※敢えて消極的作法でいうなれば、この作品はあるちっぽけな仮初の家屋の話を幻想文学として綴ってみようとしたものだが、執筆は舞台となる時代から遠く離れた後世の虚覗(特殊梵子術で仮想現実的に歴史を体験し、フィクションをノンフィクション的に描く手法)作家ヘンゲ・マイ(幻想世界クナウザスの現代人。この小説は当地で有名だった仙猫伝承の真実を暴くものとして有名になったが、それに奢った彼は以後作家としては堕落し、術法師として生きた。享年 136 歳)によるものを、時空を超えて翻訳したものであると考え、境は曖昧にしている。その辺りは変換の妙という朧月世の霧のような言葉にはぐらかし、厳密を期せず、寛容をもって処せられたい。

ピサラス

遠野　沢庵

いとたかき　みかどのとくとおもえれど

たまのちしおは　のぼるしらくも

※訳者注：本稿は独創幻想世界クナウザスを舞台とした作品の一つであり、次項より世界観紹介等ありますので、本編と併せましてご確認いただければ至極幸いです。なお、この小説は地球人種の『12 歳以上』の読者を推奨とし、年齢問わず善く読んでいただきたく、お願い申し上げます。

本編は 9 ページより始まります。

※目次

１、三匹交じり合い…９

２、率いる者として…17

３、世間へ…38

４、後退もまた前進…60

５、双巨星起つ…87

６、苦味の中核…107

７、魂の血脈…139

８、積み木の帝都…167

９、泥の中の玉…195

基礎事項注釈（新暦以降・タラム梵子科学研究機関による統一見解より）

１、クナウザス創生過程について

とある超高次元の宇宙空間においては、あまりにも複雑で多すぎる意義と素材が詰め込まれていたために、合成と分裂の過程が四次元に包括されうる低次元宇宙のようにはうまくいかず、高密度のガスに覆われた白っぽい宇宙空間の中に、巨大な星が一つだけ団子のように生まれただけであった（捏ビッグバン期）。さらにこの星の特殊な重力波が空間を捻じ曲げて虚無の世界に繋がる穴を開けてしまい、せっかくできた星も引き裂かれて半分になってしまう（捏インフレーション期）。飲み込まれた半分が時空の穴に栓をしてくれたおかげで半球惑星はかろうじて現存し、このときの勢いによって周囲のガスが攪拌され、半球面上を覆う巨大な渦が形成される。極々小さい針の穴のようなガスの中心は、台風の目のように周囲の渦と物質やエナギーを遣り取りしていく（45億年前）。次第にその周囲はエナギーが濃すぎるために虚無と同じような状態になり、中心を守る分厚い壁となる。渦の勢いは逆に中心部分に引き込まれ、有機物を含めた多様な物質、特には多量の梵子（次項参照）を含んで中心世界を攪拌し続ける。これを一般に『混沌の渦』と称する。なお、中心の面積はちょうど地球表面と同じ、さらに位置も捩れの位置であるが相関がある。よって、様々な点において地球とは密接な関係にあるようだ。宇宙唯一の星であるためか、この世界を客観的に名指しする呼称はずっと後になるまでなかったが、後世での言い習わしに倣い、この世界一帯を『クナウザス』と称する。

混沌の渦は地球における古代の海洋の、いや、それ以上に力強い役割を果たし、結果、ありとあらゆる可能性を実現させる条件の中で無数の生物がほとんど同時期に発生、進化と滅亡を繰り返し、数億年という短期間で後世の生物層の 92%に当たる生物門が出現する（20億年前）。中でも梵子を大量に取り込んで生活することで、文明などという概念すら通り越し、神をも恐れぬ強大な力を秘めた竜や魔族といった者達が食物連鎖の頂点に君臨し、昼も夜もない暗黒の世界で日夜激しい生存競争を繰り広げたのであった。

２、梵子という概念について

量子、霊子、といった高度な概念・素子をすら凌駕する究極の絶対完全統一理論を構築する素子が梵子である。これは、物質や情報だけでなく、行為、意義、結果、因果、あらゆるものの『中庸』状態にある素子として認識される。次元レベルが低いほど梵子は『素化』という現象を起こして互いに偏重しながら収束してしまうため、例えば地球の浮かんでいる、四次元に包括されるうる低次元宇宙においては梵子そのものを取り出すことはほとんど不可能に近いだろう（ゆえにその下位素子で何とか試行錯誤してある程度の希望を実現していく粗野な『科学』が流行っている）。ところが超高次元世界クナウザスにおいては、高次的因果律の下、梵子がそのままで空気のようにふんだんに存在するため、これを利用すれば原理的には『指先一つでどんな願いでも叶えられる』はずである（実際には高次的因果律や反梵子が邪魔をして大きなことほど達成しにくい）。これは、いわゆる『念（精神と魂の力）』をデバイスとした『梵子術』や『梵子科学』などの要素として扱われている。な

お、素梵子は『固化(完全に物質や方向性の決まった因果として定着すること)』する前の半熟状態なら別の利用価値があり、これをもって独自の召還術を行使することを『素梵子他象』と呼ぶ。

３、アナケー発祥説について

１の項で概説し、本稿などでも紹介される歴史観が存在するにもかかわらず、やはり絶対的根拠のある科学的事実として、後世の多少なりとも学のあるクナウザス人は同時並列的に以下のような事実を受け入れねばならない。『クナウザスは、不測の事態によって自壊してしまった、別のより有意義な世界の後釜として、そのブラックホール的な影響に引きずられ、ほんのちょっと前(新暦６１２年・学説発見時)に、この上位世界の上に捏造された世界である』。上位世界については、エルピースという唯一究極の知的生命体が生活していたということしかわかっていないが、それに由来する出土品(『無額品と呼ばれる』)は少なくなく、特に学説の根拠が見つかったアナケー地方で多く産出される。

４、虚神と信仰について

終結へと向かっていた混沌の時代に事実上の引導を渡したのが『四大虚神』の誕生である。これは素梵子化した自然概念の基礎たる『地水風化』の各々のエナギーが独自の渦を形成し、さらに同系統の力を呼び集めて生み出された、一種一固体の、無限の生命力を持った超生命体である。神のごとき力と世界に対する影響力を持ちながら、目に見えて現存する生物的存在でもあるために彼らは『虚神』と呼ばれ、生物とも神ともつかない曖昧な位置づけに属しているのである。彼らの他にも５体の虚神が発生した。四大虚神の影響でクナウザスは新たなる機微を内在する世界へと急激に変貌を遂げていく。それに合わせ、兄弟的位置づけにある地球のような昼夜の区別や時間概念、天空を彩る星々が欲しくなった地の神を除く三神は、後付的ではあるが、これらを創世の仕上げとして付け足すべく、各々同時期に『天の虚神』を『空想』した(その実在は不明とされるが、神の強い空想は現実に勝る意義を持つ)。地の神は独自に別種の子を宿し、大地を刷新する偉大な仕事を成し遂げた植物界の王を『草木の虚神』に引き上げる。また、四散した混沌の渦の残り香が中央大陸に集結、四大虚神を始め、混沌期以降の世界を憎む『闇の虚神』となり、その反動現象として『光の虚神』も出現した。さらに後世においては『無の虚神』が現れることになる(合わせて九大虚神などともいう)。さらにはあらゆる神を区別なく一個のものとして考える『総体（もしくは相対）神』という考え方もあるが、神の観えるクナウザスにおいて、哲学者でもなければ、近代以前では抽象的なものを信奉するものは少なかった。クナウザス由来でない人種の『人者種』が興した『創世主教』および『命題教(エスペス)』において、無の虚神や総体神概念がクローズアップされることになる。現代では、世界の四大を実虚神、それ以外を非実虚神と定義しているが、各宗派はそれぞれに独自の神学を持っており、あまり学術的客観分類を気にしていないことが多い。

こういった虚神の存在と梵子や素梵子の流動経路、近年の別次元への扉は密接に絡み合い、術法や信仰とも深い因果関係にある。だが、あくまでも信仰は内的な宇宙に浸透することで外的な宇宙の理に触れることであり、信じる精神の素養

や状況に左右されるものであるから、教義と神々の意識や意義が必ずしも合致せず、それどころか全く無関係なことすらある。

５、新暦までの歴史簡易年表

紀元前 150 億年　宇宙開闢・唯一惑星が誕生して半球惑星になる

紀元前 45 億年　クナウザス世界の区域限定・混沌の渦形成

混沌期～紀元前二十億年

神話期～紀元前十億年　（ここまでを創生紀と称す）

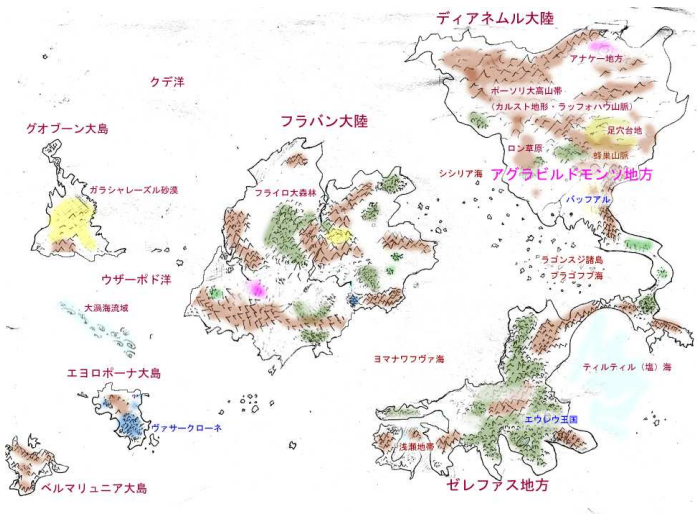
古生代～紀元前数億年　（至低紀などを含む）

中世代～紀元前数百万年（浮島空紀などを含む）

近代～新暦元年以降　（低次元宇宙より入植軍来襲・クナウザスという世界名が初めて使われる）

現代～新暦六百年以降　（大陸間大戦後・踏破家集団の台頭）

紀元前二億年（至底紀後期）の世界様相



　創生紀、莫大な量の梵子を放散していた混沌の渦が世の中を覆っていた暗黒時代からすでにして、梵子の凝集は、生物達の活動も手伝って、ゆっくりとではあるがとどめようもなく着実に進行している。それがいわゆる神話期の主人公たる『虚神』達を生み出し、彼らの力を持って世界の様相を大きく変えることとなったが、まずは彼らの存在自体が非常に大掛かりな梵子の素梵子化現象であったといえる。これを期に、梵子を甚大に消費する型の強大な生物達（混沌の生物群）から、小さいが比較的社会的で、知性と精神の力で梵子術を行使する型の『人類』に世界の中心は移ることとなった。

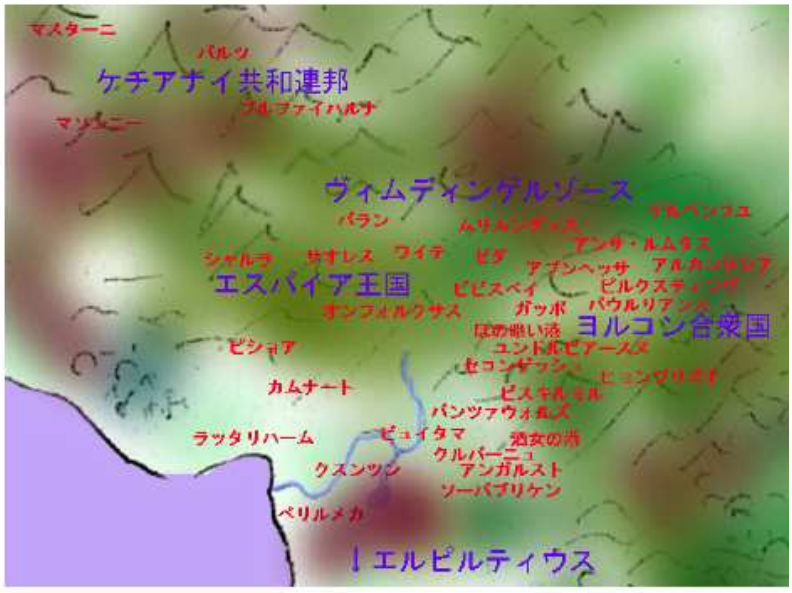
　混沌と暗黒の王である闇の虚神ツァルツは、無干渉を決め込んでいた四大を争わせるべく、『火球よ

り大地が鋳られ、それを雨が冷やし大気を起こした』という創世伝を噂として世界に流し、末弟とされた風神キルケスを怒らせた。これを発端として全世界規模の大戦争が始まった。

神話戦争期に虚神達の従者として歴史の影に隠れていたクナウザス人類であったが、事実上の停戦となった前線の停滞に伴って虚神達の権威が弱まり、彼ら独自の勢力範囲が次第に広がっていく。特に紀元前４億年前の鯨者族の海洋帝国は、高度な梵子科学技術と深海の資源によって少数にも関わらず海中から地上のほとんど全てを支配することとなった。だが、彼らは海を司る神を奉り、その上位神である水の女神をすら支配下に置こうとしたかどで、海神ともども滅ぼされてしまう（紀元前３億５千万年前・至低紀）。その後は多様な人種同士や、他のより強大で多様な生物群などを含めた各地での小競り合いによって勢力地図が頻繁に塗り替えられ、多少なりとも大きな統一を成し遂げたのは、実在が不明な伝承を除けば、ディアネムル大陸の『黄権帝国』や『神聖帝国』（共に紀元前２億年前）くらいである。なお、暗黒の力が強すぎるフラバン大陸や火山活動の活発なゼレファス地方には人が住みにくく、当時の人類の大半はディアネムル大陸北部で暮らし、地神教が盛んに信仰された。

【アグラビルドモンソ期の情勢】

※　誌奥暦約四万二千年　ディアネムル大陸北部



新暦時代に比べると地形や山脈の位置や標高が違うために全体的な植生分布にも差がある。当時は東側の山岳地帯にも平坦な部分が多く、比較的共知種族が過ごしやすかった。これは後の大震災によって激しい隆起沈降が起きたためである。また、地下には広大な洞窟世界（地内）が存在し、そこに住む人々と交易する入り口は『港』と呼ばれた。

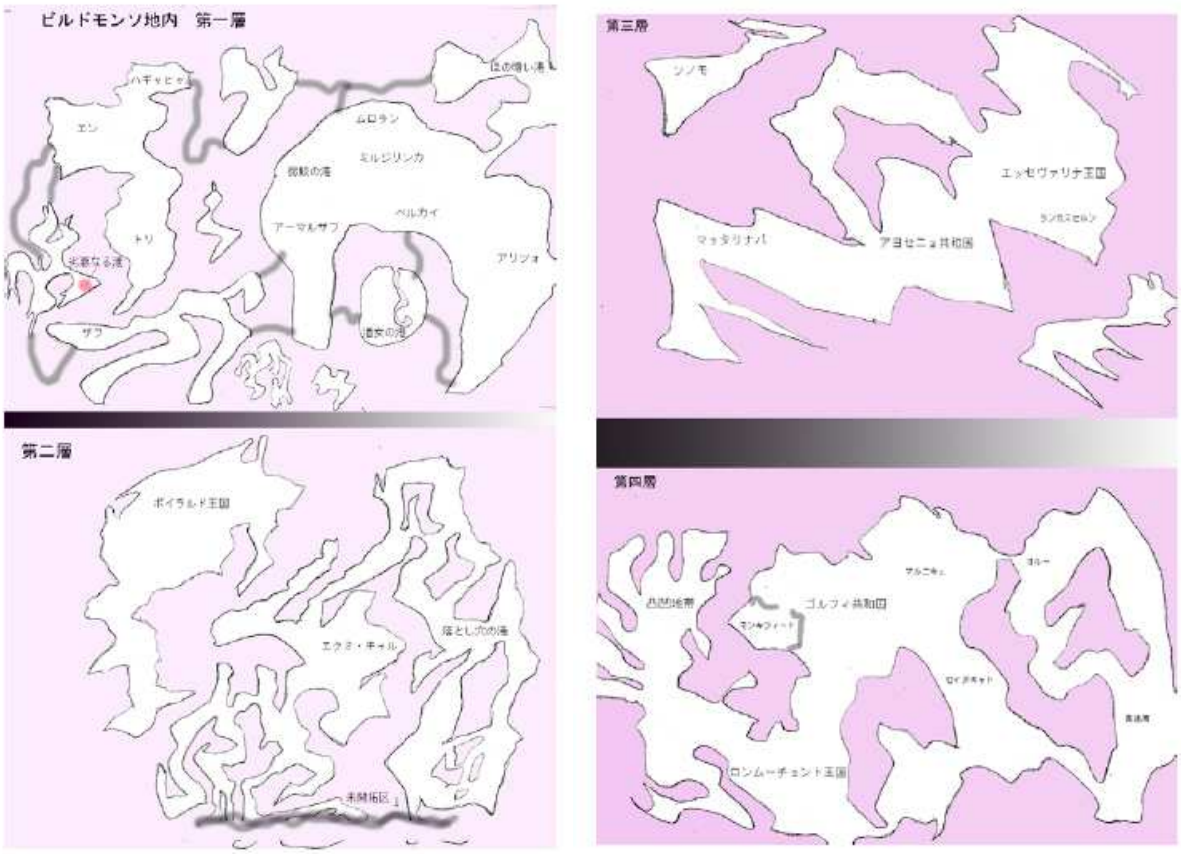
※　ビルドモンソ地内

第一層…ヤンヤン地方の人口が多い。各洞窟は不安定な抜け道などでも繋がっている。港の利権などが絡むため、紛争が多い。

第二層…急勾配の穴をロープで降りる『落とし穴の港』が有名だが人はあまり住んでいない。複雑な地形の未開拓区をはじめ、邪悪な生物の好む場所が多いからである。

第三層…平坦で様々な好物や有用植物などを算出するため、妬みの対象となる。多くの小規模部族がひしめく。

第四層…有用鉱物が多いが、落盤などの災害も多く、交易効率において劣る。深いほど地神に近いとされるから、プライドの高い民族が多い。『長遠湾』にはかつて地神の穴倉にも連結する更に深い層への入り口もあったとされる。



※ 共存知的生物種（古生代）

種族名称		5段階評価											
		腕力	物理防御	対梵防御	梵子力	知能	念力	生命力	敏捷性	器用度	術技容量	耐久値	合計
特徴・能力							容姿・性質						
種の保存・発生起源													
指者	ヌンマラー	3	2	2	3	4	3	3	3	5	3	3	**34**
指が多くあり、非常に器用。脚が腰の真ん中に一本だけ。足底は無機質的で、滑るように移動するため、地形効果を受けにくい。耳が無いが、体全体で聴ける。寿命は人者(後述)と同じだが、病気には強いし老いにくい。万能で生殖能力もバランスが良い。角のような構造で梵子力を探知できる。							体毛が全くない。体色は様々(先祖の魔族による)。超優秀なカツラが服と同列に扱われる(クナウザスに禿の亀は無い)が、当時は髪をつけないのが普通だった。個体差が激しい。人口第一位の知的生物。					
混沌期の魔族を祖先とし、世界中で様々な人種に進化したが、12本指の種族が優勢となり、最近ではほとんど同一系統である。当時は多数の種類があり、同じ指者同士でも子を作れないほど遠い種類もあった。													
稼動気	フンクフルター	2	4	2	2	3	3	4	2	3	3	3	**31**
変形能力(極端なものは不可)。ゆえに防御力が高い。応急的に代替細胞手当てができるので、生命力が高い。寿命は人者と同じ。							人のような平均容姿か他種族のような姿をランダムで取らされるが、不定形にこだわることもできる。高齢になっても比較的老いを隠せる。男女別は見かけと性質だけ。					
単細胞生物の特質、気体生物などの無形性などが概念として引き継がれている種族。混沌時代の凶悪なウィルスなどから発生した『悪素気』族の奇形として生まれ、狡猾さと変身能力が弱く、虐げられていた。だが、社会的種族の台頭で立場が逆転していった。中央大陸が発祥地だが、追いやられた者が各地に存在している。【特殊生殖】性別が基本容姿や性質(これは男女の別)以外に4つあり、それぞれがある時期に一定範囲に偏然でも集まると、勝手に分裂が始まる。儀式を行わなくても、これは確実に両親の性質を受け継ぐ稼動気になる。姿は相手側に近い。分裂後しばらくは魂が形成されないため、破棄してもかまわない。												
砂魚者	ザントシュピマー	4	4	2	2	3	3	3	3	3	2	4	**33**
砂や泥に潜れるが水泳は普通。戦士としての能力が高い。好奇心が強く、努力家が多い。食あたりに強いので食事に困らない。病気に強い(ガン以外)。再生能力有。寿命は70歳くらい。老いても能力値が下がりにくい。							少し骨が低いが、がっしりした体格。半漁人のような姿で、エウレウ王国を作ったルプル族と似ている(ただし、こちらは知性が低い)。鮫や皮膚は鱗のような感じ。					
初の脊椎動物として魚類が海から陸へ上がった知識が、クナウザスで人種として結実したもの。神話期の海洋で生まれ、能力の低い魚だったが全く不得意な砂漠へと犠牲を払いながらも進出し、進化を勝ち得た。その後風神の従者として暮らしており、数はそんなに多くないが、近年では各地に進出している。													
虫者	インゼクター	3	3	2	3	3	2	3	3	2	3	3	**30**
額の3つ目に遠視能力有。腕が一対多く、装備が多くできる。雄は喉に発酵羽があって歌に術力を込められる。雌はバッタのような細い足でジャンプできる。また、乳房が3つある。寿命が長くても15年ほど(大人として覚醒してから)だが転生が容易。							特殊能力分以外は人とほぼ変わらない。特別美麗なものは少ないが、皆それなりの個性を持って相手を惹く(種の保存のため)。成体のみで、老年や幼少期(虫)はない					
質より量的な、無脊椎動物の花形である昆虫類の概念を引き継いだ種族。【特殊生殖】恋愛などをした際(片思いでもよい)に、稀に、その二人の性質を受け継ぐ魂が虫の卵に宿ることがある。これを古い虫の一族が回収して育てると虫者になる。転生はこのシステムを利用する。しかし、こういった『純粋』の虫者は古い一族の過疎化とともに近年激減している。儀式で生むと、虫が出てくるので最初は驚くかもしれない(しかも凶暴な場合もある)が、段々知性もつきはじめ、数年で『脱皮』し、成人した人型になる。												
樹曼	バオマー	2	3	3	3	4	3	3	2	2	4	4	**33**
植物系専用術法を多数習得可能。対植物攻撃に弱い。光合成や土からの摂取で生き延びられる。寿命は100歳くらいだが、数千年など、老いつつもさらなる長寿もありえる。老いるほど植物部位の割合が多くなる。老いを嫌がって自ら土に還る儀式を行う者も多い。独特の哲学を持つが、ほとんどが穏やかで知性は高い。							性別がないので中性的なもの(オカマではなくて、中性)も多い。樹木に近い姿だが、近年では動物化現象なのか、外見上は人者と区別がつかない(しかし皮膚の中は植物っぽい)者が増えつつあるという。その場合でも、植物的な部位が体のどこかにくっついている(個体による)。					
世界自然環境を支える生産者としての功績がクナウザスにおいて結実した種族。樹神には彼らの僧正中で最も優秀な者が(神が転生したとして)選ばれる。【特殊生殖】自分を死んだ後に埋めたところから生えた植物(魂株)が稀に樹曼になることがある。ただし、その性質や能力、記憶は全く親と連結しないオリジナルである。(付近の土壌や虫の媒介も関係するらしい。これは故人には寂しいかもしれないが、種としては遺伝的刷新ができて良いことかもしれない)いずれにせよ、そこから生えた植物に成ること、それだけでなく土に還るということが彼らにとって転生以上の極楽浄土である。												
猫者	カッツァー	2	2	2	3	3	2	3	5	2	3	3	**30**
ひたすらに素早い。しかしその他能力値に秀でるところはない。爪や牙も武器として認える。人口は多くない。ごく稀に遺伝的に突出した個体が生まれることがある。寿命は人と同じくらいだが病気に弱い。早く成人する。雌には7対の乳房がある。							成体になってもほとんど猫そのものの姿。幼少期は猫であり、人語を解さず、猫同士でしか喋れない(個体差があり、優秀なものは可能な場合も)。性格は独特だがあらゆる種族に受けが良い。ムードメーカーとして、なんとなく仲間に溶け込んでいることも少なくない。					
平均化進化現象も何のその、元来の祖先の姿をそのまま人類種として引き継いでしまっている唯一の種族としては興味深い。この特別扱いは能力云々よりも何か別の意向？が働いている可能性も否定できない。3億年前ほどに犬者の祖先などから派生したらしいが、定かではない。													

種族名称		5段階評価											
		腕力	物理防御	対梵防御	梵子力	知能	念力	生命力	敏捷性	器用度	術技容量	耐久値	合計
特徴・能力							容姿・性質						
種の保存・発生起源													
飛竜者	ドラッヒャー	2	2	2	3	3	2	3	4	2	3	3	**29**
羽の先に手がついているだけなので武器装備は弱いが、尾や脚は強い。訓練次第で飛行能力が身につく(鳥のようにはいかない)。毒の実に耐性があり、嘴に温ぜて吐く攻撃も可能。寿命は60歳くらい。幼少期が死にやすい							始祖鳥のような姿だが、翼があり、男らしく誠実な人格が多いため、他種族の女性に人気が高い。9割男で、女性は女王や巫女として担がれる。					
神秘的な存在である恐竜より進化したとされ、翼持つ美しい種であり、次代の地球人類種候補であろう？と思われる鳥類に敬意を表し、クナウザスに顕現した種族。【特殊生殖】雌は儀式(古い集落にのみ残る)によって卵を大量に生み出し、たくさんの子を残せる。ただし、生まれるもののほとんどは鳥や翼竜であり、ペットや家畜としての価値しかない。このような女性は大変だが、村では全力で生涯大事にされた上に死後も神としてあがめられる												
瘤取者	ウェルストネマー	5	3	3	4	3	2	3	2	2	3	5	**35**
体がごつごつしていて筋肉質、大柄な上に瘤には梵子力を膿のように吐き出す汗腺があり、基礎能力値が高い。元巨人族。寿命は40くらいだが、いつまでもゆっくり成長を続ける(後期は老いと成長が同時進行する)。							多少魔物の風合いが強いが、それを格好良いと思えるなら魅力は高い。とにかく強いのでゲーム的？には一人は欲しい。					
人をモデルにしながら普通の人に非ずという巨人族の特殊性から端を発した種族。その派生は諸説あるが、共知人種の中では一番古い血統ではないかと思われる。													
雪聖	シュネーハイル	2	2	3	4	4	4	3	3	3	3	2	**33**
目が中央に一つしかなく、読心術ができる。また、そちらの耳が両方とも長く、訓練次第ではかなり遠方の音を聞きつけられる。雪に埋もれても生きられる反面、暑さに弱い。接触や息で物を冷やせる。寿命は150歳、100歳以降で老いが始まる。成体になるまで時間がかかる。							小柄な人、といったところ。ちょっと不気味な感じもするが、美形が多いので悪しからず。7割は女性で、海を渡った火神に使えるカザリフビー族は飛竜者に人気があったようだ。					
幻想世界には欠かせないいわゆる妖精といった概念を引き継いでいるが、クナウザスでは素梵子儀式より創られた人種として異彩を放つ。この発生起源のために生み出した水女神の力に偏っているが、知性が高いので術法や学術なら難なくこなす。													
人者	メナー	3	2	2	2	4	4	3	3	3	3	3	**32**
無し。それが良かったりするのだろうか。寿命は50歳くらい(クナウザスでは回復手段も強いが病気も強い)							モデルは被で、個体差が激しいが、平均容姿そのもの。そのおかげで他種族に違和感なく混じれたのかもしれない。この時代にはまだ存在しないが、著述の原稿が現代だと、平均容姿などの関係で引き合いに出されることが多い。					
地球の超未来、地球人類は科学力によって自然環境を破滅させたが機械の中で生き残り、仮想現実にユートピアを見出し、『神』となった。そして、現実の地獄を世話する物として、無機物質から実験室の中で人間と同じ人工生命体を大量に作り、『天仕』として奴隷のように扱う。別次元に共時的に浮かんでいたクナウザス世界を発見した『神』は、その支配を目論み、自由を与えることを約束してこの世界を開拓させるべく、奇跡の子『天子』を派遣、中央大陸に超巨大大量転移建造物『天を突く塔』の建設を命じる。彼らは『人生』を得るために、クナウザスの生物群と争い、和解の道を見出す(入植戦争)。――この後、『塔』は封印され、天仕達は人者を名乗って住み着く。後の世界新暦ではこの辺りを元年とする。												
森者	バルダー	3	3	3	3	5	4	3	3	3	3	3	**36**
不老不死に近い。人口は多くても世界で数百人とされる。類稀な知性を持つ。天子は実験室版の森者というところであろう。この種は天使と天仕の子として、ごく稀に発生したようだ。							人者と同じだが、美麗な個体が多い。この時代には存在しない。					
天使と呼ばれる、異次元入植軍の半機械兵士が、天仕と交わって得たハイブリッド。天使には本来感情も生殖能力もなかったため、クナウザスの梵子的環境が作用したものと思われる。ちなみに、生物として子孫を残したいという欲求に魔族が付け込み、子を得たのは堕天使と呼ばれる強力な悪鬼となった。特例として、儀式を行っても森者の子を残せないので、森者同士で交わるしかないが、そうすると遺伝的に近縁すぎる問題が。不老不死にもかかわらず、種としては滅びる運命にあるのだろう。ゆえに古い者達は閉じこもりがち。												

※主要人物紹介

１、３匹交じり合い

そのときは露知らぬまでも、後にビルドモンソ神聖帝国を打ち開いてゆくほどの運命を背負った猫の勇士兄弟も、かつては愛らしく目のふさがった乳飲み子であって、母猫に抱かれていたはずであったが、気まぐれな個人主義の猫の世には残念ながらそれほど少なくない一つの悲劇的結末として、もしくは他の何らかのやるかたない理由を持って、幸福から蹴り落とされ、寄る辺もなく、死の郵便受けのような木の小箱だけを束の間の頼りとしてうずくまっている。すぐその傍で、すなわちゲルペンフユ森の比較的浅い、しかし邪悪な生物がひしめきあって息を殺しているようなこの人里離れた区域で、そういう恐ろしいものを単なる食材としか見なさない化猫のウムポ・ルサが当て所もなく食事の匂いをかぎまわっている。

彼の最近――といっても、一般の猫の１年は彼にとってほんの数日にしか感じられない――の好物としては、あの存在自体が哀れに思えてくる擬態生物、巨大で不気味な『獲燐欺（エリンジ）』を挙げられよう。この菌者の端くれは数百年前よりその種を大陸のくびれた腰部にある胞子の楽園から遠征させ、暗くてじめじめした場所を培養地として勢力を拡大している。菌者の中ではほとんど取るに足らぬような能力しかなく、蔑まれている彼らであったが、二千年後に奴隷の身分から新天地で昇格したあの猿の末裔どものようにはうまくいかず、そこここで元いた場所と同じ運命を辿る。つまり、日の当たらぬ場を好んで棲

息する邪悪な生物によってたちまち餌となり、決して己が一族の数を増やすことはなく、むしろこの茸族の味を覚えた捕食者がその聖域にまで入り込み、前より数を減らしてしまうような危惧を一族に抱かせることとなる。

ところが、ただ肉が美味くて食われてしまうだけのこの種族に唯一優れた特性としての莫大な増殖能力を活かし、食われれば食われるほど、踏まれれば踏まれるほど一層に危機感を抱いて増え、自然界のバランスは保たれていく。それはそれでけっこうなことである。瑣末な生物が瑣末な、他人からすればただ食われるだけのために増えているようにみえるこれらの営みにも多少なりとも崇高な意味があるのかもしれないし、彼らがそれで一所懸命ならば、それで良いのではなかろうか。

いや、すでにここで生き、死ぬことを余儀なくされている生物全体にいえる事だが、彼らにとって生きるも死ぬも同じで、そもそも善し悪しなどない。それに、自然界の食物連鎖といったような美しくも脆い繊細さなどは、下位次元における運命的権力の脆弱性に頼った感覚にすぎないし、混沌の残り香と梵子の渦巻くこの高位次元世界で通用する掟ではない。

すなわち、それはそれでけっこうなことである、とはならないのだ。小さな事柄が突発的に大問題を引き起こすことになることが、この世界では日常茶飯事である。獲燐欺族が自らを犠牲にして邪悪な生物どもに食料を充分に供給することで、意図せずにその繁栄を促していったことは、運命の悪戯と呼ぶに相応しい、真実にしては実際ひどく滑稽な因果関係となる。

木野子どもが理由不明の大増殖をしたのは世界の齢に比してはほんの瞬く間、数百年くらいの間ではあったが、それは世界の様相を変えるといった巨大な効果を上げ、平野の穏やかな種族は『足穴台地』や『蜂の巣の山』からせめよせてきた力が強くて孤独を好むような雑多の種族の群にひとのみにされ、歴史上からほんの短い間に姿を消した。犠牲者の一例、小鳥の囀るような麗しい響きの言語をもつ『賛壺鵡(サンツォーム)』。彼らの文化、詩と歌、そして友愛の精神、感動の涙以外には何も見出すことのできない精神世界の桃源郷は、後の世で再びこの広大で意義の深い大陸に人々の群がひしめくようになった後に再び取り沙汰されて伝説となり、謎となった。

邪悪で好戦的な中にも安定状態にあった平地の国家も激戦に巻き込まれることを余儀なくされ、あの巨大なカンマルティア暗黒帝国は三十四の小国家に分裂した。蛇豚どもに自我が芽生えたというより、この気に乗じた内外の者が群雄割拠の機会を狙って内乱をいくつも起こした結果である。数億の嘆蛇(タンダ)を強制的に従える梵子技術機器を発明し、そのために六千年に渡って最も実り多きロンの平地を支配していた『叩き潰す者』ガンウランテ黄圏皇帝はこの事態を憤慨するどころか嬉々として迎え入れ、力を得た勢力にこのように伝えたことは有名である――久しくこのような戦いの興奮を獲ることはなかった。楽しませてくれたまえ。諸君、健闘を祈る。

彼もまた、時代の変革の犠牲になる運命にあった。そうと決まればあっという間、不遜に強がって見せても無駄なのだ。言うまでもなく、かつて神話戦争時代に大地神の主力歩兵団の中核を担っていたあの強大な狼人間達が死刑執行人である。灰色巨人族どもは単純でもあったから、宣戦布告をそのままの解釈で素直に受け入れ、無敗を誇った無限の死霊蛇軍団を難なく打ち破り、皇帝の最後に発した呪いに

よって僅かに数人の同胞を失っただけに終わった。ガンウランテの真の恐ろしさといったものがそれから五百年も経たぬうちに再来するとしても、少なくとも、当時は彼の威光などか弱い羽飾りのようであった。

さて、あっというまのクーデターを成し遂げた獣の巨人族は、世界そのものを体現する地神こそが多神中の最尊神と考え、自分たちを大地神の細胞の一つ一つに見立てる粗野な狂信者である。しばらくの間、暗黒帝国にあっさりと止めを刺したこの恐るべき軍勢に逆らおうなどということを考えるものがいなかったとしても、周囲の勢力を小心者と呼ぶことはできない。灰色巨人の選出した臨時の大統領カンマウリィは自分たちの国家をエルピルティウス(壮大なる美を謳う国)と名づけ、周囲の勢力は次々とこれに従属していく。

ところが、灰色巨人の強すぎる自尊心はそもそも集団化に適さない。一つの目的が果たされた後は、彼らの信条からいけば、彼ら一人一人が平等に最大の神の細胞で、同等に偉大である以上、同胞であろうとも、誰かに従うなどいつまでもできるものではない。ほとんどあっという間というほどに、正確に言えば二十年ほどももたずに、国家は自然的に瓦解した。というより、その短い間も、悠久の時を遠めでやり過ごしてしまう彼らの神がそうであることを代弁するように、灰色巨人達は適当に過ぎ去らせていただけだったし、統制の取れた強さを持たなくなった後もこの地域はしばらくの間強大な者の住まう地域として恐れられた。

エルピルティウスの騒ぎが収まるに従い、周囲の輪郭がおぼろげながら世界史に姿を表す。北のマンキル平野では裳飛野(もひや)(巨大な人者の手だけの姿で、指先の腹に顔がついている。その5つの顔全てが別人格であるという。謎多き高等知的生命体。)の国家マフルティヌゥが勢力を拡大。その傍ら、怪物どもの流出後にどこもかしこも危なげになった大陸の中で、瘤取者を筆頭とした共知種族の村が、昔ほどにはその危険性を主張しえなくなったゆえに安全の神話にでも包まれたかのような足穴台地に据え置かれ、そのうちの一つ、レスコンはそれなりの力を持って周囲を威圧している。

遥かに南方を見やれば、かような変革の種をばら撒いた胞子の聖域が、その成功によって莫大な力を得たかのように確実に北へ勢力を拡大、これをゆゆしき事態と認知した樹曼どもが集結してバリケードを張る――だが、南はこれくらいのもので、この時代ではそれほど取るに足らぬ。

ここで、ようやく我々は北に目を向け始める。ようやく、というのは、あくまでも北方、特には無数の鍾乳洞を地下に有するカルスト地形の一帯――ポーソリ山地、ラッフォハウ山脈等で山がちではあるものの、鍾乳洞から得られる多様極まる天然の財産のために価値の高いアグラビルドモンソの地が、今しがた、問題にされるべきだからである。文頭に子猫が出てきたのも伊達ではない。彼らは小箱でその一生を終えず、確かに成長している。

見たまえ、触ればたちどころに皮膚を腐らせる恐るべき洞爺草(とうやそう)をフラッグの代わりにして無邪気にじゃれあうあの子達の愛らしいことといったら形容に尽くし難い。彼らの舌を包む粘液には強力な解毒作用があり、毒の草など彼らにとっては生まれたときから単なる遊具に過ぎない。それを触れば痛い目にあうことも知り尽くしているから、どんなに夢中になって転げまわっても決してそれに触れることはなく、例外が起こると、触れた場所を痛がる相手の間抜けをお互いに腹をよじらせて笑う。幼児期が時折見せる危険な遊びの楽しみといったところだが、誰も彼らのこういった側面を注意したり健全な場所に

出してやろうという親代わりはいなかったのだろうか。

鬱屈したように枝葉をしならせて陽光を遮断する大樹に囲まれた、ただ初期の木箱が大きくなっただけのようなこの狭い空間の片隅に、やはり毒草を恐れずに、それを茣蓙敷代わりにしている男がいる。この陰鬱な部屋の住人に相応しく、世の猫族の衰退とそれを招いた自分達の愚かさを心底憎み、かつ他の種族も残らず憎み、すなわち誰一人として愛さずにたった一人で毒と憂鬱の森で半永久的に暮しつづける化猫こそが、他ならぬこの神々しいばかりの子供達の親代わりなのだ。

ウムポ・ルサの容姿からは、彼が年齢相応の老人のようにも、驚くほど幼いようにも見えて、その実を図ることは難しい。ただ、二百年ほど前に聖獣王の騎士団が正当な理由をこじつけて『化猫狩り』に興じていたとき、彼もまた標的にされたのだが、――何の苦もなく、化猫の所有する虚品に目のくらんだ略奪者どもを消し去り、国をあげての争いにもたったの一人で立ち向かって一歩もひけを取らなかった。そのせいで、全く本筋から外れた目標によって疲弊した、地上唯一の猫者国家であったハンクール王国はヨルコン合衆国の侵略を許してしまい、化猫のがんばりは同族の衰退に一役買うことになった。ウムポはそれに対しても冷淡で、どうせ愚かで救い様のない種族ならば早いところすっかり滅びるべきだと断じている。

ところで、彼は同族を心の奥底から嫌っていたのだろうか。とんでもない、全く逆であって、彼は猫族の高貴性を誰よりも堅く、心の奥底で信じている。獣のようには野蛮でも粗野でもなく、文明主義の種族のようには利己的で頭でっかちにならない、人間として究極のバランス感覚を持った、猫者種の可能性を見抜けるがゆえに、人々が愚かな衰退の歴史を辿っていることに我慢がならないのかもしれない。

そうして一人ぼっちでいた彼が、どういう風の吹き回しか、盲目的な獲燐欺狩の途中で危うく踏み潰しそうになった哀れな二匹を、そのまま踏み潰さなかったから、子供達は今、はしゃいでいるのである。子供というのは、どういう場所にでも適応する、驚嘆に値する生存能力を持っている。しかも、それがどんなに恐ろしい運命や邪悪な意味を伴っていても、彼らはそれに影響されながらも純真を保ち続けようとする。そのおかげで、軽く川で洗い流してやるだけで軽い穢れくらいならすっかり取れてしまう。もちろん、いかなるときもそうなるとは断定できない。むしろ、大抵は何かの弾みにすっかり陰気が染み込んでしまって、拭いさられる見込みは一切なくなる。だが、これほどに日の当たらない地下壕のような部屋の中でも、少なくとも、ウムポの子供達は自身同士が太陽のように輝いてお互いを照らしあったから、暗澹とした地をも秘密の楽しみができる遊び場としか認識していないようである。樹木や藪が隙間風だけを許す板切れのように重なり合って壁や天井を形成している天然の迷宮は、まるでちょっとした名も無い都会や下町における平民の団地のようでもあり、どの区域にも煩わしい羽虫が群なしていたり、何者かの生活のいきれが淀んでいたり、かさこそと、どこからともなく不気味な噂話のような音が聞こえてきたりはする。しかしながらどれもこれも、忙しく穴倉の一つに詰め込まれている者にはほとんど認識されることは無い。それは不幸中の幸いと言うものであろうが、そんなところにも、隠れ住む小さな幸せが、常に危機に瀕しながらも存在し得るらしい。

この少年二人が開いて間もない目にウムポを最初に映したとき、二匹は生まれたばかりではなく、多

少なりとも育てられていたようであり、それが捨て子の唯一の救いだった。

真っ黒の方は絶望しきったようにほとんど泣かず、巨大な死神を憎む鋭い眼差しでウムポを見上げていた。隣のふわりとした上等のガウンのごとき毛並みに包まれた灰色の子は、丸っこい瞳に筆舌に尽くしがたいほどの愛らしさを湛えてはいたが、口は盛んに勇ましく開きつづけ、毛を針鼠のようにし、敵をかわいらしい声で威嚇し続けた。その様子は頑是無い子のようにも見えたが、良く観察すると震える黒猫を守ろうとするかのような様子で、胸打たれるものがある。さすがの化猫も気紛れに同情してみようと思ったのであろう、二匹をもっと良く見ようと顔を近づけた。灰色の雉猫はいよいよ盛んに鳴き続けたが、それは、泣き叫んでいるようにも、いずれは遅かれ早かれ炎の中に潜む死神(火神リグアは戦争と冥府を司ると言われる)の手に委ねられるしかない自分たちを、万が一にも救ってくれるかもしれない相手に媚びるようにも感じられる、微妙な器量を伴っている。

「お前は出世するな」ウムポは黒と白の混ざり合った毛並みの子を撫でてみる。子は一瞬泣き止んで、片目を嫌そうに閉じる。彼は指で慎重に額を撫で続けた。忘れかけていた幸福が胸の奥からよみがえってくるような感覚に、孤独の男が恍惚としている。周りの邪悪な空気が彼を嘲笑うとしても、自由の身の彼は、全く気にも留めはしない。

彼は黒い方にはあまり目を向けないのだが、それでいてどこか気を引かれている。彼はあからさまに差別し、逆の方法で片方の気を引こうとしているかのようである。黒はぶるぶると震えた。小便をもらしているらしいことが匂いでわかり、ウムポは口の端を歪める。

「まったく、兄弟でも、これほどの差がつくものだな。本当に、見所のない…」彼の胸に陰惨な事態を引き起こしかねない怒りがこみ上げてくる。彼をにらむ三角の目つきが気に食わないだけではない。まるでこのガキは、いや、まるでかつての…

彼ははっと我にかえる。――帰らねばならない、こんなガキどもにかまっているような自分か。子供を育てられずにどこなりとも流してしまうような、吹けば飛ぶような軽い精神の連中の種など、潰えてしまえばいいのだ――急激に立ちあがったため、不意に箱を軽く蹴飛ばしてしまう。衝撃に驚いた黒猫が捨て鉢とばかりに飛び上がり、様々な雑念に気を取られていた化猫の鼻を引っ掻く。国家の軍勢にすら立ち向かった孤高のウムポが、不覚にも悲鳴をあげてよろける。力に頼れない子供には、愛らしい容姿と守ってやりたくなる衝動をどの種族にも起こさせる猫なで声が通じなかったときの、最後の自衛手段として鋭い武器が与えられているのは言うまでもないが、それを差し引いても黒坊主の跳躍と一撃は全く予想外の油断ならないもので、鼻からは大量に出血し、ウムポは激して、それを一層に悪化させる。

「おめぇ等なんぞは！」と彼は叫んだ。なりふり構わずに爪を出して振り回し、悲鳴をあげるように叫ぶ。「おめぇ等なんぞは、この俺に傷をつけたおめぇ等なんぞは、すぐに殺しはしないぞ、いたぶり尽くしてやるわ！」

彼は黒をむんずと掴んで箱に投げ込むと、孤児の家を掴んで脱兎のごとく走り去っていく。まるで、そこに淀む空気や動植物に自分の行為を見られ、様々な憶測を呼ぶのを恥じるかのようである。

三匹の生活が始まった。それは始まるべくして始まったかのように、最初からあまり遠慮のないもの

となる。ウムポは獲燐欺をうまそうに頭から丸かじりしたが、ふと気付くと、腹を極限まですかせた二匹が、泣かずに、きょとんとした顔つきで彼を眺めている。

「冗談じゃない」化猫はひきつった笑いを浮かべる。「ばかなやつらだ。細胞の一粒であろうとやるものか」

彼は立ち上がって、食いながらおもむろに枝を組む。それはあまり手馴れていない仕草ではあったが、その目は真剣そのもの。そのうち、彼が両手をこすり合わせただけで薪に火がつく。化猫は獲燐欺の腕を裂いて串に刺し、焼いて黒猫に投げつけたが、いまいましくも、小さな愛らしい目標は難なくそれを避けてしまう。二匹はハフハフと言いながらそれに噛り付く。うまく食べられない。

「じゃあ、食べなくても良いんだな！」虐めの笑いを浮かべた男が来て餌を無常にも拳骨で地面に叩き潰してしまう。土に塗れた餌がぐしゃぐしゃになって、幼児にも食べやすくなった。腹をすかした二匹はそれを必死に胃に納めていく。化猫は予め用意されている台詞を棒読みするような調子で、吐き気のするようなものを喰うやつらだ、食欲が失せた、などと悪態をつき、残りを潰して子供達の方に投げやる。

彼は二度と戻らないつもりでその場を立ち去り、実際にそうなる。次々と浮かぶ後悔に似た雑念を必死に払いながらうとうとし始める。しかし、ふと気付くとどうにかして彼を追いかけてきた二匹が自分の肩や頭に乗って爪を立てている。彼らとしてはその気がなくても、その鋭利な凶器を押さえる術を知らないがゆえに、乗られているほうはたちまち傷だらけになる。どんな子供好きであろうともこうなれば痛くて耐えられたものではない。

ところが、どうしたことであろう、ウムポはそれを夢だと決め付けて狸寝入りし、意地悪な自分の体を暖かな拠所として歩き回り、匂いを擦り付ける子供らをそのままにしておく。いつまでもそうして、痛みすら心地よく感じられた。ウムポは痛みによって、目を閉じていても二匹が自分の上のどこにいるかをすぐにわかることも面白いと思っている。彼は右の二の腕にいるやつを左で触ったが、がぶりとやられる。夢の中のことなので、意に介しない。どうやらあの臆病なきかん坊の仕業らしい。雉猫は、丸い柔らかな毛布の塊のようになって、差し伸べられた掌に擦り寄ってくる。これを撫でるのは本当に心地よく、遠くは胎内の襞、近くは子供時代の掛け布団を連想させる。それに比して黒の方はさらりとした堅い毛並みで、モップのようにごわごわもしているし、不思議な触感である。こんなことを考えるのだから、彼は本当に夢うつつとなっているようだった。そしてそのまま、現実と非現実が交じり合って陰鬱な森の中で演じられ、数年が経過する。

その間、父親は無関心を装う言葉とは裏腹に実の厳しい母のように子供達に感情移入し、何かにつけて叱り付け、絵に描いた虐待の継母のごとくに苛めようとする。ところが、息子達はそれをするりと抜けて自分たちの楽しみに興じる。黒猫は最初の臆病さがあつかましさに変わり、慣れると全くどうしようもない悪ガキになった。彼は、父親が最低限の保護義務として作っている梵子術の防御結界を壁とする家から抜け出すことばかり考え、度々実行した。対して行儀の良い雉猫は、しかし、本来の白に黒の性質を半分血に流しているがゆえにその斑色となっているかのように、黒の蛮行に興味を示し、一緒に

ついていって悪ふざけをする。雉猫はその度に、彼が一人でいたなら絶対に経験しなかったような厳しい折檻を兄弟と共に受ける。首謀者はもちろんそれ以上にこっぴどくやられたが、やり返しもし、虐待者には生傷が絶えない。比較的可愛がられている方も、編屈した愛情によって増幅した憎悪の餌食となり、決して軽いとはいえない仕打ちにあう。

そうした後、3匹は仏頂面になって、二匹の子供らは石の陰にうずくまってじっと虐待者を睨み続け、弱者相手に力を誇示する浅ましい化猫はさらに子供らを罵りながら腹いせとばかりに、崇高な趣味とやらに没頭する振りをする。ウムポ・ルサは詩文を書くのだ。どれもうまくいかず、数行にも達せずにくしゃくしゃにされてしまうのだが、そこには彼の芸術に対する無能振りを肯定するものではなく、彼の安定しない不満だらけの心境と、現状の能力を超えた厳しい要求を自己に課す彼の才質が体現されている。何千回目に試みられた詩は、また捨て去られた。「屑どもめ！」彼は子供らに向き直って小石を投げつけ——しかもさらに彼のストレスを増やすことに、素早い彼らにはまったく掠りもしない——たが、それは対象を見つけて現世の空気に言い訳を与えているだけのこと。本当は二匹を通り越して永遠の空間を循環して戻ってくる最も遠い場所、自分の背中に宿る自己の魂と、その生み出そうとした水子のごとき不具の芸術に向けられている。そして、ふて腐れて横になる。

何時間もそのままで三匹は眠ろうとしないが、いつのまにか、子供等は父と母と敵の役目を一人で担うやもめ男の脛と腿の、それぞれ思い思いのところに乗っている。時がたつほどに彼らの体は見違えるほど逞しくなっていくが、重さが土台を圧迫して苦痛を与えても、土台は決して身動きせずにそれを受け入れ、いまだに子供らには巨大に感じられる両腕が動き、二匹を撫ぜ、毛玉がすりよったり、かじりついたりする。だが、子供達が自慰のごとき悪習にふけるとき、すなわち親の上で気分が良くなり、それに酔いしれてごろごろと喉を鳴らしながら己の尻尾の先を盛んに舐めつづけているのを見つけたときは、ウムポは絶対にそれを許さず、何が何でも足上から振り落とし、このような本能的行為を全く悪とは思わない無邪気な彼らがそれを辞めるまでしぶとく痛めつけ、時にはその行為を自分も気味の悪いやり方で真似して揶揄する。

このような、ウムポ流の儀礼教育だけでなく、彼は、子供達には早すぎるような難しい知恵を授けようと躍起になった。彼は泡を吹いてわめきちらし、この付近だけでも多様性極まる小さな動植物の名前や特性をほとんど残らず暗誦できるように強要する。これは、頭の良さが露骨に見え始めた縞模様の毛並みを持つ方には楽しみですらあったが、落ち着きのない黒には苦痛でたまらない。彼はなじられ、薬草や毒草の名前を思い出せないたびに殴られ、反抗してウムポの顔の傷を増やしていく。黒猫にはそっちの方が得意で、体の一回り大きく優雅な雉猫とじゃれあいながら喧嘩の真似事をするときも、無駄のないしなやかな細身の体をばねのように使って相手を翻弄した。雉猫は柔らかだったが、黒はほとんど豹のようであって、体の肉が全て筋肉のようである。ところで、その頃には、最初は名を与えられずに適当に色とか「オイ」「お前」とかで呼ばれていた二人に、識別のための名がつけられている。

黒はピサ、縞はラス。合わせるとピサラスとなり、これは古獅語(仙猫支配時代に使われて有名になったためこのように呼ばれるが、実際の起草は犬族という説が一般的)で何かの意味になるらしいが、由来はウムポ・ルサの心の中だけにしまわれているし、これを二つにわけてしま

うと何の意味ももたぬ響きだけの名前になる。ピサは無駄にかけまわり、二歳で自分の三倍もある体躯の凧鼠を平気で狩るようになっていたし、僅かに陽光の指す場所を見つけてはそこで日向ぼっこを美味そうに貪るラスの方は、その道では比類なく偉大な父の梵子術を見様見真似で少しずつ取得し、今では兄が愚かな突撃で怪我をして帰ってくるのを癒してやることができるほどになっている。彼らは良くある捨て子で、どちらが兄なのか弟なのか、本当に血縁があるのかはわからなかったが、本人達には重要な物事にもかかわらず、化猫がこれといった理由もなく適当にピサを長兄としたため、以後、この順列はあらゆる場面で尊重され、重要な意義をもつようになる。

「今日は」ピサは得意げに息を荒げる。「今日こそは、あの川を向こう岸まで泳ぎきってやるんだ。そうしたら俺は絶対にこんなところに戻ってこない。本気だぞ」

ラスは黒猫を穏やかな丸っこい目で見つめ、首を振る。

「兄ちゃん、いけないよ。僕も同じ気持ちだけど…　父さんが聞いていたらどうするのさ」

「あんなヤツ、首の骨を圧し折ってやるさ、そのうちな。まぁ、今は生かしておいてやろう、どうせしがない老いぼれだ」

「じゃあ、僕も行くよ。兄さん一人では心配だからね」

「もちろんだ、ラス、お前は俺と一緒にいつまでもいるんだ。どんなときでもな、絶対だぞ」

「…約束するよ」

ラスは、はっとなってピサの背後を見る。彼の表情が変わる。困ったり嫌気が差したりしたときに見せる癖で、片目が半分閉じられている。転移霧の術で、恐るべき親が森の奥深くの散歩から不意に戻ってきたのだ。聡明な弟の心配事はかろうじて避けられ、帰宅はウムポに聞かれてはまずい台詞の発せられた後のようであった。

「たまには言いことを言うな、ピサ。そうだ、お前達二人はどうせ大したことのない凡俗だ。だが、俺に関わったからには、相応に、外の無分別と無味乾燥が支配する広漠とした地を我が物顔で闊歩する、救いようのない雑多な連中には是が非でも優越してもらわなくてはならない。二匹でようやく一角か、うまくいけば、あの無限の雑魚ども、一般大衆を絨毯のように敷き詰めてその上に君臨することもできようし、…二人でいること、それが、お前達の総てだ」

「けっ！」ピサが唾を吐く。

「ふん、たまに誉めればそういう態度か、クソガキめ。じゃあ、俺が苦労してとってきたこの窯椰子の実は一人で食うとしよう。いや、ラスも食うか。仕方ないな」

ピサはぎくりとして涎をたらしそうになったが、必死に飲み込んでふて寝を決め込む。ウムポはわざとピサに聞こえるように音を立てながら実の甘い液を啜り、「うまい、この世のものとは思えん！」と絶賛して叫ぶ。

「うるさい！　寝れないじゃないか、そんなに美味ければその木の下で一生を過ごすがいい、どうせこの森から出られん臆病者が！」

噛み付くように吼えたピサに、実の殻が勢いよく投げつけられる。ピサはかろうじてそれを避けたが、

怒りに身を震わせ、今日という今日は家出してやる、と瞳を燃やす。が、すぐに、その殻にまだ液が残っていることに気が付いてしまい、しぶしぶ座り込んで食べ始め、数刻もたたぬうちに親子の食卓の無くてはならぬ人員として溶け込む。家出を切望する発言をはばからなかった子供達二人が親元から、予想しない形で別れたのはその二日後の夕刻である。

２、率いる者として

兄弟はその日も梵子の壁から抜け出し、森の中を走り回る。あまりにも幸福そうに自由を満喫しているので、彼らが死の危険と常に隣り合わせにいることを忘れさせそうなほどである。そう、彼らはとてつもない危険、後世の優れた踏破家でさえ身震いするような環境をアスレチック代わりにしているのである。例えば巨大な出目の頭部に直接無数の手足が毛のようについている鞠陽を見つけて彼らは歓喜し、それをもっとよく観察しようと不用意に近づいていく。殺戮の経験を養分とするこれらの邪悪な生物に戦いの理由など必要ない。化物は出会い頭、愛らしい小猫たちに機関銃のように容赦なく梵子術の弾丸をばら撒いた。彼らの天性の勘がなければそこで標的は二盛りの灰に変わっているのだろう。子供達は方々に飛び退り、そのまま藪の中に姿を消してしまう。豪胆で、かつ、叶わない敵に対してもあくまで冷静。平地の人々を震え上がらせる妖怪は必死に走り回っても二度と小さな妖精達を見つけることはなく、妖かしたるものが化かされるなど、と憤慨したかもしれない。

その間、兄弟はもうそんなことは忘れ去ってしまう。いずれ偉大になる者たち。彼らにはこんなに愛らしい姿の時代から、もうその生まれつきの寛大さ、将来的には自らの下に屈服する者達を上から見下ろす姿勢が窺い知れる。だが、もちろん子供そのものでもある。彼らは腹を抱えて様々な悪戯の成功や失敗を笑い、お互いにつつきあう。つつきあいが段々小突きあいに、それが当たり所の悪い一撃に変わる。ギャッ！と、本気の悲鳴があがるやいなや、どちらもパッと身を翻して飛び退り、ピサは腕組みし、斜めに構えて自分の耳に噛み付いた弟を睥睨し、弟は弟で、負けじと興奮した息づかいで腰に手を当てている。後者は、少年らしい空想力で単なる小石に面白そうに戯れる兄を理解できず、自分が放っておかれているのでちょっかいを出してみたのだ。兄も弟も、半分は苛立ち、半分は待ちに待った状況に興奮を抑えられない。対峙した二人はそのまま睨み合い、ゆっくりと油断なく、間合いを詰めずに相手の横へ回り込もうとする。お互いにぐるぐると一つの円周を描く。仕掛けたのは縞模様、体を丸め、弾丸のようになって兄の不意をつくように突進する。ピサはもんどりうって、二人は組あい、殴り合い、その腕に噛み付き、尻尾を踏みつけ、ごろごろと一つの球のようになって坂を転げ落ちていく。

地面は石でごつごつ石しているが、弾力性充分の体とふわりとした体毛が皮膚を守るから気にもならない。ポカポカと、お互いに興奮して近づきすぎているので決め手にかける叩き合いが延々と続くかに見えたが、ピサが弟の尻尾を噛もうとして身を翻したときに組んでいた足が外れ、その隙にラスは脇の岩の上に後退する。しかし、一度火のついた闘争心がこんなことで満足するはずもない。今度はピサの

番だ、――見よ、あの岩の上に陣取る弟の様子を。俺のことがまるで見えていないかのように、頭の後ろを気持ちよさそうに掻いて、斜め上空に投げている目を細めたり、乱れた尾の先を毛繕いしたりしているではないか。柔らかでざらついた舌が毛を撫ぜると、魔法のように痛みも毛の乱れも落ち着いていく。尾がふらふらと動き、ラスは驚いたように自身のそれを追いかけ、後ろを振り向き、体を回転させ、一人で猿回しのような仕草をしている。ああ、あれはもちろんわざとやっているのだ。クソ親父の言葉を借りるまでもなく、猫族が自分の体を隅々まで気高い精神で制御できるようになってもう歴史的には久しいのだから。挑発に乗れ、挑発に乗れ、飛びつけ、次の狙いはやつの首筋だ――

ラスは不意に飛び掛ってきた黒い塊に目を見開いて驚いた振りをするが、もちろん、予測の範疇である。彼は腰を不自然な方向に曲げる。

「兄さん、当てが外れたようだね…　その攻めは昨日僕がすっかりやっつけたじゃないか」

「舌噛むなよ！」

ピサは岩を蹴り、角度を変えて弟の避けた方向へ跳ぶ。ラスの驚愕は本物になった。二人は再び重なり合い、叫びあって少し殴りあったが、また、ぱっと離れ、間合いを取る。今度は兄が、さも詰まらなそうに足をぷらぷらとさせ、もはや縞模様の雉猫など眼中にもなく、目の前を飛んでいく小さな羽虫を手で抑えようと躍起になる。その様子を弟は前傾姿勢になりながらじっくりと睨み、足に力を溜め、尾を振り、明らかに次の突撃を予測しているであろう相手の本当の隙を窺う――そう、彼らのじゃれあいや喧嘩は、何よりも重要な戦闘演習であった。彼等の天性が困難を伴う運命を予期したことで、本能的な、生活に使う必要以上に、それは激しく行われたのかもしれない。攻撃は交互に行われ、様々な予期され得る事態が抜かりなく訓練されていく。

お互いがいなかったら、もしも父に一人子としてただ可愛がられ、過保護にされているような子だったら、彼らは後の偉業を成し遂げるようには強くならなかったに違いない。お互いがいたから、他に誰もいなくても全く寂しくなかったし、精神的にも大きく成長していくことができたのだ。多くの人間に会わず、影響という試練を受けずに偉大になる。これは不思議なことだったが、それほど、お互いの人格の素養が大きかったということがいえるのかもしれない。陰鬱な暗い森ですら彼らの幼年期の輝きを、もはや再び戻ることの無いそれを翳らせることはできず、それどころか、優しく微笑んで見守らずにはいられないようであった。

「面白いよな、それ…　いや、俺は、そういうのはできないよ。俺にはさっぱりわからないんだ、梵子言語の文法だっけ…　もうウンザリだ、聞くだけで頭が腐ってしまうよ」

毒草の先端に可憐についた蕾が見る見るうちに乾いた血のような色模様の花びらを綻ばせていく様子に、ピサは心から感心する。ラスが指先から発した淡い光をかざした結果である。兄はそういうとき、賢い弟のことをどれだけ誇らしく思い、彼との友情を幸せに感じ、そういう気持ちだけで心を満たしたことであろう！　優しい弟は、しかしそこまで踏み込んではいない。「兄さんにもきっとできるよ、でも、やろうとしないんだからね…」

「おい、てめぇが化猫か？」

背後の藪がなって、人型の生物が幾つか姿を現したようである。兄弟はとっくにそいつらの気配に気付いていたが、自分達のやっている遊びに夢中だったので、何かの対処を予めしておこうとは思ってもみなかったらしい。雑魚に目をくれている暇はないといったところだが、父に言語教育をも鞭持ってなされていた彼らは鎖禽(さきん)語系(南部の飛竜者族から伝わった楔形文字を使う言語。古代龍語が発祥という説もある)の強い訛りが入った前語を理解でき、ようやく振り返る。愛らしくにこやかに、「誰？」。最初は興味なかったのだが、どんなに下品な相手であろうと、思えば生まれて初めて他人に出会うことになるのだから、兄弟はすでに好奇心による興奮を隠すのに必死である。

「二匹だぜ、どっちもか？」

「いや、違うだろ、こんなチビどもじゃあないさ。おい、ガキども、ここら辺に大きな猫野郎がいなかったか？　俺達はそいつにちょっとしたヤボ用があるのさ」

粗末な衣服の腰部に大きめの平刀を差した男達が、下卑た笑いを破裂させる。プライドの高いラスがピクリと反応し、低い声で唸り始める。

「まぁ待てよ、ラス、ええと、なんだっけ、四匹くらいいるな、なんつーのかな、こういうのは…」

「指者が三匹、瘤取者が一匹、どれも雄だね。兄さん、僕は宣言する。こんなやつらは存在自体腹に据えかねるよ…」

二人の会話は聞こえるように前語でなされたから、男達は唖然とせざるを得ない。

「匹？　雄？　おい、話しかたってのを知らないようだな。おじさんたちが教えてやろうか…？！」

「なんだ、睨むときはそうするんじゃないんだぜ。相手をもっと萎縮させるには…」

ピサが丸く短い中指を伸ばし、爪をゆっくりと眉間に寄せ、寄り目になっていく。男達の奇異の目が薄笑いを浮かべながらそれを追いかける。フウッ！　突然短い唸りが彼の体から発せられ、体毛が針鼠のように逆立ち、体が数倍に膨れ上がった錯覚を来訪者に与える。小さい体に生まれながらの貴族性を宿す豪胆な兄弟は、よろけて藪の刺に刺されたり石に頭をぶつけたりして大騒ぎする連中を指差し、腹を抱える。

「僕等は、その人を知っている。でも、意地が悪いから、教えてあげないよ」

怒り狂った山男どもが刀を振りかぶるが、武器も防具も無い子供達に、かすり傷一つ与えられない。

「くそ、すばしこいヤツラめ、大人しくくたばりやがれ！」

「ま、待ってよ、あんた達は俺達が狙いなの？　冗談じゃない、さっきは悪かったよ、歓迎するつもりだったのに…　言うことを聞くよ！」

「兄ちゃん、何考えてるの。あんなにお世話になったあの方の居場所を教えるなんて…

この人たちは、悪い用事があるに決まっているんだよ、目を見れば一目瞭然じゃないか」

「じゃあ好都合さ。俺はそんな風に恩義を感じてはいない、これっぽっちもね。あいつが困ったって知ったこっちゃないさ！」

剣を持った大人たちをそっちのけで兄弟は激しく口論し始め、またもや男達を呆然とさせる。がみがみ言い合う子供達を前に、男達は互いに目配せしあった。先ほどとはうって変わって、喧嘩は良くない

と聡し、優しげに話し掛ける。それは下手糞な演技で、ピサは吐き気を催したことを身振りで密かに弟に示す。彼は無邪気な様子で、教える代わりにおじさんたちの家に連れて行ってほしい、と媚びる。化猫にいつも酷い目にあわされてもう嫌気がさしたから、家出してみたいのだ、と。ラスもそれならば、としぶしぶ承諾。男の一人がさらに浅知恵を働かせ、自分達の親分は怖い男で、君たちと仲良くなったというのでは面目が立たないから、一応、見かけだけでも手を縛らせてくれないか、と持ちかける。いとも簡単に子供達は手首を差し出す。

「ねぇ、きつすぎるよ、それに、これは紐じゃなくて鉄の鎖じゃないか。重いよ…」

「…大人を見くびるとこうなるのさ、少年達。またあんなに逃げ回られたんじゃ厄介だからな。まぁ、せいぜいボスにこってりとしぼってもらうさ…」

おお、兄弟は騙されてしまった。恐ろしい大人たち、恐らく山賊か何かだろう、虜になって牢屋に入れられる！　あんなに華やいでいた兄弟が、不安と苦痛でしゃくりあげ始めている…――ところが実際は、鎖をかけられた手を必死に顔に近づけ、その下に涙はなく、悪戯っぽい笑いを必死に噛み殺しながら、二人は目配せしあっている。兄弟も前に何度か探検したことのある西の方面を半日ばかり歩いて、樹系妖怪の死骸と思われる巨大な幹の下に彫られた穴に連行されていく。土から長く立ち上がり、無数の網の目のように張り巡らされた根が屋根や柱のように山賊達の家を仕切っていて、その一室に、彼らは頚木でつながれた。

兄弟は冷たい土の上でじっとしながら、無言で心をときめかせている。彼らの空想がこの真っ暗い空間に共有する現象となり、言葉も必要となく、子供特有の感応力が発揮される。これまでにない溌剌とした幻想の中に出かけた兄弟は、この洞窟がどの程度に大きくて、そこかしこの部屋にどんなものが置いてあるかを想像し、探検して歩く。それはすぐ後に現実化するであろう光景を先取りし、それとの差異を検証して興じるだけでなく、幻想が現実を越える愉悦を与える瞬間でもある。ウムポの樹木の洞は住み慣れ、狭すぎたし、空想を発展させるには物足りなくなっていたのである。子供達は新天地を満喫した。

「すごいね、見えるだろ、あそこに見えるのは賊どもが溜め込んだまばゆいばかりの財宝の山だ。俺はあの王冠と青い宝石の散りばめられた杖がほしいな」

「うん、僕もだよ、それに目をつけていたんだ。でも、僕達の目は暗いところでも見えすぎるね。なんだか邪魔者がちらついて集中できないよ」

「そうだな、ようやく連中がみんな帰ってきたようだぞ。直にここに来るだろうよ。俺達を人質にされたからって動くようなあの男でもあるまいになぁ」

「どうであろうと父さんなら、嬉嬉として皆殺しにしてしまうよ。彼らをちょっとでも哀れに思えば、紹介なんてとてもできないよね」

「違いない、そろそろ外すか…　うんしょ　…っ…あれ、外れないや」

「構わないよ、杭ごと抜けば歩くくらいはできるし」

「そうだな、あいつらに外してもらおう。鍵は親分さんが持ってるんだろ。ふんっ…うぬぬぬぬぬぬぅ

っ…！」

全くのバカ力である。兄弟がこれほどに成長しているとは。常日頃陰で見守っているあの老人にはいつまでもか弱い赤子のようにしか見えていないのに。杭を堅い土から抜き去った兄弟はそれを後手にずるずると引きずったが、どうにも邪魔なので、腕を前の方に頭の上から廻し、それを両手で握る。もちろんそれは依然として邪魔者でしかなく、兄弟の得意とする敏捷性を削ぐものであり、今更過剰になり始めているハンディキャップを埋めてくれるおあつらえ向きの武器とはお世辞にも表現できない。それでも、それは兄弟が始めて手にした武器の記念すべき第一号であったという点では、何らかの誉れをいただくことになったといえるかもしれない。以後、何度となく握られ、敵を朱に染めていく皇帝の剣、その先駆けの――

ドアを破る轟音が洞窟内に響き渡る。賊どもは慌てふためき、武器を取ったり、盾と飯盒の蓋を間違えたりしている。近隣に住む巨猿の襲撃かと思ったらしいが、生物学を含めたあらゆる知識に乏しい彼らの頭脳には、そんなものよりも自分達が襲撃してそれが隠し持っている財宝をせしめんと企んだ相手の方がよっぽど危険極まりないということなどには気付くべくもない。兄弟は鎖を取ってもらうためという理由で、食糧庫となっている部屋を衝いた。そこには三人の男が張っているはずだが、彼らの命運は見るまでもなく尽きたのであろう。

彼らは狭い地形を存分に利用し、すれすれの所で身を翻して相手の武器を壁に当てさせ、怒号と共に本気で襲い掛かってくる大人たちを足蹴にし、得意の爪をつかわずに棒を振舞わして敵の急所を確実に仕留めて気絶させていく。目的をもった戦闘としては初めてのはずなのに、野生の本能か、偉人となるべくして自然が抽出・交配・培養を続けた末の才覚か、彼らの戦い振りは手馴れた戦士そのもので、兄弟は興奮しながらも、仕事を一つ一つ片付けるような冷淡さを醸し出している。

しかし、ピサが深追いしすぎていく。危ない、向こう側の、左右の道筋のどちらにも敵が潜んでいる！

挟撃された黒猫はとっさにしゃがみ、一方の攻撃を武器で受け流そうとしたが、それは単なる棒切れにすぎず、杭は折れれば良いものを、そうはならずに敵の武器を挟み込んで引きずってしまう。相手の体重を受けて戸惑ったピサは、思わずバランスを失い――あの恐怖の大帝、反吐の出るような食事と無理強い、理不尽な折檻で自分を苛めつづけてきた陰険な男の言葉が思い出されるようではないか。眼下はごうごうと響き流れる飛沫と切り立った無数の岩、落ちたら最後の綱渡り…

「尾でバランスを取れ！　左右に振るんだ、いいか、貴様等屑どもが、猫族に絶対不可欠で、お前等に負けず劣らず下劣な他種が重要視せずに退化させてきたバランス感覚を失えば、それで一巻の終わりなのだ。それ、それ行け、あ、バカめ！」黒猫は一瞬自信を失い、ぐらりとして、悲鳴をあげながら無慈悲な落下を遂げようとした。父親が梵子の見えざる推進力で飛行し、彼の首根っこを齧る。黒は目を力強く瞑ったが、それは、首筋の打撃と思われたものが面食らうほどに優しい甘美な刺激だったので、たまらなくなってしまったからである。それが曲がりなりにも親というものであった――あの失敗の再来である。

用意の良い後方のラスが梵子の円陣を組んでいる。オレンジ色の火球が轟音と共に術士の足元から出

現し、急いで目標に向かって射出されるが、それは少々遅かった。ピサの背後から襲った敵に梵子弾丸が見事命中したが、勢いのまま、刃はピサの肩口にめり込もうとする。しかし、彼には以後に幾度も体験されることであるが、偉人に特有の悪運がついて廻る。黒猫と武器を介して連結された敵の方は武器を放して起き上がることを思いついたのだが、それが彼の不幸、ふらついてピサに覆い被さるような格好となり、代わりに仲間の一撃を受けて絶命し、運命の寵児の贄となる光栄を与えられたのである。もう一人はその下から飛び上がって顎に頭突きを食わせると大人しくなった。

二人は死んだ敵を見下ろしている。今までも多くの蟲を、獣を、人型の妖かしを、相手を選ばずに必要とあらば、もしくは事の成り行きで殺してきた。そういうことを黒は考え巡らし、半ば空ろな瞳は床に広がっていく血の周を追いかけていく。

「さぁ、兄さん、行こうよ。鎖が邪魔でこういうことになったんだからね、さっきの失敗は帰ったら復習しておこう。まさか両腕無しで戦うといったことはこの僕の占いも予想できなかったんだから」

ピサは弟に答えず、死骸の生物学的種別名称を問い、それが鼠の成りあがった姿であるという回答を得る。彼は、これを見たのは初めてで、とても残念なことになった、としきりに壊れた棒切れのかけらで壁を掻く。落ち着くために誰しもがそうせざるを得ないような、爪研ぎができるほどには両手が自由ではないからだ。

このような様子を見た者は大抵、瑣末なことに心を揺り動かす男と将来の支配者としての偉業を結びつけるのに難儀し、偉大な人間は必ずしも不動の心をもっているというわけではなく、個体によっては矮小なものに左右されるものだ、などと結論付けるかもしれない。しかし、少なくともこの場合の最良の観測者は、兄がここにいる全ての人間を一人残らず自らの足元にひれ伏させるといった、成否の難易度を全く度外視した、何歩も前を見据えた目標を漠然と狙っていることに気が付いている。

それは兄弟の中で一度も明確に話されていないし、ここに来た目的のいずれにも含まれていなかったが、彼らのように、自らを急速に大きな存在に更新していかなければならない者たちは、無意識に小目標を段階的に設置して、そういうものを持たぬ大衆が不思議な天才的跳躍と見る成長を、実際には極めて着実な努力として達成していくものである。今回はピサがそれを思いつき、ラスがそれを理解したのだが、どちらも同じくらいの天才であるのは歴史を知るものであれば誰にも明瞭であるほどだから、その順番はどうでも良い偶然の産物であったし、互いの前進の方向について一々相談する必要がなかったのも全く不思議とするに当たらない。

それからは襲撃がまばらになったから、敵の数はそれほど多くないようだった。子供達は通路を左に進み、棚にある飲み物を口にして、焼付くような味に驚いて吐き出す。彼らにはこれが愚かな素振りで油断を誘った、自分達をはるかに超えた知性が周到に準備した罠だと想像され――その誇大な自分達の怯え方を、先ほどの憂鬱を忘れて笑う。

それはごく普通のアルコールであった。父はいつも軟化草などを発酵させてこのようなたまらない匂いの飲み物を作っている。ウムポ・ルサがこの類の濁り水を飲んだ日はいつになく大人しく、一度ならず老いた樹者の枝のように細くしなびた腕に子供等を抱き、信じられないほど美しい声で子守唄を聞か

せてやったものである。ラスはそれを素直に享受したが、黒っぽい塊となって震えている方は、明らかにそれを不気味がり、口臭から顔を背けている。一種の反抗心でピサはアルコールを毛嫌いし、立派な指揮官となって配下の労をねぎらうときも自分だけはいつも冷静で、ある時から彼自身のこだわりが解け、祭事に嫌いな濁酒を作らせて口に含むようになるまでは、酒宴の部下の興を冷まさないように注意するのが常となる。

しかしラスは、この薬品の効能を長々と陽気な調子で説明し、大胆な身振りを交えたために柱に大きな音を立てさせる。ピサの舌打ちがその口上を塞き止める。

「不味いなりにも兄さん、評価すべきところがあるんだ。それは、飲んでみなければ決してわからないし、それが経験論というもので、…うっ、ひっく、何より…」

「だからってお前、飲みすぎだぞ！　俺達はあいつらがどれくらい残っているのかよくわかっていないんだ。お前、俺を諫めるのが仕事の冷静な男が、なんて様だ…　いいか、これから飯を食う。束ねる者はきっと強いぞ、俺は油断しないし、やつは俺がやる。いいな？」

弟はそれを気前よく、美しい灰色の毛並みの下からも明らかに判る赤ら顔でにこやかに譲ったから、兄もそれですっかり機嫌を直す。自分を脅かすかもしれないほどに手強く、興奮させられる相手は一人に違いないし、その敵と戦う権利は兄弟のどちらにも魅力的であったから、いつもならそれを取っ組み合いの喧嘩でもって取り合わねばならなかったのである。

彼らは道を戻って食糧を少し調達し、邪魔にならない程に腹に詰めていく。それは半ば腐っているものもあるが、どれも全く食べたことのないものばかり、例えば小麦粉を練って焼いた半球状の塊とか、よく焼かれ、スパイスで味付けされた細長い干挽肉とかである。彼らはウムポが無造作に投げよこすゴミのような食物すら満足行くほどには与えられないのが常であったから、これは激しい誘惑となり、子供達はそれにあっさりとかかってしまう。父が何という粗食で自分達を苛めてきたか、世の中ではこういった美食にしがない賊ですらありつくことができるのに、という最初に湧き上がった憎しみも現状も忘れ、べちゃぐちゃと音を立て続ける。もちろん、彼らは自分達をここまで無意識に鍛え上げ、常に頭脳を沈着で明晰にしておく素材が父の食べ残しやゴミ、すなわちあらゆる知識に長けた者が厳選して選んだ滋養と極めて優れた成長剤によるなどとは露知らぬのである。そして、舌に珍しい大衆の粗食を夢中で頬張っている間に、危険の準備はすっかり整えられていく。

『禿鷹と屍』、これが、兄弟を捕らえた者達の団体名称である。そのリーダー格であるビスタン・ケイマリッチは騒ぎを聞きつけても慌てず、不手際を仲間のせいにしつつ慌てふためく部下を睨んで黙らせ、悠々と、武器も取らずに騒ぎのほうに向かう。子分が慌てて彼の立穴棒を抱えて従う。まだ元気な賊は各所に倒れている負傷者を助け起こし、そのほとんどが気を失っているだけであることを確認し、動ける者を連れ、再び突撃しようとした寸前で瘤取者の親分に制止される。彼は食糧貯蔵庫に繋がる三つの通路全てに部下を回りこませる。

「ケイマリッチ閣下、いけませんぜ、やつら、ただのガキだと思っちゃぁ…　もう一人殺られちまってまさ。皆で一気にふんじばりましょう！」

「『禿鷹と屍』ともあろうものが、あんな小童どもに？　…震えているのか？　臆病者が俺の武器を持つんじゃない、よこせ！」ビスタンは焦者(地神が土を捏ねて兵士としたものの子孫。知能は低い。顔などは自分で彫る。)を突き飛ばし、座り込んできょとんとしている子供達に歩み寄る。

「すっかり満腹というところか。御代はもっているのかい。それとも、化猫がお前達の分を払ってくれるのかね」

賊といえど、他人に食後の乱れた様子を見せるのは作法違反。ピサは手に舌で唾液をたっぷりつけ、顔を丹念に整え始める。ところがラスは再び食べ始める。酔っているので腹の抑制がおかしいのかもしれない。面白いことを何よりも尊ぶ黒猫の予想通り、いや、それ以上に、ビスタン・ケイマリッチは優秀な風体である。生まれながらの平均的身長からいくとそれほどでもないのかもしれないが、それでも他種族に比べると大柄で、何より、筋肉が文字通り鋼のようで、彼がどのような理由と行為を積み重ねてきたにせよ、無駄に集団的暴力による獲物を享楽してきたのではないことがわかる。体中の傷は、彼が幾多の戦いと身の危険を潜り抜け、少々情けない感のある部下達の先陣を切ってきたことが窺える。瘤取者種に特有の皮膚と筋肉の伏目が荒々しくささくれ立ち、瘤が活火山のように雄雄しく幾百も突き出ている。ピサが正直な感想として、ハンディキャップが少々重い、という苦情をもらしたくもなったのも無理のないことだ。

「一人仲間が死んだから、俺達を憎んでいるんだな。仕方ないな、こうなってしまったら…　おい、ラス、もう好い加減にしろよ、俺達もいよいよこれまでかもしれないんだぜ」

「待ってよ、それなら一層食い納めだ、兄ちゃん。ほら、この腐った匂いのするべったりしたものもおいしい」

兄弟は子供らしい実感の無さで喋っているが、例えそれが実感でも彼等は大して苦にもしないだろう。死を知らぬもの、死を意識しない健康な者は意外なほどぽっくりと逝くことがあるというが、兄弟は生まれたときから死と隣り合わせであり、既にそれと親しく、だからこそいかなる状況でも頑健にその境界線を綱渡りし、軽快に現世に踏みとどまってきたのだ。今回はどうなるのだろう、それは結果でしかなく、結果とは消えうせる定めの名残でしかない。尊い者が生きるとき、彼らの過程が一コマ一コマの意義ある断片となるから、ここで死ぬことも、後世に名を残すことも、彼らにとっては運命という一つの円環の縄に縒われた藁の一本一本に過ぎない。

ピサは望んだ強敵に対して無言で斜に構え、鎖と邪魔な板切れをぶらさげるのも意に介さず、腕を差し出して肘を上に曲げ、自由にならぬ手首の上を左右に広げた。ジャキッ！と音がするかのように、異常に長く太く、鋭利な爪が出る。それは勇壮なものだ。しかし、これで一体どうやって戦うつもりなのだろう――してやられた部分を抑え、引きずって観戦する連中はがやがやとしはじめ、その中には少なからず笑いが混じっている。ざまぁみろ、所詮はガキ、調子に乗るからだ…

『偉大なる大地を体躯とする巨人の名を借りて命ず、汝ら岩土の躯よ、這い出て汝等の父に譲られし、頑健さの片鱗を覗かせよ！』

雉猫の周囲の食物が吹き飛び、その下に隠し描いていた術の方陣が翠緑色の光を煌かせて露出、念に

よって整理した素梵子を操る梵子言語の命令文が術士の予め準備しておいた岩に、導火線を伝う火花のように流れていく。それを受けた岩と土の塊はたちまち顔の無い不気味な人型を取る。そのような準備された瓦礫が三つの通路それぞれの前にあって、どれもが同じような結果に到達したので、賊どもはすっかり肝を冷やし、騒々しさが恐怖を帯びる。

瓦礫の化身はふらふらと無機質的な動きを取り、不用意に近づく者に掴みかかろうとする。しかし、決して持ち場を離れず、無能なりにも弱点が特に無いので多少の投擲ではびくともしない。動く壁といったところか。

「ちょっと手間取りました、何しろ初めてやったからね。それにしては上出来でしょ？　父さんが僕達を監視するために良く使っていたので、見様見真似でできたんだ…　ふう、じゃあ、約束どおりに兄さんの番さ、悔しいけどね」

ラスはその場にへたり込む。複数の召還術を一気に成功させるのは彼にはまだ早かったのである。それでもさすがに、後世において豪傑的なピサに比して指揮官の鏡とされる沈着な頭脳をその愛らしい小さな頭に載せているラスであって、その働きによってなんとか一騎打ちの状況まで持ち込んだのである。だが、仲間から不気味な術で分断された敵の親玉が全く動じたところを見せていないのが、聡明な弟の不安を掻き立ててもいる。兄さんは疲れているし、こんな広いところでは地形を使うこともできないから、あの邪魔物がどうしても戦いに響いてしまう。いまだ勝ち目は薄いのではないかと彼は感じ、片目を細める。

「ふん、やる気らしい…　誰かこいつの腕を外してやれ。おい、誰でもいいんだ、スパンナ！　あるところは知ってるんだろ」

親玉に呼ばれたせむしの中年がびくつき、他の者は自分がどやされずに安堵する。

「しかし、こいつが、閣下もご覧になっているでしょうから今更説明するまでもありませんが、この化物が邪魔で、そちらに何もお渡しできんのです。武器を先にお取りになったのがもっけの幸いというところで、そのようなガキどもはその素晴らしい豪腕で一刀のもとに切り捨ててしまえば、このような紛い物の衛兵もすぐに消え去ってしま…」

ビスタン・ケイマリッチはスパンナの言葉の半ばで彼のいる入口の方へ大またで歩いていき、少し武器を腰の後へ引くと、体全体をばねにして振り払う。その弧の軌道上に置かれていた石の虚実体(素梵子術によって召喚された従者)の上半身が吹き飛び、さすがにそうなってしまっては不死身ぶりも発揮できず、下半身も先ほどまで上半身であった部品とともに瓦礫に戻る。

「これで通れるだろう。しかし、このままじゃあ大きな野望を達成するなど二の次よ。ガキどもを片つけたら貴様等全員の根性も叩き直す必要がありそうだな」

直ちに兄弟の戒めが解かれ、二人は腕を振って痺れを取ろうとする。だが、ここまで譲歩して度量の大きさを見せた男が、黒猫の背後から不意に攻撃を仕掛ける。ピサはそういったことにはラスとの遊びで慣れっこだったから、ひょいと跳躍し、太い武器を足場にしてさらに高く上がって敵の後に回りこむ。

「いいね、いい攻めだよ。待ってたんだけど、本当に来るとはびっくりしちゃった。正々堂々と戦って

くれるんだもの、俺も本気で、失礼の無いようにやらないと。…殺しちゃうよ、多分ね」
「ガキが図に載るんじゃねぇ…　イイコちゃんじゃねぇんだからな、こちとらは！」
　巨大な棒があまりにも速く振られるので、大きな扇子で叩いているようである。これほど威力のある打撃にはどんな防具も役に立ちそうに無いから、ピサが敏捷性を盾にしていることは本当に幸いであるという他は無い。射程も攻撃範囲も広い相手に、さすがのピサもただただ逃げ回るしかない。隙の無い相手に黒猫の興奮は頂点に達し、ゆえにある面では冷静、彼の隠された能力がどんどん引き出され、弟も驚嘆する宙返りを決め、ある瞬間、ほんの一瞬の偶然、もしくは天才的勘による衝動から、ピサは天井を蹴って頭上から巨体を襲い、鋭利なもので相手の首を挟みこむようにする。それで勝負は当然ながら決してしまう。世界中の高等生物のほとんどが体の各所に分かれた機能性を持ち、そのうちの重要ないずれかが破壊されてしまえば即座に全体の死に直結するといった脆弱さを持っている。あの強靭な瘤取者とて、脳と臓物の連絡通路を刺し貫かれるようなことがあれば、その摂理を免れぬ。山賊のボスはがくりと膝を落とし…、――言った。
「…どうした。ガキが、殺すのが怖いのか」
「そうだね、せっかく知り合いになれたのにさ、それはとても惜しいんだ。あんた強いしね。俺じゃなかったらどんな奴だって勝てやしない、そういう意味でもとても惜しい、こんな山奥でその能力を朽ちさせていくのはね。でも、そんなのは俺の身勝手、子供の我侭でしょ。だから、交換条件をつけるよ。
　あんた等の探している化猫の名はウムポ・ルサ。俺達の父親気取りさ。でも、その実はとんでもない悪党で、俺達も危うく苛め殺されるところだったんだ。あんた達が探しているのが何か知らないけど、あいつは確かに何かを家に隠し持っていて、そういうのに俺達が間違って近づいたときには無差別に激怒しやがる。俺はあいつを憎んでいるから、あんた達に協力したいんだ。最初からそういうつもりだったのに、あんた達が縛ってしまうものだから。解いてもらおうと思ってちょっと動いただけなんだよ。…ところで、一体あいつは何を持っているというんだい、あのケチ野郎は」
　ビスタンは取り落とした武器を拾わずに起き上がる。
「奴自身の開発した、二本の武器だ。もちろん、しわがれた老猫には相応しくない代物で、あいつが二百年前にゼイダキャトの科学者だったときに作ったのさ。ところが、完璧主義者の狂った開発者が作った規定外のそれを使いこなせる者がいなくて、全く相手にもされず、皆にバカにされながら、それを後生大事に持ち歩き続けていたらしい。それを、遠慮なくこの俺が有効利用してやろうかと思ったのだ」
「ゼイダキャト、地図で見たことがあるよ、兄さん。小さな街だよね…　洞窟の第三層の。しかしまさか、父さんがそこの…」
「けっ、何にも知らないようだな、マジックやら忍者ごっこやらはどうにかできているってのに。どうも、面白くない雲行きだな。本当にお前等を連れて行って、奴が身代金代わりにブツを出してくれるものか、そこが知りたいんだがね」
「何ともお答えしかねるよ」多分ビスタン専用であろう、この粗末な住居には不釣合いに機能的な構造の優美な椅子にラスが子供らしい無遠慮で腰掛ける。その周りでは幾人かの子分が親分へのジェスチュ

アと恐ろしい子猫を怒らすまいとする苦慮で板ばさみになり、気遣わしそうにしている。
「僕の思うところでは、というより、これは事情を少しでも見知っているものであればそれほどの能力を必要とせずに思い当たる事実なのだけれど――あんた方が僕等の父さんに矛先を正式に向けていなかったことは全く君達の幸いというものであって、束になってもあいつには叶いはしないのだ、決してね。いいかい、君、そこの…　黒い髪の虫さん、疑わしそうな目をして隣に耳打ちしたがね、全部聞こえてるから注意してね。注意ついでに忠告しておこう、あの人があんたを標的としたとき、奴が控えめなら、逞しいあんたの腕は一瞬にして消し炭と化すでしょうよ。もちろん、あの人が本気だったら全身ごと消失しているから、かえって気にやむこともないのだろうけれど。――あいつの術力、知識、念の操作に関する技量…　全く驚嘆に値するよ。僕の術なんか足元にも及ばないし、今後努力してもそれに続けるとは思えない。そんな風にしてまで術だけにのめりこみたくも無いからなんだけど。まぁ、君達が幾百人で奇襲しようと、奴がどんなに油断していようと、その差の堀を埋めることはできやしない」
　指された男はむっとして歯をむき出して見せたが、その腕は少年の冷たく見下ろすような目に映る予測に操られ、焼かれるかもしれなかった部分を無意識にしきりとさすって安心しようとする。黙っていたピサが、口を挟む。
「俺はこいつと少し考えが違う。つまり、俺達だけ、あんた達だけで戦っても勝てる見込みは薄いけど、協力してやれば、きっとあの化猫――ふふ、あいつに相応しい呼び名だ、あいつが巷でそう呼ばれているなんて、全くお笑いだ。俺も早速その呼び名を使ってみることにしているが――ウムポ・ルサを打倒し、…あいつの持つ、あいつに相応しくなくて腐ろうとしている武具は相応しい人間に取得され、有用に使われることができるはずだ。これは武器を救うことにもなるね、そうは思わないかい、親分さん。あんたの考え、狙いは、全く称賛に値するね」
　先ほど生死の境に触れる激しい戦闘を行ったとは思えない元気さとくつろいだ様子で黒猫は土の上にあぐらをかいていて、さっき外の空気を吸いに行ったときに戯れにもぎ取ってきた雑草の穂を腿に打ちつけながら力説している。侮れぬ不思議な子供達の能力と思考の動きを見極め、敗北したという不利な状況を逆手にとって利用したいと狡猾に考えているビスタン・ケイマリッチは、最初に出会って不覚にも心を揺り動かされたごとくに、この時点ではまだ自分にも説明のできない子供らへの強い興味の正体を思案し、子供の話をあまり聞いていなかったので口をもごもごさせている。代わりにラスがすかさず横槍を入れたのでそれは帳消しにされる。
「…武器を救うだって？　あまり賢い表現とはいえないね、武器は救うものになっても、救われるものにはならないし…　文意の表現については兄さんの領域ではないから大目に見るとしても――どう考えても、それは武器を救おうと蛮勇を働いて自分の命を捨てに行くような行為さ。結局は『刀さん』にとっても救世主にはなり得ないだろう」
「お前は何にだってとっても厳しいね、ユマの泉水(心の性質を成長させる水が湧き出る場所の総称。文脈からすると、ゲルペンフユ森には勇気の泉があったのだろう)を喉が欲しがっているんじゃないのかい。弟よ、お前は父さんと呼ぶがね、俺は一度だってあいつをそういう風には呼ばないし、そうしようとは絶対に今後も思わないだろう。俺が今まで喋ってきたことが演技だと思ってる奴が

いたらはっきりとその思い違いを訂正しておく機会を与えてほしいものだ。俺は間違いなくあいつを憎んでいる。そして、俺達は強い、あいつの力無しでも、もしくはあいつを利用して強くなっていく。あいつを倒すことができるだろう。もちろん、思い上がっているわけじゃない。用意は万全にする。だから、味方が必要だったんだ。

どうだい、俺達の利害は一致している。あんたたちはやつの財宝を得るだろうし、俺はやつを倒し、猫族の誇りある状態に還ったことを、すなわち本当の意味での独立を宣言するだろう――」

『禿鷹と屍』の面々は子猫達の見違えるように威厳ある態度と流暢な話し振りとから、捕らわれの身になっていた彼らがまさに文字通りの猫かぶりをしていたことを今更ながらに寒気を覚えながら理解し始める。立場上どのように行動したら妥当なのかもわからず否死(霊体生物、いわゆるアンデットのことだが、特にゾンビのようなものを指し、『不気味で鈍感』なことを『否死めく』などと形容する)めいてふらふらと当て所もなく右往左往し、未開な幼少の精神を捻じってそのまま固めたような知性しかない周囲の三十五名は、不遜な子供の言葉を丸呑みにし、本当にそれが自分達に利なことかもしれないと考えたり、兄弟の話からというより、親分にすら対等以上であった恐るべき戦闘力を秘める兄弟を育てたという事実から推測される化猫の恐ろしさに今更ながらに震え始めたりしている。そういう空気は不安な騒然として波及し、中心にいる一人だけ逞しい親分を苛立たせ、彼は周りを見る気も失せていたが、かわりに地を震わす沖御輿(おきみこし)(海岸部にかつて住んでいた世界最大の体躯を誇る巨人族。今は灰色巨人族に負けて激減した)の足踏みのごとき轟音をたてて黒猫の隣に座り、子分どもをはっとさせる。

「期待に背くようで悪いが、黒坊主、俺の腰抜けどもに関する解説は弟君に任せた方が良いらしい。だめならだめで仕方ねぇな、お前等に一刻も早くここから出て行ってもらえば、散らかった家の中を片付けるのが俺の次の慎ましい願いになるさ」

「本当にそうは思ってないな、しかも自分独りで勝ってみせようと思ってるね？　いや、悪いね、俺達猫族は目を見れば考えていることは大体判っちまう。特に、優れている連中の思想に共感して判るのさ。何しろ、俺があの化猫を知らなかったら、俺だってきっとそう考えるに違いないから。

それなら余計に去れない。さっき、せっかく出会った一角の人間を失うのは惜しいと言ったでしょ？いいかい、それに、俺にはプランがあるのさ。あんたの部下は、――いや、どんな人間にだって成長する余地が多分に残されている。何もできないようなやつが、実際にやってみないと信じられないことだが、めちゃくちゃに鍛えればそれなりになるものさ」

その思想は『お前等屑どもでも死地を越え続ければいずれあの炎の死神(軍神リグアのこと。火の神は『最強』を表現するときにしばしば譬えられる)のごとくになれるだろう！』と叫ぶ孤独に狂った男の影響ではないか、と弟は思い、思うだけでそれを口には昇らせない。彼は父を憎みながらそれに似ようとする兄の姿を、聡明な同胞として微笑ましく思っているわけではなく、すでに片目を嫌そうに閉じて、もう一つの目は伏せて聞いている。端的に言うと、言葉と裏腹に、彼はピサほどには父に情を抱いておらず、化猫に対しては術の優れた師、もしくは餌を持ってきてくれた保護者、親の愛情を時折感じて心を満たす親子関係のまま事――と彼は心中で表現する――をする相手といったくらいに見ているのである。

だから、弟は兄の激情する憎しみの火種となっている父への、いや、母代わりも同時にしてきたウム

ポ・ルサという名をもった両親に対する捻くれた愛情と、それによるどうしようもない憤懣をくすぶらせている様子を冷静に客観視できる。彼は額を右手で抑えて、そのための表情を隠すようにして言う。
「兄さんは、僕を意気地無しというんだね。まぁ、そこまで言われては引き下がれない。いいよ、やってやる、そうと決まれば隊を調練しよう。それは僕に任せてくれるね。ご存知の通り、僕は父さんが奥の穴――猫達の粗末な住居には床の土に一人分体がすっぽり納まるくらいの穴があって、そこに雑多な荷物が無造作に積もっている――に入れている埃と染みだらけの、英雄仙猫が記した兵法書をこっそり愛読しているんだからね。あの百六十五ページ…、僕も男として、互いに無関心でばらばらになって力を弱めている大衆という顔の無いなめくじ達を細胞に見立て、一堂に集め、一匹の巨大な竜として合成することに興味がないはずはないからね…」
「お前は祈祷にも詳しいだろ。面倒なことを委ねるついでで悪いが、その前に、全員を一つに見立てるなら欠けたものをきちんとしよう。誰か、あの不幸な人をどうしたか知っている？　えぇ、裏に埋めた？　みんなで祈りを捧げたわけでもないのに？　…一体、…あんた方に、神は無いのか！」
　突然のことである。先ほどまで大人しかった黒猫は土を掻き毟って憤怒と仁王立ちになり、わけのわからないほどの王者的な感情の高ぶりによる激しい身振りで、年齢に遺伝的な差異が手伝って自分の倍以上も身長のある男達に詰めより、すぐに全員を整列させるように喚きたてたので、さすがに寛大な親分も堪忍袋の尾が切れて彼の肩をぐいと掴み、押してよろめかせる。
「おい、おめぇ、冗談じゃねぇぞ、てめぇ等が殺ったんじゃねぇか！
　いいか、俺達はなんとも思っちゃいねぇがな。今までに何百とも殺してきたんだ、これからもだ、どうとも思わねぇ、自分が死んだってな！　くそくらえだ！　死んだ奴が悪い。それでも奴は寝食を、悪道を共にした同胞だったから、適当に処理してやったんだ。掌で足りる土盛りと墓標に一本の葦、猫の偶像よりどれほどでもマシってもんだ。
　ここに来て偉そうにするんじゃねぇ、追い出さないだけでも、てめぇらにまだ利用価値があると思って大目に見てやってるのに、一体何様のつもり…」悪ぶっている体内に現在の下賤な身分に甘んじない高貴な野望とそれゆえの憤懣をくすぶらせている巨漢は、背を向ける子供の肩がぶるぶる震えているのを見てはっとなる。
「…俺だって、お、俺…　…殺したくなかったんだ。あいつが突然来て、身をかわすので精一杯だった…！」
　ピサは振り向き様に自分を突き飛ばした男に猛然と飛び掛り、その筋骨に膨れ上がる鋼鉄のような腹を拳で何度も打つ。無論、勢いは凄いが兄弟喧嘩に使うような武器は、鍛えられた体躯には脅しにもならない。ちょっと前の戦いの再来を想像して子分たちは慌てたが、親分は誰にも目をくれずに眉間にしわ寄せて厳しい表情をあらぬ方向へ向けたまま。ピサは涙も嗚咽も全く隠さずに爆発させている。弟はそれをぞっとするような恥じ入らせる光景だと思ったり、うらやましい自由な特性だとも分析したりしつつ、のんびりと椅子の上で毛繕いしている。
　それから一週間もしないうちに、元々三十六名いた山賊は三十三名に減る。一人は土に還っていって、

あとの二人は考え方の代わった組織についていけなくなって夜にこっそり姿を消したのだ。ちっぽけな大人らしい考えで、それなりに小物としては賢明だったのかもしれぬ。偉大な人間に関わるということは意義深いことで、中核となる人間の助けともなるが、助けを行う当人にとっては自分の器を超える働きを要請され、存在を吸引されるようなことである。

情けない人生の落伍者達、お前達は何が面白いかどうかもわからずに、ただ自分たちの愚かさが許す限り上層の者に従って今までの行動を何気なしに変え、わけもわからずに能力と働きと職務に応じて割り当てられた新しい武器を振り、整列し、隠れあったり、明らかにお前達より優れた遺伝子から現像されている子供達が考え出した呼子の合図を学習したりしているが、それは、お前達の人生の荷に余ることである。それを裏打ちするかのようなことだが、ほんのこれより三ヶ月程も経過させてみれば、お前達の頭数はさらに減少することになる。しかし、理由がその性質の愚鈍であろうとも、小気味の良い人間と共に生き、その感化を素直に受けて個体維持の道を踏み外して命を失う道へと方向修正することは、それが困難になるはずの頭の凝り固まった大人であれば余計に、一つの感動を呼び起こすような、磨耗という犠牲に満ちた英雄的成長といえる。

犠牲者達よ、お前達のアポトーシスは蛞蝓ではなく竜のそれであって、洗練された生き残り達は後の輝かしい戦歴に君たちの残り香を漂わせるであろう――後の軍章将ゲンド・グラッマ、サイモン・アームン、マーシャン・ギャリド・エブナ、ザウナ・ガリソ、そしてラスの下で術すら覚え、その腹心となるハーン・サイバル…　――巨大な神聖帝国の初代皇帝となるピサとラスの最初の軍隊はこうして、粗末だが実に有意義な成長を伴って培われていく。ラスの部隊編成と全体行動の調練はまことに見事なもので、既にしてこの時点で完成されていたといっても良く、以後も指揮官としての彼に並ぶ働きのできるものは本当に僅かしか数え上げることができない。おかげで早くもすっかり彼に心酔する部下も現れ、十五名ほどの筋の良いものは自分たちの上司が猫なのか恩義のある瘤取者なのか多少悩んでから答えねばならぬ有様となる。

一方ピサは最初に好き放題のことを叫び散らすので仕事を終えたという風で、いつも偉そうにふざけて歩き回り、努力する連中の前で誰も欲しがらないような大鼠を獲ってきては勿体つけて喰らったり、彼等の一方的で形式ばった訓練を揶揄し、おどけて真似してみせたりする。さすがに怒った男が、最近の訓練でつけた自信を木刀に委ねて子供を痛めつけてやろうとする。と、意外なことに黒猫は攻撃をいとも簡単に受け、必死に防御しようと逃げ回る。男は夢中になって追いかけ、それまでの相手とはやってみようともしなかった独創の剣技を試行錯誤して彼を追い詰める。あともう少しで洞窟の壁に押しやって叩き伏せようというところで、ピサは全く不自然な寝転ぶような姿勢から、脚のばねだけで剣激の下を横に放物線の軌道を描いて跳ね、相手の後に回りこむ。男は子供に弄ばれたことに気が付いたという風ではっと剣を落としたが、ピサはそれをすぐに拾って彼の手に返し、肩で息をしながら去り際の言葉を選ぶ。

「…ったく、油断なんないね、あんたも…　さすがに俺もやばかったぜ。だが、調子に乗るなよ、俺もいずれ強くなってやるさ。あんた等に負けるわけにはいかないからね。かといって、俺は訓練などしな

くても強いがね…　さぁ、一暴れしたから寝るとしようかな…」

この意は微妙である。どうとも取れるが、言った本人は考えているような考えていないような、本能だけで熟慮と同等以上の結論に至るような類の人間なので、その効果を知り、半ば意図的に発している。未熟な男は優越感と劣等感の板ばさみになり、才能に溢れた子供が言葉で強がっても実は陰で努力していることを空想し、奇妙なライバル心すら抱く結果となる。こうして時折妙に情熱的に、訓練を力みすぎる連中が出現し、自分の指令だけによる軍隊的単一性を尊ぶ司令官を悩ませる。それが兄のせいだと勘付くとその奔放な邪魔の仕方に抗議したが、それこそあまり正しくない偏った熱の入れようというもの。ピサの寂しそうな手の振りと、いつもみたいに逆切れする風もなくその場を去ろうとする様子でそれにはっとさせられた弟は恥じ入り、以後は兄なりの教育方法にケチをつけることはせず、逆にその光景から自分に欠ける多くのこと、等閑にしていた兄への尊敬を再確認する。それは雉猫にとっても、彼の手塩にかけた部隊にとっても本当に幸いといえた。

こうしてお互いに鍛えあう彼らは、それはもうほとんどラスの、そしてピサの部隊となっていく。同時に、子分たちは親分のことを忘れない。子供達も独裁的支配を望んでいるわけではなかったし、そのようにはならないような配慮もさりげなく交えている。例えばある作戦行動の鍛錬がうまくいったら必ず親分に最終確認をさせる。親分が無言で深長に頷く、そうしたら次のカリキュラムに進む――その頃のビスタン・ケイマリッチは二人の調練師に大よそを任せて全体を監督し、怠慢の状態に堕落しやすい連中の尻を叩くために腕組みして敷地内を巡回することが日課となっている。何しろ子分たちはさすがにこの地で賊をやっている大人だけあって、サボタージュの術には抜け目が無く、優秀とはいえまだ幼い先生の目を盗むことなど造作も無いのだ。

そこで親分の出番。彼は子分たちの中で依然として親分であって、親分は彼しかいなくて、親分は親そのものでもあって、先生猫とは違うのである。

「そこで何をやっている。伏兵の練習か」

「え、へ、へへぇ。へへへ…へぇへぇ、そうでやす、そうそう、そうです」

「へーへーばっかり言いやがって。それじゃあ葉巻の煙くらい外から見えないようにやるんだな、それくらいは俺でも指導できる。それと、俺と皆のために努力してくれるお前にもう一つ言葉をやろう。…サボってないで持ち場に戻れッ！」あたふたと走っていく子分の背は、それでも彼には日に日に頼もしく映るようであり、それが彼の心を決して悪くない気分で動揺させる。

ビスタンは無口で堂々としていて、そういう様子は子供達が来てから一層に顕著になり、威厳と風格が変わらぬ彼の魅力として子分たちを射止めていたが、そういった自分の見え難い変化の理由は子供達の目覚しい働きぶりによるものであると彼自身にもわかっている。彼はそれを小さな反抗心から外面的には認めたくないものの、不得意とする弁舌を弄してぼろが出ることを恐れ、口を真一文字に結ぶことが多くなった。彼は天から降ってきたような変化のせいで自分が少しずつ変わり始めているような気分だけでなく、それに対して嫌悪を感じるどころか強い期待感を抑えられないことに、武者震いにも似た苛立ちを感じている。

彼は時折こういう夢さえ見た――兄弟が逞しく成長し、遍く広大な領土に住まう数多の民衆を徳と武力によって統率し、彼の優しい両親を無残になぶり殺した国家の蛮兵と腐った権力を駆逐し、真の治安を達成している。そして彼自身、従属する身分では混沌と不正に満ちたどの権勢も改善できないと判断できる明晰な視野を持ちながらも諸悪を打倒できるほどには力を持たず、絶望に空回りした結果として闇雲に現代を困らせる職業につき、諦念の鬱憤晴らしをするつもりでそれをさらに溜め続ける生活を送ってきた彼はというと、すっかり満足した風に兄弟の下で逞しい兵士達を束ね、偉大な使命と愛すべき同胞のためにその命を喜んで戦神に捧げている――彼はびっしょりと汗をかいて、洞窟内に響き渡る荒くれ男どものいびきの中に上半身を起こす。何と言う様だ、と、彼はすぐにその幻と胸に湧き上がって余韻を残す甘美な満足感を忘れようと頭を振る。

そういう日の彼はいつにも増して不機嫌であったから、ピサはその様子を目ざとく見つけて彼をからかおうとしたものか、それとも全く他人の精神状況など意に介さないのか、少なくとも相手を元気付けようなどと思うのはこの二人の猛者の場合は全く似合わないことなのであるが――意味もなく親分につっかかり、喧嘩に誘う。考え深そうに、煩い蝿を追うようにしかしない巨漢も、あまりにしつこい子供の波状攻撃にはついに怒りを爆発させて黒坊主を喜ばせる。この大暴れは心の中にうやむやを募らせているビスタンにも実際には少なからず良いものであったに違いない。ラスも子分たちも大きな音を聞きつけると、また始まったか、と溜息をつき、音が煩くて仕事にならないのでそれを休憩の合図としている。ビスタン・ケイマリッチはピサがどうやって自分が勝利したかわからなくなるほどの戦闘力をその肉体に秘めていたから、彼が初期に有していた優越感はことごとく崩れ去っていく。

ピサは自分の何倍もの体躯で迫り来る巨大な怪物に対しても自分の腕力を誇示してきたから、力で全く歯が立たない相手に本気の狼狽を隠せず、かといって得意の素早さに賭けようともせず、意固地になって正面から力比べをしようとする。彼はいつか泣き喚いたときにしたような猫パンチやラス相手にするような蹴りで腹や首筋を狙うが、命中したところで岩石相手の方がまだ手応えがあるという程で、たった一発の反撃をまともに受けただけでいとも容易く小石のように吹き飛んでしまう。観衆がやんやと親分に喝采を送り、日頃腹の立つ挙動の多い生意気な子供をここぞとばかりに罵る。ビスタンもこう思う。彼のウェイトの無さは遺伝的にどうしようもないのだから、長所をもっと伸ばすべきなのに、この黒坊主の頭の固いこととあきらめの悪いことといったらこの上ない。すっかり叩きのめしてやるのがこいつのためだろう――しかし、ピサはめげず、へとへとになると悔しそうに茂みの中へ去っていく。

どこか誰にも見えないところで傷んだ皮膚を癒しつつ毛繕いでもしているのだろう。もしかしたら本当に人知れず鍛錬しているのかも知れない。天才にとって、努力と初期の才覚に頼ることの間に分け隔てなどないのだから。猫族は敗れた相手に何度も挑戦してまた敗れることを繰り返すという自分の未熟さと愚かさを曝け出すようなことには本能的に恥じを感じるはずだが、この黒猫にはそういう常識が通用しないようだ。そのうち、笑ってこの一時の観戦を楽しむ者達の中で、相手役だけが一人、防御する部分に僅かずつ違和感を覚えはじめる。屈強な瘤取者の背筋を寒くさせる程のスピードでピサの筋力と相手の急所を狙い定める技術が向上しているのである。

そのうち、瘤取者は相手の攻撃をまともに受けずにかわしたりすぐに反撃したりするようになった。こうなると乱打戦になるはずだが、ビスタンは大人らしい態度を盾にして今度こそ黒坊主の相手をほとんどしなくなってしまう。「卑怯だ、勝逃げは卑怯だ！」と黒坊主が罵ってもお構いなしで、たまに煩そうに子供を突き飛ばすと洞窟の入り口からすぐ左脇の部屋にかけられているハンモックで寝入ってしまう。黒猫は苦々しく地団太を踏んだがどうしようもなく、子分たちの視察と称して彼等をからかいに出かけていく。

山賊の親分はほっと一息ついて呟く。「冗談じゃねぇ、こちとらの腕だって商売道具なんだ。てめぇみてぇな化物に圧し折られてたまるかってんだ…」そう言いながらも、彼の胸の内にはあの燃え上がるような感覚が、肺に溜まった諦念のガスを払拭しようと努力し始めるのを感じるのだが、その頃ではもう彼はそういうことにもあまり抵抗しなくなり始めている。

猫達が来てから一月も経過すると、この集団にはある顕著な変化が起きはじめる。それは派閥化であって、その形成理由には単なる部隊編成の影響だけでなく、いつまでもわけのわからない訓練をさせられていることに対する憤懣を感じる人間が少なからず目立ち始めていることが原因となっている。最もこれはごく当然の予測されるべき現象であって、別に取り沙汰するほどのことでもないのだが。むしろ、ここまで突然の変化にも整然と全体が従ってきた事の方が不思議であって、それは単に構成員の単純さにかかっていたのであろう。

もちろん、そうでない人間もごく少数だがいたのであって、彼等は最初からいたし、彼等が変わってきたのではなく、猫達の努力と平行してこの反抗勢力の努力も微細ながら続けられてきて、全体からすれば暗躍といえるようなその活動が、しかしその実行者からすれば至極最もな理由があって目に見える成果を出してきたというところである。その首謀者はモロサイフンガル・バイオーフという名の豚者であったが、彼はこの種にしてはなかなかの切れ者で、親分の信任も厚い。それが彼の傲慢をくすぐってある程度の従順さを培っていたのだが、ある時にいくつかの隊に分かれて夕食の支度と訓練を両立させる狩りの競争に出かけたときには、彼は数人の隊員にこのように広言して憚らない。

「閣下ともあろうお方が、野郎どもを正しく率いたいというのであればこの私を使うべきであろうに、あんないまいましい臭ぇ種族のガキどもに俺達を傅かせるなんてな。俺はいつも『禿鷹と屍』の今後を愁いているんだよ。奴等、俺達を使って公僕にしたり戦争でもおっぱじめる気なんじゃねぇのか」

聞いているものは不遜な言葉をお偉いが聞いていてどやされるのではないかとびくついたり、同意して笑ったり、一緒に愁いてみたりしたが、そこにちょうどラスの愛弟子のようなハーン・サイバルもいて、モロサイフンガルの顔を全く不思議そうに見つめる。

「君にそういう面白くない冗談をいうセンスがあったとはね。そして戦争、君にしては悪くない例えじゃないか。俺達の大将はこんな森で猫追いをしているようなタマじゃねぇんだ。俺はあの人にもっと大きくなってもらいたいと常日頃思っていたし、そうなれる人だと思ってついて廻らせてもらってる。大体臭いのは君の口臭くらいで、君という人は彼等を子供だという理由だけでその優れた部分から何も学ぼうとはしないのかい、それは何とも勿体無いことじゃないか」

忽ち周囲の単純な男達は『勿体無い』という言葉に反応して、それをぜひ得なければならない宝のように欲望をたぎらせ、ハーン側につく。

尖った目と黄色く濁った息を吐き出す醜く歪んだ口とに狡猾さと精神的容量の無さを見事に体現させている豚男は名誉を傷つけられたと叫び、前々から気に入らないと思っていた口達者の男をここで勢いに任せて殺してしまおうとする。

あとは適当なことを言って繕うこともできるし、あるいは堂々とこのことを報告するか見つかるかしても、ボスがそれを賊の集団にはよくあることとして、気に入らない奴を武力に物言わせて始末した自分を評価するかもしれない。そうでなければ声高に自分の正当性を主張し、影で悲劇の役者を装うことで賛同者を集められるだろう――こういった彼なりの損得勘定で決断し、遠慮なく力任せにハーンを脅かす。周りの男達は止めようとして巻き添えを食うよりも、ピサとビスタンの争いが著しく減少した今、日頃の鬱憤を晴らすようなせっかくの見物を楽しむことに決めて少し離れたところにふらりと立っている。ハーンは習ったことの正しさを一々試すように冷静に闇雲な突進を裁き、掛け声とともに身をかがめて敵の構えの中に入り込み、一閃とばかりに太った腹に脇差の柄を叩き込む。

「そこで何してる、呼び笛が聞こえないの？　それとも合図を忘れたのなら楽しい罰ゲームを課してあげるよ」ラスが冗談めいた言葉とは裏腹に、命令に従わない隊への苛立ちを隠さない表情で藪から姿を表したので、草を掴んで悶絶する豚者も、上司の敵を倒して得意げな指者もその周囲の取るに足らぬ連中も、皆が申し合わせたように彼等にしてはうまい言い訳を繕い、協力して監督者のいぶかしむ目をごまかすことに成功する。ハーンはラスの後につくために隊から離れようとするとき、一度モロサイフンガルを振り返った。

「このことは仲間のよしみでケイマリッチ閣下には伝えないでおいてやろう。だから、改心して閣下のために謙虚に努力を積み重ね、腕を磨くんだな。そうすれば今日のようにはならぬさ、例え俺達の意見がすっかり噛みあわなくともね」

豚者は顔を上げなかったが、彼を軽視している指者はそれを意に介さずに去る。

感心させられる特質を持っているがゆえに惜しいことだが、説教をした方も、何かと問題の多いことである。まず彼は理想の追求には余念がなく、立派なことを喋るが、それをどんな相手にも押し付けがましく主張する。また、尊敬する相手には良く従うがそれ以外の大多数の人間とも帳尻を合わせていくのはあまりにも下手だったし、なまじ能力があるがゆえに人を過小に見たり自分を過信したりしてしまう。それゆえに、こうして内部に微妙な亀裂を生じさせたり、それを自己判断で上役に報告しなかったりするのである。それは結果的には非常にまずいことに繋がり、以下のような犠牲を呼んだが、しかしそれはハーンだけに罪を問うべきではない。

必要に迫られ、犠牲を埋めるだけの躍進に彩られていたとはいえ、猫達の自己本位的な努力、本来困難を伴う茨の道である正道を遠回りしない無意識の無理強いが悲劇の種火を産んだともいえようから。もし彼等の偉業のためには多少の犠牲もやむなしとの専らの歴史家のような立場をとるなら、この程度のことには目をつぶらねばなるまい。その悲劇とは以下のように段取りが組まれ、演出されている。

退屈な、そして最も以後に重要になってくる基礎教育がある程度済むと、ピサの強い要望もあって舞台は先に例を見たような実地演習に移り、その行動範囲は次第に広くなっていく。猫達が家を出てから二ヶ月が過ぎようとするころ、彼等は最初の目的を半ば忘れていることを思い出し、ほとんどあまり賢い出処とは言えない義務感や虚栄心から、本能的にはできればそのままいくらでも後回しにしておきたかった目標地点に照準を再び合わせる。

知恵袋の雉猫は、化猫の恐るべき攻撃術法対策に、孤濡卦(こぬけ)(脚が無数の触手で、植物系の知的生物。全身が薬になるという噂で虐殺され、共知種族を憎んでいる。雲系術が得意)を狩ってその肝を細かく計量された分量の各種妙薬とともに煮込んだ抵抗薬を作り、敵術者に先手を打たれるという最悪の事態に陥ったときの武運は一切をそれに賭けることにする。彼等は探索を小軍団の最後の試験も兼ねて実行することにし、全員を三人ずつの小さな班に分け、どこにいるか全く予測できないが、兄弟の記憶だと確実に獲物が生息する方面へ定められたくらいの距離を探させる。そして、もし遭遇した場合には直接相手にせず訓練した通りのやり方で仲間を呼び、包囲して逃げ道をふさぎつつ危険なく戦うことにする。

モロサイフンガル・バイオーフは予めクジに細工をしておいて自分の気心を知る者達と徒党を組み、ある程度森に隠れると方向を変えて他の班を次々と不意打ちする――今回の作戦こそはケイマリッチ閣下の知恵の深さを表しているといえる、なぜならこうした最もらしい行動の裏には、この俺を使って猫どもに毒されていない仲間達を集め、騙されて分断されたとも知らずに安穏として我々に混じっているあの薄汚いガキどもを襲撃し、昔の素晴らしかった親分一極支配の状態に戻ろうという狙いが隠されているのだから、などと豚者はなかなかの演技で各班をそそのかしていく。

ほとんどの者は、単純で愚鈍な人間が良い影響よりもかつての悪い方向からの誘惑にいかに弱いかということの生き証人となろうとするかのように簡単にモロサイフンガルに従っていく。また、心ひそかに自分の見違えるような成長振りを楽しんでいた者も、念を入れた豚者の武装や組織の中では一際目立つ彼の目の爛々とした暗い炎を恐れ、うつむいてついていく。予め自慢の青銅板の胸当と腰当、鉞と大型の弓を森に隠しておいていた豚者のいでたちは、いつでも獲物の怪物付近から退避できるようにと命じられた軽装ではない。こうして謀反者は三班を集めるともう十分と考え、途中で方角的に出くわすことになるサイバル班長のチームをすっかり包囲する。

裏切られた指者は呼子を鳴らしたくともそれを持つせむしの老いぼれが、幾許もない余命を護ろうとでもいうかのように、敵に従ってしまっている。かといって武勇の関係ない策略とはいえ、自分があのとき甘さを見せたがゆえに一度勝った相手に屈服するということもプライドが許さず、ついに彼は逆上し、一人でも戦ってやる、俺も倒れるかもしれないがそれまでにはお前達のいずれもがその弱弱しい皮膚の中に隠し持っている臓物のどれかを大地に好んで捧げることになるだろう、と叫んで腰の物を抜く。一同に緊張が走る。

ここで、一人の役者、舞台に閃光のように現れてその宿命に従ってすぐに消えてしまう惜しい男を紹介することができる。ハーン・サイバルの班の一人は全く寡黙で面白みの無い瘤取者の亜種で、みんなからあまり相手にされない木偶の坊のようではあるが、コンドリムスとかいう名前だけを、最後にハー

ンを筆頭とした仲間達に決して消えない記憶として焼き付けた。この男は、同伴のハーン自身が驚いたことに多数には従わなかった。彼の剣は学んだことの域を出ず、決して誉められたものではなかったが、この才覚をほとんど持たない愚鈍な男が、それでも懸命に、正義感や高い理想ではなくて単に班長に従おうという自分の小さな意志に実直に、今まで彼が誰にも顧みられない生き方の中にも彼なりの成果を出してきたことを公開発表していく様子は胸打たれるものがある。

彼がいなかったら、こんな状況にも関わらず覚えたての術法を行使してみようという気になってしまった、こちらも『あともう少し思慮があったら』と惜しまれる男はすぐに囲まれて串刺しになっていたであろう。近接で包囲された状態で隙のできる術を使おうというのは全くの自殺行為であることは言うまでもなく、それに輪をかけてその腕前はまだまだ未熟どころではなかったが、彼は己を過信し、これで一挙に包囲する敵を退けられると考えたのだ。彼の思う通りになる、コンドリムスという犠牲を払って。

事態の収拾は遊撃隊を称して自由気ままに移動していたピサによってなされたが、その時には既にハーンの戦友はその命の灯火を吹き消している。直ちに全班が集められる。狩りは失敗に終わり、モロサイフンガル・バイオーフは永久追放され、それに従おうという者も認められたので、結果的に組織は六人を失うことになる。ハーンは仲間のためにぜひとも自分が決裂した豚者と決闘をしなければならないと主張したが聞き入れられない。彼等の長にだけするにはあまりにも高貴で考え深い上役達もさすがにこの防げなかった最悪の事態には悩まされ、喧嘩両成敗とはいかないまでも、必然的に生じてしまったものを全員の責任を問わずに恐怖の粛清に晒すよりは、これを組織の革新に伴う少数精鋭化現象として前向きに捉えようとしたのだ。無論、即決しなければ士気の落ちる状況下、僅かな時間で最大限熟慮したその結論が、ハーン・サイバルという個人の未来を決することになるとは誰も想像し得ないのである。

落ち込む士気を盛り上げるためにすぐにでも莫大な報酬を想像させるような目標に向けて戦陣を組まねばならなくなる。ラスは彼等の前で雄弁を振るう。――そもそも術法対策など付け焼刃のようなものでほとんど役に立つとは思えないから、一切を初期より入念に練られてきた策略と訓練してきた武勇に委ねたとしても全く遜色なく、また、その方が危険も少なくなろう。なぜそのように考えを変更したかという確固とした理由ももちろんある。あの狩りの収穫として、諸君等がこの僕の予測以上に隊旗の下で優秀に行動するのを見ることができた。これは良く努力する者達に時折見られる全く思いもかけないような嬉しい現象であり、その様子を見れば優れた指揮官は総合の戦闘力を算出し、敵側よりそれが勝っていることを立証することができる――

ラスの演説は山男にもわかるような易しい言葉に配慮され、かつ彼等の聞いたことの無い鼓舞の筋立てであったから、予定通りに集団心理を操縦できる。ビスタン・ケイマリッチは寡黙に会の様子を眺めていたが、軍略の参謀に振られて出陣前の挨拶を述べることになると、子分たちの惚れ込むに相応しい威厳で自分たちの勝利を約束する。――猫兄弟の不必要に恐れる術に面しても自分の瘤に含まれる紫の血潮が水に対する油のような働きを見せるだろうから心配するほどでもない。奴の所有物の価値ある武具さえ自分は手に入れられれば良いから、他のものは売り払い、お前達に武勇のあった分だけ配分する

と約束しよう。

黒猫がそれに口をはさむ。――それゆえに一層、努力すると共にむちゃをせず、全体の作戦に従って戦ってもらいたい。さもなければ自分の身も護れず、せっかくの取り分にも与れなくなってしまう。例え化猫といえども竜には叶わぬことを、奴と共に暮らし、生き抜いてきた自分が良く知っている――

戦勝の前夜祭のまとめとしてピサの言葉は相応しいものであったが、彼のいでたちは一糸纏わず武器もなく、賊の家に来たときと全く変わらない。彼はウムポ・ルサに素手で挑むつもりである。恐らくそれが一番良い方法ではあっただろう。正確には、それが最も勝率の高い方法だと言えるのみである。もし彼が育て親の傍を離れて久しくなく、自分の見違えるような成長に多少なりとも自惚れていなかったら、その確率が彼の子供の頃相手にしてきたどんなに小さな石ころよりも微細であることに気が付かないわけがなかったのだが。

兄弟は勇ましく山を降り、計画通りに死出の旅路を突き進んでいるとも知らず、幼少期の喜怒哀楽を呑み込んできた地域を包囲する。森は冬になろうというところであったが、そもそもこの地域には四季などはお飾り程度にしかないのだから、いつもより寒いくらいの期間としか言えず、ちょっと前に夏の雪に震えたときよりはよほど暖かいくらいである。

一挙に攻め入る手はずであったが、親分の進撃の合図を、斥候のピサが急いで制する。段取りが狂うことを恐れ、苛立った弟が声を潜めながら兄に抗議する。黒猫は黙って、一段高くなった丘と崖を除いて半円形に兵を配置した中心を指差す。一度も洗濯がなされていないいつもの襤褸をまとった老猫が、衣服に負けず劣らず粗末な茣蓙の上に胡座をかいている。そして、見たことも無い巨大な柱のようなもの、恐らくは自分たちが得たいと欲望していた武具であろうものが所有者の座る付近の土に突き刺さっている。さすがのラスも、全てが見透かされていたこと、それのできる父親の予想以上の恐ろしい実力を一度に再認識させられ、片目を嫌そうに瞑るだけでは済まされない激しい恐怖に身を震わせる。

同時に子分たちの悲鳴が方々からあがる。囲んでいたつもりの者達が、実はすっかり囲まれているというだけのことではあるが、一回り大きな外周の構成員はあまりにも粗野で本能に忠実な連中であって、小さな生命維持機関に移動と指令と実行の慎ましい部品をつけただけの集団化せざるを得ない弱小の種族に比してあまりにも大仰な個性をもった生物種と形容できる。

長い牙を自慢とする猛獣の頭が浮かんでいるだけという姿の生き物、霧状の不定形で半透明な体にたくさんの鋭利な武器のような影を浮かばせる生き物。兄弟がよく名を知っている『櫻射（エイシャ）』は中でも多数派で、警告色でも擬態色でもなく、個性としての色とりどりの羽毛で鮮やかに着飾り、その嘴に生える鋸状の牙の中から悪魔の胎児のような顔――それはこの生物の脳のようなものである――が覗いている。この鳥のような体長二mほどの生物は四羽いて、そのうちの半分もいれば容易に自分たちを殲滅できるという答えを、ラスの知りたくなくとも自動的に動き出す無慈悲な計算がはじき出す。

すっかり恐慌状態に陥った哀れな部隊の中で、恐怖とは違う様々な想念に囚われて身動きの取れない兄弟を放って、ビスタン・ケイマリッチは部下達を叱咤して右舷と左舷から少しずつ中心にかき集め、なぜか待機しつづける怪物どもに対して密集隊形を取らせる。巨大生物達もそれに合わせて少しずつ間

合いを詰めたので、ここに集まる生物達はさながら化け猫を中心にして開いた扇子のような配列に置かれる。子分たちは生きた心地もせず、お互いに噛り付くようにふんばっている。…息荒げる怪物どもが襲ってこない。彼等の自我を、高次元に相応しい不可思議の物理素子を巧みに用いて束縛している者の命令が来ないからだ。

ピサは目と心を燃やして中心に一歩近づく。誰も止めたりできない。こういう絶望的な状況の際に何をしたらよいのかは全て己の運命に委ねられるからである。

「てめぇ…　どういうつもりだ、大人しくそれをよこすのか、それともよこさないのか。言っておくが犠牲を恐れて帰ってきたんじゃないぞ。この間合いならてめぇも逃げられない。俺の爪の餌食になることは目に見えている。今まで多少とも俺が恩を受けているというならここできれいさっぱりに流してもいい。そいつをよこせ、そしたらお前を無傷で逃がしてやる、そして、もう俺はここには二度と来ない」

ウムポは子供を全く見ていないで、彼の声の音だけを聞きつけたかのように興味なさ気に顔を上げ、怪物に囲まれる一団に目をやる。驚いたことに、視線はビスタン・ケイマリッチを捉えていて、ラスの視野は父と眉間にしわ寄せて立ち尽くす巨漢の顔を往復する。

「ガキどもが面倒をかけましたね。私がそのくだらなさを数段高尚なやり方で真似てみているような召還獣の秘儀――すなわち、ちょっとした土くれの召使を呼んでの悪ふざけのような一騎討ちにもお付き合いいただいた上、貴殿の大事な俗物集団を彼等の実験に提供していただけるとは。本当に、お礼とお詫びを申し上げなければなりません。

同時に、彼等のくだらない一生の中でもそれなりに意味を持つ若い時間のいくつかを無益に過ごす機会を与えられた貴殿に、多少は彼等に関わった親代わりとして、相応の罰則をお渡ししなければならないことも残念ながらご報告申し上げねばなりますまい。しかし、それを避ける僅かな機会を、猛毒の果実を食べて生き残ったら無実とするという、ある地方の実に意義深い裁判方法に倣ってご用意しております。もし何かのありえない奇跡があなたに無罪をもたらすなら、あなたは得がたい宝も同時に手中に収めていることでしょう。

ご覧の通り、貴殿のような豪傑に相応しいものを、貴殿のご要望通りに取り揃えております。どうぞご自由におとりいただき、お気に召しましたら、その持主にそれを用いて打ち勝って、あなたらしいやり方で、力づくでご入手なさってください。きっとそれは、世の凡俗どもと場所と志は違えどやはり無益に過ごし続ける私にとっても、決して小さなものではない慰みとなるでしょう」

「変態の覗き野郎が、意味不明な口上垂れてるんじゃねぇ、お前は俺の手で死ぬんだ！」

ピサの動きは豪腕によって放たれた巨神の矢のようであったから、ウムポ・ルサはあっという間に死角にもぐりこまれ、爪が彼の喉元を、襲撃者の動いたとほぼ同時と思える瞬間に抉ろうとする。化猫は相手に目を向けることもできなかったが、代わりに小さく何かを呟いたようである。それだけでピサは目的を果たす一歩手前で崖側の方に襲い掛かった時と同じくらいの勢いで跳ね飛ばされる。崖の高さの中ほどに叩き付けられた黒猫は、自分の体と物理衝撃を受け止めて壊れた瓦礫と共に反動で落下する。彼はすぐに第二段の攻撃に移ろうとするが、それは彼がただ吹き飛ばされただけだと勘違いしたからで

ある。観測者の仲間たちを本人より一足先に震え上がらせている事実に彼も程なく気がつく。

黒猫の腹が無邪気な方面に陥没している。痛みなどは感じる余裕も無い。ピサは口から血のような、それだけではないようなわけのわからないものを噴出し、薄れゆく意識の中、知り合った巨漢が堂々と武器の一本を抜いて、たちまち殺戮されるのを目の当たりにする。他の者は降伏したようだが、詮方も無かろう。彼は呪いの言葉を吐きながら意識を闇に投げ出す。ちなみに、最後に残ったのは己の未熟さに対する逡巡だけであったようだ。

３、世間へ

誌奥暦(古生代魔族が始めた暦で、この時代の文献に多く登場する基準)四万二千年頃には、世界の東側に横たわる神巨人(地神オゼリアのことで、最大の大陸ディアネムルそのものが神であるという考え方が古くからある)の皮膚にはまるで疣でもできたかのように国々が乱立し始め、怪しげな新興宗教がその細菌を媒介しようとしきりに世紀末思想を植付け、腐敗と略奪の横行はごく自然なものとなっている。彼等は癒着し、増え、食い散らかす汚物のようになりながら自分たちの短い春を謳歌し、殺しあう。それ自体は下位世界の住民に上位世界のなんたるかであると説明するほどのことでもなく、人間のような種族が集まればどこでも良く見られる歴史の嘔吐であろうから、ここでは特に詳しく述べる必要もあるまい。ただ、いつか森で見た子供達と同時期に生まれた幼子の多くが飢えたり阿漕な仕事に駆り出され、普通の兵士と同列に殺戮されたりもしているのを見るにつけ、あの子達はどんなにか幸福だったことかと思わずにはいられない。あの陰鬱な森が、虐待する一人の両親が、彼等を護っていたのだと思わせられるのはまさにそれ自体が皮肉めいた悲劇であるが――

かつて樹曼中心の国家として自然環境と中立和平を愛したヴィムディンゲルゾースもすっかり変わってしまっている。突如発生してこの国の権力中枢を握った『枝穂の女王』サイルゴッツは樹曼の民衆を――言うまでもなく自由意志と行動力、痛みと神々の使命を担った人間である彼等を、まるで植木のように無造作に一所に押しやり、研究機関に開発させた農薬の実験台にし続ける。その虐殺行為はごく当たり前の光景として、この国を訪れるものは誰でも目にすることができる。忍耐を重んじるとされる植物の精神性を動物系種族に模範的に示す樹曼も、ついにその度を越えたやり方に対して反逆を企てる。

ヴィムディンゲルゾースの化学兵器は近隣諸国、特に鉱山で莫大な利益をあげている軍事国家エスパイアに輸出されている。これを使った戦争は効率よく相手を根絶やしにできるという無差別的な性質を持ち、武勇の持つ僅かの美にも欠けるために戦争に嫌気が差す――無論正しい人々はそうでなくとも殺し合いを憎むものだが、理想論の即効力は薄く、戦争とは生物の歴史上どうしても避けられぬものである以上、せめてそこに最低限の自主的な倫理感覚が求められるものなのである――人がいるかもしれないという利点があるだけで、こういった兵器の多くが常にそうであるように、それ以外の効果はまったく目も当てられない程のお粗末なもの。戦争の終った後にも土壌を汚染し、敵の力を長期間に渡って挫けるという点においては役立つが、支配に成功した後にもそれが不毛の地であり続けるのだから本末転

倒という他はない。多くのものが目先の勝利を争う中、少しでも未来を考えられる者は、例え時の権力者同様に強欲に焦がれる者でもこういった粉やガスの兵器開発に反対し始める。毒の生産所となった患部は大地の各所に沸きあがる抗体を恐れ、自分と同じ属性にあるエスパイアの『髭猿王』モーフに泣きつく。

ここから正しい人々を一層にがっかりさせるような、実に情けないドミノ倒しが始まる。エスパイア王国とヴィムディンゲルゾースが同盟し、反乱勢力の温床となっていると噂されるヨルコン連邦共和国に迫ると、レジスタンスの台頭に乗じて北を攻め取ってしまおうと企んでいた同国は全く予期しない緊急の事態に慌てて、病毒兵器開発を支持する次のような変り身の声明を出す。――正統な国家である三国の友好によってまだ無分別の横行する南国や海外を制圧するための革命的技術に反対する者が自国に多いことは真に遺憾であるが、それは今だ自国に強い影響を及ぼすビルドモンソ層の国々が地内で暗躍しているからで、自国は単に地理的な意味でそのような病巣を持っているに過ぎぬ。これを制圧するのは今までもそうであったように甚だ困難ではあるが、一層の努力をもって反乱分子の鎮圧に当たるものである――

しかしエスパイア王国はこれに満足せず、地内を制圧することが貴国にも反乱勢力を抑えることにも有益であるから、そのためには我が軍も惜しみなく力を貸そうと宣言し、連邦共和国に地内侵攻の共同作戦を強いる。ヨルコンとしては親しいビルドモンソ地内連合と争いたくはなかったが、このような板ばさみでしぶしぶ弱腰の承諾をせずにはいられなくなる。対する方はというとこちらも大いに慌て始め、特に、閉鎖空間に住む彼等は毒の兵器を必要以上に恐れたから、ヨルコンには今までのよしみを訴え、一方では閉鎖していた港穴をいくつも開き、今まで共和国だけに結んでいた交易の機会をエスパイアにも与えてその気を静めようとする。地内連合院の決定はほとんど全ての共和国が賛成してのものであって、第一層が恐慌状態になると続け様に第二、第三、第四と感化され、かつての地内独立の誇りを捨て、地上との友好を約束したのである。

しかしそれは、せめてもの慎ましい願いである自域防衛という面でもあまり賢明とは言えなかった。エスパイアは地下水となる雨水のごとくに次第に軍事力を地内に染み込ませ、大一層の国ベルカイを奇襲で占領、驚いたヤスドは即日に降伏して支配下に入る。地内の入り口を完全に我が物とした欲望の国家はたちまち本性をあらわし、第二層に攻め入り、気圧されたヨルコンもしぶしぶと一緒に地内をかき回し始める。ようやく事態の深刻さに気付いた地内の人々は各部族、種族、国家を超えて団結して敵の侵攻を防ごうとするが、毒に怯えて全く戦にならない。指が片手に三十三本もあるといわれる『赦鬼主』エンジブ公が忌まわしい将棋倒しのきっかけとなる声明を発表してからたったの一年後には、『物差の道』から入った侵略の軍勢が第四層のほとんどを制圧し、第二層の生き残りと第三層は上からも下からも攻撃を防がねばならなくなる。

外界との連絡が取れぬ彼等が自分たちの地理的要因をこれほど厭わしく思ったことはあるまい。しかし、希望を削ぐようなことばかりでもない。残りの人々もまた次々と敢え無く平伏していくような中で、エッセヴァリナ王国は頑強に戦い、隣国を勇気つける。マッタリナパのカイミン城がヨルコン軍に包囲

されたときも、かつては敵同士であった下層の軍勢が頼まれもしないのに大挙して敵を共に退け、これを機に二国は友情を誓い合っている。また、旧来の友軍であるヤッツガッツの部族も頼もしく、毒や大軍を恐れる同地の人々を笑い飛ばし、その大言に相応しい働きを、地理を知り尽くしたゲリラ戦法で見せつけ、エスパイアの鉄骨兵士達を困らせる。少々頼りない若い王が統べる第二層のポイラルドは優秀な臣下のおかげで古い伝統を持つ地を他国に蹂躙されることを逃れている。だが、この国は付近に二本の大穴道があって、それぞれが敵対する二国に繋がっているので大変苦労し、友軍に励まされる一方で消極的な案も強く出始め、優柔不断な王を一層に悩ませている。

ビルドモンソ戦役は三年に渡ったが、少しずつ抵抗勢力が包囲され、弱められていくのを余儀なくされるような状況にも関わらず、常に一般的人類にとっては過ごしやすい環境を呈してくれるがゆえに地上以上に季節感が無い地内の、あくまで暦における夏の一定期間に催された式典中の場面を挿入することで、それが決して地内の人々にとって悲観される結果ばかりをもたらすものではないことを予感してもらえることであろう。

その登場人物として、色々な意味ですぐに目を引く者は他でもない、あの白と黒の美しい縞模様の毛並みを持った美少年、…いや、美青年である。彼は大観衆のお祭り気分に囲まれるスタジアムで剣闘士のような役目をしており、対戦相手を鮮やかな術法と戦技で圧倒し、次々に勝利を収めていく。背丈が見違えたにも関わらず一目ですぐに彼を認識できるほどに、あの愛らしい少年時代の特徴を外面的には良い意味で持ち越している彼の身なりは、しかしかつてとは全く違う豪華絢爛なものなので、それは彼の趣味というよりも、その場の意味に相応となるように着せられているものであることを注記せねばなるまい。彼はあきらかにただの一選手ではないのである。その証拠に、今しがた屈強な戦士を倒したラスは、主賓席に気品を漂わせて座し、盛んな拍手と、内的な聡明さを示す青い瞳から愛情の視線を送るどこかの国の王女に親しげな眼差しを送る。美しい猫の淑女はそれを正面から戸惑わずに微笑みで返している。

次の対戦相手は黒装束にすっぽりと身を隠した少年らしく、雉猫はたまたま上位まで勝ち残ってきたらしい相手を、どうやって処理してやったものか、大人気なく振舞うよりも余裕のあるところを見せて次に進む方が見るほうも楽しいだろう、などと考えている。その次の相手がなかなかの強敵、枝穂の女王に虐げられてきた種族のエグルブブア・ペンサバオム。恐らく祭りの楽しみも忘れて本気でかかってくる彼とは術の力比べになるだろうが、それに対してはどのような戦術を用いたものであろう――などと相変ず知的な雉猫であるが、その相手はというと、自分があまり問題にされていないことに気付くべくもないのであろうが、ポンポンとリズミカルに軽く跳ねたりしている。準備体操くらいはさせてやろう、青年が相手から目をそらして試合開始の鐘を叩く審判に待ったの合図をしようとした瞬間、――…

ラスが第四層の国家に到達する数ヶ月前、彼は父に永劫のつもりで離別を果たしている。それは猫族には親孝行と同列に尊いものとして位置付けられる親離れを意味してもいるが、離れられた方の衝撃は尋常ではなかった。つまり、雉猫はその人生の一大事件をいくつかの理由から全く不意の出来事に仕立て上げているのである。

あの幼稚な企てが、彼等の幼年期との完全な決別を意味して暗黒の森の支配者に打ち砕かれた後、命を奪われかけた者たちは弱者を上から見下ろして嘲笑するような哀れみの篭った殺戮者の秘薬を受け、かろうじて一命を取り留めている。ウムポ・ルサは彼等の身分を捕虜と名づけ、家の結界を狭めて牢獄のように強化してすっかり閉じ込め、その中での主人の邪魔をしない範囲でのみ、自由を許す。だが、少なくとも負傷者の一人にはその必要はなさそうであった。人並みはずれて強靭な二人の犠牲者の回復は異常とも言えるほどに早かったが、黒猫の打ち砕かれた心はすっかり駄目になってしまったようで、腹が治ってもそれはいつまでも癒える気配は無かった。

話し掛けてもからかっても二言三言弱気な言葉を吐くだけで、常に横になったままであり、かつての放縦な活発さの名残をどこにも見ることができない。山賊の親分もその不甲斐ない様子を見守りながら、彼の希望を沸き立たせた者の復活に一縷の望みをかけて時折刺激を与えてみたものの、全く反応がないので、それからは黒猫のそばに据わり、子分にすらあまり取り合わず、前以上に寡黙になってしまっている。

ラスだけが前より多少活動的で、兄を見舞い、子分たちの暇潰しのためにちょっとした遊戯盤を考案して自作したり、気難しい男の顔色を窺ったりと忙しく毎日を過ごす。ウムポは張り合いの無くなった黒猫を挑発しようとしたものか、天性の愛らしさをいかなる状況でも発散できる息子を邪魔者無しで愛でる楽しみを知ったという風にラスだけを前以上に可愛がるようになる。美少年は甘え、今までもある程度許されていた物入れの穴をほとんど自由にし、一層に学び、時折は特例として外に出ることも許される。そのうち、彼はたくさんの書物の中からある一通の手紙、どうやら思念によって送られた電報であるようなものを見つける。差出日の書いてある上の部分が湿気で破れ落ちているが、彼は字体などからそれが同族によって書かれた古いものだと見抜く。

――世の尊王と呼ばるべき偉大なる救国の勇者ウムポ・ルサ様――

風の噂に貴下の広大で意味深いお住まいが煩わされることはないとお察しし、貴下の高度な情報網を考慮に入れずに、しかし、失礼に値しないように簡潔に当方の情勢をお伝えすることをお許しください。また、貴下の静かなる生活をこのような世間からの電報で邪魔立てすることはあまりにも心苦しく思われますが、身勝手ながら、当方の事情がそれほど切迫していることをご考慮いただきますとともに、貴下より賜りました勿体無いご友好におすがりし、どうか一度でもこの文にお目を通していただければ有り難く存じます。

すでにゼイダキャト、マルニキュの城が落ち、我が同胞は魂を乗っ取られたかのようにこの小国に牙を剥き始めてございます。私達の軍勢は古き時代に貴下に受けた恩を思い出し、また、当地の者達が歴史上で指折りとなるであろう恐るべき愚行として貴下に害を与えたことを今更ながらに恐れ、悔恨に満たされてはおりますが、せめて貴下に誇りとされる光栄に与った部族の一派として断固として敵に当たり、貴方の愛したピルゥスの沸泉、ケスマの色彩と石材の実り豊かな鍾乳洞、そして、我が国が偉大なる先祖より伝統として脈々と受け継いできた当地をみすみす地上の支配に譲り渡すことなど致しませ

ん。

私はこう書いて、この手紙が、都合の悪いときは追い払い、悪くなるとすがるような我等一族の愚かさを代表するものとなることを恐れます。自業自得のこととお笑いになられても仕方のないことと思います。しかし、戦う前において、親愛なる貴下に我等が決意を示し、最後まで戦い抜くことこそ貴下への罪滅ぼしとなると考え、また、愚かにも、凡俗ゆえに敗北の後まで考えざるを得ず、その時には、せめてこの私の命を惜しまぬことで、恐れながらこのように申してよいのであれば、時代を超えた心の底からの友である貴下へ、我が偽らざる決意を示し、我が国民を赦していただきたく願うのです。

我が国の勇士は地を朱に染め、地の底にお住まいになる我等が父の元へ還るでしょう。私は彼等のために涙を惜しみなく地へと注ぎます。例え異国の者達がこの地を支配し、いつか平和が訪れ、私達のいくつかが交じりあって全てを忘却の彼方に捨て去っても、我々の友好と偉大なる意思、少なくとも私の貴下への想いと戦士達の血潮の記憶は、決して消えず、深遠の至福の地に、貴下はそれを見ることができましょう。

ロンムーチョント王国　王妃クァ・ヤス――

ラスは興奮して、その打っ棄ってあるような手紙がごく自然に彼に見出されたことに何の疑いも挟まない。彼はそれをもとの場所に戻し、また普段の生活に戻り、考えを数日間かけてまとめ、病床の兄にそれを囁いたりした。ピサは半分眠っていて、いつも通りの無関心さであったが、ラスの心は躍っていたから一々細かいところまでは目が届かない。彼は溜息をついて、「じゃあ、もう行くね」とだけ言った。それは、彼が兄の遊びに興味を失い、先に家へ帰ったりするようなときに使う口癖に似ている。

それからの雉猫は再びいつもの生活に戻る。もちろんそれは見せかけのもので、自分の内心を咎めるかもしれない他人に悟られぬようにするためである。彼は同棲者達の目を盗んでは準備していく。急いで親孝行の義務の真似事だけでも果たそうとでもいうかのように化猫に傅く。ウムポは息子の一人が出て行ったことをある瞬間に知ったのではなく、ふとした折に、すでにもう随分前から彼を見かけていないことに気が付いた、という風に失踪を認識する。ラスは水汲みに出かけたりすることも多かったし、特に心配も無く、念のために森中を探し回った化猫は次第に焦燥を眉間に表し、梵子術で飛び回り、迷走したが、全てが徒労に終わる。化猫は絶対に世間へ出ることを避けていたので森を出てまで探す気にはならず、息子が猫の立派な流儀に従って完全に親を見限ったことを理解してついに諦め、残虐な彼にこれほどの人間らしい心があったのかと傷ましく思えるような、激しい傷心と動揺で呆けたようになってしまう。

彼のような陰鬱な親には傍目から見て決して似つかわしいとはいえなかった美しい息子は、まるでそこにまだ彼がいるような、幻影が残り続けるかのような印象を与えながらうっすらと消えていく演出を成功させ、跡を濁さぬ、下位次元において同様の遺伝的要素を持ちながら高度の知性を持つには至らなかった小さな同系種にも見られる誇り高い主義を遂行したのだ。家には彼を含めた三匹の生活が、一定範囲の過去という時空の断片に切り取られ、そこに美しい思い出として永遠に循環され、黒い天空を飾

る虚構の星空(クナウザスには宇宙と無限の星々が存在しない。全ては天空神の作った幻像である)のように打ち上げられている。

ラスはそれを顧みようとはせず、ただ前を向いている。振り返ればそれがどんなに嫌なものであっても気持ちが挫けるであろうから。若さが青年を駆り立て、彼はそれに素直に従ったまで。それでなくとも、人が旅立とうというときはいろいろな自己暗示の手段を用いて、自分を引き戻そうとする鎖をうまい具合に解いていかねばならない。それに、思い出すのは全てが終わりかけたときでも良かろう、少なくとも今はまだ何も始まってすらいない。

後にビスタン・ケイマリッチをも多少動揺させたことに、ラスは一人で出ず、予め自分が手懐けた賊の十人ほどを従えていたから、家の中の住人はいつのまにか極端に減ってもいる。これはしかし、親分が舞台から足を踏み外した黒猫の沈滞にばかり気を取られて自分の子分をさっぱり気にかけなかったのだから、無理も無いことと言えよう。もちろん、去った者達が人の変わってしまった親分を見限ったというよりも、それまでに出会ったことの無い高貴な性質を持つラスの性質に惹かれたり、新しい主人の軍隊的な支配の方がより出世が見込めそうだと判断したり、閉所恐怖に耐えられなくなったところに都合よく脱出の計画が持ち込まれたりしたことが、この恩知らずの行為を促進したのである。彼等は恐らくラスの指導であろう、親分への別れの手紙も残してはいない。こういうとき、自分たちの決意を言い訳がましいやり方で相手に伝えるべきではないというのが、あの暗に救助を求めるような手紙を読んだ青年の感想なのかもしれない。

だが、そういうことは全て残された者の想像でしかない。ピサはラスがいなくなったことをビスタンから知ったときもあまり驚かず、いずれすぐに帰ってくるだろうと思いながら数ヶ月をやり過ごし、ゆっくりと、それまで以上に絶望していく。もうこの頃には化猫はピサの寝所に全く顔を見せなくなり、彼の世話はビスタン・ケイマリッチと彼に従いつづける忠実、もしくは優柔不断な連中が交代で行っている。あの優美でしなやかだった黒猫が痩せたり太ったりするのに任せているのを、眉間に皺寄せる巨人が、責めもせず、根気良く見守り続けている。瘤取者の男は残った子分たちにラスがやっていたものを見ながら覚えた調練方法を続けさせ、自分も休憩や看病以外の時間を全て肉体の酷使に費やす。彼等がそんなことをしながら青春の一時を無作為に捨てている頃、家を出たほうも、決め手に欠ける一進一退を繰り返している。

この頃目立って有能なところを見せて新しい主人を喜ばせているハーン・サイバルやかつて麻薬の密売などを行っていたゆえに人間社会に詳しいンゴバルケブ・ソアの助けを借り、ラスの世間知らずであった弱点は彼の膨大な予備知識もあって忽ち解消されたからその点では問題なかったが、森の出口付近はすでにどの国も全く予断の許さない戦争状態に入っていたので、彼等は目的の場所に入ることがなかなかできないでいる。どの方面に移動しても彼等は素性の知れない怪しげな一団として目を引いてしまう。

隠密で拠点を転々とし、八人の男達は外に出ることから期待されたものを少しずつ疑い出す。…人数を間違えたわけではない。移動中、どこかの国の軍隊と遭遇し、夜間だったので敵だと思われてしまった後、バラバラに逃走した彼等全員が再び集合することはできなかったのだ。

こうやって兄に負けず劣らず苦境に立たされ、美しい毛並みを泥まみれにしていたラスを救ったのは、意外にも、卑しい性質の指者リーフパルサンの何気ない提案である。

「もう良いじゃありませんか、どうせ大将――ラスは仲間達にこのように呼ばれている――の恋人さんの国は洞窟の瓦礫に埋まってますぜ、その手紙が来てからあっしらが出るまでにも相当の時間が、しかも、それからさらに時は流れているんでやんすからね。どうです、大将のような明晰な推察と論拠でしょうが？　でも、全然悲しむには及びませんぜ、うまいこと出世すりゃ、想像の女じゃなくて、いくらでもお好みの種族の女を現実に抱けるんですから。俺達の中にあの樹木野郎どもがいなくて本当に良かったですぜ。いっそのこと、虐殺の執行官にでもなって、とりあえず禄にあずかろうじゃありませんか」

同じ種族としてより強く恥に思ったハーンが提案者の胸倉を掴もうとしたが、ラスはそれを留め、目を輝かせる。「それだ…」彼は思わず、発想の転換とは実に他愛無いところから出てくるものだという、書物で読んだ先人の格言を知らずに実践した男の肩を掴んで揺さぶる。「敵について、潜りこむんだ！」

それから考えた末、ンゴバルケブの働きで、ヴィムディンゲルゾースではなく、地内に入りやすいヨルコンの軍隊に義勇兵として志願する。この戦争自体に消極的で正規軍を出し惜しむこの国はそういう連中をうまい具合にさっさと前線に行かせてくれた。こうなると事は今までの停滞からすると信じられないほどうまく運びゆき、彼等は戦争の混乱に紛れ、支配に落ち込む人々の傍らを素通りし、最後の抗戦に息荒い連中に出会うと味方の振りをし、一気に第四層まで降りる。間もなく期待に胸膨らませる美青年の目に、ロンムーチョントの城はすでに跡形もなく荒廃しているのが認められる。攻城兵器と破壊の術法が惜しみなく使われた結果である。ラスが後で知るところによると、偶然にも、彼が足で踏みつけている小さな水溜りはかつてピルゥスの泉と呼ばれていたということであった――ラスは失望を隠さなかったが、同時に素早く知恵を働かせ、自分がどこに行くべきかを知ろうと辺りを巡る。

ならず者のような風情で奴隷達に鞭を揮う味方の兵士に聞くと、王妃を殺したものの、肝心の王と皇女の遺体が見つかっていないということである。もはやあまり問題となることではないとはいえ、近々本国より大捜索隊が辿り着く手はずだとも、愚かな猿顔の男は威張って付け加える。ラスは目を再び、今度はあの手紙を見つけたときのように力強く輝かせ、興奮を隠すために激しく肩を毛繕いすると、情報提供者に謝辞を示しながらサイバル青年に目配せし、背を向ける。

「おい、どこに行くんだ。そっちは何にも無いぜ、毒の穴ばっかりだ。そういう穴を一つ一つ探すのは大変なことだから、とにかくどこにでもばら撒いたんだよ。かなり溜まっているはずだ」

「本当にご親切にどうもありがとう。しかし、毒については僕も不慣れではないから、安心してくれたまえ。君にもお礼に忠告しよう、手遅れかもしれないが――」台詞が間に合わない。すでに、数人の仲間達が訓練された殺し屋の動き――ラスは父のおかげでどのような戦術にも精通していることを改めて言及しておこう――で、兵士の背後からその息の根を止める活動を終らせている。奴隷達は驚いた目を謎の救済者に向ける。ラスは這いつくばる彼等に身をかがめ、優しく諭す。自分たちは近いうちに戻ってきます、貴方達が正しい心を捨てないならば必ず救われるでしょう、それまで耐えてください、とその汚れた頬を撫でてやる。

偽りの義勇兵達は毒の残る危険な穴ぼこの畦道を、綱渡りをするように探し回る。だが、注意していたにもかかわらず、仲間の一人が毒に漬かってしまう。彼は発展途上の優れた部分に卑しい性質が勝ったために、穴に突き出した枯れ根にひっかかっている犠牲者の貴金属を取ろうとし、足を滑らせたのである。ラスは自分の身を顧みずに勇敢に穴に飛び込み、すぐさま彼を助けたために犠牲者は即死を免れたが、危険な状況には変わりない。若き統率者は、どんなに愚かな人間であろうとも、ここまでついきて労苦を共にした仲間を見捨てまいと、梵子術と少ない薬草を使って必死に看護を続ける。大将の勇敢さと冷静さ、直向な思いやりは仲間の心を打ち、一層に彼等の団結を深めていく。探索は中断され、死線をさまよう男は、自分が重荷になったことを申し訳なく思っていると表明するが、もはや手遅れなので見捨ててくれとまで言う勇気はない。

「誰だっ…！」

ふと、看護者がその遠見の効く青緑に澄む目を上げたとき、彼はある穴に動く小さな影を見る。弾かれたようにハーン・サイバルが走り、穴に落ちようとする影の正体を掴まえて無理に引き立てようとする。雉猫が走りより、ハーンが自慢げに掴まえた手を外させ、それが女性だということを彼に判らせる。腹心はびっくりして、その汚れてはいるが高貴な身分を想像させる身なりにようやく気が付く。ラスは初めて家族以外の猫を見たが、彼女はそれが同種であるという要因を除くことができたとしてもあまりある程に、青年の心を捉えるに十分な美しさを称えていたから、ラスは激しく動かされる心をゆっくりと静めながら話し掛ける。

「ロンムーチョントの王女とお見受けします。このような寂しく危険な穴にお住まいになるにはあまりにも高貴でお美しい方、どうか震えないでください。我々としても状況が悪かったとはいえ、どうか部下の手荒をお許しください。しかし、私達は貴方がたの苦境を聞き、最も深き黒緑の地より馳せ参じてまいったのです」

「…ああ、まさか、本当に貴方がお母様の…　ウムポ・ルサ様…？　暗黒に落ちた私達の唯一の希望、偉大なる仙猫様なのですね。私は迷いましたが、でも、一縷の望みを貴方に賭け、危険を承知で出てまいったのです。本当に、嬉しく存じます。ああ、有難う…」

王女は感極まって泣き崩れそうになり、美しい青年に抱き起こされる。彼等は名乗りあい、ラスは、美しい女性のエルフム(失われた古獅子語で『真に美しい子』という意味。令嬢時代にウムポ・ルサのパトロンであったクァ・ヤスが教えてもらったのであろう)という名を、彼女の容姿からは連想できない風変わりな響きだと感じたことを悟られないように緊張したが、もちろん、そこまでする必要も無いことである。また、王女の方でも彼がウムポではなかったことと自分の早とちりに狼狽しかけたが、彼女の気品がそれを全く表情に出さないことに成功し、やはり仙猫の直弟子である男は誰よりも頼もしいはずであると考える。また彼が、想像していた相手よりも紳士的で自分に年齢の近い、しかも本当に郷国中でも見たことが無いほどに美麗で逞しい若者であったことを、いささか状況を忘れて好ましく思わずにいられない。いずれにせよ、名を知った青春の男女は、もし互いに惹かれ合うに十分な要素と状況を持っているなら、その瞬間から相手をより明確な対象として認識し、どのような札であろうとそれを相手の美しい個性と自らの内に広がる甘美な憧れと結びつけ、至上の名詞として認識するようになる。エ

ルフムとラスは同時にそのような状況に陥り、顔を赤らめ、急いでその場を取り繕おうとする。
「も、申し訳ございません。私、喜びで、急務のことを忘れるところでございました。この薬をお使いください。貴方が必死に看病なさっているのを見て、きっと悪い人たちではないと判断できたのですが、わが国に伝わるこの秘薬であれば、ご病人の体力さえまだ残っているなら、きっと希望が持てます」急いで毒に冒された男が王家の者の隠れ家に運ばれ、適切な治療を受ける。しぶとさだけが自慢だった犠牲者は、これでほとんど安心となる。
「私達は毒を決して恐れていませんでした。むしろ、あの者達が毒を使ってくれたからこそ、私達はこうして隠れ住むことができている程なのです。父に会ってください。きっと元気がつくでしょう」
予想されたことだが、出迎えられなかったロンムーチョントの王、ヤス家の長は、洞窟の奥で戦傷の悪化による病床に伏していて、そこを逞しい近衛の騎士達が張詰めて護っている。さすがにラスも近年の詳細な社会事情までは知らなかったが、王はどうやら虎者のようである。知能が低くて荒っぽい種族も人類と共存することがあるという例外を目の当たりにしても、彼の立派で紳士的な態度は内心の驚きを全く表に漏らさない。もちろん洞窟にいる彼以外のほとんどの人々にはそれはごく当たり前のことになっているから、彼さえ我慢すれば何事も無く謁見は始まる。
大柄な王は少し体を持ち上げ、襤褸の姿――ラスは仲間の調達してくれた簡素な衣服を纏っている――にもかかわらずどこか自分たちと同じような高貴な印象を漂わせる青年を眺め、満足げに頷く。王の状況は思わしくないようだったが、その威厳はいささかも衰えることは無く、それは彼に心酔して絶対の忠誠を誓い、例え姫の連れてきた者達であろうと油断せず、万が一の時には自分の命を盾にしようと来訪者を睨みつける兵士達からも想像できる。ラスは跪き、どうしたらよいかわからなくて下手な愛想笑いを浮かべる下賤な身分の仲間達に無言で真似をさせる。ラスはこういうことを自然とできたが、それは、あの身の毛もよだつような陰険な支配者が、子供達に服従を強いるときに鞭打って覚えさせた態度でもある。
「話は聞こえてきていたよ。本当に良く来てくれた。諸君等にせっかく来てもらったが、朕はこのように情けない状況で、生き残った兵士達を動けぬ我がために毒の中に押し込み、ひたすら貴君等のような優れた人間が来るのを待っていた。
この際であるから、はっきりと物を言おう。貴君等にお願いしたい。あの美しくも勇気ある掛け替えのない人、生涯ただ一人愛する亡き妻が命と引き換えに護ってくれた、どんな宝よりも大事な我等が希望、…我が娘を、朕にかまわず、どうか安全なところに逃がしてほしい。他にも五つの小隊を散在して穴に隠れさせている。彼等も連れて行ってもらいたい。我等のみが知る抜け道を教えよう。ここまで辿り着く英知と勇気をもった君になら油断する敵の衛兵を突破して未来に賭けることもできるが、ここに居続けては、いずれ大軍が押し寄せ、全ての希望は地に溶けてしまう」
兵士たちがざわつき、王の言葉を控えめな言葉を用いながらも情熱的に否定する。機会はまだある、王を捨てるくらいならここから全軍で突撃して突破口を開き、誰の力を借りずとも民衆と玉座を取り戻し、偉大なる殿下にお返しすることができる、と。しかし王は引き下がらず、ロンムーチョントの血筋

を絶やしてはならぬ、お前達も国の勇者ならば王の覚悟を厳粛に受け止め、その最たる願いのために死力を尽くせ、と叫ぶ。体に障ることを恐れた王女が彼を慰めようと近づくが、王はそれを身振りで拒み、か細い救援の青年に望みを託すかのように震える腕を差し伸べる。ラスは立ち上がってその剛毛に覆われた手を両手で取り、恭しく屈みこむ。

「陛下、私がどのような困難にも挫けずにここにきたのは、逃げるためではありません。猫族にこだわらず、調和を保ってきた多様な民衆と、それを統べる偉業を成し遂げてきた陛下のような方々の国家を助け、このビルドモンソの地より、欲望のままに自我を通す侵略者を退けるためでございます。そういった意味では、ここに詰める兵士の方々と同じ気持ちでございます。初めてお会いできる光栄に与ったにも関わらず、これは恐れ多くも、陛下の御深慮にそぐわぬ言葉となるようですが、しかし、陛下が敵の強大な侵攻によって一時は国を失うとも、決して諦めない、改めて賛美させていただきたいその偉大なる知慮が、不可能を可能にする大いなる助けとして私の前に思いもかけずに広がっている今、どうして陛下をお救いするような、偉大なる目的のために培った我が力を揮わさぬことができましょう。

　一体、総合でどのくらいの兵力が残っているのでしょうか。敵国の状況はここに来るまでに大よそ見てきたのですが…」

「そういう点に期待しているなら、ラス殿、私の表現が悪かった。…隠すまでもない。選りすぐりか怪我人、もしくは後衛の老兵、合わせて七十人に満たぬ。もちろん、ここにいるものも入れて、だ」

「それであれば我々を入れると八十人ほどにはなりますね。そうですか、それならば多すぎるくらいですな…　早速集められますか、いえ、陛下の偉大な軍隊を、私のような下賤な者がどうしようというなど、全く厚かましいことではありますが…」

「いや、貴君、遠慮は要らぬ。今の状況下、誰が見ても貴君こそが唯一の希望なのだ。部隊は呼子一つで簡単に集結しよう。しかし、敵は百倍、いや、そんなものでは効かぬ。どうするおつもりか…？」

「優秀なる指揮官でも在らせられる陛下に恐れながら申し上げますが、敵軍の間延びした配列に比すると、ここの穴だらけの地などは全く平坦で堅牢に見えるほどでございます。また、大きな敵と臆さずに当たるときは常に敵の兵力を分断することが有効なことは言うまでもありませんが、この戦場があまりにも入り組んだものである以上、それは決して難しいことにも思えませぬ」

「恐らくその聡明な頭脳にあらゆる兵法を叩き込んでいるとお見受けする貴君よ、しかし、相手は新参の地上軍ばかりではなく、ここに住まい続け、事情に精通するかつての友軍も、残念ながら多く含まれている。地形を知り尽くす彼等の働きがあって、わが軍は効果的な戦闘を演じることができなかったのだ」

　ラスはここで頭を降って言葉の応酬を少し控える。それは否定ではなく、悲しみの表現である。

「ゴルフィ共和国のことでございますね。事情を知らぬ私は、彼等を裏切り者と即座に断じる立場にありませんが、同地の味方として手を抜くことのできる相手ではないことは心得ています。しかしながら、私は自惚れでは無く、…味方の血を流さずに、戦時には常なる穏やかさからは想像もつかぬほどの荒々しさを地割れのように爆発させる虚神へ、敵となる者の血だけを供物として、地に染み込ませることを

お約束いたしましょう。それゆえ、陛下がこのラスめの願いを寛大な御心で一つお聞き遂げくださるならば、どうか一軍を、半分ほどの手勢のみをお貸しください。私には何の確証もありませんから、最初にお借りできるのはどんなに傲慢に多く見積もっても、そのくらいです」

しかし王には半分を残されてもどうにもならぬから、若い指揮官に全軍を率いるように頼み、またお互いに譲り合いの応酬を幾度も交えた末、優秀な幾人かを高貴な一族の生き残りの元に置くことでお互いに妥協される。義勇部隊を慰労するためにささやかな宴会が催され、王は久々に心を穏やかにし、また、見ていて気持ちの良い思慮のある会話を続ける若い二人を見るにつけ、益々青年を気に入り、それに期待するようになる。王は彼のために自分が完全に滅亡するとも決してそれを恨まぬ覚悟を決める。そのとき、突然に杯を取り落としたので、周囲の者達は心底驚いて駆け寄る。だが、王は恥かしそうに笑って彼等を制する。

「いやいや、本当にうっかりとしていて、渡しそびれるところであったわい、あれを…　アルサイド、あれを持ってきてくれ」一人の兵士が奥の物置場所から美しい装飾に彩られたさやに収まった大きな剣を持ってきて、それを手にしているだけでも誇らしそうに、恭しく王に差し出す。

「ふふふ、エル、親子じゃのう、私達は揃って勇者に大事なものを…　しかし、こうしてしっかり思い出すのだから愛嬌というものじゃ」彼はかなり気分良く酔っていたから少々呂律が廻らなかったが、その様子も真に王者らしく、貫禄がある。彼は無言で立派な武具をラスの方に差し向け、ラスが遠慮してそれに手をゆっくりと差し伸べようとしたときにぽいと投げやってしまったので、ラスはそれをキャッチしつつ料理をひっくり返さないのに一苦労する。王はまた大笑い。

「お父様、その武具のご説明を終えましたら、すぐにお休みくださいね。勇者様がせっかくがんばられても肝心のお父様が倒れられては、勇者様のご苦労も水泡に帰すると言うものではありませんか」

ラスも笑って姫の言葉に同意を示す。

「いや、お前、母親のようなことをいう、あれも本当に気丈で、賢く、時には小うるさく…」思い出に目頭が熱くなってきた王は急いで話を切り替え、ラスに渡した剣は王国に伝わる由緒ある武具で、自分もそれを用いて幾多の賊や敵軍を武勇の下に平伏させたことを誇らかに語る。だが、この武具は梵子術の力を高めるという機能を持つという点では全くその道に通じない朕はそれを使いこなしたとはいえぬ、貴殿のような術戦士にこそ相応しい代物だ――と解説し、王国の再建が目に見えた暁の前報酬として、貴君へそれを譲ろう、とも付け加える。ラスは、有難く借りておきます、きっと陛下の武勇や服従した数多の霊が戦いの助けとなるでしょう、とだけ返答する。王は、謙虚過ぎることは偉大な勝利を掴む気概を損なう恐れがあると冗談めかす。

「他にも報酬はいくらでもある。剣を持った者はいずれ隠居する者を安心させるための地位につかねばならぬし、それが面倒だと風来坊のように言うとしても、その隣に座る我が娘の美しさと優しさが――この点では実の父だからといって控えめに言う必要のないことは、あらゆる客観的な立場からも検証され得るはずだ――きっと貴君を引き止めてくれるであろう」王はたちまち顔を赤らめる二人を見て豪快に笑い、大きな手で若者達の肩を叩くと座を外す。

父がこんなに陽気になったことは、平和だった頃以来本当に初めてのことです、と王女が優しげに王の寝姿を見守る。「きっと、それが当たり前のことになります、いや、してみせましょう」王女は頼もしい青年の手に控えめに触れ、ラスはそれを未だ目的果たさぬがゆえに情熱的には握れぬまでも、そっと包むようにする。

猫の指揮官は数日を作戦や調練、偵察に費やし、残る者に見送られて、そのなけなしの希望を受けて進撃する。注意深く毒穴の地を抜け、まずは適当な拠点を得るために全く隠れず、策も無く、堂々と爪跡を象徴とする旗を掲げて。数は少ない。しかし、隊列は確固たる様子で、皆が抑えられていた意欲を漲る闘志に変え、それが沸き立つように勇士達の武具から発散されている。偵察の話だと、頚木に繋がれた人々が付近で地上兵に連れまわされているというので、ラスはすぐに足を向ける。奴隷と敵兵は、地上の正規軍の早い着陣かと首を傾げている。

「そんなに這いつくばって一体何を探しているのかね。地上の平地の者達にはここでは何をするにも困難というものであろうから、元ヨルコン義勇兵として、君たちにとってそれが有益か不利益かわからぬが、少なくともその苦役からは解放してくれるような事実を教えよう。お探しのロンムーチョントの残党はここにいる」

愚かな敵の兵士たちは初め、まだヨルコン義勇兵のバッジをうっかり衣服につけていたままのラスの言葉を取り違えて、本当にそれが味方のありがたい申し出だと思ったらしく、涎を垂らしそうに目を細める。しかし、どう考えても旗を見ればこの一軍がどういう所属かわかろうものだし、ラスやハーン達は相手の驚くほどの愚かさには賛嘆の意すら示すべきだというように、顔を見合わせて控えめに目で笑い、ゆっくりと偽りの称号を敵の前で外し、それを足で踏みにじってみせる。

「おっと、すまない、僕としたことがこんなミスを…　せっかくの宣戦布告が台無しじゃあないか。まぁ、それも一興、もちろん君達ごときに我が知略を使う気などさらさらなかったのだから、勘違いされぬよう、頭脳の乏しい者にもわかりやすく簡潔に言おう。我が背後に息荒ぐ勇者達は、お前達が傲慢と悪しき欲望で攻撃したロンムーチョント騎士団の精鋭で、いわば、奴隷の解放者、もしくはお前達を獲りにきた死神…！」

誇り高い青年は低俗な者達に名乗る必要すら感じない。彼の合図で部隊は怒号を上げ、数だけ多いが散在して統制の全く効かない敵軍に、各々自分の相手を求めるかのように突撃する。指揮官はあえて勇士達のしたいように任せる。今後苦しい戦いもあるかもしれないから、こういうときこそ、最初こそ、しっかりとした統制を取らねばならないと考えるのが秀才というものであるが、一方、この指揮官は天才と呼ぶに相応しいのだから、その視野は常識を超えている。彼は先を見越し、現状を正確に把握している。ラスは、軍隊としての実戦経験の無い自分の仲間や敗北して怒り以外の意味では士気の落ちている兵士達には、こういう楽な戦いで存分に自分の力と勝利の味を思い出させ、士気を盛り上げておくことこそが肝要だと判断したらしい。鬱屈した力を爆発させるような味方の攻撃はものすごく、数百の敵はあっという間に潰走し、予め準備された合図で深追いした者もすぐに戻ってくる。彼等は息荒く、敵は算を乱して逃げてしまったので倒した数はそれほどでもないが、仲間達の方は全く傷を負っていない。

指揮官は部下の武勇を誉めるとすぐに奴隷達を解放させ、その中で士気と体力のある者を取り立て、武器を渡させる。しかし、ここには都合よくロンムーチョントの若者が多く、彼等は母国復興の機会が永久に失われたと絶望しているところだったので、思いもかけずにその閉ざされた光が目の前に輝くのを見て誰もが心を燃え立たせ、我先に自分の武器を争い、予備に持ち出した剣や槍だけでなく、敵や粗末な兵士小屋から奪った多くの武器も、あっという間に尽きてしまう。残りの者は素手でも裸でも戦うと言って聞かなかったので、ラスは彼等の勇気と志を誉めるとともに、今後の再建を担う大事な若者を失うのは痛手であるから、一度王の元に戻るように諭し、すぐに自分たちは敵から奪い、取り返した武器を持ってくることを約束する。それでも、長い奴隷生活の痛手を若さと意欲で打ち消してしまった頼もしい兵士達が加わり、その兵数は二倍以上になっている。

その日は敵兵の宿舎となっていた建物の周りで戦勝の会を開き、敵から奪った酒が振舞われる。地上の住人は意外に知らないものであるが、地内にも昼や夜がある。それは天井の土中の網目状に微細な穴に溜まる水が器用に地上の光を反射させて実現する。だが、そもそも昼夜の区別自体が姉妹的世界の単純な確定的現象を似せたものに過ぎず、その実は高位次元世界としての自由度と実力を存分に発揮した梵子的な方法で反映させ、世界に意味付けを行うためのものである。それだけでなく、ここでは同様の入り組んだ方法で雨も雪も降る。とはいえ、地巨神が過保護にする地域と言われるように、地上において北の地がそうであるようには激しくなく、他にも多くの変動が緩和されているから、都合よくたしなむ程度である。

地の虚神がその意義深い腸に善玉細菌のように人を住まわせている地内もまた、この神の定義する地上同様の『世界』である以上、そこには天の虚神の力が働き、その親のごとき他虚神の司る素梵子的作用がそれを援助することとなる。こうして作られる地内の夜も、違いは掴めぬ星が見えないというだけで、趣はまた格別である。ここの星は岩石や昼間に光を持ち運び、それを溜め込んで夜に発散する夜光の苔や虫であるし、それには――趣という面でそれが良いか悪いかは個人の感性に任せるとして――触ることもできるし、常に散りばめられた宝石のような美しさを展開する。

初めて地内の夜を楽しむラスも子供時代にたしなんだ時のように顔を赤くし、解放された非戦闘員は歌や踊りで戦う者達を元気つけようとする。愉快な会の周囲で、尖った岩や入り組んだ壁の陰に隠れて増援を連れてきた敵の兵士達が味方の周囲をすっかり包囲していく。敵は、一般人も交えて残党の全てを殺戮しても良いという指令を上官から受けていたので、遠慮なく中央に向かって突撃し、かがり火が踏み消され、せっかく救われたばかりの民衆は自分を護ってくれるはずの兵士達がどこにいったのかもわからず、誰を頼ったらいいのかもわからない。奴隷から解放されたということが死に繋がるとしても、その方が幸福だったと言える人はそれほど多くないに違いない。突然のことに人々はどこに逃げてもいいかわからず、大騒ぎをしながらその場にこわばったりお互いに衝突したりする。

偉大な指揮官は酷く酔っ払っていて、彼はどこかで寝入っているという話が混乱する兵士達を一層に怯えさせる。混乱とそれがもたらした被害は随分と長い間その場を支配したように渦中の人々には感じられたのだが、客観的時間の幅でいくと、その間はほんの数十秒というもので、そのような状態を破っ

た男が敵と味方の前にはっきりと姿を表したのは敵の多くが瞬時にして倒れた後である。それは文字通り一瞬のことであって、秘密の作戦を聞かされて共に準備していた一部の仲間すら目の前の現象を疑わざるを得ない。ラスは十八番の、いつかも披露したことのある『導火線型』の術を成功させたのであるが、その威力は以前の召還術とは比較にならないほど凄まじいものであった。

十分に油断した敵が多く踏み込んだ最高の頃合で、彼等の足元に幾重にも張り巡らされた長いロープが青白い光を闇に浮かばせ、瞬間、ロープにわずかでも触れた者はその線と同じような色の淡い光を体から発する。付近がぱっと明るくなったが、すぐに暗くなって静寂が訪れたので、その後の轟音が、敵が倒れて武具を取り落としていることを示すものであることに敵も味方もなかなか気付かない。うまくそれを避けた敵も仲間がほとんど全滅してしまったことも知らずに勢い勇んで躍りこむが、ふと周りを見やれば、囲まれているのは何のこともなく自分の方である。どこを見ても自軍の姿は無く、彼は、黒焦げになって倒れている友人や、同じような境遇に陥って目をぱちくりさせている仲間の兵士だけを見ることができる。

ラスはこのような大きな戦功にも全く感情の動くところを見せないが、それもそのはず、これは彼にとってごく自然の結果なのである。智謀を働かせたとはいえ、このように一軍を壊滅させてしまうほどの強力極まりない術をまではさすがのラスも習得していない。これは、彼がいつか父の機嫌が良い時にねだって譲られた、所有者の執筆した一冊の書物が、その各ページに書かれている超高度の梵子言語をはがしながら導火線に伝えていった結果であり、術者はその準備と発動のきっかけを与えたに過ぎない。この場合、書かれていた言葉、文字、文章が、梵子的な意味を帯び、行為と結果そのものを表している。そして、それが実現された以上、本の方も、真っ白のただのノートとなってしまう。ゆえに、このようなとっておきの兵器の使いどころは指揮官としての重要な決議事項であり、ラスが早速これを使ったのにも、彼らしい幾多の様々な理由があり、全体の予測を立ててのことである。

第一に、兵士達に、予防接種的な勝利だけでなく、油断による敗北に対する戒めも与えねばならないこと、第二に、味方の戦力を良くわかっていない敵が大挙して油断するということが起こりやすい序盤戦で、相手の予想を裏切ってその戦力を削いでおきたいということ、第三に、拠点を持たない自軍は守りに弱く、そういった意味では、予め準備し、敵を誘い込むことが必要な防御用の術は使いどころが難しく、一般人がいて、味方も心底油断しているような、特殊な事情のある今こそその効果を最大限にあげられると考えた、など――ラスは先に挙げたような理由の中から教えるべきことだけを簡潔に取り出して人々に説明し、人々を護るために苦心して考えた作戦とはいえ怖い思いをさせたことを謝る。彼は幾人かの気の効く部下に命じ、ようやく落ち着きを取り戻し始めた人々とともに散らかった辺りを片付けさせ、今度こそ本当に安らげる会を開く準備をさせる。そうしながら彼は、すっかり意気消沈して倒れた者と同様に立ったまま武器を捨てていく敵の兵士達を見回し、皆に聞こえる大きな声で言葉を選ぶ。

「夜闇の奇襲は兵法の基礎、何も卑怯な業ではなく、こうして油断しているところを狙うのは、相手が僕じゃ無かったら、という条件付なら決して悪くない。我が智謀、そしてその片鱗をお見せしたような術法は化猫とも仙猫とも言われても遜色ないと自負している。できるなら後者で呼んでもらいたいもの

だが、しかし、悪しき運命によって我が道中を阻む者には前者のように見えてしまうことだろう。

私は偉大な王家の命を受け、腹痛を催させるような悪い菌のごとき貴君等地上軍を討伐し、巨神の愛する地内の平和を再び取り戻すために最深遠の地より来た、ラス。汝等ごとき、例え祝宴で酒が廻っているときでも、いつでも相手をしよう。ハーン、アルサイド、彼等の戒めを解き、帰してやれ。ンゴバルケブとフィブラは落ちた武具を回収して持たない味方に支給し、亡骸は簡易に埋葬せよ」

ウムポの功績をあえて自分の手柄にすることで味方の希望を高め、敵を一層に怯えさせることにも抜かりのないラスに、腹心が反論を試みる。種族の相対年齢としてはラスとほぼ同年代に当たるハーン・サイバルは謹厳な面持ちで、恐れ多くも申し上げますが、と切り出す。地内の流儀ではほとんどが地神教で、その場合…、いや、他の正しい宗教でも、敵とはいえ、勇敢に戦おうとした者の骸から物を盗るようなことは許されていません。ここで正しいことをしておけば、いずれの日にか勝利したときに我々の名声を高める役に立ちましょう――彼も自分達の部隊のためには武具がどうしても必要だと知っていたが、その進言は感情を抑制した優れた性質のものであったといえる。

しかし、ラスのより高度な読みは決して事態を楽観視しない。もちろん、このような急務のとき、形骸化した理想論を乗り越える手段を、天才はいくらでも持ち合わせている。今、武器がどうしても必要なのだ。頼りにして余りあるほどの英雄がもたらした勝利に沸き立つ人々の士気を落としたくはないのであえて口には出さないが、次の戦は厳しいものとなるであろう、ここからがようやく本番なのだ――「ハーンよ、ここに攻め入り、一般人すらを殺そうとした敵兵の武装を見るがよい。そう、この紋章は、ゴルフィ共和国騎士団のものである。君も僕もそれに気づき、察してあげるようにしなければならないが、敵を直接手にかけたわけではないロンムーチョントの兵士達に、母国を裏切ったこの死者達への恨みを抑えることばかりを要請し、死した者とはいえ、生前の罪を全く罰せられないということを押し付けよというのだろうか。…おお、実にその通りなのだ！　真の平等を教える尊き神に仕える敬虔な人々よ、今を試練とし、我々も万物の父なる者に倣って寛容を示さねばならぬ。戦時ゆえに簡単なものとはいえ、悲しいことに憎むべき敵となった彼等を、辱めず、埋葬するという事だけでも、大きな譲歩というものであろう。そして、罪を罰せず、しかし、それを赦すために彼等に罪を購う術を与えよう。すなわち、その手にしていた武具を、国の過ちによって敵とした我等が正しき兵士に委ねさせ、地内に住まう者として、解放の戦争に、正義の軍の味方として参加させるのである」

彼はこのように正当化して、大量の武器を手に入れ、人々の荒がる気を鎮めつつ信用を勝ち得る。隠していた味方にこれを装備させると、兵士の数は実に出陣よりたったの二日で五百を越えている。部隊は総指揮官の下に４つに分けられ、第一小隊長にハーン・サイバル、第二小隊長に王女の付き人にして王国一の剣豪マイザブル・ビアツ、第三小隊長にンゴバルケブ・ソア、第四小隊長には、地理に詳しい第三位司教で、先に披露したラスの術を手伝ったアインダー・ゼットコウロ――彼はゴルフィの者であったが、密かに友好国との争いに心を痛め、奴隷達を労わっていた――が任命され、部隊がそれぞれに振り分けられる。

ラスは彼等に、出陣前に予め訓練させておいた『牛蛙陣』を取らせる。この陣形は楔形陣を改良して

彼が独自に考案したもので、外を盾兵が固め、中に最後まで倒れてはならない指揮官や回復すれば再び戦力になり得る傷ついた者、支援用の弓兵や術者を匿う、といったもの。うまく動くには独特の訓練が必要だが、ラスが見せ、以後の兵法書に最も優れた戦術の一つとして追加されるこの陣形は、隙が少なく、遠近両用の攻撃が可能で、隊の維持に優れる、といった特徴があるために一顧師団の突破作戦が可能。

まさに多数の人々を細胞と見なして竜を創るといったウムポとラスの智謀の合作であり、連結した全軍行動の際には塀のブロックのように組み合って大きな軍団に素早く化けることもできる。牛蛙の群はその進み難そうな円陣型からは想像できないような速度で前進する。途中で待ち受けていた敵部隊は新しい戦法に成すすべなく簡単に破れ、リァルダの城が開放され、新たに数百の兵士が加わり、敵はロンムーチョントの護り難い破壊された城を捨てて、そこから東に六根土（コンド）（樹曼が考案した距離の単位。1根度（コンド）3.2ｋｍ）隔てたモンキフィートの城に立てこもる。

この城は傾斜の急な坂の上にあり、その真中辺りで左右の壁がくびれているので、そこに兵士を集中させれば攻め難く守り易いという天然の要塞になっている。いくつか抜け道が横や背後にあるが、そこはあまりにも細くて一人がやっと通れるほどだったり、這わないといけなかったりするので、そこから攻めることも考え難い。完全に鎮圧し、もはや全く危険がないと思っていた敵軍は第四層の将帥にお世辞にも優秀とは言い難いメーフグ・フッフ・クラオオという名のマンマオル族（第二層の一族。開戦と同時に降伏して地上の支配下に入った）の伯爵を置き、主戦の兵士はもっと問題のある地域に送り、ここの守備兵の多くはゴルフィや降伏した兵などに任せていたから、数と地形の恩恵にのみ頼っている。

それだけでも小さな軍団にはあまりにも大きな障害なので城攻めはほとんど無謀とも思える状態である。あまり長期戦になると篭城する側よりも早く外にいる者の兵糧が尽きる恐れがあったし、敵の援軍が日に日に接近しているので、ラスは奇麗事を捨て、犠牲を強いてでもここを攻め取る決意をする。雉猫の命を受けた第四小隊が他の抜け穴を探し出す。彼等はそこから奇襲をかけて一気に入り込もうとするが、敵が手堅く守っている限り、多少の計略ではびくともしないほどに兵士数の差は歴然としている。せっかくもぐりこんだ第二、第三軍は包囲され、かなりの兵士を失って逃げ帰ってしまう。敵の追撃を予測していたラスの本軍が兵を伏せてこれを挟撃し、相手にも傷を負わせたものの、敵の増援がもうすぐ後ろに迫っていることが斥候より何度も報告され、人々は怯え、すっかり希望は消えたかのようである。

耳を欹てれば敵援軍の靴音が岩窟内を伝わってくるのではないかという程のころになって、ラスは残りの兵士を前もって用意しておいた秘密の言葉で激励し、再び牛蛙陣の三部隊を自分の本隊主導で率い、結合陣による総突撃に全てを賭ける。フッフ第四層将帥はそれを聞いても全く顔色を変えず、抱える女達に祝勝の酒を一足早く持ってこさせる。ちくちくと小さなことをやっていた連中がついに観念して無謀な特攻に命を費やす覚悟ができたらしい、肩の荷が下りたわい、と彼はほくそ笑む。将帥はゴルフィの老いた犬者の栄誉騎士ヒューリ・エングラムに指揮を委ね、享楽にふける。逞しい老人は黄色い髭を千切ろうとするかのようにひっぱって苛立ちをあらわにし、ゴルフィの若き騎士達を集め、…――一方、

ラス軍は傷つきながらも指揮官自らが矢面に立って部隊を奮起させ、敵の前門を突破している。敗走する敵を蹴散らし、一気に城門を目指して駆け上がる。しかし、様子がおかしい。

逃げていく兵士は後方で少しずつ集まり始め、天然の門をふさぎ、隊伍をなおして進撃してくる。他の連中も城門の前に集結し始め、攻撃側の周囲に乱立する奇岩の上には人影が出現する。銅鑼が鳴り、包囲されたラス軍は四方八方から攻撃される羽目になる。敗戦色濃く、当然のことながら勝負を捨てて逃げようとする者が出る中、逃げられない目前の死に立ち向かう蛮勇が、かつては呆然と散漫に過ごしていた山賊出の幾人かを勇士として脱皮させる光景も見られる。第四部隊の中では先の奇襲作戦ですでに実力を垣間見せていたマーシャン・ギャリド・エブナは盾を捨て、囲まれようとする指揮官を見つけると身を呈して助け、ラスが梵子的な破壊力を付与した王の剣を託される。素晴らしい武器を得たギャリドは潰走しかかっている第三小隊の方に行って油断する敵をなぎ倒し、次には油断せずに隊列を組んで猛然と向かってくる者達もやはり一人で倒してしまったので、味方は俄かに活気づく。ンゴバルケブ・ソアは彼を従えてマイザブル・ビアツの部隊と合流し、敵を頑強に防ぎ、じわじわと押し返し始める。

第二小隊所属で、短い間ながらも地内どころか大陸中でも指折りの戦士である小隊長に師事したサイモン・アームンも驚くべき働きを見せたが、彼のは火事場のバカ力という感じのものである。囲まれていよいよかというときになって、サイモンは死にたくない一心で倒れた味方の武器を取り、混乱していたゆえに危険を避けるという点ではあまり賢くない方法、すなわち闇雲に突撃して両手でも重いそれを片手に一本ずつ持って振り回すといった芸当を見せ、幾多の敵を同時になぎ倒し、孤立しかかっていた第四小隊を存続させる。また、第二小隊はその頃誰もが認めるようになっていた、飛びぬけて強い砂魚者が率いていたので、彼の周囲が死んでも彼だけは一人黙々と敵を切り続けていく。彼等の奮闘は目覚しいが、所詮は多勢に無勢である。しかし、策を捨てて武勇にかけたのであろう総指揮官は敵味方の血に塗れながらもその目の澄んだ輝きを曇らせてはいない。

彼の目は戦場に余り注がれず、多くの場合天井を見ている。死に瀕して、地上の郷里を思っているのではない。それには余りにも目の輝きが強いのだ。敵の攻撃が一層に厳しくなり、防ぎきれなくなっていく。

…突然爆音が辺りに響き、敵味方はその出処と思われる城の方を振り返る。岩窟の天井にできた小さな穴から最も数の減った第一小隊の兵士達がロープを垂らし、ある程度降りると次々と飛び降り、一気に城の屋上や天守閣に取り付き、無防備な窓を破って中に続々と侵入していく。

これは敵にとってはまったく唖然とするしかない光景である。そもそも、城の天空――地内では岩窟の天井をこのように呼ぶこと稀ではない――にごく小さい穴がいくつかあったことは知られていたが、十根土以上も厚みがあるはずの天井を上から破るなど、普通は全く見当もつかない。気象学、地理学にも精通するラスは、散漫に責めると見せかけながら要塞内の自然構造を玩味し、ここの天井には壁の薄くなっている地点があり、そこと柔らかくなっている小さな穴の部分から突破口を開けると確信し、第一小隊を派遣していた。第三層への安全な抜け道は地理に詳しい郷里出身者が教えてくれたから、こう

して時間はかかったものの、雉猫の狙いは見事に的中したのである。

だからどうしたというのだ、依然として有利なのは我が軍だ――敵の武将はこのように叫び、指揮官を先に射程内に捉えているのだから、戦闘に集中するように兵士達に呼びかける。同時に、突如危機に瀕した、大っぴらな声ではいえないが実質的にはあまり頼りにならない総大将を守るために兵士の一部を城の中に急行させる。だが、敵軍の多くの者が総大将の身を案じ、完全に裏をかかれたことに動揺を隠せない。城の中は全く安全だったはずだし、まさかこの地内で天から攻めてくるという発想は今までに無かったので、守備兵をほとんど置いていなかったのである。案の定、城の中から雄叫びが上がり、その声自体は戦場の喧騒にかき消されたが、城に突入した敵部隊よりも早く屋上に駆け戻った第一小隊長の数多く蠢く指が、愚かな第四層総監の首に巻きついている髪を握ってぶら下げている。

「地内の和平を願う勇者ラスの命を受け、このハーン・サイバルが、愚かなる敵将の首級をあげた！　勇気と正しさを持つ地内の勇士達よ、間違った道を歩んだ諸君等が贖罪し、正しき地神の元に、再びその子として認められる機会が来た。自らの良心に問いかけよ、貴殿の国は敵に支配される代わりに悪しき意志に蹂躙されているのだ。母国を救う気はないのか、栄誉騎士殿！」

名を出された方は将軍の横暴に嫌気がさしていたし、前の奇襲時にアインダー第三階位司教が遺した矢文に書かれていた約束が果たされたことにも感服していたが、それよりも仲間に裏切り者といわれても仕方の無いような状況に追い詰められ、いよいよ後には退けなくなる。エングラム将軍は、国益と信じて寡黙に目を伏せてきた良心の呵責を呼び覚ました、勇士の勇気を示す手紙の内容を思い出す。

『ロンムーチョントは地内の平和を心底望み、貴国との友情が、この試練を通じて一層に堅くなるために例え微力であるとも死力を尽くす所存。これを読まれた方、もし貴殿がゴルフィの騎士で、憂国と自責の念に囚われているならば――我等の行いが真実であることを証明する、困難を鉄の意志で貫き通す我等が働きを見たなら、地神の名に賭け、その力を我等に貸し与えたまえ。今ここに、我等は地神の加護受け、貴君等を従える悪しき地上の総帥のみを打倒し、貴君等に危害及ぶを最小限に食い止めるという誓いを立てん』

この手紙が老いて益々盛んな驍将だけを狙って送られたこと、いや、そもそも一連の奇襲や天空突破は彼を刺激するために行われたことであったことなど、経験豊富で武勇に優れるヒューリ・エングラムにもさすがに判らない。意を決した彼は寡勢を率いて味方の大軍に反旗を翻し、地上軍の部隊を選別して攻撃を開始する。

それでも地上軍の方がまだ兵数において勝り、敵の主力は反逆者も後少しで壊滅するはずの反乱軍も一気に倒そうと部隊を二分しようとする。だが、これだけでは収まらなかった。老将軍の愛弟子、ゴルフィの未来を憂慮する精鋭達がそれぞれの部隊を率い、犬の栄誉騎士の元に集まっていく。――ヒューリが勢いのままに胸の内を吐露したとき、彼は若き騎士たちの前で大人気なく振舞ったことを恥じ、自分を反逆罪で将帥の前に引き立てるように言った。誰かが密告し、自分を見逃した者も罪に問われるかもしれないと。

しかし、若者達は彼の手を取り、ここにいる誰もが偉大な将軍と同じ考えであり、将軍が決起しない

ことを悲しく思っていた、と伝える。彼等は話し合い、約束が果たされるという一つの奇跡を天命として受け止め、もしそれが現実となったら、例え国家に罪を着せられようとも武勇を正義のためだけに費やそう、と結論したのだ――戦況は当然ながら、ひっくり返るように一変する。方々で同士討ちのような現象が起こり、このような地形のために逃げ場も無く、敵はほとんどが死ぬか降伏する。ラスは、彼の部下がそれにふけるようにはこの大仰な逆転勝利の余韻などには目もくれず、緊張を全く解かずにすぐさま伝令を出し、毒の穴に守られていた人々を城の中に招き入れ、服従した兵士を減った分に宛がい、城の周囲の要所に配置する。寸でのところで、猛然と上層の四方から攻めてきた敵の増援軍は狭い地形に阻まれて足を止める。

彼は緊急の事態を理由にゴルフィの者達と講和を強制締結し、味方にも恨みを捨てなければ国を捨てることになると厳しく諭す。部隊は一軍の離脱といった不穏な動きが起きないように、指揮が落ちるのを承知で兵士達を混ぜ合わせて再編成する。ヤス四世の委任でそれぞれの部隊は、地神の名の下に地内解放軍としての使命を受け、軍団内には新たに３つの部隊が結成され、ゴルフィの老将軍と先の厳しい戦争で戦功を上げた二人の勇士が部隊長に就任。そうこうしている間に敵はとてつもない大軍でモンキフィートを包囲し、幾度も攻め込もうとしたが、その度にラスの計略が冴え渡る有利な地形によって辛酸を舐めさせられる。

戦争は互いに決め手にかけたものの、数は増えたが外の敵に比べれば本当にちっぽけでしかないロンムーチョント軍は、次第に疲弊しはじめる。しかし、天才指揮官を悩ませたのはそういう戦力差などではなく、相手の指揮官がその軍団の動きから察するに、極めて優秀な人間であるらしいことである。敵は反乱軍が手強しと見ると決して挑発に乗らず、先にラスによって一時的に解放軍の物となった無防備な地を次々に再占領し、上層を含めた多くの地域に部隊を配置してその動きを見張り、持久戦に持ち込む。こうなると兵糧面で篭城軍は苦しくなり始め、ラスが予め考えていたように援軍を求める使者が幾度も送られたが、どれも効果をあげない。

第三層の反抗勢力は自分たちを守るのに手一杯でもあり、また、多くのものが、一度滅びた第四層の小さな反乱の成功などはほとんど度外視していたし、地内の高貴な士族でもないラスの活躍は、上辺の名声でしか判断できない連中の気をひくのも難しい。密命を受けたハーンはうまく第二層まで辿り着いて生きて還ってきたが、猫の司令官を喜ばせたのはそのことだけで、ポイラルド軍は全く相手すらしてくれず、言い訳がてらの、いずれ小さな兵団を送る予定、という口約束をもらってきたのみである。

さすがのラスも苛立ちを隠せなかったが、それを知られれば軍団を酷く動揺させることになるので、ここが正念場とじっと堪え、チャンスを待って警戒を怠らない。その間に軍団兵の調練をしたり、自分がやらせたように天空から攻め入られないよう、天井を埋める工作をさせたりして、時折考え抜いた計略で敵陣を乱し、食糧をわずかに得て食いつなぐ。それも長くは持たないと思われ、次第に準備される総攻撃の時が、『自分が相手なら』と正確にシミュレートできるラスにははっきりと予感される。もしそうなったら防ぎきれるものではないだろうから、ラスはまた、大胆な突破作戦に賭けることを考慮に入れねばならないと考える。

彼は主だった勇士達を集め、作戦会議を開き――しかし、その決戦がどれほどに激しく、書かれるに足る重要なものであるにせよ――そろそろ、かつて赤子を見つけたときの化猫のように、どことなく気になる存在なのに、諦念に支配されたがゆえに見捨て去られた者のことが、気にならぬであろうか――…あの少年を思い起こすためにも、物語りの視野を地内の戦場から次第に離し、眼前に、これまで見たこともないような、美しく晴れ渡る自然の景観を広げさせてみよう。

彼は今どこにいるのであろうか。弟が出世している傍ら、いまだ、あの陰鬱な森の中である。それにも関わらず、あの黒猫は風そよぐ美しい風景の中にいて、柔らかな陽光できらめく小川のせせらぎにじゃれつくようにも見える小魚の立てる飛沫を、土手に座り込んで楽しげに眺めている。彼の肢体には明らかに成長が見られたが、それは、闇の森と同化してしまったかのような病人の体とは全然違うものである。

彼は天国にでもいるのであろうか。病が進行して…　そうかもしれない。なぜなら、信じられないことだが、この見たことのない風景に、見たことのある人物が登場するからである。それは猫者種の美しい女性の姿で、彼女は風下の好ましい光の靄から溶け出すように飛んできて、ピサの隣にふわりと降り立ち、美しい毛並みの素足を水につけて青年とともに清廉の流れを楽しむ。ピサには、この風景も彼女のこともすっかり馴染みであったから、全く驚く様子もなく、彼女に気づかぬような振りをして、胸中を甘酸っぱい興奮で満たしている。エルフム・ヤスも小川に目をやったまま、甘えるような声で、黒猫に言葉をかける。

「何だって？」ピサは全く心外な顔をして美しい少女を振り返る。悪い冗談だと思って彼は口を歪めて苦笑いを作るが、『今回』の逢引がいつもの甘美なものとは違うことが、何となくだが、なぜか理解されてくる。彼は頭を振り、何度も否定する言葉を呟き、どうして彼女と『お別れ』しなければいけないのかを問う。神秘的な印象の、白い薄手のブラウスしか身につけていない少女は誰よりも純粋な心をもつ青年を、それに劣らず魅惑的な、吸い込まれそうな瞳で見据え、答える。

「私、貴方のことが好き。私と貴方は、私達が望んだ通り、きっと、本当に逢うことになるの。でも、その時ね、あなたは他の人を愛している私を見つける。私達は魂の上では本当に惹かれあっていたのに…　現実で逢おうとしてはいけなかったんだわ。そのとき、運命が別つべき二人を正当に別つのを見るだけなんだから…　もう、そうなったら、私達はここに来ることもないでしょうね」

謎めいた言葉であったが、黒猫はその大よそを感覚的に理解しているようである。彼は、ある時にそうなったように、ここでもはっきりとした諦めの色を見せる。その耳は頭皮に付き、伏し目がちになった大きな目には、しかし、この快活な人間が魂の深遠の中に弛ませる清廉な水のような、憂愁の美しさが煌く。おお、偉大な人間の諦念が、考え尽くすと同じ結果を瞬時に見定めるということは何という――少女も、その眼差しから離れることが、後戻りできない分かれ道の、恐らく優れた精神の境地に行き着く道ではない方であることを、理解しないが、その悲しみだけは感じてとったかのように涙ぐむ。黒猫は彼女に背を向ける。

「さようなら、エルフム…　俺はこのときが来るのを、君が俺達の夢の中に出るようになったいつかの

時から、知っていたような気がする。

俺はここにいないとき、いつも深淵にいた。どこまでも落ちていって、落ちていって…　そこが地獄の果てのようなところであることは、いくら俺がバカでも理解できたよ。周りは真っ暗、というより完全な意味での漆黒で、どこが上かも下かもわからなかったけど、良く落ち着いて考えてみれば足元が下に決まっているし、足を冷たくさせていた泥水――何色の水だって、そこじゃ、真っ黒に汚れているように見えるさ――が、実は、完全な意味で蒸留されたものだって事に気づいた。俺はそこでばちゃばちゃと水遊びをしていた。暇でもあり、寂しくもあったけど、小さな充足感が、何者にも煩わされない時間が、俺を満たしていた。俺はそこで溺れてみようかという思い付きを、それがこの浅瀬では難しそうだという理由だけで反抗的に、いたずらっぽく思いついた。つまり、死にたいと思ったらしい。…でも、死ぬとは？　まぁ、人はいずれ死ぬらしい、しかもかなり簡単に、ということを俺は親父から耳が腐りそうなほど聞かされていたから、それほど興味のあることでもなく、やっぱりやめてしまって、　…そしたら今度は何もかもくだらなく思えてきた。

そんな折に、ふと、見上げたんだ。多分、弟はそうやって君を初めて見出したんだろう、あの青い愛すべき瞳で。そのとき俺は、多分同時に全く違うものを見つけ、君から目が逸れてしまった。それは白っぽい小さな星屑のようなやつで、俺は近づけば近づくほど大きくなるその出口と思しきものに、歩んでいく…。その光で周りのことがおぼろげながら見えたのだけど、この小川はあそこを源流とするらしい――でも、信じてほしい、俺は、君のことだけを愛していた。君の外面、君の地位、君の性質、君の肉体、君の存在…　そんなものにはまるで興味がなかった、それがどんなに優れていて、俺の肉体や精神を虜にするものだとしても…――その全てを問わずに、俺に触れあった君の魂だけを。だから、俺は君が、俺には有難くない方法でも、再会を約束してくれたことは嬉しい。俺は君を愛したことを忘れない。そしてまた、俺は何度もここに来るだろう、例え君が…」

「ごめんね、私は忘れるわ。きっとね」少女が悪戯っぽく笑うが、言葉は真剣である。彼女の目線や言葉を紡いだその唇が、まだ少年の域との境目を右往左往する青年には急に大人びたように、あまりにも美しい、ほとんど妖艶といってもよいほどに感じられ、彼は思わず目を背ける。

「それでも俺は、君を愛する心を捨てはしない。さようなら、エルフム、さようなら…！」彼は走り去る。決意とは裏腹に、全てを諦め去ったはずなのに、やはり心はにわかにかき乱され、泣き崩れたくなり――

ピサは別段いつもと変わったこともない腐った臭いの立ちこめる樹木の洞の中にいて、違うところといえば、彼がやにわに上半身を起こしていることくらいである。しかも、周囲にいた者を驚かせたことに、それまでほとんど動きさえしなかった黒猫は蒲団を跳ね除けておずおずと立ち上がり、忽ちよろよろと倒れかける。彼は思わず駆け寄った瘤取者の、相変わらず逞しい胸筋を押して彼の助力を拒む。それまでは、現実世界の体験を攪拌して再合成する魂の世界で特定の少女と逢うという特殊体験を、そのくびれて閉じる出入り口から持ち帰ることはなかったが、今では、それがおぼろげなもう一つの現実のように、一連の記憶として彼の実感――いくつかの、運命的には重なっているが、彼個人には知るはず

のない現実の断片、例えば少女の名前、弟のことなどはその中に含まれない――となっている。
「ビスタン、俺は行かねばならない。準備してくれ」
　思いがけない出来事による喜びで柄にもなく涙ぐみそうになったビスタン・ケイマリッチは慌てて欠伸をし、さも興味なさそうな振りをして、しかし、必要と思われることをするために手足が急ぐ。
「大したご決断で、否死殿下。あの美しく愛らしい子供が出て行った今、貴殿のような、ゴミ屑にも等しいのが、生きているか死んでいるかなどには興味がありませんでしたがね」ちょうど通りかかったウムポ・ルサが穴の入り口からその厭らしい顔を覗かせている。「腐って異臭を漂わせるようなことになっても大変ですから、本当に奇跡的な、負け犬のご英断といったところですね。これでようやく一息つけますよ」
　ピサは慇懃無礼の薄汚い悪態に怒りもせず、それを噛み締めるように耳に入れ、両目を閉じ、次いで、強い意志を込めて見開く。
「ウムポ・ルサ。本当にお別れだ。短いような長いような…　とにかく、お世話になりました。…行こう」
　彼は薄笑いを凍りつかせている男には目もくれずに退出し、すっかり準備を終らせ――といっても、持ち運べるようなものも大してなかったのだが、外で様子を凝視していた者達に合流する。賊どもは幾度か振り返ってみたが、先導者があっという間に藪の中に姿を消すので、慌てて追いかけ、見えなくなる。
「ああ良かった。全くせいせいしたものだ」独りになった化猫は、ようやく取り戻したかつての静寂を満喫しようとして空き地の中央に座す。そこでは、あの子達が分別なく彼の皮膚を傷つけ、その後、愛らしい舌でその痛みを慰めてくれたこともある。化猫と呼ばれ、世間と相対する男は、一段とやせ衰え、老けたように見える。彼は痴呆症の老人のように何事か呟いている。
「…ようやく旅立った。二人で一人。三人で一人。一人も欠けられぬし、欠けたら全てを終わりにしないと釣り合いが取れぬ。だが、そもそもどうやったって人は、子供は、己が道を行くものだ。全てが終わり、私を除けば、始まったのだ」彼は、傍に放置され、そのほとんどが染みに支配されているようなくしゃくしゃの紙屑のどれかを取り、覚束ない手つきで広げ、そこに書かれている梵子言語に何事か書き足していく。それは詩であった、彼の完成させた初めての…――いずれ、その内容に触れる機会もあろうから、ここでは特に取り上げないが。

４、後退もまた前進

　ラス達は梵子術によって地図製作をしながら進んだので比較的早く出られたのだが、いくら野外行動に熟練したビスタンやピサといえども、森自体が恐るべき迷宮のようであったから、出るだけでも困難極まりない。十人弱の旅人は必死に陰鬱な森を抜けようとしたが、何度も同じところを巡ったり、恐る

べき怪物に出会ったりして、次第に消耗し始める。特に、あれほど最強を謳歌していた黒猫の戦力ダウンが深刻である。

そこで、急がば回れ、『禿鷹と屍』の親分は踏みとどまることを主張し、焦るピサを張り倒して、悔しければ以前のように俺を倒してみろ、と挑発する。ビスタンはまるでウムポ・ルサが乗り移ったかのように――実際に黒猫は彼をそのように揶揄し、罵った――黒猫にリハビリの努力を強いる。もはやピサの筋力は誰が見ても絶望的な様子であるが、瘤取者はあきらめず、執拗に青年を鞭打ち、克己という目標に向かわせる。

その間、黒猫の復帰だけが脱出と人生の成功に繋がると信じた仲間たちも、それを控えめではあるが、特に命ぜられずとも自分なりに手伝うようになる。料理が得意で、食用になるものとそうでないものを見分ける知識をもつ虫者のザウナ・ガリソは、自分で仕留めてきた明索侍（メイサジ）（透明な機械生物。霊体生物に分類する学者もあり、強力な怪物であることよりも、その生物種としての議論で有名である）の肉と内臓を周囲の草から抽出した旨みで巧みに調理し、ピサを喜ばせる。この頃のピサにはすっかり以前の活発さが戻ってきて、仲間たちと冗談を交わし、打ち解けあい、一団の首領というより、その一員として溶け込んだようである。だが、体力はなかなか戻らない。しかし、ビスタン・ケイマリッチはそもそも自分がこれほど辛抱強い性分であったのかと驚くくらいにしぶとく黒猫を鍛錬させ、彼が泣き言を言っても許さない。

あるとき、歌を得意とし、仲間の眠りを楽しませた温厚なサリイアン・ヨーツェが、水汲みに言ったときに不意に出現した鞠陽に襲われたことがあった。悲鳴をあげたが遅く、恐るべき妖怪の体全体が中央から丸く陥没していき、自分を丸呑みにする間にもほとんど抵抗らしいことすらできない。

遠くでかすかな声を聞きつけたピサは、スパルタ教師が逃亡を咎めてわめくのを無視して恐るべき速度で猛然と駆け、勢いのまま、凄まじい蹴りを化物の体に食らわせて仲間を吐き出させる。食事を邪魔された妖かしは、目の前の男がかつて同種、もしくは自分をからかった奴であるかどうかには留意しなかっただろうが、とにかく激しい怒りを、青筋のようなものを体中に浮かばせて不気味に明滅することで表し、体表面に浮かばせた黒い孔から梵子弾丸の嵐を激しく噴出する。しかし、ピサの反応がなぜか遅れ、彼のことを心配するよりも救援者の死が自分の死に直結することを考えたサリイアンの叫び声があがる。周囲のいじけたように畝って立つ細い木や藪、羊歯に覆われた土が粉砕されて舞い上がり、犠牲者の姿を覆い隠す。それが収まると、そこには傷ついた黒猫が、しかし、周囲の無抵抗な素材とは違って、形を失わずに突っ立っている。

「…ってぇ、梵子術、か。全く、俺はこれができないというのは本当に欠点かもな、悲しくなっちまうぜ。気合を集中して防ぐってことを思いついて、早速試してはみたが、全然うまくいかないもんだな。…悪いけど、二度目は食わないようにするよ」

これで防いでいないとは、豪胆を越して無知というもので、これほどの破壊力を持った兵器を真に受けて『痛い』で済ましてしまうなど、そもそもとんでもないことである。彼は少年時代のやんちゃな頃には見せたこともないような、訓練された格闘士のような構えを自然に取る。それは彼が『夢』の中でぼんやりと創作してきた戦法の一端でもある。

ピサが飛び、罪のない彼の元いた場所に再び容赦ない破壊力が突き刺さる。駆けつけた瘤取者は、彼の人生を賭けた希望が前以上の躍動を得て、恐るべき生物を幼稚なペットか何かのように扱い、爪でその岩のように堅い皮膚を切り裂き、敵の血に塗れている様子を見る。鞠陽はこのすばしこい雀蜂のような小さい者の戦闘力に加えて増援が来たことに怯え、必死に逃げていく。黒猫はそれを追わず、軽く手を振るようにしていたが、慌てて背後の巨体を振り返る。「いやあ、取り逃がしたよ（面白い奴だし、わざわざ殺すこともないだろう)」「馬鹿が…　修行が足りんからだっ！　来い！」

黒猫はずるずると嫌そうに引っ張られていく。しかしそれ以降は、いつかビスタンが子供の相手をしなくなったように、指導は参加型ではなく、カリキュラムを自分でこなさせるように変わっていき、前に約束していた決闘による試験をうやむやにしようとする。ピサの噴出する若さと溜め込んできたひたむきな努力の成果が相まって、例え後ろ向きな時であっても真の目標に対しては魂が常に前向きであった。それゆえに一度きっかけをつかんだ天才の成長振りは、弾力物質が圧力を押し返すような凄まじい勢いとなる。ビスタンは森に留まりすぎることの無意味さを訴えて、凄みを増した武神の生まれ変わりのような男と真正面から戦う機会を何とか避けることに成功する。彼自身も鍛えつづけていたし、今度こそはピサがいくら強くなっても優越できる見込みがあったのだが、彼の予想は、内心では嬉しい意味で裏切られたので、もし戦うとなったら、双方無事ではすまなくなるだろう――いや、自分を過小評価する気はないから、こう言うしかないと彼は思う。例え自分程のものであっても、もちろん、全世界のいかなる最強の戦士といえども…――

当のピサだけでなく、彼ほどではないがつられるようにそれぞれの水準で成長した山賊の面々は、そもそもが野外での流れるような生活に性分の上でも慣れているので、そのころはすっかり当所の目的を忘れ初めている。面倒臭がる彼等を追い立てて森を出ようとするビスタン・ケイマリッチも、誰しもが恐れるであろう邪悪の森でキャンプ気分を満喫できるほどの仲間を頼もしく思う気持ちを禁じえない。彼等はこの緊張の中で一体感と野生の感覚を得たようで、交代で眠っている時も冗談を言い合う時も常に油断がない。どれほど恐ろしい化物といえど、こういう連中のことはなんとなく敬遠してしまうのか、それからはほとんど敵に遭遇することもなく、森の勝手も何となく肌でわかるようになっていたので、適当に進んだだけで、あれほど迷った道をごく簡単に制圧してしまう。

外界に出た彼等は、まず、何はともあれ人間の住む街に行ってみることにしたが、かつて『禿鷹と屍』が荒らしたヨルコン王国を避け、辺境の小さな瘤取種、猫者の集落を経由し、南の方からさらなる未知の地へ行くことにする。彼等の旅には誰にも明確な目的がなかったが、漠然としたそれぞれの目標が、それぞれのやり方でこのような大雑把な道筋を許容している。大きくなったピサは夢の中の天使にどこかで逢うことを願いつつ、今はそれよりも、回復した彼の若い好奇心だけではない王者的な欲望の萌芽として、いろいろな遠い地を見て回ろうと思っていたし、志を燻らせている巨人は今や黒坊主についていくのが当たり前のようになっている。他のメンバーは自分の親分達のことが好きだったし、彼等についていけば当分食い扶持に困ることもなく、彼等が理解している以上に偉大な人々が辿り付く好ましい手柄に、自分たちも与れるはずだと踏んでいる。いずれにせよ、高貴な使命とか大きな野望なんかには

程遠い気楽な気持ちが常に彼等を落ち着かせていて、旅は行き当たりばったりの、それなりに有意義な遍歴生活となる。

また、そもそも高貴な性質を隠し持っていたビスタンは別にしても、荒くれの悪人の集団であったはずの山賊達が、黒猫の何にでも染まるが自分の色を保ちつづける強力な純化性質によって心を洗われるように、大人しくなったり、優秀になったりしていることはそれだけを取っても意義深いことであろう。黒猫は彼等に混じって悪の振りもし、また、そうかと思うと自分の欲求に素直に従って何の臆面もなく善の道を行く。影響を受けた悪人達は善悪の主義の堺が判然としなくなったように感じ、次に、ピサと打ち解けて明るく過ごすことで心の刺を少しずつ抜き、我とも知らずにその穢れを濯いでいく。同時に、走って競争する者が速い相手を前にしていると良い結果を出すように、成長が止まると一般的には言われている時分から――しかし、多くの人間は単に、あきらめて止めているだけである。本当は、ゆるやかだが真に重要な成長は成人してから起きるものである――彼等の能力は向上させられ、自信が誇りと余裕を生み、驕りだけが忽ち真に優れた手本によって無情なほどにすぐさま打ち消される。

このように、生まれながらに万人の人格を努力せずに導くような偉大な個性の傍にいて学ぶ機会を与えられるなら、多少の素質さえあれば――いや、それくらいの素養はあらゆる人間に備わっているといっても過言ではあるまい――優れた人間にならずとも、短期間でまっとうな方向に矯正されることはそれほど難しいことではない。

「黒坊主はいずれ大きくなるぜ。もしかしたら親分よりも、だ。俺にはわかる。そしたら、俺達は大金持ちになれるに違いねぇ」食糧調達の狩の間、エクスタン・バリアーシュはゲンド・グラッマに期待できる展望を何度も繰り返す。醜い顔の栗犬者ゲンドはそれに曖昧に頷く。彼の信条には、望みすぎると、どんな確実なことでもうまくいかなくなることがある、とあるからだ。それは普通『期待過剰の危うさ』を教える格言などに謳われるが、この男の場合はもっと徹底的で、『望みすぎること』が直接に、梵子的に事実に働きかけて事象を捻じ曲げてしまうことがある、と思い込んでいるようなのである。ゆえに彼は常にどんなことでも腹八分で満足するようにしていたし、悪事においてもそれで堅実な成功を収め、自分の力をもっと高尚な方面に使うようになってからも、期待感は多少薄いが、信頼置ける同志として仲間に認識されるのである。

対して、自分勝手に儲かった後の夢想話を楽しげに続ける鼠頭巨人の男も、乱暴な性質を最近ではごく自然に抑え――この前にアンタルスという名の集落に立ち寄った時に、ささやかだが心の篭った手厚いもてなしを一同が心行くまで楽しめたのは、山で道に迷った小娘を親元に送り届けた彼の功績である。彼は全く脳天気な性質で、今まで何十人を切り殺してきたかも思い出せないが、これから何人を助けていくかも、やはりはっきりと覚えはしないのだろう。彼の行く末も、その愚かさと生まれながらの性悪質に不安が残るとはいえ、彼の展開するとりとめもない雑談のように有望なものであったに違いないのに、結局、彼の人助けのカウントは１で停止することになる。

激昂で歪んだ顔をさらに酷くさせた栗犬者だけが、仲間たちに再会できた。連れはその先で、鹿でも撃とうとした位置で冷たくなっている。

「…畜生、アーシュがやられたっ…　奴等、こっちに来やがる、逃げてくれ！」

　ビスタンは表情を強張らせ、ゲンド・グラッマの言葉に反して、傷ついて倒れ掛かる彼を抱きとめて他の者に託し、自慢の武具を構える。エクスタンとは囲碁や石騙し(普通の石を使って遊ぶゲームの総称。地域によって様々)などのたわいもない遊びに熱中し、特に親しくなっていた黒猫は、しかし無表情に、騒がしい音を立てて林の奥から突進してくる武装した連中を黙って眺めている。彼はすでに、突然の悲劇に動じない強さを身に付け始めているのである。

　二人を襲ったと思われる集団は十五人ほどであったが、そのいずれもが簡易ながらただの狩とも賊とも思えぬ正式の戦闘を見越した武具と盾を持っている。近寄りながら相手の幾人かが弓を構えたので、仲間た達は反射的に動こうとするが、巨人が逞しい腕を振ってそれを制する。

「俺達が『禿鷹と屍』と知ってのことか…？！　いや、こういうときにくだならない前置きはよそう、『バンディッドハンター』。貴様、前に一度どこかで見たことがあるな」ビスタンが話し掛けると、相手の中で特に騎士のように全身を金属板で包んだ男が前に進み出て、剣を地に刺し、それに両手を持たせかける。刃には新しい血がまとわりついていて、生贄を好む土着神へと捧げられていく。彼は低くしゃがれた声で叫ぶ。

「そういう名で呼ぶのは辞めていただこう。それは下等な欲望でお前達を追う連中の呼称で、出身は変わらず、お前達を食い終わった後はそれに成り代わるという、薄汚い細菌同士のどちらか一方に過ぎない。この盾の紋章を刮目せよ。我等は偉大な国家の命で、人類の不浄な肉腫である貴様等を追い、完全に根絶やしにすることをその誇り高き職務としている兵団『鋼磨吹』。幸か不幸か、貴様等のような屑どもは減らしても減らしても増えるので、我等の誇り高いが陰鬱な仕事には失業の文字がないが…

　しかし、まさか、お前達から仕掛けてくるとはな。奇襲なら、もう少しうまくやるように部下に伝えておくんだな、ビスタン・ケイマリッチ。…ふふ、これしきで驚くな。お前達だけではなく、近隣で稼動中、失踪中の多くの目標が我が黒の帳簿に載っている。それらの名は見つけられ次第、黒く塗りつぶされていくのだ」

　騎士のような男は剣を少し持ち上げ、再び勢いをつけて地に突き刺して威勢の良い音を立てるが、ビスタンは動じない。

「ふん、分別のない子供でもあるまいし、獣を撃った流れ矢を見間違え、恐れをなして賊のように賊を慌てて襲ったのか？　姑息な口実作りなど今更必要なかろうに。そういえば、前に出会った時もそんな風に臆病さを丸出しだったよな。あの時の俺は数十人従えていたが、貴様かどうか…――すまんが、良く考えてみると、お前さんのようなちっぽけな連中はどれも同じに見えるから、本当は会ったかどうか記憶が定かではないんだが…――とにかく、貴様等のようなやつが倍以上の数で攻めてきたが、まるで本気じゃないようで、軽く討ちあっただけですっかり逃げてしまったな。ああ思い出したぞ、確かあのとき、お前に良く似た奴をかわいそうだから逃がしてやったっけ。恩を仇で返すとはまさにこのことだ」

「…！　あの時は、人員に恵まれていなかっただけのこと、私も若かった。だが、今度こそ、貴様等を討つ。捕らえるのではない、その首級を挙げることが国王直々に許されているし、それが最も確実なの

だ。貴様等に殺され、略奪された人間のことを思えば、厳しい監獄といえど、地獄以上には貴様等に相応しい場所ではない。騎士を愚弄しおって…　偉大な使命の元に集う勇敢な者達よ、あれらこそが邪悪の中の邪悪、『禿鷹と屍』だっ！　殺せ、八つ裂きにして犬に食わせろ」

敵の兵士達と遍歴の仲間達が武器を光らせて同時に動こうとした時、悠々と、その間に小柄だが無駄なく逞しい肉体を誇示するかのような――黒猫は昔からの流儀で裸であったが、猫者種は幸いなことに、毛並みさえしっかりしておけばあまり服装に頓着しなくても他種にそれほどおかしな印象を与えることはない――青年が割って入る。

彼は憤る人々に、以下のような提案を持ちかける。自分はこの賊の一員ではないが、一緒に生活してきた中で彼等にも貴殿らと同じ善の道を歩める可能性を見ているから、この争いを捨て置くことはできない。彼等の悪行による罪は、これからの行いによって必ず償わせるように責任を持つが、それでもどうしても彼等を滅ぼすというなら、自分なりの判断による善の意志を貫き、貴殿等と戦わねばならぬ。そうなれば、優秀な貴殿らの多くが、この先の森に住まういかなる邪悪な生物も恐れるであろう我が太い爪によって体内の重要な様々の器官や、致死に相当する大量の体液を皮膚の外に吐き出すことは避けられない。

これは貴殿らと賊の問題にとっては甚だ不条理なことであろうから、一つの妥協案として、自分とそちらの最も腕の立つ誰かが正々堂々とした決闘を行うことで、結末を導き出してはどうか。自分ひとりに負けるようではこの集団全部を捕らえるのはそもそも全く不可能なことであろうし、自分が負ければ、ここにいる連中は希望を失って全てが大人しく縄にかかり、お沙汰を待つだろう――話の途中で相手方はざわつき、その中心人物は黒猫の提案を一笑にふして再び攻めようとしたが、一人の、こちらもやはり甲冑に身を包んだ人間が出てきて、試しに自分がやってみよう、という。

敵の首領はその人物に一目置いているらしく、敬語を使って一歩引きはしたが、やはり、同意できない旨を表す。しかし相手は、どうせ勝利することがわかっているのに、ここで退いて全部で叩き伏せるよりは、賊どもに正しさだけでなく力でも技でもかなわないことを思い知らせて少しでも感化させ、更正の機会を与えるべきだと主張する。剣を地に刺している男は、信じられないという風に首を振る。

「これは奇異な…　更正？　死後の魂の心配をするのはこの際よしましょう、我々は彼岸や生まれ変わりを熱心に信奉しているわけでもありますまい。リバオヤ殿、まぁ、貴殿がそこまで言うなら、貴殿の凄まじい剣技を矮小な集団に味方する哀れな乞食に見せてやってもいいでしょう。いや、貴方の仰ることは…　そうですか、それなら…　いえ、全てお任せいたしましょう。貴殿の更正力は、この素朴な過ちを物語る猫にだけ限定されているのですね」

彼は一人合点したようであったが、進み出た方は密かに、相手の言い分を全く聞かない強引なやり方に賛同しかねて首を軽く振り、首領が勘違いであろうとも自分の無理ある意見に従ってくれたことを良しとする。

リバオヤという騎士の顔は頬や首まで隠した重厚な兜で見えないが、その目は切れ長で、美麗な印象を与える。ピサは最初、相手が代わったことを何とも思っていなかったが、彼の構えを見て毛が逆立つ

ような印象を本能的に感じ、目を輝かせ、皮膚が熱してくるのを感じる。瘤取者も勘の鋭いピサの様子を見て、この少し細身の相手が、体格からは想像できない、油断のならない相手であることを悟る。そうやって良く見ると、確かに相手の構えはこの地方に伝わる剣法の正当流派のかなり上位を会得しているように思われ、自己流の意外性はあるが基本の技術に疎い彼やその小さな友人が正統派に対して不利な位置付けにある可能性は否定できないから、彼はピサ以上に緊張し、拳を握り締める。

彼らの攻防は凄まじく、力対技であったビスタンとの一騎撃ちとは全く違い、激しい打ち合いの応酬となる。とはいえ、ピサは傍目には圧倒的に不利であり、仲間からは目を被いたくなるように見える。彼の爪は揮えば鉄をも切り裂くほどであるが、あの時と同様、あくまで素手なのであまり激しい攻撃を受けられない。全ては紙一重に回避しているが、風に舞い上がる彼の毛が切れて、黒い気圧がその周りに漂うかのように錯覚させる。

相手は全く容赦せず、執拗に無駄のない剣戟を繰出し続け、ピサを脅かす。騎士は心の中で、いろいろの雑念を払えずに、ほとんど必死になってそうしている。――動いているからだけではない汗を激しくかいている、このことを甲冑によって誰にも悟られないことは幸いだ。武装のない相手にそんなに本気で掛かって、と、味方であろうと、笑いたい奴は笑えば良い。しかし最初に、私がこの男と戦ってみたいと惹かれたことは、決してその見る目を疑わせるものではなかった。もし私が隙なく打ち込まなければ、どのように自分の防具が厚かろうと、僅かの隙間を抜けて敵の武器が我が急所となる部位に突き刺さることになろう。それがすぐに肌でわかるほどに相手の狙いは正確無比で、それゆえに、こちらは攻撃の決め手を欠いている。それに、この本能的な、型に嵌らない異様な運動性能は？　まるでこちらの攻撃を全て予測しているかのようだ。

そうであるともそうでないとも言えるのであろう。こいつは、私が出遭ったことのない、恐らく極めて特異なタイプの戦士であり、全てが未知数で、はっきりいえることは恐ろしく強いということのみ。今のうちに、一気に潰してしまわねばならぬ。そうでなければ、我が手勢がいかに百戦錬磨といえど、彼一人に殺戮されても全く不思議ではない――

気合一閃、細身の騎士が目にもとまらぬ鋭い衝きを放つ。それは大技であり、温存されてきた必殺の一撃であったが、ピサを仮にも天才と見立てたのならなおさら、そういう挙動に出るべきではなかったのだろう。黒猫もまた、命をいつ失ってもおかしくない状況の中で、相手が自分の基本を崩す一瞬を、たったのそれだけを冷静に、本能的に狙っていたのだから。ピサの胸元に赤い筋が走る。すれ違い様、彼の左手が相手の濃い紫色の胸当ての上に襲い掛かり、首巻板を弾き飛ばす。騎士に後悔の色が浮かぶと同時に、低く鋭い呻き声があがる。敵の兜が中身を見捨てて宙を舞い、ピサは右手で肩を抑え、相手の足元にうずくまる。

「殺れいっ！　屑どもに負けるわけにはいかぬ、我等の勇士が襲われたぞ！　何をしている、敵の頭部を叩き潰し、細菌どもを殲滅しろ」

『鋼磨吹』の統率者は機械構造の弓を構えて激しい身振りでわめき、兵士達が走り出す。ビスタンは黒猫に駆け寄って、出血を酷くしないために彼の肩に刺さった矢を敢えて引き抜かず、助け起こして退

がらせる。瘤取者の巨大な体に比してあまりにも小さな瞳はこれ以上ないほどの怒りに燃え立っている。「てめぇら…　男の戦いがルール通りの甘いものではないことは認めようが、ピサを…！　構わん、者ども、存分に暴れろ。俺達の仲間が殺され、今また傷つけられた恨みを抑えておく必要はねぇんだ！」

黒猫は肩で息をし、突き刺さる鏃に、森でその素材となるものに慣れ親しんだような、あまり良くない毒が塗ってあることに気が付いているので、仲間達を止めたかったが、毒の廻りを遅くするために身動きすらできない。下手なことをして格好をつけて、足手まといにはなりたくないからだ。しかし、彼の思ったとおり、戦った相手の騎士は立派な意志をもつ青年のようであり、必死に戦いを止めるように叫び、仲間を抑え、敵味方の剣を同時に防ぐことを余儀なくされている。…青年？　黒猫ははっとする。

ピサが相手を一撃で屠ろうとしたときにその本能に理性が打ち勝ち、擦れ擦れのところで攻撃の角度を真上に変えたために顎の部分から兜が跳ね上げられた――矢は、その瞬間に騎士が殺されると思った敵の一人から放たれたらしい――のだが、頭部に毛の代わりに美しい紋様が描かれているこの指者種の戦士は、何と、女性だったのである。その声も、凛と響きはするが心地よい鳥の囀りのようにも聞こえるから、今までの会話は随分無理をしてドスを効かせていたようである。ピサは彼女が涙ぐんで、というよりすっかり泣き叫んでいるのも見てとったが、それに同情するよりも、このような戦場で女子供もないから、特にあのように戦える立派な戦士としては、咎めたい気持ちにかられる。もちろん、現状の重要な問題を据え置くような彼の思考は毒によって判断能力が落ち始めているから生まれたのであり、その眼は空ろになりはじめている。彼は頭を振って気を確かにしようとする。

そうこうしているうちに、決着がごく簡単に、予想通りの仕方でついていくのを彼は三流のチャンバラ劇か何かのように眺める。――あいつを、あの巨人を怒らせてしまってはならなかったのに――味方は一人も失われず、敵はすでに数人が、地巨神の生まれ変わりのような男の棍棒の餌食となり、体が不思議な彫刻のようにひしゃげてしまっている。

女騎士の説得がビスタンに通じ、ピサを心配する彼もこれ以上無駄な時間を使いたくなかったので、山賊の親分もそれを追う者の首領もお互いに捨て台詞を吐いて、その場を去る。負傷者を近くの村に連れて行こうとする仲間に、ピサは、急いで出生の森に戻ってくれるように頼み、毒草は転じて最高の毒消しにもなることを教えるが、それは、すでにそこから遥かに遠いところまで移動してきた彼等を困らせただけである。

ビスタン・ケイマリッチは、ピサが支離滅裂なことを言うようになっているのに焦り、毒消しの方法を自分が学んでいなかったことを激しく後悔する。とにかく村に連れて行こう、粗末な集落に期待するのはかなり絶望的ではあるが、そこに一縷の望みを賭けるしかない、と考え、患者を担いで必死に走る。だが、半根土も行かないうちにそれを阻もうとする者が現れ、瘤取者は激しい口調で威嚇する。相手はそれに怯まず、ゆっくりと近寄ってくる。

「その毒は容易には消えないよ。あいつ、ヨルコン鷹捷兵団から外されたあの国家権力の狂信者、クリニコマイチは、大よそ唱えている大それた正義とは反比例するような戦法を使うんでね…　こいつを使うが良い、俺は、あいつの毒にやられた見所のあるものを密かに助けるために、いつも数種の薬草を持

ち歩いているのだ。警戒している暇はない、早くしないと命は助かっても後遺症が残る」

それを聞いて、相手を睨みつけて動かなかったビスタンも急いでその薬品を傷に宛がい、後は女騎士のするように任せる。彼女は連れてきた数人の仲間に水を持たせ、定期的に頭や患部を冷やすようにし、しばらくしてから所定の薬を飲ませ、落ち着くまで安静にしておくよう伝える。ビスタンは彼女の献身的な様子と先ほどの戦い振りから、この人物があのような粗暴な連中とは違う人種であることは理解したものの、やはり仲間を一人殺した者達の一味であるから好きになれず、彼女に簡単に礼を言い、無言で立ち去るように仕向けようとする。しかし、彼女がそれに気づかないようなので、ついに、落ち着いて眠りにつく青年の傍に傅く騎士に、はっきりと退去するように告げる。

騎士は立ち上がり、その美しい切れ長の目を逞しい瘤取者に差し向け、意図せず、彼をわけのわからない衝撃に追いやる。『純粋な魂をその目に映しているかのような女だ…』と彼は思い、ピサに会ってから感じたよりも狭く、より甘美な、経験したことのない感情に心をゆすぶられるのを感じる。彼女はもはや男の振りをしなかったが、美しい声に似つかわしくない男の口調でここに残りたい旨を、控えめではあるがはっきりと示す。

「私の生まれた台地や山地の合間にある村々は常に賊や邪悪な生物の脅威に怯えなければならなかったので、女子供も武装することが当然の義務となっている。この私はその中でも群を抜き、そのうち、男であろうと山の怪物であろうと私にはかなわないことがわかった。私は同志とともに国に見捨てられがちな辺境の地を守ることに喜びを見出し、そのうち、ヨルコンの国境警備団に入った。そして、より多くの悪を撃滅してきたが、それも国家が怠慢を隠すための散漫な対処療法であることがわかり、公僕の構成員も多くがその流れに乗っていたから、私は絶望しはじめた。しかし、村の期待を受けて旅立った手前、今更気に入らないからといって職務の勲章を放棄するわけにもいかない…　――巡回中、各村で風変わりな一団の噂を聞き、彼等のほとんど無意識に成されたような善行やその好もしい性質の数々を知り、私はどこかに知られざる同志がいるものだということに心を楽しませたが、あの男は、噂から自分の恨みを晴らす絶好の機会を得たと思ったらしい。

だが、おかげで貴殿方に会えたことには、先ほど、永遠の意味で別れを告げてきたクリニコマイチにも礼を言わねばならないかもしれない。貴殿方は、特に目標はないと村の者に話したらしいが、本当は何か目的があるのでしょう。世の中を憂い、祈るのではなく、自らがその希望の光とならんという志が、貴殿方がいかに隠そうとしても滲み出ているのが私には見える。無理を承知で、この私と我が同志達を共に連れて行っていただけるようにお願いしたい。私もまた寄る辺を失ったが、貴殿方にそうさせるだけの価値を見とったのだから悔いはない」

彼女は言葉を切って真直ぐに、しかし身長差でどうしても見上げるというより上目使いとなり、激しい初恋に心を揺さぶられる男の心境を一層にかき乱す。彼は眼を背け、それができない旨を告げ、自分たちはただどこに行くかもわからないならず者に過ぎず、その点では君の仲たがいした友人の方が詳しいし、今ならまだ、貴殿ほどの腕を国家は見捨てまい、と、内心に反した返答をする。彼女はしつこく食い下がるが、瘤取者は煩そうにして、終いには跳ね飛ばしてしまいそうな勢いだったので、美しい騎

士は巨体の男の胸を締め付けるような悲しみの表情で、切れ長の目を僅かに伏せ、諦めようとする。

少し前から目を覚ましてやり取りを聞いていたピサは、体を起こさないままで、彼女の申し出を受けるように説得に加わる。彼は細かい心情の機微には疎いようでいて、その勘の鋭さから、友人の、自身でもどのように処理してよいかわからない複雑な心境に勘付いている。いずれ自分は大国を見たいと願っているが、その時彼女等はきっと素晴らしい道案内人になるだろう、それに、去るもの追わずと同時に、自分は来る者も拒まぬのが信条だ、などと黒猫に言われ、有難い理由を与えられた大男は、お前がそれほど言うなら仕方がないと悪態やらを呟きながらそれ以上否定しなくなる。彼女は大喜びし、すぐに、付近で待機していた同志数人を連れてくる。彼等の多くは自由な遍歴者達の可能性にひかれたというより、あまり俸禄の良くない職務に嫌気が差したり、密かに統率者の女に惚れこんでいたりするようであることが、その夜のささやかな宴会の様子から推察される。

全く尋常ならざる早さの復帰を果たしたピサは、酒には手をつけなくとも一座で最も陽気に振るまい、古い仲間の幾人かに、新しい仲間の誰かが、武装を外して本当に美しい肢体を隠すことのできなくなった女を、酔うごとに熱っぽく眺めているのを密かに指摘して興じる。黒猫は巨体の友人にも目をやったが、彼はほとんど女には注意を払っていないようで、かえって、意識していることが感じられる。賊出身者の幾人かも、男勝りに杯を開ける、豪胆さと女性らしさを両立させた彼女にすっかり骨抜きにされそうになっている。

また、楽しむ仲間達は目の前の盛り土にも酒を惜しみなく注ぎ、返ってこない冗談で笑いかけ、脳天気だった男に相応しい陽気な別れを演出する。最後に、地神を信奉する女騎士の提案で長い黙祷が捧げられたのだが、ピサは、不謹慎な悪戯心でそっと目を開け、盛り土に鼠顔が、黒猫の企みを喜んで腹を抱えているのを見て、近くの小石をそっと集めて墓の前に並べる。「アーシュ、これで、あの世でも暇にはならねぇゼ。あばよ…！」

新しい仲間も古い仲間も、意図せずに一座の空気の中心となっているピサの気兼ねない性質の影響であっという間にその区別がなくなり、酒瓶を転がしたままでいびきをかいている。ようやく、楽しむ人々の興を削がずにまだ酷く痛む肩を気にすることができるようになったピサは、低く唸りながら、患部をさする。

「まだ傷むの。…ごめんね…」

全員が寝入ったと思ったので油断していた黒猫は、いつのまにか指者の女が彼の隣に来ていたので心底驚き、自分が彼女を起こしてしまったのだろうと謝る。彼女は首を振って否定し、ピサの間近に寝転びながら彼と頭の位置を合わせるようにもぞもぞ近づき、その眼に釘付けになっている。だが、自分のことにはてんで疎い黒猫はそういう相手の昂ぶる感情を全く推し量らず、痛みと眠気に任せ、ぼんやりと彼女を見つめ返している。彼女もまた、酒を飲んでいて少々大胆にはなっていたが、もともと大変に誇り高く、あまり男性を重要視しない男勝りの性質だっただけに、ビスタン同様、自分の中に湧き上がった強い憧れをどのように扱ったらよいか判断しかねている。

「あんた、私を殺せたのに…　あんなに踏み込んだところから思いとどまれるなんて、普通じゃない。

どういうことなの、…本当はそれが知りたくて、私、職務を捨てたんだ」彼女は喋ってみて、自分が思った以上に酔っていることに気が付く。だが、どちらにしても自分の中の葛藤をうまく話すことなどできそうにもないから同じようなことだろうとも思い、黙って返事を待つ。

「どういうことって？　よくわからないけど、あそこに小さな石があっただろ、あれが致命的だった。躓かないように、戦う前によく地形を見ておけとラスに、あいつが兵法の教科書の素晴らしさとやらを語って聞かせるときに聞いたが…」

「ちゃかさないで。女だと思って甘く見てるんでしょうけどね、次やったらきっと負けない。だって、あなたの武器を繰り出す仕方は、子供が散らばる石を目標もなく投げつけるようで、あんなんじゃ、本当の戦場では長生きできないんだから」

「そうなんだ…？　いや、ラス、俺はお前の説教はもうまっぴらごめんだ。大体、どこ行きやがった、俺を…　いや、ラス？　違うだろ、君は、イグ。イグの出身はどこだっけ、俺は森の生まれで、ラスってのは、失礼、俺の弟なんだ」

「ちょっと、寝てるの？　私はイム。イム・リバオヤ。いい？　もう間違えないでよ、騎士の名前を忘れるなんて、馬鹿にしてる。それに、私のことなんかどうだっていい。聞きたいのはあんたのこと。まだあんた達のことが良くわからないけど、多分、どう見てもあんたが皆の核になってることは明確だ。一体、どこにいこうとしてるの？　何かあるんでしょ、どうか教えてよ。何か手伝いができるかもしれないじゃない」

　ピサの素朴そうで複雑な、悪戯っぽくて真面目な瞳は、あまり重要視しなくなり始めていた夢の少女に突然差し向けられたため、急に目が覚めたように見開く。その目の輝きは弟のそれのように万人受けする美麗なものではなかったが、どこかに特定の人間を深くひきつけるような性質があり、例えばイムはそれに、彼に負けた時にその鋭い眼光に心を射ぬかれたとき、いや、もうその姿を見た時からほとんど電撃的に、永久に心を結び付けられてしまっている。

「な、何…　言いたくないっていうなら、別にいいけど。これから一緒に旅するんだから、知っておいても損はないと思うし」

「…他のみんなはそれぞれの目的があって、たまたま一緒に行動しているに過ぎないけど、…俺は、ある人を探しているんだ。逢ったこともなければ、名すら知らない。本当にいるかもわからないがね」

「何、それ…　どんな人なの」涼しい夜だったが、イムは胸の動悸でうっすらと全身に汗をかいているような気がしてくる。ピサは彼女から目を外し、梵子世界のプラネタリウムそのものである天空を正面に廻す。そこに浮かぶ星を、森ではほとんど見ることができない秘密であったそれを、弟もきっと存分に観ていることだろう、と彼は考え、そうやって宝物を貪ることは幸福に直結しないという、書物が教える格言――彼はラスのようにはあれこれと勉強しなかったが、短い文章と馴染みの言語で書かれた未完成の箴言集だけはほんの数行で暇な時に読み切れてしまうので、その多くを、著者が自分の父親だとも知らずに読破している――を思い出す。言うまでもなく、弟の見ている天空が今全く違うものであることを彼が知る由もないが、天空の真意からすればやはり黒猫の感じたとおり、それは同じことなのか

もしれない。

それから、ピサの長話が、忘れられた昔話のようにたどたどしく続く。幻惑されそうな話を聞かされた方はすっかり面食らってしまったことを表情から隠せなかったので、わかり難い話をわかりやすくするために下手な脚色を加えていた話し手もすっかり恥かしくなり、また、自分の喋っていることの真実性に多分に疑いを持ち始めたので途中で話の輿を折り、冗談に混ぜ合わせていく。

それはたかだかできそこないの恋愛歌でしかないと同時に、誰しもが一度ならず遭遇する人生の大事でもあり、その結末に関係なく体験の過程そのものに運命を賭けることが許されるように本人には思われるのだが、いかなる場合でも、状況を共感できない他人には決してその話をしてはならない。その人の愛が純粋で、肉の定められた病から生じる要素から奇妙なほどに分離している場合、もしくは分離しようと悪戦苦闘している場合は、すでに状況は高度に救いようもなく抽象化しており、その人を中心に相手も世界も一舞台を形成するようになっている。しかしその劇は常に例外なく神々のためだけに催されるのであり、従って舞台裏の小道具に過ぎない個々人にその台本の全てを理解させることは難しく、辛く甘美な役目を負わされている中心人物は話の本筋を他人に伝えて気を楽にするどころか、ひどい無理解にあって自分の道を踏み誤ってしまう危険性がある。それでも一般的には、結果の成否はともかくとしても、そのような夢想の恋の破綻が人を強くしたりもするのであるから、全てを悪いとは言い切れぬのであるが。

さて、今の場合、彼の話を拒絶した聞き手は、現実的な生活と本能的欲望にすがりついていないものの全てを脆弱と見なし、その幻想の中にある真の高貴性から来る純愛を感じとれない俗人的性分とは正反対で、彼の話を驚くほど正確に理解したからこそ、悪い予感が的中したように感じたのである。彼女は我に返ると慌てて、手を振って寝入ろうとする黒猫を揺すったが、早くもいびきが返事となってしまう。イムは次の日に詩文を書く癖のある仲間――リチャルド・ワイナンという名の不定形種――に気になっていることを、相手にその根底に何があるのか悟られぬように何気なく聞いて、『夢の中の出来事とはこの世の精神世界と密接に繋がっているだけでなく、より高次の、全く別の世界、もしくは平行運命における現実にも繋がっていて、それを体験することもある』といった知識を得、特に、猫族ではそのような思想が昔から強く根付いている、ということを知ってすっかり驚いてしまう。

女騎士はそれから何日も惚れた相手と過ごすうちに、初期の激情の苦しい波を押さえつけて平常の分別を得ることに成功し、彼に程よく距離を取りながら、無理せずに少しずつ『夢』の話を聞き出していく。元国境警備兵の一人がその会話を小耳にはさみ、噂の『お姫さん』が文字通り、亡国の王女のことではなかろうか、という推察を導き出す。すでにその事実を別の観点から見てきたのだからその答えの正否判定については言うまでもないのだが、彼はそれを明察な知恵で得たのではなく、単に、夢見の現実性を信じず、それを否定するために『現実ですでに出会っている・説』を持ち出し、『他国訪問をした（かもしれない）猫の姫』を想像したのである。猫者の王族といえばビルドモンソ地内が容易に連想されたから、彼が偶然にも正答にぶつかったのはあまり驚くにはあたらない。そしてもちろん、一同の中にこれが正答であるかどうかの評価を下せる者などいないのだから、すぐにその意見をゴール付近か

ら遠ざからせてしまう。大きな弓を自慢とする元鋼魔吹の仲間が首を振る。

「地内に住まう妖精のような猫族の王国なんぞは、もう昔々のお話さ。僕は士官学校で習ったことを今でもその授業を昨日受けたかのように思い出すことができる。あの、努力を嫌う高慢ちきな…　おっとピサ君、どんな種族にも例外があるし、君を優れた意味においてそのようなカテゴリに入れない者がいるとしたら、それは本当に杓子定規の考え方しかできない愚者だということも付け加えねばならないが…」恐らく出来の悪い教師の口調を誇らしく思い出しているのであろう、平民らしい思い上がりから生じる回りくどさをピサは面白がって笑い、気にせず先に進むように促す。

「は、は、は…　俺も、自分と同じ種類の人間をそれほど多く見たことがないけど、別にそのような出会いを格別に焦がれたりはしないよ」

「君はそうあるべきですよ、御大将」知識はそこそこあるが考えの浅い男は、偶然にも、黒猫の弟が別の場所で仲間につけられている呼称を聞き手にも使っている。「彼等は衰退の一途を辿りました。初期は仙猫と呼ばれる、彼等に似たる容貌を持つ猛獣すら飼い犬同然とみなすほどの恐るべき力を持った突然変異種の集まりが、大陸全土の全種族を支配していた時すらあったのです。その時、猫族もメジャーな地位にあったに違いありません。

　しかし、優れた支配者達が諸説ある理由で歴史の舞台裏に隠れてしまい、もともと『適当さ』を第一の特性とする彼等は、国家の繁栄にぜひとも必要な努力、団結、勇気、英知、そのいずれをも持ちながらもどれにも決め手にかけ、懸命でなかったために努力で力強い欲望を実現していく勢力に押しやられていきます。それでも、自分たちを『最も大地に愛される種族』として考えるような誇りだけは捨てられず、他種族から優れた部分を取り入れることもせず、洞窟の中に押しやられるようにその安住の地を見出します。しかしながら――」彼はここで一瞬黒猫を見やり、彼が目を輝かして自分の話し振りに聞き入っていることに満足する。しかしピサのほうでは、話し手が父親のようなことを、舞台背景の解説付きで喋ってくれることに興味を抱いているに過ぎない。

「地内にはすでに多くの先住民族があり、地上を制圧した者達も地内の権益を追い求めておりましたから、猫族は板ばさみとなり、結局はこの狭い逃げ道のない場所に追い詰められたところで持ち前の好い加減さを発揮し、種族と民族のアイデンティティを捨てて他の国家に混じり、その構成要員として落ち着くことになりました。僅かな期間にできた地内の猫族の王家や部族の名残が、ある国に…　とある国にですね、取って代わりましたが、それも、つい最近に滅びて、すっかり消えてなくなってしまったのです」

「ア・ルプ・パンチノだろ。でも、噂によるとその血族はロンムーチョントとかいう小国の王家にかくまわれたとかいうじゃないか。…そうだ、そうだ、ピサ君！　僕の推察はきっと君を喜ばせられるだろう」近年の事情通でもあるリチャルドが、先ほどまで全員の関心をひきつけて得意になっていた男の思い出せなかった詳細にフォローを入れ、彼からその地位を奪ってしまう。

「もし君が、同種族の高貴な美人に誌的な意味で憧れを抱いているというなら、僕は自分の趣味からもそういう考えに強い賛同を示さざるを得ないのだが…、その場合、君は、君の高次元における網膜に焼

きついた像と、ロンムーチョントの王女、すなわち、僕の考えからすれば猫族の亡国の末裔とを一度は重ねてみることも、決して無駄ではないはずなんだ。君程の男に並べても遜色のないかなり美しい娘らしいから、もしそれが不一致を起こす結果となっても、決して君は悪く思わないはずだ」

ここで話の主導権は、一行の主要人物の一人に然るべくして数え上げられている女性に渡る。

「いずれにしても、この議論ではロンムーチョントもとっくに滅びているのを忘れないようにしないといけないな。しかし、こういうロマンスを夢見れるなんて、あんたってのは本当におめでたい青少年さ、まったくうらやましいもんだ」

彼女は暗い気分を皮肉に変換するが、黒猫が控えめに、考え深そうに目を伏せて肩をすくめたので、たちまちに恥じ入り、動乱に関係する社会事情をよく観察している者として、知っている限りの情報を披露する。すでに地内の多くが地上の国家によって制圧されているが、中にはまだ反抗しているものもあり、その中に猫族も混じっていることが確かであること。リチャルド・ワイナンの提示した小さな部族やロンムーチョントを滅ぼしたのはゴルフィ共和国であること――引き合いに出された騎士の友人が再び、補足説明を許されるならば、と切り出す。夫婦愛に恵まれていたにも関わらず、ロンムーチョント王家は子供が出来なくて困っていたので、天からの授かりもののように拾った高貴な一族の幼子と、その一族の運命に深く同情し、公には『種族間婚姻の儀(当時は珍しかったが、中世代には『授子の儀』として定着、世界人種共存構想の主柱となる。ある仙猫が広めた思想が元だといわれる)を経た実子として』彼女を引き取ったらしい。そのことを契機に同国は、同盟国との仲がおかしくなってしまったことだけは間違いない――

黒猫を最重要の友人として一行の誰しもが感じるようになっていたので、等閑にされてきた彼の目的が新しい仲間によって根掘り葉堀されるうちに、それは皆の問題として考えるべきだと、当たり前のように認識されるようになっている。単純な人間はこういう実益に関わらないことに夢中になれる才能をもった者についていくことでその影響を受け、自分もより高次の意義を感得できるようになりたいと本能的に願うものらしいが、それだけではなく、遍歴の一行の誰もが一段と成長した人間性でもって本当に気の良い仲間として結合し、取り急ぎ共通の団体目標を掲げようと欲した結果でもあるのだろう。こうして当面の関心時に心を奪われた結果、賊や反賊の血は救いようもなく薄まって、何の団体なのかますますわからなくなってしまっている。

すでに山賊の旗はかつての家代わりの洞窟に置いてきぼりであるが、『禿鷹と屍』の小さな紋章は彼等の薄汚れたシャツの染みの一つに混じっているし、イム・リバオヤの仲間もかつての所属の腕章などをそのままつけている。つまり、今のところ、各人が自由な意志で、旧来の個々人のスタンスを崩さないまま、傍目にはあまりにもバランスの悪い形で、しかし、実際にはこれ以上ないというほどに強く、不安なく手を結んでいる。この不思議な状態を保っているのは、一同の一人として空気のように溶け込んでいる黒猫の特殊な人格的素養の影響であることはもはや再三に述べてきたことだが、当の青年は、もしかしたら夢に見た少女に思いもかけずに早く逢えるかもしれないことを幸運に思うと同時に、それがもたらすかもしれない不幸をも予測し、胸中を暗くしたりしている。

時折物思いに沈む彼を、イムが姉のように励ます。彼女は友情を超えた思いやりから彼を一時的に元

気にすることに執心し、その見返りとして彼の目の輝きを堪能するが、一方では自分の行為に対して反抗的に湧き上がる想いの苦さを噛み殺さなくてはならない。多くの恋愛関係で生じる、ある種の小さな残酷さがここでも存分に働いていて、ピサ自身は女騎士のご高説を有難いような煩いような、身内の干渉といった程度にしか感じていない。

他方では、女騎士が自分の男勝りのプライドで、友情の中に覆い隠そうとしていた想いが幾人かの勘の良い者達にいつしか見破られてしまったことも、別段違和感なく許容できよう。例えば黒猫の友人としては新参者に負けるわけには行かないといった立場の大男もその一人であったが、彼は当の昔に持ち前のどっしりとした精神で一瞬湧き上がった情熱を押さえつけてしまっているので、自分の思いも含め、一般人の中に存在する飛びぬけて優れた性質の男女を中心とした感情の押し合いへしあいに、大人びた客観的眼差しを向けるだけに留めている。ヒルスポスという名の元山賊の一人などは考え無しに彼女に直接そのことを指摘し、図星を突いたがゆえに極めて激しい反抗的否定を食らってしまった。彼は単にからかい半分で好きな女と話をする口実を得たかっただけなのに、その後しばらく彼女にまともに口を聞いてもらえなくなるという悲惨な状況に陥ってしまう。

彼の探りを入れる言葉は否定されたのだから、当面、安心させてくれる返答であったことは間違いない――などと考えるほどに皆は愚かではなかったので、この件を聞いた多くの者が指者の美女の気持ちに気づいてしまい、周囲の井戸端会議的な様々のちっぽけな羨望や憶測が生まれ、仲間たちがこの集団に共通させる話題の一つとして定着していく。…さて、そんなこんなである。彼等がゆっくりと軌道修正して潜り始めている地内では、ぼんやりとした青い眼差しの奥にいかなる賢者も舌を捲くほどの知性と知識を詰め込んでいる灰色の雉猫が、大規模の使命と戦いを、幾多の血を流す同胞、敵の中に見出しているなどとは露知らぬまでも。

実際、いずれ黒猫達が運命の手によって地内に向かわねばならなかったのだとしたら、新しい仲間に出会ったことはその最短の道筋を提示してくれる意味でも本当に意義深いことであったに違いない。一度当面の目標が決まると、彼等は直接ヨルコンの主要な洞窟に行かず、辺境の地理に詳しいイム達の先導でさらに辺境の外へと踏み入り、後世で『足穴台地』等と呼ばれる名もない危険な生物の住まう一帯にまで入り込む。そこにはたくさんの地内へ繋がる洞窟があった(後の大地震で地形が変化したため、現在は存在しない)からである。

彼等はすでに、長期間移動しつづけることをいかに過酷にせず、やり抜くかという点においてはどんな踏破家(当時は存在しないが、現代世界において、冒険活動を生業とする数人の集団のこと。社会の歯車として繰り返す人生ではなく、常に自分なりの目標を新しく決め、達成していく型の生き方そのものを示すこともある)よりも経験豊富であったので、驚くほどの速さで、第三層で未だに細々と権益を守りつづけている国家に辿りつき、熱烈に迎えられる。イム・リバオヤの名が、名剣師として知れ渡っていたからである。

街につくと、まずイムの提案で、嫌がる黒猫に鎧やら盾やらが支給される。そして、皆の前にしぶしぶとお披露目に来た彼を見て、一同の誰もが言葉を失う。そこにいたのは、ただの立派な騎士であるというにはあまりにも言葉が小さすぎる、小柄にも関わらず威風堂々とした一人の神々しいばかりの勇士であった。その様子は、もはや小さな悪戯小僧の印象を漂わせず、後の神聖皇帝の姿を予感さえさせる――もちろんそれは、歴史を先回りする未来からの偏見に過ぎないのではあるが――ピサは城の者が驚

いたほどに軽々と重い武装を着こなしていくため、彼等は試しに、というより、小さな猫男などに装備を支給するという国家の思い誤りを皮肉ろうとして、最も重量のある、礼装用の装飾黄金鎧を冗談半分に着せてみたのである。

だが、ピサの筋力はそれをもってようやく落ち着いた様子を見せるだけで、鎧の方は真の主を見つけたと喜んでいるかのように輝きを一層に増す。その姿は誰しもの目を引くが、その内実は先ほどの描写を全く裏切っていつもの黒坊主そのものであるから、彼はたちまちエッセヴァリナ王国第一の都市であるランカス・ヒルンの城下町の人気者になり、ビスタンもイムも、仲間の誰もがそれを誇らしく眺める。

彼等は程なくして王の前に呼ばれ、義勇兵として軍団に組み込まれると共に、中でも明らかに優れた力を持ったピサ、ビスタン・ケイマリッチ、イム・リバオヤ――ピサやビスタンの実力は女騎士が実証を持って責任を持ったし、疑い深い人々のために催された腕試しなど、彼等は何の障害もなくパスしてしまったことは詳述するまでもない――は幾つかの部隊を与えられる。

当面定住する職務を見出した遍歴の仲間たちは主導者達に感謝し、新しい環境に溶け込んでいく。だが、一部の優れた者達は面白みのある黒猫や自然消滅してしまった家族のような集団のかつての親分、美しく誇り高い女騎士への愛着を捨てられず、彼等は職務の傍らで度々会い、お互いの近況を報告しあったりする。一部隊の正式な指揮官となった三人は幾度か散漫な攻撃を仕掛けてくる地上軍に対して凄まじい武勇を示したので、敵は怯えてしばらく攻めてこなくなり、王は益々彼等を気に入り、長引く戦争の消耗を物語る慎ましい食卓に呼ぶことも多くなる。

その中で、一兵士が第四層で起きた小さな反乱の詳細を報告したことがあったが、黒猫はすぐにその指揮官が自らの弟であることを直感し、王にその軍を助けに行くことを提案する。しかし、第四層の絶望的な状況を知っているハンザツムフワンク王は、その願いを遠まわしに断る。彼の国は第四層を必死に支援したにもかかわらず、当のいくつかの国が消極的な戦闘しか示さなかったために、今上下から挟撃される憂き目にあっていることを指摘し、国民のためにも冷静に取り急ぎ防がねばならない相手を見定めねばならぬと主張したので、ピサ達はそれ以上何も言えなくなる。

いよいよ夢の預言の通りに間近に迫ってきたロンムーチョントの王女のことなどはもはやピサの脳裏から消し去られている。突然の失踪から、寂しさと反抗心から意識に昇らせないようにしてきただけで、どんな親友よりも大事な幼馴染でもある弟のことを兄はいつも胸の中で気に掛けていた。それが、兄弟の運命的絆に導かれて彼の前に再び現れてきて、その思考を全て支配してしまったかのようである。彼にとって、弟は本当に掛け替えのない存在であったのだ。例え、弟が彼のことをどう思っていようと――

黒猫はそれから幾晩も弟の夢を、弟の夢だけを見るようになる。雉猫と遊んだ森の日々、彼の笑い声、聡明で大人しい弟を苛めたこと、弟が反抗してきたことに非常な驚きを感じ、互いの関係が次第に対等の、好ましいものに変わっていった経過。灰色の猫の美しい毛並みを舐めてやったこと、弟の極めて繊細で技巧的な慰めの毛繕いによって、父に叩きのめされた後でも天にも上るような気持ちになることができたこと。弟との訓練的な喧嘩の数々、目論んだ悪戯の楽しさ、自分の愚かさのせいで雉猫も一緒に

父親に殴られたこと、その後、彼が苦笑いして兄の素行に肩をすくめたこと…――俺は、あいつに嫌われたのかもしれない。俺は、愚かな兄だった。あいつは優秀だった。俺の誇りだった。今でもそれは変わらず、あの頃以上に、強くそう思われる。あいつはきっと、どこかで俺の助けを待っている…！

行かねばならない、例え独りでも、と瘤取者が友人に聞かされたとき、彼は似たような言葉を病床から起き上がった時に聞かされたのと同じくらいに嬉しく感じる。意義深い正義の名の下に戦っているにもかかわらず、どうもしっくりこない感覚に悩まされていたビスタン・ケイマリッチは、黒猫が自己判断で再び動き出したことを喜んだのだ。彼等は部隊を去る決意を鈍らせる説得を誰からも受けないように、イム・リバオヤにだけ伝える。彼女は大変に驚き、それほど性急に動かねばならぬのなら、自分の口から王に頼み、それでもだめなら自分もついていくことを約束する。しかし、旅立つ男達はそれを断る。

「イム、俺達は今すぐに出て行くし、君は、ここでがんばらねばならない。この物好きな大男はともかくとしても――俺達のやろうとしていることは非常な危険が伴うし、意義のあることかどうかはわからないのだから。

今までありがとう。君があのとき、薬草を持ってきてくれなかったなら俺は間違いなく、こんなところに立ってはいなかったんだからね。…なんだ、泣いているのか？　冗談じゃないぞ、あの時も思ったんだが、君って人は、強いのに時として泣きすぎるじゃないか。まったく…　いや、そういうところが、君の魅力なんだ。俺はそういう君が大好きだよ。きっとまた逢えるんだから、それまでどうか戦いの傷を受けぬように」

何の気なしに言ったのであろう青年の言葉が、若い女の心を鋭く射抜いたかのようである。彼女は頭が朦朧とし、震える体を押さえつけようとして右腕の肘に左指を絡め、感情を整理する。

「あんたね…　いい、あんたみたいな鈍感な奴なんか、行けばいい。でも、これだけは覚えといて。前にみんなで王女様のことを話してたときに感じたことなんだけど、あんたは自分の種族に対する誇りを持たなすぎだ。『適当』とか『好い加減』。この言葉、普通は悪い意味に使われるけど、それは、本来『中庸』をも意味するはず。猫族が世を統べていた時、人々はあんた達の主要一族に押さえつけられたのではなく、あんた達に混じって、どの種族も分け隔てなく平和を満喫していたんですって。だからこそ、平和呆けしてしまった愚か者やそれを利用した悪事が蔓延するようになっていったんでしょうけど。

…でも、腐敗した現代社会は、『努力で達成する』種族とやらが、つまり私達が、築いてきたことは否定できない。私には、今必要とされていることが、あんたを見ているとわかってくる気がして…　何て、言ったら良いのかわからない、でも…」

「わかってる、適当に、やるさ。そして生きて帰ってくる。君の提案で嫌々ながらも鎧やら武器やらを身につけたけど、おかげで君と一戦交えた時のような、やばい状況に陥る憂き目を免れることができる。…それじゃ。皆によろしく」

二人は女を置いて去る。ビスタン・ケイマリッチだけが一瞬振り返り、不安そうに見送る女騎士に軽く手を振り、『こいつなら大丈夫、殺したって死にやしないよ』といった冗談めいた身振りを示す。イ

ムはそれに軽く頷いて笑ったので、堪えていた涙が再び零れ落ち、彼等が深層の闇に溶け込むのを早める。だが、彼女は思い切ってそれを腕で拭き取って深呼吸し、例え信条である正義のための戦いを断念することになっても、自分もぜひとも彼等についていかねばならないと決断する。「もう、泣くもんか。あんたが来るなって言ったって…！」

しかし、事態は彼等の予想しない方向に動いている。その頃エッセヴァリナに届いた急使は、ロンムーチョントの残党軍が最後の望みを賭けた大突破作戦を展開したことを伝える。敵陣の至る所で計略による火の手が上がり、逃げ惑う敵は予め用意されていた崩落する瓦礫の罠の下敷きとなっていく。だが、第四層の反乱鎮圧を任されたエスパイア地内制圧軍の副将軍ヤンゴスギルブビツ・ラックソルバーケは自軍が数で勝っていることを見越して冷静に対処し、甚大な被害を受けながらもそれに臆せずに部隊を次第に集結させて、裏を返せば奇襲と謀略に頼るしかない反乱軍を再び包囲して今度こそ完全に息の根を止めようと動き始める。

この事態は第三層の者達をも震撼させ、ピサのいた国だけでなく、その拠点を第一層から第三層に移していた地内共和連合院においても急務の議題となる。この機に増援を出せば敵を倒すことに光明を見出せるのか、それとも、どの道早々と決するであろう敗戦の巻き添えを食ってなけなしの力を失い、いよいよ上下の圧迫に屈することを余儀なくされることになるのか――大勢は後者の説を主張して保守に努めたが、自国から去ろうとする勇士達のことを聞きつけたハンザツムフワンク王は驚いて、長い防戦生活で忘れかけていた自国の勇猛な性質を他国の人間から教えられたように感じ、優秀な客人を引き止めるためにも、大急ぎで第四層に攻め込む手はずを整える。イム・リバオヤは王の命を受けて自慢の脚力を活かして走り回り、旅立ちかけた二人をなんとか連れ戻して再び部隊の指揮官の地位に戻ってもらうことに成功する。地内の勢力の中でも最も力のある国が動いたことで、連合院の議論の傾きは大きく変動し、その指示によって他の国々も続々と兵士を戦場に送る。

敵が計略に掛かって大きな損害を受けたにも関わらず、まるで否死の部隊であるかのように痛みに鈍感に、着々と包囲網を広げていることに驚いたラスは、もはやまともな意味での勝利を期待できないことを悟り、あとは嘘から出た真といった感じで、いつか宣言した通りに最後の一兵まで全力で戦いつづけ、そのうちに相手がこの地域の権益をあきらめてくれることを願うしかなくなっている。そこに、なだれ込むようにどこかの軍隊が到着したので、敵も味方もすっかり魂消てしまい、戦いの命運を握る新参の軍隊が自分に来るのか相手に来るのかを待つ以外にない。

結果的には、それは地上の制圧軍にとっては止めの一撃といったものになり、いよいよ士気の尽きた敵軍は方々で潰走し、甚大な被害を出して第一層に引き上げていく。

この戦いは当事者達の思っていた以上に大局的な戦局にも作用を及ぼす。地内の抗戦機運はいやがおうにも盛り上がり、ピサ達は本当にラスが地内で一軍を率いる総大将となっていることを知るも、彼に再会する暇もなくすぐに第三層に呼び戻される。敵は援軍を下層に出したことで手薄になったと思われたエッセヴァリナ王国を攻撃しようとしたが、予想以上の速力で戻ってきた味方の部隊に駆逐される。敵軍は方々に逃げ帰り、第二層以上の門を閉ざしてそれ以上反抗の火の手が来ることを防ぎつつ地上に

更なる援軍を請うのだが、地内だけに莫大な武力を費やすことは、目先の利潤しか目に入らない優柔不断な敵の上層部を迷わせたので、今度は地内制圧軍の方が防戦を強いられることになる。

病身の虎者の王に代わって、英雄と呼ぶに相応しい青年の指導で、ロンムーチョント王国の再建が急速に行われていく。同盟国とのいざこざはまたしてもうやむやにされ、暗がりで唇を噛んで新参者を妬ましく睨んでいる者が全くいないわけではなかったが、ラスのこれ以上ないというほどに的確な指示と解放された国民の努力によって、取り急ぎ王の住まいや治安維持のための警察施設が作られる。とにかくも王を失わずに済んだ人々の喜びたるや、このような悲惨な荒廃を全く意に介さないほどで、活力を得た彼等の働きは昼夜を問わず続けられ、間もなく簡単な市場ができ、共同の居住区には早くも子供達の平和な笑い声が響く。

その様子を、手を繋ぎあう、誰が見ても好ましい印象しか与えられない若い男女が、すでに光を失いつつあった偉大な王の傍に傅いて眺めている。青年は王の、娘の夫となって自分の後を継いでくれるようにという願いを、すでに恭しく受け入れている。だが彼は、正式な即位はどうかまだ先に延ばしてもらいたい、王はまだこの通り神々しくご健在で、しかも、まだ突然来たばかりの自分を皆にわかってもらうまで、しばらくの徳行が必要なのです、と伝えてもいる。ヤス四世はその思慮深い提案を、意に反して受け入れている。彼は、娘を大地より授かった時から気がかりだったことが、今、共和国との軋轢という形で自国に苦痛を与え、万民の統率者として遜色ない人物の見えざる敵となる可能性があることに、思い悩まないわけにはいかなくなっている。

――だが、後悔はしない。自分がしたことは正しいことだった。少なくとも王妃は、あの正しき心の具現、我が存在を照らしてくれていた地内の太陽は、私の思い付きを神の言葉と同等に崇めたほどである。…美しい娘になった…　我々の体内の遺伝子を精神的なものに変換し、魂の世界において結合した姿、創造の地神より賜った我が娘。どうか、幸せになってもらいたい…

王の様態が急変し、医者が呼ばれたが、もはや手の施しようが無いと宣告される。しかしラスはあきらめず、梵子術を駆使した独創的な看護法で王の魂を現世の肉体へ繋ぎ止める。ラスは立派な人物同士が自然と至る共感に達していたので、なんとか敬愛するヤス四世を元気つける方法はないものかと、再建の仕事の合間に考えを巡らす。ちょうどその折、戦前からすでに地内での権力を低下させていた連合院が、この機会に、それが作られた当所の理念に相応しい最上位の地位を取り戻そうと活動を始める。まずはその一環として、勝利に沸き返る人々の結託を強め、かつ戦士達を刺激し、切磋琢磨し、隠れた強者を見出すきっかけと銘打ち、地内の連合国家全体で闘技大会を主催することになっていた。ラスは自分がこれに出場してみたいと思うことを王に告げると、戦の武勇を揮うことだけではなく見ることも好む虎者は大喜びし、その企画を楽しみにするようになる。

雉猫の術戦士はその実力だけでなく英雄的身分においても特別扱いされたが、王を楽しませて生きる活力を与える見世物を演出できればそれでよかったので、ラスはそれを受け入れ、派手な武装をつけ、多くのお祭りイベントに参加して観衆を喜ばせる。連合院の長老達は彼を地内開放の付け火役となった英雄として祭り上げ、そのスポンサー気取りになっていたので、さすがにラスもすっかり鼻白み、皮肉

を言わないように我慢するので手一杯、というところである。しかも、彼等はラスがウムポ・ルサの指導を受けたということは絶対に押さず、素性の明らかでない仙猫、という風に彼を扱う。もちろん、当の雉猫も、この頃には父親の名声が地内では非常に微妙な位置にあって、その働きを認めていたのはごく僅かの人間だけであったことを色々な筋から知り得ていたので、自分の立場を無駄に不利にすることをあからさまに願うほど愚かではない。

彼は本戦でも十分に余裕を残したままで勝ち上がり、あくびを噛み殺すような戦いを必死になって面白みのあるシナリオに演出し、ようやくあと一つで決勝戦を迎えるところまで辿り付く――と、彼は感じたのだが、それは別のイベントなどが忙しかったゆえの印象で、実際は予選も本戦の下二回戦も飛ばし、三戦しかしていない。

しかしながら、とラスは思う。エグルブブア・ペンサバウムとの戦いは楽しみである。あの男の梵子術の組み方を観戦したが、彼ほどに時空形の術を使いこなす人間はいないのではないかという印象を受けている。愛しい人と、今や偉大な友人、義理の父となる男――そういえば、森の師匠も含めれば、これで義理の父が二人になってしまうな…――に軽く手を上げる。そのまま、対戦相手にも優しい思いやりの篭った眼差しのお裾分けをし、勝利までの苦難をいかに楽しく二人で演じきるか、君はその手助けになってくれるかな、などと首を僅かに傾げる。相手は小柄な黒装束の少年か何かで、自分が明らかにあまり問題にされていないことに気がついていないのであろうが、ポンポンとリズミカルに軽く跳ねたりしている。準備体操くらいはさせてやろう、青年が相手から目をそらして試合開始の鐘を叩く審判に、待ったの合図をしようとした瞬間。

「相手から意識までも逸らすのはまずいぜ。舌噛むなよ」

ラスは驚愕して振り返り、とっさに梵子術の短い発語で青白い半透明の防御力場を形成する。おかげで、真っ黒い姿のあまりにも鋭い攻撃がわずかに逸れる。敵は一撃加えただけで、反撃の梵子弾丸から飛び退って距離をとる。ラスは殴られて激痛を訴える左腕を抑え、美しい目と同じくらいの比率で口も大きく開き、黒い布の中から飛び出してきた、やはり黒っぽい中身を凝視する。

「どうした、戦場では予想外の事はなかったのか？　この程度で驚くなんて、随分楽な戦いをしてきたようだな。…ほら、うちこんで来い、見せてみろよ、お前の成長振りを」黒猫は自分が本気で戦うことを示すためであろう、喧嘩のおふざけの流儀に従わずに斜に構えて相手から目をそらさず、手で差し招く仕草をする。まるでそれが強力な静電気を引き起こす梵子術の身振りであるかのように、ラスの美しい毛並みがざわざわと逆立つ。

「…兄ちゃん…　本当に、あんたなのか…？　そうか、そういうことだったのか、突然の援軍。…まったく、後悔することになるよ、兄さん。僕の梵子術を試すなんて。父さん譲りだからね、また立てなく…」ピサが右手に跳んだので、ラスも口上をやめて術の詠唱に入る。

「遅いぜ、ラス。親父の、何だって？　舐めた口利くんじゃねぇっ！」あっという間に、黒の巨大な塊が雉猫の懐にもぐりこむ。

「ふっ、教えてやるよ、梵子術には間合いを取らなくても撃てるものがあるってことをね」術印無しで、

意思を込めただけでラスの腕が蒼く輝く。**『凍てつく宝物、悲しみの地より招かれよ』**

前後左右から包囲するように無の空間から湧き出てきた氷の刃を反射的に両手と片足で叩き落すが、いくつかを体中に受けたため、黒猫の周囲に弾丸の弾ける音とともに鮮血が飛び散る。黒猫は苦痛に顔を歪め、思わず膝を尽きそうになり、ふらついて後じさりする。あくまで術者は落ち着いていて、また何事か唱え始め、手で複雑な法印を空に大仰に切り始める。たちまち今度は激しい雷光が彼の手から発せられ、ピサは腕を眼前で十字に組んでそれを受け止めようとしたが、体中の神経を動かす信号を遥かに超越した無作法な侵入者のような力をまともに受け、体を震わせて弾かれ、さらに後方へ、土俵際のところまで追いやられる。

彼はかろうじて空中で半回転し、だらりと垂らした両腕で弱った体のバランスを取り、息を切らしながら、内臓をやられたのだろうか、仕方のないことだが、時折神聖な場に唾を吐いたりしている。この大会のルールでは、相手を殺せば負け、試合場の一段高くなった組みブロックから落ちたら負け、である。観客席は騒然とし始めている。初めてラスが実力の片鱗と思われる術を披露し、しかもその凄まじい威力が、それほど重要視されていなかった相手を激しく傷つけているからである。ラスを応援する身内もざわめいているが、特等席の反対側に座っている黒猫の仲間は、彼の弟が全く手加減なく、無慈悲に兵器のような攻撃を繰出すことに戦慄したり、腹を立てて罵ったりしている。

「ちょっと、アンタっ！　手にもっている武器は飾りなの？　男ならそんな飛び道具みたいなの使わないで拳で勝負なさい。それ以上撃つなら私が相手だっ！」もちろん、試合場に乱入しかねない勢いを大男に押さえつけられている女騎士の怒声は大観衆の歓声で遮られているので、彼女が妙な筋で咎められる心配は要らない。ゆえにその声が聞こえたわけでもなかろうが、優勢な方は悠然と巨大な打撃杖を対戦相手の方に突き出し、ゆっくりと近づいていく。

「…というわけだよ、兄さん。わかるかい、僕は努力してきたんだ。兄貴は天才かもしれないが、僕はこうして、ついにあんたをすっかり追い越してしまったというわけだ。この杖で突き落としてやるから、変に逃げないでくれよ、当たり所が悪いと困るからね。第四層の各地で冷たくなっている連中の中には、こいつを断末魔に見たてている者も決して少なくはないんだから」

ピサが肩をすくめたので、下がった腕がふらふらと揺れる。「謙遜だなぁ…　天才はお前の方だろうに。ところで俺は、本当のことを言うとお前のことなんかどうでもよくて、あそこでお前に心配そうな、熱い視線を送っている美女のことだけが気がかりで、というより、はっきりいえばモノにしたくて、ここに突っ立っているんだ。俺は彼女にお前より古くから会ったことがあるし、お前を倒せば、何はともあれ強い方の雄の子孫を残そうという本能に訴えかけるチャンスはいくらでもあるんだから」

ラスはびくりとして立ち止まり、一瞬後方を見て、姫の目線が自分とだけ合ったのを確認して安堵し、瞬間、再びぎょっとして黒猫に対して僅かに後退りし、身構える。…彼の取り越し苦労であり、ピサは弟の隙を狙っているわけでも、それができるような状況でもないらしく、相変わらずだるそうな姿勢のままである。

「どういうことだ…　エルフムを知っている？　冗談はよせよ」そんなはずはない、子供時代から繰り

返されてきた、愚かな兄のわけのわからない冗談だと嘲笑おうとしても、ラスの心を何か嫌な予感が締め付けている。

「冗談じゃないさ。俺は本気だ。エルフム、っていうんだね。ロンムーチョントの王女…、いや、そんなことはどうだっていい。正々堂々、俺は好きな女をもらっていくぜ。悪いけどな」

「…詰まらない。実にくだらない戯言だ、兄さん、いや、ピサ、黒坊主めっ！　叩きのめして、そんなことは二度と喋れなくしてやる」

ラスは引きつった笑いと血走った目で、自分を酷く恐れさせる奇妙な、弱体化したはずの存在に対して、予め歩きながら準備しておいた方陣から梵子力を引き出し、まるで相手を殺しても致し方ないほどの、手加減無しの攻撃術法を発現させる。ラスは高度の学院でもないと特許が手に入らないような特殊技法である『闇火』と呼ばれる術を使ったので、たちどころに出現した渦巻く漆黒の火柱によってピサのいた部分の床が爆破され、ものすごい轟音を立てる。

観衆は叫んだり唖然としたりして、一瞬早く黒い爆炎から生まれたように飛び退ったピサと、それを追う召還された巨大な梵子球を目で追いきれない。ラスは続けざまにもう一発、今度は自分の周囲を無差別に攻撃する、目もくらむばかりの光の衝撃波を放つ。ピサの毛並みや皮膚が焼け爛れるように後方になびくが、それ以上にはならず、黒猫の毛並みは常に並々ならぬ闘気を体中に漲らせて術の威力を全て半減させていたことがようやく誰の目にも明らかになるが、…もはや遅い。

彼はそのまま折った肘を突き出して全く臆せずに特攻し、それを術者の腹に入れ、苦しそうに腰をかがめた弟の顎を左腕の拳で捉え、ラスが後方によろめきながらも抜け目なく鋭く杖を振るったのも軽々と避け、さらに一発、二発、三発、四発、五発、六発、と弾丸のような攻撃を浴びせる。立派な身なりの青年の骨が砕けてしまいそうな激しい音が連続で響き渡り、場内は騒然とする。

それを哀れに思った兄が相手に背を向けて離れたかと思ったのも束の間、勢いをつけて背面に跳びあがった黒猫の体は、弾かれて獲物をはさみ殺す鼠捕りの罠のように容赦なく、よろよろと床に手をつきながら起き上がってきた弟の後頭部に踵をぶつけ、彼を完全にはいつくばらせる。ピサは着地し、勢いのまま何歩か跳ねて倒れた相手から距離を取る。彼は腰に手を当て、術法の顕現が皮膚を破ったいくつもの痛手をさすってはいるが、先ほどとは打って変わって堂々と、相手を見下している。

「どうする、まだやるか？　いくらでも相手になるぜ」

「あ、当たり前…だ…　くそ、これくらい、うぐっ、ごほっ…

…　…？　…何だ、やめろ、お前達、離せ……」

場内のほとんどが英雄猫の味方で、どこぞの国の兵士として若干活躍した素性のわからない黒猫なんぞはほとんど悪役だったし、試合の成り行きが雉猫の勝利だけを至極当然のこととして期待していた高貴な人々を大変に心配させていたので、その指示も速やかに伝えられた結果、見かねた役員達が彼を担架に乗せようとしている。ピサは無言のまま、弱者を哀れむ王者的な目で、優しさすら漂わせて弟をみやっている。が、弟を驚かせたことに、兄は手を口に当て、一瞬、右下の床を見やったようである。気づかれないように、必死の配慮で、という具合に。ラスの毛は再び逆立ち、小さく欠伸をした兄に憎悪

の念を燃やし、その思いだけで毅然と立ち上がる。

お偉方の意図に反して無理を押そうとするラスに苛立ちを隠せず、無理やりに連れ去ろうとする連中を、満身創痍の雉猫は噛み付かんばかりの獰猛な唸り声で荒っぽく追い立て、腕組みして片足をふらつかせている黒猫を睨む。ラスは、自分が知っている最大の攻撃術法で、すなわち、いかなる忌々しい思い出があろうとも運命の悪戯で自分たちの父として機能した男が、かつての黒い方の息子の命を潰そうとしたあの禁呪術に、自分の武運の全てを賭けると宣言する。彼は、逃げるなら今のうちだぞ、とも付け加えたので、合点した兄は急いで、ぴょんとあらぬ方向に飛び跳ねる。そこは、特に何か特別なものがあるというわけでもない、描写する必要もないような芝生の生えた所ではあったが、一瞬言葉を失った審判員は、急いで勝ってほしい方に駆け寄って彼の傷ついた腕を高々と差し上げ、試合の決着を告げる。観客は不平やら安堵の溜息やらを交えた歓声を盛んに送り、ラスの叫びはかき消される。

「なぜだ、わざと負けるとは。勝負しろ、だめだ、だめだ！　まだ終わっていない！」今度こそ多数の男達に押さえつけられた雉猫は急いで医務室に運ばれていく。

こんな風にして兄弟の再会に代えた激しい一戦は終わったが、勝利者の傷や疲労はいかに優れた梵子術を揮おうともとても数時間で癒されるようなものではなかったし、肝心の本人が全く戦意を喪失してしまったので、自動的に決勝戦は不戦勝で樹曼の術者が王者の称号を得るという、イベントを純粋に観ている者としては何とも煮え切らない結果に終わる。優勝者も、締めの会で「準決勝の凄まじい戦いが…」などと主催者の長に解説されると面白くない顔をせざるを得ない。すでにたくさんの術者や医者が入れ替わり立ち代り煩く看護したために――ラスはそれを苛立って拒絶しようとしたが、穏やかな婚約者の願いで不本意ながらも大人しくした――ほとんど癒えていたが、どうしても閉会式に出てもらいたいという院の願いだけは体調不良を理由に頑として無碍に断って、ベッドにへばりつくようにして天井を見ている。身内のような人々にも愛敬を振り撒く余裕すらないが、優しく寛大な王の娘は、それを、いかなる時も人格者であり続けた彼の愛すべき弱点であると考え、そのかわいらしい丸い手で青年の額を撫でる。

「貴方の戦い振りは見事という他はありませんでした。戦場にいて、私を守ってくださったときと同じように。相手様は貴方の術に恐れを成した、と私に伝えていかれました。こうも仰っておられたのですよ、強力な術法を隠しカードにするなど、まさに最強の戦士に相応しく、自分が不得意とする術士である相手と決勝戦を闘うに相応しいと。

でも、そう仰る相手様も、我等と同じ一族の出であられ、尊敬すべき部分を持っておられますわね。確かにラス様の方が数段上手だったのは言うまでもありませんが、彼とて、準決勝の相手が悪かったというだけのことで、優勝決定戦に挑戦しても遜色はなかったと、私、思いましたのよ。お父様も大変喜ばれていました。もう、あまり興奮なさると普通は毒なのでしょうけど、父の場合はかえって若返るようで、自分が戦場で闘っていた頃を楽しく思い出していたらしいのです」

奇妙な静けさが気になりだしていたエルフム・ヤスは自分でも不思議なほどお喋りに夢中になっていたが、相手が依然として無言なので、少々ふくれてみせ、ラス様は私がどんなにか心配して、心を動揺

させていたのかお気遣いもないのね、と冗談で怒ってみせる。しかしラスは、「…すまない、独りにしてくれ」と言ったきり、横になってしまう。王女は今度こそ本当に悲しくなり、涙を抑えながら、彼のわけのわからない苛立ちの理由がどこかにあり、それは地神と対極におわす神の針の打刻（天空神ベックカエグゾッドは時空を司るとされる）が解決してくれると信じ、席を立つ。彼女は、廊下で先ほど立ち話をした立派な男性に再び会ったので会釈をし、自分が泣き面になっているのを悟られまいとして父の下へ急ぐ。

「…エルフムに会ったのか。会話の内容は？　僕には、知る権利があるはずだ」

　気配だけで、部屋に兄が音もなく入ってきたことを知り、雉猫は顔も向けずに問う。ピサは頭をかいて、彼等の内心の中央にいる女性が先ほどまで座っていた椅子にどっかと腰を下ろす。

「いや、水のみ場のところでたまたま会ったんで、この人だな、と思って。それで、…おいおい、怒ってるのか？　何だよ、お前ならわかるようなたわいもない理由さ、つまり、何だ、…うーん、言い難いな。

　夢見だよ、ほら、俺達がガキの頃しばしば旅立っていた、妄想の世界さ。お前がいなくなっても、俺だけは度々ああいうところに『出かけて』いたんだ」

「…ばかな話だ…　相変わらずにね」ラスはため息をついて首を振り、兄を見上げる。しかしその目は、子供の頃彼が黒猫に何度も感化され、たきつけられて悪事を働いた時のように、悪戯っぽく煌いている。

「ばかで、ばかすぎて、とっても面白いよ。ぜひ聞かせてくれるだろうね」

「いや、ところが、それっぽっちなんだ。そうがっかりするな。…でも、実物を見るほうがよっぽど綺麗だな。お前の相手には本当に相応しい。兄として、これほど嬉しいことはない。お前のような優れた男が、世間に出て変な女にでも掴まらないか心配だったんでね。あの森にへばりついている染みったれ野郎なんか、気が気じゃないくせに、追いかけて呼び戻す勇気もなかったのさ。ざまぁみろだ。なぁ？」

「あのさ、父さんのことはともかく、そっくりその心配を返してやるぜ。女に免疫のないことじゃ、兄貴には勝てる気がしないからね」

　二人は笑って、少し小突きあったりする。ふと、黒猫は考え深そうに腕を組んで、笑いを顔に残しながら言う。

「でも、安心したよ。お前、何一つ変わってないな。お前のことだからどっかでうまくやっているとは思ったが、まさか救国の英雄殿とはね…　正直、魂消たぜ」

「何一つ変わってないだって？　…ふん…」弟はまたごろりと転がって、兄と反対側にある窓を眺める。どこかで笑い声や鳥のさえずりが聞こえる以外は、静寂。「僕が。こういう僕が…？　旧家に節穴がいっぱいあったけど、兄さんの目は本当にそれとそっくりだよ。何だって、僕が変わらないなんてばかなことを言うんだい」

　ピサは少し腰を上げて、弟の肩に優しく手を置く。「さっきの戦いは楽しかった。あんなにやりあえるのは世界広しといえどお前だけだな。

　…白状するが、俺はお前に会いたくて、そればっかりを念じてきたから、いろいろ大変だったけど、何とかここまでやってこれた。だから、俺は今、とても幸福だ」

ラスはついに我慢できなくなって激しく身を震わせて泣き出し、上半身を起こして兄の上着に齧りつくように顔を埋め、嗚咽する。ピサも涙を浮かべ、弟の肩を、まるで母親がするかのように優しいリズムで叩く。二人は一頻り泣き止むとそれを恥じて急いで顔を拭き、互いに不十分な、整えにくい個所を舐めあって取り繕う。彼等は、今度暇が出来たら、前に見つけたいろいろな面白いところに連れていったり、知り合った連中に会わせたりすることをお互いに約束する。

元々真から融合しあうべき魂が離別から再び打ち解けると、もはやそこにはどのような障壁も無力なものとなる。楽しげに話す二人が兄弟であったことを知ったエルフムは驚いて、愛する人の兄に会えた光栄と長く離れていた彼等の再会、そして何よりも、ラスがそれによって元気を取り戻したことを大変に喜ぶ。王女の改まった挨拶にピサは丁重に答え、恭しく跪いてその手に口づける。少々熱烈すぎるといったほどで、弟と目をあわせて悪戯っぽく口の端を歪める。後に彼は弟に、自分だけが相手を知っているというのは不思議なものだが、考えてみると、有名な姫様に大衆がお会いするという場合にはそれも別段珍しくも不思議でもないことだな、という感想を伝える。

兄弟は国に戻ってからは公務で忙しくてなかなか約束を果たせそうになかったが、両方とも、ビルドモンソ共和連合院からある秘密裏の理由でお呼びがかかったことで、期せずして早く会うことになる。ところが正装の二人は、地内の最も品の良い石材が惜しみなくつぎ込まれている、これ見よがしに芸術色の濃い建物の中で出会ったときも、それほど感動的な様子を見せず、ほとんど冷淡な感じで、お互いを額からつま先までじろじろ眺め、不意に近づき、気に入らない個所、例えば兄の襟首、弟の裾、といったところを手直ししたりわずかに寝癖になっている個所を軽く舐めあって整えたりすると、すぐに離れて、控え室で黙りこくってしまう。付き添いに来たロンムーチョントの王女もこれには不思議な印象を禁じえなかったが、何となく気圧されて、ラスの隣で静かに待つしかない。兄弟はしばらくの後に名目ばかりの授与式に呼ばれる。ようやく本当の意味で二人の上に立ったと感じたエグルブブア・ペンサバオムは、煌びやかなメダルに感動の涙を注いだが、しかし、退室の音楽と相変わらずあまり取り合おうとしない長老達に急かされるように、部屋を出る。

式の行われた部屋は決して大きくなく、何かの組織の役員と思われる数々の勲章をつけた重々しい雰囲気の人間が数人いるだけで、見ようによっては厳かだが、やはり、あの熱狂的な観衆の前で行うよりは実に簡素で、寂しいものであったに違いない。兄弟も、優勝者に続いて全く落ち度のない品のある会釈をし、踵を返す。

「まぁ、お待ちなさい、英雄のご兄弟…」

そう来るだろうと予測していたくせに、背後の声に、さもはっとしたような、不思議な印象を受けたことを隠さない、無邪気さを二人はそれぞれの遣り方で顔に表して立ち止まる。大きな磨りガラスの窓

を背にして、書類が整然と積まれた長机には大きな土竜の紋章が描かれていて、その席に座っていた人物も、同じ紋章をつけた額飾りをつけ、穏やかな、しかしどこかに油断のない奥深さを光らせた目で兄弟を見据えている。

彼は兄弟が姿勢を正して歩み寄ると、顔を崩して笑みを作る。この男は稼動気であったが、この種が時折定型の模範とするように、捻じ曲がった時空の素子を受け、当時には例外を除けば現存し得ないはずの、後世で人者と呼ばれる種族の男性の姿を使い古しているらしい。

「ご両人、この度の大会でのご活躍が大変に素晴らしいものであったことは、今更私から述べるまでもございませんが、今一度、祝辞を述べさせていただきます。傷つき疲弊した民衆も、汚辱を受けた王侯も、あなた方の戦い振りに勇気付けられたことでしょう。しかし、それは決して象徴的な意味だけではなく、実際にあなた方は地内の外から来られ、長い時の中で幻惑星の神が親孝行のつもりで落とす隕石のように、我等の敵を追い払うために尽力してくださいました。その功績は筆舌に尽くしがたく、また、こうしてお会いする機会を与えられたお二人の英雄と呼ぶに相応しいお姿と印象からしても、私達の切なる願いを打ち明けることで、ともに正義の道を歩んでいただけるものと確信できます。

私達、すなわち、地内の人々がすでに、それが恵み深い低き天空のように常にあると感じて取り沙汰すらしなくなっている、崇高な理念から生まれた組織の中枢、連合院の長老級と呼ばれる私達は、組織が偉大な先人達によって結成された時から首尾一貫して、崇高な理想を追い求めてきました。それはいつしか形骸化し、個々の国の自由が衝突と不公平を生み、最も親しくしなければならぬ者達が牙を剥き合い、断固として当たるべき外界には尻尾を振って付け入られ――要するに、私達は弱体化しつつありました。私達の組織は理念そのものであり、その具現化であり、それの消失と共に消え去るからです。

しかし、我々は憂いしか見出せないような時代にも希望と努力で存在し続けました。なぜなら、地内の万民がそれを望んでおり、一部の先見ない欲深き者達だけが、我々を無視しているに過ぎないからです。しかし今ここに、地内の運命が、最深淵よりの使者のごとき貴方達を地上より、最もその恩寵の深い地へ遣わしてくださったと感じています」

「私達がそれほどの者であるかを認めることは、正直、恐れ多くてお約束しかねますが」雉猫が柔和な表情と口調で、気品を漂わせながら半歩ほど踏み出して胸元に手をかざす。「長老様方の御深慮こそが、真に計り知れぬほどにこの地の人々への思いやりに溢れておりますことは、あの素晴らしい大会の時機を得た効果が実証しています。人々は意気盛んになり、必ずや敵を駆逐し、再び完全の平和を手中に収めましょう」

「正直であろうとするならば、残念ながら、組織の無力さをも披露せねばなりません。偉大な地神の望まれるように、事態がゆるやかに進むことを私も望みたいのですが、しかし、現に敵は再びすぐそこまで追い迫っているのです。誰よりも早く事態を把握しなければならない責任のある私達は様々な方法で情報を集めておりますゆえ、情報技術は発達し、地内にいながら、地上のいかなる出来事をもそこに住まう者より早く入手できるほどなのです。エスパイアだけでなく、ヴィムディンゲルゾースの超獣部隊が、更なる危険な毒を携えて地内に通ずるいくつもの港から侵入する手はずであることが、現地で命を

賭してくれている結社の人員によって報告されています。幸い、梵子術の無数な生贄の命を使った儀式がうまくいかずに滞っているようですが、そのようなものがもしこの地内を蹂躙しようとするならば、もはや、一国の利益などは全くその前では塵にも等しいのですから、いかなる手段を使っても強靭な指令の下に結託し、敵のあらゆる行動に先んじなければなりません。

しかしながら我が組織はそもそもが地内の平和を持続させるために作られたがゆえに、戦の道に関しては残念ながら自慢できるほど通じておらず、長い幸せな時の中でその力も鈍る一方でございます。しかし、どうか、…英雄方、お二人に、客観的で辛らつなご意見でも構いません、はっきりとした言葉で思うところをお教え願いたい。人々を一時的に驚かすようなことになろうとも、今こそが我が組織の全力を傾けて地内の人々に、かつての気高き始祖が開いたビルドモンソ統一の理想を、訴えかけるべき時ではないでしょうか」

黒猫は何か面白いことを言ってみなくては、と意気込んだが、以心伝心ですぐにそれが判った弟に足を踏まれ、発言の代わりに難しい顔をして痛みに耐えている。ラスは、話の主導権を握る男の望むであろう言葉を先回りして、若干の情熱すらを、梵子術によって無から炎を引き出すようにして、淡々とした返答に混ぜ合わせる。

「訴えかける、実に控えめなお言葉ですが、十二分に伝わっております。問題は方法でございましょう。無論、衆生は事態を無駄に楽観視し続けられるほど愚かではありませんが、先見の力においては、偉大な長老様のようには徳が修練されていないゆえに、不十分であります。誰しもが自らの先立っての保身と急務の復興に力を注がねばならない今、どんなに高貴な人でも知恵のない野獣のごとしとなる恐れがあり、より高い共同の理念にまで目を向ける余裕があるかどうかが心配されます。しかし、困難に立ち向かうためにあらゆる種族が手を取り合い、尊い働きで地内を切り開いた先祖のことを思い出せば、出し惜しみながらも、それぞれの国、部族なりに、力を貸してくれるでしょう」

「全てが完全に結託しても防げるかどうかわからない強敵を前にしても、でありましょうか」稼動気は興奮で目玉の機能を持たせた模様がずり落ちそうになるのを必死に抑え、叫びそうな勢いで僅かに腰を上げる。

「いかなる戦いにおいても、数が全てということはありません。少数の正しき者が、多数の誤りを思い留まらせることは最も尊いことで、どのように希望のない時代においても、それは期待されるべきです。正しき者達が偉大な核を中心としてまとまった時、相反するものにすら慈愛を傾け得る意味において慕うべき、最大のお方に相対する荒廃を伴う攪拌によって恵みをもたらす嵐(風神キルケスのこと。風（および天空）⇔地、火⇔水は対消滅を起こす反属性である。しかし、これが神個人同士の相性を直接示すものではない)のような力を見せるからです」

「その核とは、すなわち、貴殿方をおいて他にないのです、ラス殿、ピサ殿！　その願いがどれほど急なことであろうとも、我等を取り巻く事態を少しでもご理解いただいているならば決して咎められるものではないはずです。どうか、ご決心くださいませ。そして、我等をお導きくださいませ。ここに、私達の組織が全会一致で、いや、尊敬すべき点を多く持つゆえに一層残念な、少数の弱い心をもった人々のとるに足らぬ反対を押して、正式に採択した信託書と印綬がございます。あなた方が土竜の戦旗を天

空に届かせて掲げてくださるならば、あなた方をおいて、他の誰にこれを渡すべきでしょうか。例えそれが我等の命運を決するものであろうとも、これ以上ない選択として、我等は後悔も恐れも致しません…」

地内の名目上の最高権威者はこのように卑屈な押し付けがましさを昂ぶった感情の涙で覆い隠し、率いる者の勝利によってもたらされる栄誉と個人的な意味での利益は全く計り知れないものであることを、控えめながらもほのめかして付け加える。

ピサは不敬な感情をついに抑えきれず、わざとそれとは反対の態度として胸を必要以上に張ってみせ、鼻を含ませたりすぼめたりしたので、さすがの聡明な紳士気取りの弟も失笑を長く堪えられそうになく、従って話の後半はほとんど聞いていない。彼らはとっくの昔からその頭の中に共通して描かれていた通りに申し出の受理と、あまり残されていない時間を有効に使って綿密に計画するための会合を幾度か繰り返すことを勿体つけながらも約束し、最後は客の方からこの会話を主導して引き取ってしまい、早々に退出する。その頃には悪い笑いの虫はほとんど不発のまま収まってしまっていたので、兄弟はこれといって話すこともなく、二言三言交わしてから引き上げていく。同じように、室内に残った者達も短い応答で意を通じ合っている。

「あの二人、そこまで入れ込む必要があるかどうか、私にはどうにも…」

「いや、駄目なら駄目で、我等の同朋全部が壊滅するわけではないし、首謀者が外の者なら、万が一にも敵との交渉に有利であろう？　それに、あの化猫が育ての親だと言う…　化物のような働きぶりも納得がいこう」

「まさに、親子ともども、我等の富基盤を作る人柱となってくれるのでしょうな」

５、双巨星起つ

兄弟の行動はまさに電撃的に成されたから、彼等に繋がる者の身辺も急激に慌しくならざるを得ない。院の老人達の檄文だけでは連合組織を侮る国々をほとんど動かせそうに無かったので、ラスは友人の高貴な身分の口を借りて、ピサはそれまでの実直な活動と功績を認められて自由な意味での名誉を与えられている騎士の助言で近くの国を次々と説得し、多いとはいえないまでも、必要と思われる最低限の兵士をかき集め、編成し、部隊に率いる者をおき、軍隊の規律を敷いていく。こちらの軍備が進められていることを隠すほどの暇は無く、とにかく迅速さが求められた。

もちろん、難しいことは常通りに雉猫がほとんどを行う。彼は第四層で戦争を行った時に育てた部隊編成をそのまま持ち越したく思っていたのだが、ゴルフィ共和国は同盟国と自国の再建にぜひとも不可欠な人材として、ラスの心の安らぎ場所となっていた徳高きアインダー司教と老年益々盛んな栄誉騎士を引き止めてしまう。一方、ロンムーチョントからは、期待をしていなかったにも関わらず、あの心細い状態であろう国にはぜひ必要だと思われる優秀極まりない勇士が送られてくる。

ラスは彼に、自分の愛する人と国を守ることを継続するよう勧める。マイザブル・ビアツは苦笑して

答える。彼は寡黙だが、一度話し始めると、おおよそ自分の思うことを隠し立てしたり装飾したり出来ない無骨な人間であるが、それは捻じ曲がりの無い正論であって、人に不思議と悪い印象を与えない。「拙者もそうしたかったですよ…　別に、貴殿に強い恩義を感じているわけではないですからね。しかし姫は、長い間あの方にお仕えする拙者にこそその価値が良くわかる穢れのない思いやりをもって、拙者を追い出すようになされたのです。あの方は、あなたがもし戦場でその影のみを大地に立たせるようなことになれば自らも果ててしまうと嘆かれ、また、地内が先祖の名の元に団結しようと言う際に自分達の保身のみを考えるくらいなら今までがんばってはきませんでした、と仰られました。

行きなさい、マイザ、と。大志を貶めて我等のお守りをするなどと――その数は減ったとはいえ、依然としてここに残る多数のあなたの同朋やかつての尊厳を失わぬ我が父を侮らぬように。私も、この辛い期間の間に決して捨て置くことのできぬ程の護身術を身につけたのですから、と…　それはそれは勇ましくございました。しかし、拙者がここに来たのは、心配事を遠くに残しておかずにその病巣のごとき敵を早めに駆逐し、一刻も無駄にせず、あの方々の下へ帰るためであります」

ここまで言われては、さすがのラスも首を縦に振って、彼に軽く握手をするしかない。元々期待していた指揮官候補が得られなかったということもあって、それ自体は願ってもないことである。地内でも最強の戦士として誉れある砂魚者を、軍師は兄の部隊の近くに入れる。実戦に長ける黒猫の方が彼を良く使えるだろう、という根拠を雉猫は呈するが、この点については軍略的な面において後世で論議されている部分である。すでに腕力勝負においては申し分の無いピサ側に同系の指揮官を置くというのは偏りが見られるし、彼が局面戦闘において比類の無いマイザブル・ビアツを手元で用いていれば後の戦いの多くをもっと楽に勝利できたのではないかと言われているのである。しかし、優秀な軍師たるラスも人間であったのだから、勝つためには彼がぜひとも必要だったがゆえに選ぶ権利もなく、愛する女の元に信頼置ける護衛を置けなかったことに言いようの無い不安を覚え、その避けられぬ悲劇的運命を予感したのなら、自分の心にわけのわからない雑念を呼ぶきっかけとなる対象を遠ざけておきたいと思ったのも無理は無い。

ランカス・ヒルンでは今回の遠征に最も貢献することで地内の主導権を握ろうという考えが主流となり、他の全部を合わせても七千人しか集まらなかったのに、エッセヴァリナ王国は四千人を出し、武装や兵糧も惜しみなく与える。敵の部隊も侵攻準備を整えているという事実が警戒を怠らぬ雉猫の情報網に引っかかったため、壮行のパレードは中止され、簡易な出陣式のみが連合院主催で行われる。そこには五つの軍団が、その数は敵に対して遥かに少ないとはいえ、優れた指揮官に率いられて息荒く、目を輝かせている。

簡易な歴史年表が兄弟の生涯をほんの数行で表現しようという無謀な試みを強行する場合、その最初の文字は大よそこの時点を示していることが多いのではないだろうか。これよりの戦いは一般的に良く知られる部分も多く、その戦術面、歴史的な情勢等を詳細に述べることは、その道の研究者に任せることもできる。本書では兄弟の物語に必要最低限の要素だけが断片的に取り入れられて強められることになろうが、それは他では得られない部分として、梵子的な意味での想像力が浮かび上がらせるもう一つ

の現実となろう。だが、以下のような、この時点での軍団編成は、後に急激に形を成す巨大な軍事力構成の基礎となるものであるから、軽視してやり過ごさず、改めて簡単にでも見ておかねばなるまい。

ビルドモンソ連合地内解放軍…（　）内は兵数、主な兵種

～左弦軍団～

左弦総督：ピサ（1100 軽歩弓兵）

参謀無し（右弦総督がその役）

第一軍団・将軍長ビスタン・ケイマリッチ（1800 装甲兵）

百章将ゲンド・グラッマ

第二軍団・将軍長マイザブル・ビアツ（900 機竜兵）

百章将ザウナ・ガリソ

第三軍団・将軍長イム・リバオヤ（1300 軽槍兵）

百章将サイモン・アームン

～右弦軍団～

右弦総督：ラス（1500 装甲兵）

参謀ハーン・サイバル

第四軍団・将軍長フアンホ・ラップァ・マーヒ（1300 術法兵）

百章将ンゴバルケブ・ソア

第五軍団・将軍長アイバン・クフグ・キャーイ（2000 軽歩兵）

百章将マーシャン・ギャリド・エブナ

上記のように、特に総督と関わりのあったエッセヴァリナやロンムーチョントを除けば、ほとんどの地内の国家がその他の援助同様に優秀な人材を出し惜しみする傾向があったので、必然的に、部隊の中核となる人間はほとんどが国外出身者、猫兄弟に縁ある者たちとなっている。彼等は山賊時代を遠い過去として懐かしみ、意義ある戦いの元に再会できたことを喜び合えるほどの勇士として成長していたので、その点ではそれほど不安の要素はないと思われている。

その中で目立つのはラス直属の将軍長であろう。第四軍団を率いることとなった瘤取者の信仰系術士は、兵士を多く出さない代わりに第二層の大国から派遣された第一位の大枢司教であるが、この国では地内の例外として地神教が複数認められている宗教のうちの一つとなっていたので、彼がいなくなっても、国としてはそれほど困らないといった背景がある。ラップァ自身も、そういう祖国に対してよりも地内全体のために働きたいという願望があったし、ちょうど、ラスが戦略上どうしても必要としていた術士部隊を率いる上で、その道に理解のある指揮官が必要だったことに合致した結果だったが、それだけではない。

雉猫には、知的生物種の最大の武器である知性でもって、時として兄以上の責任を持って全軍を導か

ねばならないという重圧を、知能ではなく、より高い水準の教え、すなわち美徳や戒律、悟りの言葉によって取り除いたり和らげたりしてくれるような、アインダー・ゼットコウロの代わりを務めてくれる人物がぜひとも必要になっていたのである。

ところがアインダー以上の最高階位を持つフアンホ枢司教に過剰の期待を持って席巻したラスは、その後から全くの不服そうな面持ちである。司教は醜い男で、かける言葉もきつく、「弱弱しい女でもあるまいし、術以外の面であまり頼りにされても困る」などといってラスを心底怒らせてしまったので、偶然その場に居合わせたイムやビスタンが彼を押さえつけなければ、戦う前から大変なことになっていたかもしれない。

より高い目標のために一身上の好き嫌いを押さえつけたラスであったが、このラップァという男、その後も何かとラスに苦情をつけたりして、右弦総督に敬遠されることとなる。奇しくもピサの直下で働く第一の将軍が瘤取者の才能の一つである体格を如何なく発揮しているように、第四将軍長は、瘤に沸く梵子の元素を元手にした術士としての極めて高い能力を見せるので、彼等二人で瘤取種の可能性を最大限の形で見せてくれているかのようである。ビスタン・ケイマリッチと黒猫の関係同様、こんな彼が、激しい活動を続ける大脳新皮質に全神経を奪われているような天才的美青年の、真の意味での理解者になろうなどとは、この時点では本人達はもちろん、誰にも予測できないことである。

マイザブル・ビアツは単純かつ実直で無駄の無い精神ゆえに飾らない言葉を用いるが、この瘤取司祭は、その真に極められた気高い知性と美徳のために、人の心に直接に触れていくのである。それが嫌われることも多々ある。国家としてはあまり興味の無い戦争に押し出されたことからも容易に判ることだが、宮廷内には、彼に公然と汚職を批判され、第一位司教を憎むものさえ少なくない。しかし、彼の偽らざる言葉による教えに魂を洗われ、救われる者はそれ以上に多いのである。例えばラスも、「別に何の不安もなかったが、ちょっと弁舌の能力を試すために聞いてやったのに、あの程度とは。あんな嫌な奴には二度と相談するものか」と文句たらたらながらも、これをきっかけとして弱音を吐きそうになる時も不安を克服する術を自ら見出していったので、ほとんど誰にも、そういった意味での相談をする必要を感じなくなるのである。

第五軍団のアイバン・クフグ=キャーイ――大柄の、黄土色の虎模様の猫で、彼はその毛並みを地神の力の象徴だと考えて大変誇りにしている――はあの小さな強豪、マッタリナパ出身の士族の出で、兄弟と同じ種族ということもあり、大変に期待されて迎えられる。彼は少々自信過剰で高飛車なところを除いて良いという条件をつければ、およそ逞しい立派な指揮官というに相応しく、最も多い数の兵数が与えられ、その中の一部の精鋭は、彼自身が率いてきた部族の男達である。だが、彼については後に述べることもあろうが、一つだけこの時点で言えることは、フアンホ・ラップァ・マーヒのような事例があるからといって、第一印象の効果というものは決して過小評価できるものではない、ということのみである。

部隊は前述の通り、大きく二分割されている。一般的には指揮系統を一極化することは必須であって、部隊編成の仕事の最後に、雉猫も兄を上に立てたいと当然のごとく希望したのだが、ピサは、この点だ

けを彼の唯一の要望として打ち出し、譲ろうとはしなかったのである。彼の考えでは、自分と弟には上下の隔てなどなく、一応、形式的に左右に分ける（クナウザスでは人類の大半が偶然にも左利きであり、物の順逆は大筋、左が右の上、とされることが多い）としてもそれ以上にはできないし、このように、他の軍隊ができない編成をすることで、自分たち兄弟にしか出来ない軍略の可能性を得よう、と具体的事例を持たないが、魅力ある話し方で述べる。

兄弟が二つで一つであるなら、別々に伝令無しで動くこともできようし、左右で相談しながら駒を無駄なく、しかも敵に全く予想できないような遣り方で進めることも難しくはあるまい、と。ラスは、その自信がないかと兄に問われたとき、そうだと答えればあの森での離別以来に彼の中でしこりとなっていた気持ちを悟られそうに思えてしぶしぶ承諾したのだが、厳かな地内流儀の出陣式で地神の加護を祈る捷香灰を受ける勇士達を眺めるに連れて、兄の勘が導き出した意外で、しかも的を射ているように思われるこの編成を使い、兄と幼少期に培った類稀なる連携を敵に見せつけるのも実に面白いことだと意気込み、それが、しこりをきっといつか、何でもない陽性の腫れ物か何かと同じような末路を辿らせるに違いない、と気が軽やかになる。

こうして、意気盛んに彼等は出撃し、敵は一歩遅れ、あっさりと第二層の月枕と呼ばれる地域に解放軍の侵入を許す。敵が二、三倍の兵力で散漫に攻めたところで文字通り全くお話にならずに蹴散らされることは言うまでも無い。以前の戦いの経験から強敵が来る前に地歩を固めておきたいと考えたラスは、兄と早速分かれて動き、左右とも、伝令を使わずに電光石火の勢いをもって、絶妙のタイミングで次々と敵の拠点を襲う。第二層の敵は大混乱に陥り、生き残りは第一層の部隊に辛うじて合流する。

解放軍が追撃を行わなかったのは、通りかかったエクミ・キャルの城を解放し、幽閉されていた士族を救い出すことに専念していたからである。ここまで猫兄弟の軍勢はほとんど何の損害も出していないという状況であったから、ここで英気を養い、一挙に遠征の目的を果たしてしまおうと考える。エクミ・キャルの小さな王子や王女は、戦いに自分たちもついていきたい、と幼い中にも勇気あるところを見せて勇士達を楽しませる。また、瘤取種における美女の基準を高水準で満たした選りすぐりの逞しい女性達が、その容姿からは想像も出来ないような柔和な仕草の舞いを見せる。これは、ヨルコン合衆国を通じて地上の南方から伝えられてきた文化である。ピサは、ぼんやりとそれを眺める友人をからかう。

「どうだ、すげぇ美女ぞろいじゃん。俺、ああいうムキムキッとした女って、けっこう好きだな。不思議な美があるよね。…ん、何だよ、俺ばっかり見とれていて、肝心のあんたが詰まらなそうなんじゃあ…　は、はーん…　そうだよね、あんたは、例えば細い指の女の方が良かったりする変な趣味があるんだっけ？」ビスタンにはもちろん、何気なくその背後を通りかかったイムにもしっかりとお仕置を頂戴して、黒猫は頭が瘤取者のようになってしまったと嘆き、弟はくすくす笑う。そうして、ラスは、踊り手の向こうに座すマイザブル・ビアツを視界に入れたことを契機に、舞の幻想的な感覚と強い酒の影響で夢見ごこちになり、あの愛らしい人と過ごした、これ以上ないというほどに激しく、かつ極めて甘美な夜の一時を思い出している。

兄は彼女を得なかったのであるが、自分はそれをこの手で抱き、何度となく契ったのである。兄はそういうことを全く知らないのであろう。というよりも、これは聞かずとも見ていればほとんど明らかな

ことだが、兄は女そのものを知らないに違いない。自分は姫に会う前に、あの教養の無い方面にはやたらと詳しい者達の導きで、何事も経験という曖昧な格言にそそのかされるままに、娼婦を幾度か買ったことがある。しかし、あのような者達との冷めた関係は、単純な意味での経験として一考の価値があるというだけで、エルフムとの愛を一層格上に引き上げるための比較対照に過ぎないと、彼女を知れば知るほどにはっきりと思われる。彼女はうっとりとして自分の顔を、肉体を、熱っぽく眺めるのであるが、兄さんの空想のお嬢さんは、そういうことをして楽しませてくれたのかどうか、…そうであってくれたらいいと思う、自分はその程度のことで嫉妬しないし、兄を思いやる気持ちを決して失ってはいないのだから――そんなこんなと思われている黒猫の方は、何かまた失言でもやらかしたのだろうか、酔った指者の女騎士に首を閉められているのが認められる。ラスは、時を経ても変わらぬ人間って本当にいるものだな、とその様子に一種の賛嘆の眼差しを向ける。

彼は再び追憶の世界に没入する。ついに戦場に出ることを明日に控えた夜、二人は夜闇の中、奥深い秘密の岩陰の温泉で愛を確かめ合い、特に、男の疲れを癒し、筋力と気力を高めるために愛情の篭った入念な毛繕いとマッサージが長時間に渡って為された。月光（大き目の夜光石は、地内の月と言われる）の綺麗な夜だった。雉猫は、戦では男と血と汚物しか見られないのだから、見納めとばかりに、自分に尽くす王女の体の美しい均整をしげしげと見つめて彼女の顔を赤らめさせたが、いつもそういうときには恥かしがって目を閉じがちな王女も、この時ばかりは、ラスの体を隅々まで見ることとなる。例えばラスは、王女の多く体につくかわいらしい大きさの乳房の一つに、不思議な形の、渦巻き模様のような、奇妙な毛並みがある部分を認めた。青年はそれを彼女の名前から得た印象と合わせ、彼女にしかない個性として愛している――突然、王女は彼の背中を流している時、小さな叫び声をあげて雉猫を驚かせる。彼女は何でもない、と言いつつすぐに帰ることを主張し、翌日からも、何とはなく様子がおかしく思われ、膨大な仕事を抱えていたのでそれどころではなかったとはいえ、雉猫は不可解な違和感を覚えて出撃することを余儀なくされた。

そのときは彼女の言葉を鵜呑みにしたラスも、今こうして思い出してみると、あの時のエルフムの様子はやはりおかしかったし、自分が心配してきたことや、誰かにそれを打ち明けたいと思ったのも、そのことを発端としていたのではないか、と思いつく。彼女は自分の不幸を猫族にありがちな予知とやらで感じとり、自分を見限ったのではないか――しかし最後の思考の迷走は、聡明な雉猫にしては随分とセンスの無い妄想ではないか。無論、極度の疲労ゆえのことである。彼は味方の被害を最小限にするため、いつも神経をすり減らしてきたのだ。楽な戦だったのではなく、楽な戦に仕立ててきたのである。すでに夢想は解体し始めていて、レム睡眠の織り成す取り留めの無い劇に、主な出し物が終わってたけなわとなっている宴会場が、その構成要素として混ぜ合わされて採用されている。兄が来て、むにゃむにゃ言う彼を優しく寝床に連れて行く。

黒猫は、手伝うといいながら言葉に反して全く使い物にならない状態になっているイムをも介抱してやらねばならなかったが、ビスタンと二人で彼女を連れて行こうとしたとき、泥酔者にふと真顔で、「あんた、あの人のことあきらめちゃったの？　意気地なし…　だめだよ、誰が相手でも、負けちゃ駄目だ…　そんなことで、私は喜んだりしない…」と言われ、言葉に詰まってしまう。黒猫は考えないように

していた、自分のためにも、弟のためにも。

彼は時折思う、人を好きになるって何だろう――梵子的に抽出されたそれは、生存と種の保存に絶対の条件であるかどうかは別として、永遠の性質を帯びる用件であろうか。もしその必要を誰か、例えば神か運命のようなものが認めるとするならば、彼は無意識に、有限の命の中でそれを追いかけるのではなく、永遠に時空の一断片としてあり続ける注目されるべき一時に、例えそれが今の弟や女騎士を支配している他愛無い夢想のそれであっても、その中で精一杯自分なりに愛したことを、大事な宝物の一つとして、恋の認識と終わりに縁取られた時空の瓶に封じ込め、永久保存したのかもしれない。

瓶の中に落ちている閉じられた時空の環を構成する分子となっている彼の当時の魂は、その時のエルフムを、永遠に愛し続けている。そしてあの時の少年は、その瓶をそっと恭しく闇に落として、全く別の地に旅立って久しい。黒猫がまだ幼い悩みを克服していなかったというよりも、問題自体が既に過去のものとなって久しかったので、俄かに答えられなかったに違いない。

また、別の観点から鑑みれば、彼の魂に運命が何かを遣わして、一つの得がたい必須の教えを与えようとしたとも言えぬだろうか。そのとき、相手の処女はその一時的な危うさゆえに、世の可能性という豊穣を閉じ込めた虚無の瓶そのものとなる。彼女は幻影の天使を自らに降ろして教育的な使命を持った巫女の役柄を担い、運命の寵児の魂に触れて諭す――どのように現実性と癒着し、アポトーシスと癌化を繰り返す安っぽい因果による細胞でしか構築されていないような世界にも、至福の美は、理念や空想を顕す芸術の中だけに借り置きされておらずに、確実に、目に見える形で現存することを今一度、そして何度でも、保証する――

無論、ピサはそういう細々したことに一々注意を払ってはいないが、過去の集約として、自分の良心や潜在意識となっている深い闇にも似た部分から湧き出たその教えだけが今は残って、彼を導いている。合点行かずといった表情のままで寝ているイムを眺めながら、黒猫は、無二の友人にぽつりと零す。

「誰にも内緒だけどな…　王女に会った時、彼女が俺をしきりに見ているようだったから、気になって何気ない素振りで話し掛けてみたんだけど、そしたら、『一度お会いしたことはありませんか』って言われてさ」

「本当かよ。黒坊主、んで、お前は、何ていったんだ？」

「『え、まさか、でも、今からお知りあいになりたいなーっ』…　なんて、いや、焦ったもんでさ、正直なところ。まぁ、不思議なこともあるもんだ。でも、やっぱ、俺の不毛な恋の火種は、然るべくして消えたわけだ。いや、俺は実際に幸運さ。少なくともここに親父がいないんだからね、いればどれほど笑われたかわからんよ」

瘤取者は深く溜息をつき、無言で、ピサの背を何度か景気付けに叩く。翌朝、彼等は再び出立し、第一層の砦群も、まるでそこに何も障害が無かったかのように虱潰しにしながら突き進んでいく。その快進撃は、前に苦戦を体験している軍師にはむしろ怪しく思われるほどであったが、偵察兵があきらかにしたところによると、第四層の敗北を咎められた敵の副将軍がその地位を剥奪され、地上の、どこかの辺境に飛ばされてしまっているということである。ヤンゴスギルブビツ・ラックソルバーケは事実エス

パイア騎士団でも優秀極まる男であったが、愚かな猜疑心の塊である敵の上層部が自ら誤りを冒し、彼を遠ざけたのであろう。それは彼と一戦を交え、自らも優れた人間であるがゆえに相手の恐ろしさも実感できる雉猫には何よりの好機と思われ、進軍は一層に急がれる。彼等は拠点を開放するごとに財力を得、それを惜しみなく本国に送り、地内の人々を惹きつけて欲にかられた国々から兵力を増強してもらっているので、すでにその数は初期の二倍以上に膨れ上がっている。敵も、地上からの援軍が近くまで来ているからこそ、地位をそれらにすっかり取られてしまわないようにするには、崖淵のところまで追いやられたことになる。

敵残存総兵数、約三万六千。兄弟の解放軍の 1.5 倍ではあるが、『新鮮なる雨樋』を天然の堀としているベルカイの砦に立てこもった方は恐々とし、そこからたったの切根土(四分の一根度)しか離れていない丘に陣を張った方は、悠々と、相手に降伏勧告の矢文を送る。もちろんそれは受け入れられず、というより返事もなく、いくら挑発したところで出てくる様子も無い。時間を稼がせるわけにはいかない。将校達は集まって会議を開き、アイバン・クフグ=キャーイはこれくらいの城の提灯など一揉みに蹂躙できると息を荒げたが、ラスは無謀な突撃で兵力を失うわけにはいかないと考える。兄弟の狙いはもっと先のほうまで見越しており、すでに地内解放などはその視野の中で確定処理を受けてしまった過去の目標に過ぎない。

ラスは虚報の作戦を展開し、各軍団をばらばらに動かしてピサに率いさせるとともに、自分の信頼する百章将や参謀に使命を持たせて別働隊とし、各方面から地上の増援が来ているように思わせ、敵を誘い出して適当に叩く。だが、相手はすぐに偽りの計略に勘付いて再び立てこもり、前以上に出てこなくなってしまう。剛を煮やした黒猫は全軍に突撃命令を出し、水場を埋めずに脚力で切り抜けようとする。だが、敵がこの城に自信を持っているように、澄んで浅く見える水の底は泥土でぬかるみ、しかも金汚(微細な機械生物。金属を腐食させる)などといった水棲生物が増殖していたから、全く予想されないほどに邪魔立てされる。その間に防御部隊からの莫大な数量の投擲を受け、損害を出しつつ、攻撃どころか先に進むことも退く事もままならぬ状態に陥る。

その時、ベルカイの城から火の手がいくつも上がり、攻撃の手が散漫になる。前の作戦で逃げる敵に紛れて城に潜入した味方が、城の付近にあるいくつかの地下への抜け道をこじ開け、下から回り込んでいた右弦軍団を招きいれたのである。水の上でこれを今か今かと待ち受けていた左舷も一斉に突撃する。自分以上の名声を持つ副将軍を妬んで追いやったがゆえに大変な損失を招くこととなった制圧軍の大将軍は、もはや生きていても恥を受けるか、敵味方のいずれにも処刑される道しかなさそうなので、せめて最後くらいは勇猛なところを見せ、潔く黒猫に討ち取られる。多くの敵が降伏し、そうしなかった勇敢な者は、哀れにも不得意な穴倉の地形では逃げることも叶わず、残らず追撃部隊に命を掠められる。

この偉大な勝利は本当にあっという間の奇跡のように行われたから、勝利を受けた側も敗北した側もしばらく実感が湧かないほどである。連合院は兄弟が自分達の任命の元にあることを強調して、彼等の居ぬ間に、地内における新しい共同理念とその実施のための法制を整えることに躍起になる。だから、人々へのアピールのための凱旋を一刻も早く行ってほしい、という願いを兄弟が恭しく辞退したときも、

それほど咎められることもなく、むしろ、大変に喜ばれて承認される。兄弟は敵の新手が迫ってきていることを理由に、これを先制で返り討ちにし、さらに遠征して地内の力を誇示し、地内と地上の均衡による平和と利潤を取り戻すべきであると主張したのだ。彼等には新しい兵士や武器が届けられ、あまり休む間もなく陽や星の光を直接に浴びることになる。三万人もの大軍に膨れ上がった遠征軍は、軍団の基本的な大別は変わらなかったが、細かく編成を加えられる。名前も北圏交正軍などといった適当なものに摩り替えられ、特に優れた者が一軍団に千、百の章将級として取り立てられて配属される。

兄弟は久しく地上の空気を嗅いでいなかったが、それをさほど懐かしいとは思わない。彼等の故郷はむしろ様々な点で地内に似ていたのであるから、今までの『祖国解放』という借り物のお題目にも感情移入しやすかったし、むしろ、これからようやく改めて戦いが始まるような、新鮮な気持ちになっている。悠然と恐れなく進む連勝の軍隊の先鋒では、かつて山賊をやっていたあの瘤取者が、巨大な打撃棍を大地に突く勇ましい音で軍の闊歩する音頭を取っている。彼の謹厳な眼差しはもはや昔のようには曇っておらず、自分の人生を賭けた、ちっぽけな体躯に巨大な運命を秘めた男の存在を背後に感じながら、前だけを見据えている。その兄弟に負けず劣らず有効な遠目に敵部隊と思しき影が映り、総大将に伝令を飛ばす。

見たことも無いような敵勢に、さすがの勇士達も戸惑い、ざわめく。虐殺の女王は樹曼だけでは足りずに今まで尽くしてきた自国の他種族も犠牲にし、数十万の命で持ってようやく、無数の獣たちを従える素梵子他象(虚実体を使役する術法体系のこと)の契約儀式を完了させたようである。しかし、遠征軍も意気盛ん、相手が一般の兵士ではなく化物だからといって恐れるような者は一人もいないし、こんな先っぽの戦で挫けるようでは、これから訪れるであろう苦難を乗り越えるなどは到底考えられない。

敵の数はそれほど多くなさそうだったので、第一軍団がこれに正面から当たり、右から第二軍団、左から第三軍団が回り込み、左弦の本陣は様子を見ることになる。ラスは考えがあってその後方に止まり、周囲に警戒を怠らない。予想通り、アンガルストから出てきたエスパイアの鉄骨騎士団が、調子に乗って這い出てきた目鞍な土竜どもをこの機に再び穴の中に押し込めてしまおうと、不気味に軽い音を立てながら不死兵のごとくに迫り来る。鉄骨兵とは霊体生命体を飼いならして訓練したもので、術に弱いことは幸いするが、一般の刃物系武器による攻撃が通じにくいため、ラスは予め用意しておいた打撃系武器に直属兵達の装備を変えさせている。右弦は相手を先制の攻撃術方で射撃して牽制しつつ、第五軍団を展開させ、小隊ごとに牛蛙陣を取らせて綿密な指示を与える。各小隊は交響曲における指揮者と各楽器の関係さながらに、呼笛と認識術をあわせた独特の合図で微妙に位置をずらしたりして気づかれぬように少しずつ敵を分断し、削り取るように攻撃していく。術士の部隊は一発当てた後は後退させ、アイバンが率いる兵士の武装を梵子術で強化させるなどの支援に徹するように指示する。

敵は鉄骨兵一人と一般騎士五人を組とする小隊を基本として動き、武力で他国を威圧してきた国に相応しい戦い振りを見せ、今までの地内戦は前哨に過ぎなかったことを強調するかのようにみえる。それよりはるかに数は少ないが、左弦の相手は混合兵種であって、それぞれが一顧師団に相当する戦力を有し、策もなく好き放題に暴れるので、かえってやりにくい。毒や炎の特殊攻撃をばら撒き、恐るべき爪

や牙で襲い掛かる怪物達はほとんど恐れを知らず、戦場に出てきたというよりも、無我夢中で空腹を埋めようと、個人的に餌を取りに来ているかのようである。

左弦は大苦戦し、ついにピサが部隊を率いて、最も苦しんでいる左側の部隊を支えるのを手伝う。化物退治には慣れ親しんでいる彼は臆することもなく敵の真っ只中に突撃し、味方を唖然とさせる。これにより発奮した兵士達、特にビスタンやイムは彼を救おうと必死になって犠牲を省みなくなる。目の色が変わった小さな群に恐れをなした怪物どもは、統制されていないが故に士気というものに欠けるから、次第にどのように戦ったら良いかわからなくなる。もはや飼い主である指揮官の声も届かず、第一軍団長が深入りして敵の大将を討ち取ると、離散してしまう。左弦はそれを追わずに弟の部隊を助け、敵の左翼から崩して敗走させ、アンガルストまで追いかけていき、激しい攻囲の末、ようやく地上で初めての拠点を得る。しかし損害も大きく、今まで増える一方であった彼らの兵数は著しく減少し、負傷者もかなりの数にのぼる。

休んでいる暇はなさそうであるが、短期間で必要と思われる準備は全てなさなければならない。対する相手に特殊な兵種が出ても対応できるような戦法が教えられ、すぐに状況に合わせられるように、軽量の交換武器を各兵士に支給する。地内に増援の願いが出され、それはある程度叶えられたが、兄弟の思っているほどではない。安全な穴倉で暮らす人々にとって、自分達のために命を賭けてくれている兵士といえど、すでに地上に出てしまった者達に対する、ある程度の無関心さの現れであろう。兄弟はそれを如実に感じても別段不思議とも追わず、お互いに目を合わせ、軽く頷きあったりしただけである。新しい者は古い者に混ぜて教えさせ、アンガルストを右弦軍団に守らせる。その大将にハーン・サイバルが任命され、ラスはピサの参謀として左弦につく。

遠征軍は第一から第三の軍団でアムプラの流れを渡河し、ヴュイタマの街を制圧するために進撃する。兄弟はいつまでも大国と無謀な喧嘩をするつもりは端からなく、エスパイアと講和を結ぶつもりであったから、南方の権威であるこの大都市を落とすことで、それを力づくで不利な条件無しに受け入れさせたいと考えている。ヴュイタマは城塞都市ではなかったので、集まった敵兵士は急造の陣地に大軍を並列させる。北圏交正軍は書面で以下の内容を簡潔に伝える。

『我等は貴国の侵略を憎んでいないにも関わらず、攻撃されたがゆえに自衛の意味でこのように入り込んでしまっているが、それは本来の目的に添うことではない。貴軍との友好が確認されれば速やかに退き、一時的に押さえたものも慎ましくお返しする準備が整っている。我等は、同胞のような一帯の国々と地内の人々を巻き込んだ一連の悲しむべき戦乱を招いた張本人、人の命を恐るべき術で搾り取って邪悪な生物に与える、気の狂った罪深い悪魔を地に還し、再び我等の平和と友好を打ち立てたいと考えている。

それは地内に吹き込まれた巨神の意に適うものであるがゆえに、我等はいかなる犠牲も恐れず、それに当たる者は、決して無傷で済まされることは無いと断言できる。願わくは、我が軍を共に助けていただきたい。貴国とヴィムディンゲルゾースの友好は尊重されるべきであるが、これは国と国の争いではなく、人類と個人的な悪の戦いであるから、緊急的な例外措置としてかの国の首都に攻め入ることは正

しい心をもつ誰にも許されるだろうし、そうして得た莫大な誉れと、貴国と地内の友好関係は、貴国の更なる発展にとって推薦に足る恩恵となるはずである』

敵は予想通りこの手紙を破り捨てて届けに行った者に石や罵詈雑言を浴びせたので、兄弟は整えておいた作戦通りに声の無い合図を出し、部隊を密集させながら隊伍を組ませ、二根土ほど後方へゆっくりと退き、相手の侮りを強めさせる。街は守るのにあまり適していない地形なので、敵は数が多いことに自信をつけて主軍だけが攻めてきて、他は密かにパンムリスの森に隠れながらアンガルストを奪還しようと企む。

斥候が、敵の指揮官がエスパイアでもかなり有名な剣の使い手、ビルスボーン・メンジキルニであることを伝える。小柄な黒い姿に金色の鎧を着た勇壮な総督が彼との一騎討ちを宣言すると、司令官の手を煩わせるまでも無いと、剣の道では負けず劣らずの自負心がある二人の将軍長が名乗り出る。本当の意味で強い相手と巡りあい、自分の力を誇示できる機会はそう多くないので、女騎士も砂魚の戦士も全く譲る様子が無い。ピサは部下の勇猛さを嬉しく思ったが、第二軍団には密かに別の仕事をやってもらいたいと思っていた。そこでマイザブルには、既に彼が地内に収まりきらずに最強の誉れをいただいていることを考慮に入れさせ、英雄としての名声が先行して剣技においても類稀であることはまだ相応に理解されていないと思われるイムに、今回は機会を譲ってもらいたいと仲介する。

難しいことは何一つわからぬ、という口癖をただの謙遜であると感じさせるようなマイザブル・ビアツは黒猫の目配せで大よそのことを理解し、必要な準備のために天幕を出る。イム・リバオヤは勇んで兵を連れ、数倍の兵力を持つ敵の前に臆面もなく出ると、堂々と一騎討ちを所望する。敵指揮官は相手を女と侮って出てこなかったが、イムは逆上せずに淡々と、肩をすくめるように相手の気弱さを指摘する。女と思って侮るからこちらも侮って戦う、すると我が実力に相手も気づかざるを得ず、本気になる。しかし、我はまだ折ろうとする雑草の茎をそっと掴んでいただけであって、そこにちょっとした力を加えれば決着はついてしまう。かように、我が実力のことはもちろん、己の弱さをも知らぬ者が無数にいるし、しかも名声とは間違った形で広がることも多いから、別にビルスボーンの事例も不思議ではない。我も弱い相手の血で剣を濡らさなくて助かった、後方で自軍の勝利を見守るとしよう、などと大声で嘲笑い、無防備な背を向ける。これには敵指揮官も頭に血がのぼる。部下は彼を必死に抑え、一人の甲虫のような巨漢が代わりに出る。

「名も功績も、女ゆえに甘く与えられたことを知らぬようだな。己が力だけで数多の戦場を拓いてきた方の真の武勇を損ねるような雑言など、我が剣で切り捨てよう」

「戦場はゴキブリや毛虫の暇潰しではない」イムは相手の出方を待たずに切りかかり、しなやかな一本足を支柱として体躯全体を捻ったり回転させたりして細腕からは全く想像できないほどの素早く痛烈な剣激を浴びせていく。左から振りかぶって相手の盾をかち割ると、すぐに右から腰の反動を使って切り返し、相手の自慢とする堅固なチキン質をも柔らかい肉と同じに扱って、胸部から上だけを少し斜めの切り口ではあったが、きれいに跳ね飛ばす。「…次は？」

ビルスボーン・メンジキルニは毛長鼻長種（共知に分類されない犬者種にはこれと栗犬者、粉犬者といった多くの種類がある）であったが、その筋肉には脈が浮き

出ていて、まるで皮膚が張詰めすぎたことで毛孔から抜け落ちてしまったかのように、禿げている部分が多い。目は真っ黒く淀んでいて、しかも瞳の中まで血走っているように、何かの筋が浮き出ている。両者は激しく打ち合い、互角のようである。特に、その速度はお互いに全く引けを取らず、一人は鋼のように鍛えられた筋肉から、もう一人は弛まざる鍛錬と才覚ゆえの技巧からそれは繰出されていくが、体力的には明らかに男の方が優れているように見える。

しかしながら女傑リバオヤの実力とは、その持久力にこそ真価がある。彼女は最も優れた評価を受けるであろう踏破家のように、人々を救うために様々な局面で数多くの苦難に耐えることを余儀なくされ、一つ残らず克服してきたのである。それに比べれば戦場で自分より弱い兵士を機械的になぎ倒してきただけの豪腕などは障害のうちにも入らぬ。犬が疲れ始め、彼女の勝利は突然に濃厚になり始める。敵の副官が怒号で兵士を進ませたので、イムは舌打ちしてあきらめ、自分の部隊の方へ退こうとする。しかし、丘と林の陰から回りこんできた第三軍団が一騎討ちの行方に夢中になっていた敵の左翼に突撃し、敵は部隊を二分させて対応することを余儀なくされる。このことは元いた指揮官の両方を驚かせたが、最も驚いたのは味方の方である。

「ピサ、あんた…　私を信頼してなかったの」

「援軍が来たくらいで気を良くし、そのきれいな項を見せるとはな！」ビルスボーンは呆然とする女の背中を襲って肩口から振り下ろし、己の腹に、真横に冷たい刃を埋めこまれる。女騎士は振り返りもせずに武器を構えて軽くバックステップしただけであったが、無情に実力の差を示した相手の死に注意を払う余裕もなく、機兵で波状攻撃をかけて敵を翻弄しながら隊伍を崩そうとする味方を眺める。だが、もちろん彼女はすぐさま我にかえり、自分の兵士と援軍に自らの勝利を高らかに宣言する。味方は大いに奮い立ち、倍の兵数の敵に果敢に突撃していく。

敵はメンジキルニを失った痛手にも関わらず混乱を収拾し始め、いくつかの部隊に正しく分かれて遠征軍に当たろうとしたので、戦闘は激化していく。二つの軍団は徐々に近づきあってお互いに支えあい、ようやく敵を退ける。だが、彼らにはすでに追撃する余裕はなく、負傷者を回収して引きずるように陣に戻っていく。

だが、本陣に待っているはずの味方の姿がない。再び唖然とする女騎士に、剣豪が笑って教える。

「リバオヤ殿、拙者とて事情をよく知りませぬが、ここに味方の望まれぬ残骸が転がっているわけではありませんので、指令の無いうちは、陣を守るためにここにいるのが我等に与えられた命令であると考えましょう。…あなたが出かけられた後に、御大将は拙者にかくのごとく言われました。敵の指揮官に第三軍団長が勝てると思うからこそ危険が感じられる、一騎討ちなどは子供の約束に過ぎぬ側面があるから、速力を活かし、敵が高貴な戦いを台無しにしようとしたら遠慮なく側面を突いてもらいたい、と。また、我等の武勇がいかに優れようと、状況は楽観視できない、それゆえに勝利は勇士の美酒となろう。我等は状況に即した行動を取らねばならぬが、各軍団長を心底に信頼しているので、不測の事態にも全く心配せず、自己の最善を尽くせる、とも」

イムは納得しつつも、これには彼の弟の入れ知恵も多分に働いている、なぜなら黒坊主だけであれば

とっくに作戦をすっかりぶちまけてしまっているだろう、あいつはバカ正直だからな、と皮肉を浮かべて笑ってみせようとする。性根の真直ぐな剣豪は、友人とはいえ、自軍の総司令となっている人間に対する言葉にはあまり相応しくない彼女のわざと曲げられた感情の底を無理なく見とる。

「確かに、その一見して欠点のように見える要素は彼の掛け替えのない美徳でありましょう。貴殿は、ピサ殿を本当に好きなのだな。優れた女性でもある貴殿のような人物に愛されたあの方は、本当に幸せだ。拙者とて、貴殿があまりにも優れた張り合うべき勇士でなければ、と思ったことは否定できぬよ」イムはあまりの驚きを克服するために深呼吸を一回し、誤魔化し様もなさそうだと観念したのか、否定もしない。「それで、弟殿は？」

「いや、あの方に関しては…、故郷で共に戦った時も、何を考えているのか検討もつかなかった。少なくとも、我が軍の勝利のためにその英知を働かせてくださっていることであろう」彼の言うとおりである。ラスは戦況を見計らって兄に混戦の敵味方と街の間の低地に潜むように指示し、自分は第一軍団を持って敵の別働隊を待ち構えている。彼は一人で率いていることを良いことに、猪突猛進型の兄ならば難色を示したであろう、幾重にも仕掛け置いた連動の罠で敵兵数を十分に減らしてから接近戦闘に突入している。それでも相手の数が多く、ラスは罠の作製に術費をかなり使っていたのでビスタンに頼る他なかったが、この瘤取者の強さに関してはすでに言うまでも無い程なので、敵は多大な被害を出して敗走し始める。ここに、この優勢に上乗せでアイバン・クフグ=キャーイの部隊が加わってきたので、追撃は一層に効果を示す。

「さすが、まさか後詰とも連絡を取っていたとはな」と、仕事をとられた第一軍団長が武器を下ろすと、雉猫は片目を閉じ気味にしてぼそりと答える。「…まあね。キャーイ伯爵殿、参謀はどこに？」

胸を張って帰ってくる勇壮な猫の貴族は、城を指差す。「ああ、あの臆病者ならオウチでお待ちかねですよ。自分に与えられた指示はここを守ることだけだ、と言い張るのでね、遠くに戦いの煙が見えるのに…　まぁ、無理を押してきた介はありましたな、こうしてお役に立てれればね。いや、この程度でお褒めいただくのは恐れ多い、もっと前線でこき使っていただいてもかまわぬのですから、この私は」

無論、右の大総帥はその直属に、万が一のときに戻れる場所を確保できるよう、何があろうとも城を守っておくように伝えおいたのであり、このように万全の状態にしておき、かつ、手元にある兵力のみで勝利することこそ彼の策の妙味である。しかし、もしその駒のうちの一つが『より良い自己判断』とやらであらぬ方向に動いていったら…――それでもラスは第五軍団長の機転を誉めそやし、自分の心に沸いた『命令無視、上官批判』といった、戦功によって消され得る小さな言葉を黙殺する。そして第一軍団を陣地に戻し、自分は第五軍団とともにアンガルストに向かう。逃げる敵をさらに絶望に追い込むような、側面からの不意打ちによる追撃という仕事を面白くないと思いつつ為し終えた黒猫も、同じ頃に本陣へ戻ろうとしている。

こうして、街を守る敵のほとんどが壊滅し、新手が出なければ街は制圧したも同然であったが、ラスは胸騒ぎがしたので仕上げを兄に任せて城へ急ぐ。まもなく、脚が速いことだけが自慢の百章将――ギム・フッツ（腿轔（巨大な両生類が這いずる姿。言語を持たぬが念話に卓越し、学者によっては共知に入れる場合もある））――が、拠点が南方から来た術士に率いられた巨人族の

群に包囲されていることを告げる。

敵の国籍は不明だが、特徴からしてエルピルティウスの残党のようである。だとすれば、全く予期しない、というより石橋を叩いて渡るように考慮に入れていては一帯での戦争に参加することなどできないような、不幸な偶然が起こった事になる。すなわち、敵でも味方でもない放浪の勢力は、地内遠征軍が引き起こしたエスパイアの混乱を突いて簒奪しようとしたものであろうが、そうやって当たった小城がたまたま猫達の拠点だったという――何もかもが自分の思う通りになるのなら苦労はしないし、時折こういうことは起こりうるものであると、ラスは頭を振って思考を切り替え、敵が誰であろうと味方を急いで救出しなければならないと思い、至急伝令を飛ばして左弦を呼び寄せ、自分達は敵を牽制するために先行する。

軍団長の感想を聞き、ヴュイタマを守る敵の残りの中にまだ侮りがたい指揮官がいると感じた左弦総督は近衛兵をビスタンに預け、脚の速い第二軍団だけを連れて拠点に急行し、占領には他の二軍を充てる。黒猫の予想通り、敵のマルチーヌ・ヌイプとかいう副官が兵法をいくらかは知っているようで、兵士を適地に配置し、短い間で簡易の保塁を作って抗戦の構えを見せている。第一軍団と第三軍団は急激に動かずに半根土のところに並んで陣を構え、そこから弱いと思われる経路を探り、二手に分かれて攻撃を開始する。

黒猫の脚力と持久力は馬が煽られるほどなので、援軍は半日で弟に合流することができた。アンガルストを包囲する敵はそれほど多くないようだったが、瘤取者の巨漢でもまだ子供のように感じられるような、古代の神話時代から荒ぶれる血筋を残している恐るべき巨人族の姿は、遠くからでも一人一人を見分けられるし、比較対照物がなければ相手に随分近くにいるかのように錯覚してしまいそうなほどである。

「兄さん、ちょっと計算外なんだけど、ああいう連中にこそ使いたい僕の力が、少々減ったようなんだ。いや、はっきり言うと、もう全然期待してもらいたくないくらいなんだよ。中にも、打って出る力が残されてはいないだろうし…」

ラスは兄を焦点にしながら密かに伯爵をその内に入れる。だが、第五軍団長は反省するどころか、むしろ運良く包囲を突破できたことを誇りにしているようにも見える様子で、このように提言する。「我が部族の逞しい祖先は、灰色巨人と秘密の穴を通じて交易していたことがある。ゆえに彼らの弱点も知ると同時に、恐ろしさも良く知っている。こうなってはあまり刺激するべきではありませんな。幸運なことに、右の主力はこのように外に健在ですから、中の者には良く耐えるように伝え、成り行きに任せてみるのも一つの手です。いかがでしょう、お互い高貴な種族の者同志、このような運命論は共感できると思いますが…」

「あんな鈍そうな木偶の坊どもなんぞより、あっちで一戦やらかしている味方の奴の方が、敵に廻せばよっぽど恐ろしいと思うがね」「見たこともないからわからないのも無理はありませんが、左弦総督、奴等は思いのほか素早いのです」

こういった黒猫と虎猫のやり取りを眺めながら弟は思案をまとめ、敵の中に術士がいることに着目す

べきだと主張する――かつて地神の主力兵だった灰色巨人族は、その強靭さでもって地の素梵子を体現しているようなものなので術を全く使わない。南方には北の迫害から逃れた術の得意な樹曼も多いし、彼らは北部の国家に恨みを抱いているはずである。もし相手の指揮官が話せる者なら、古から地方語まで数多の言語を知る自分が弁舌で彼に、味方にできずとも戦いを避けるほうがお互いの利益になることを伝えられるだろう――

アイバンは承諾したが、それで敵でもない馬鹿げたほどの力を持った連中と争い、大志の兵力を減らすようなことになりそうなら迷わず小さな犠牲を選ぶべきだと付け加える。ラスは曖昧に頷き、黒猫に至っては憤慨してほとんど口も利かず、マイザブル・ビアツを連れて臆せずに突き進む。

ところで、ちっぽけな城門を今にも叩き割られそうな状態に陥って恐々としている第四軍は、現場責任者だけでなく、いつもは戦意を低く見られている第一位司教の指図によって各所に兵を配置し、城壁から代わる代わる術や弓で攻撃し、軽装備の者には掠っただけでも一たまりもない、敵の砲弾のような投石を必死に避けながら時間を稼いでいる。ラスの参謀は、尊敬する雉猫と折りのあわないこの男をやはり気に食わないと思っていたし、勇気と明朗な人格でどこを見ても快活な気分になりそうな自軍の指揮官や兵士の中にあって、不平不満をぼそぼそと言う瘤取者を、地位のある人間でなければ叩き出してしまったほうが良いような、例外的な歪のように感じていた。

その点では彼と虎猫の意見は同じくしていて、ハーンが控える愚痴を、地内の貴族は無遠慮に、聞かれても構わないと言う風に捲し立てていた。ところが、それから大した時も経ずにあの男は自分の命令を聞かずに出払ってしまった。その代わりに侮っていた男が、まるで何かの理由があってその優れた部分を今まで隠そうとでもしていたのかと思われるほどに、立派な部下、いや、優れた指揮官として働いている。

雉猫に腹心として扱われている指者の青年は思い返す――このハーン・サイバルとて、確かに伯爵が罵ったようにしがない元山賊であって身分はないが、人間としての誇りと総督に対する忠誠心では誰にも負けはしない。彼に胸倉を掴まれて臆病者と罵られた時には例え勝てなくとも決闘を申しこむべきだと思った。だが、司教が遠くから全てを見透かしたような眼差しで我が目を捉えたとき、『お前の目的は、こんなところで瑣末な心しかない男と争って費やしてもいいような、そんなに小さなものなのか？耐えがたいことにこそ耐える意義があり、それが明日の成功を呼ぶのだ』と言われたような気がして、ぐっと我慢したのだった――指者の青年はフアンホ枢司教に対する見方を変え始めていて、包囲されて以来まともな休息を取っていない第四軍団長に自ら食事を運ぶ。

「これはこれは参謀殿、痛み入ります。しかし、物は食べられれば良いと言うものでもなく、美味しいか美味しくないかということも、自然にそう思わされているだけのこと。言ってみれば、自然に対するちっぽけな反抗心のようなものが、断食という行為の源です。これも修行。無論、そういう思ってもみないような口実が、貴殿から差し出された別段有り難くもない下賤な食事に手をつけることから私を遠ざけてくれることを、私は豊穣によって真の馳走をもたらす神に感謝することも忘れないようにしなければならないでしょう」奇しくも彼の話し振りには邪悪の森に住まう猫の賢者とそっくりな語り口があ

ったが、相手の青年はそこまで比較対照できるほど彼らを良く知ってもいない。

「なるほど…　いや、こんな粗末な保存食でも、今の困窮する味方にとってはご馳走です。一食でも部下に分け与えようと言うお気持ちはありがたく頂戴しますが、このような状況下にあって一筋の光明となるのは正直なところ、軍団長殿の、いや、優れた枢司教殿の英知に他なりませぬ。元気をつけていただかねば。兵士達も心配しております。何しろ、敵の統率者が、強力な兵士を連れる必要がないのではないかと思われるような恐るべき破壊の術を使ったときも、あなたのそれに勝るとも劣らぬ防護結界がなければ…　ラス殿の術の技術に感服したときと同じくらいの気持ちで、地底の御使いのようなお力を持った貴方にも尊敬の念を禁じえません」

「各能力が相互補完しあうような偉大な人間の欠点とは見えにくいもので、それはあの優れた青年にも言えることである。彼は人を見る目という点では一般的水準をそれほど超えているようには思われず、貴殿の責任は大きすぎるものだと言えます。つまり貴方には、地位相応となるまで、まだまだ長い修行の時が与えられるべきです」ハーンは半ば、嫌いな人間に譲歩するような気持ちで言葉を並べたのに、遥かに洞察の次元が異なるラップァはそれに箸もつけないという風である。気分を害した指者は適当に言い繕って去ろうと思ったが、思い直して、謙虚な気持ちで司教と会話を続ける。

よく聞いてみると、その言葉には刺があるように感じられるが、実はその刺とはすでに自分の中に刺さっているものであって、彼はとてつもない慧眼で名医が患者に対するようにそれを鋭く見出し、軽く触れて見せるだけなのである。彼によれば、生まれてから改めて刺さったものだけでなく、地の上で循環する肉体、魂には、前世からの刺もあるという。そうやって刺だらけになった自らの心に気づかず、人は他人をも同様に傷つけようとする。司教は対話と教えと行為によってその刺を少しずつ抜いていく。ハーン・サイバルは地神の信者としてはあまり優秀な方ではないが、気高い人格者としてのフアンホ・ラップァ・マーヒに心底から敬服するようになり、今は難しくとも、自分の尊敬する二人、猫の青年と瘤取者の司教はいずれ本当の意味で理解しあうだろうという明るい展望を持つ。先回りして述べるならその予測は預言に近しい優れたものであったと言えようし、それも一重に司教の教えがあってこそであったのだろうが、それゆえに一層、彼の行く末が惜しまれる――

ところで右弦参謀は外にいるウムポ・ルサを見たことがあるにも関わらず、あまりにもその容姿の雰囲気が異なる上に、普通に考えて、あの化猫がこんなところに居るとは思われないがゆえに、見分けることができていないことは明白である。

類稀なる恐るべき梵子術者は白い毛並みよりもさらに白く光沢を放つ不可思議な力を宿す材質で作られた奇抜なデザインの胸当ての下に、長い襟襞のついた格子縞のローブを着ている。片目には眼帯のようなものをつけているが、これは彼がコレクションしている虚品（梵子科学技術で造られた品物）の一つであって、目を隠すことでより一層見えるという現象を体現し、相手の心理や能力、温度、果ては対象を構成する細胞量まで数値化して装備者の頭脳に提示する。あの襤褸しか纏わぬ、ある意味では隠遁の賢者に相応しい様子だった彼は今や靴にまでも気を使っているようである。それは入念に靴墨が塗られて手入れの行き届いた伝統的な上げ底ブーツで、つま先がくびれて上に反り返り、四角推型の飾りがついている。踵には小

さな車輪のようなものがついていて、飾りではあるが、歩くとくるくる廻って梵子を吐き出し、歩行に使う労力を僅かに減少させてくれる。これは三重頭の山羊革がふんだんに使われ、混沌期の魔貴族の紳士達が愛用した当時からの高級品で、今ではその特異な芸術性も相まって計り知れない価値がある。

被り物も優れた代物で、額から耳の穴を隠すくらいまでの幅で巻かれた金属の鉢巻から支柱が数本出て、頭の周囲でふらふらと上下に動く防御用の小板を支えている。一見して奇妙なアクセサリーに過ぎない弱々しい構造だが、小板同士が連結して強力な防御結界が作製され、頭部が重要極まりない機関となる生物の急所の一つをあらゆる攻撃から守ってくれる。他にも多数の怪しげな品を身に纏っているようであり、例えば太くてごつい右の薬指にはある莫大な力を秘めた指輪が第一関節の皮膚の中に埋め込まれ、その部分が生まれつきの骨の奇形であるかのように盛り上がって見える。しかし見ようによって彼の様子は、満身創痍の世界を教えだけでは何も変えられないと悟り、自らの知の権威を教えた者の力を借りずに実行で示そうとする最も立派な意味での賢者のようでもある。

兄弟は一瞬早く兵士達を後退させ、英雄的な生き方の中で忘れかけていた暴虐の父をまざまざと思い起こさせてしまうに足る、化猫流のほんの挨拶のつもりだったのであろうが、目の前の大地を何気なく引き裂いた地割れに仲間を奪われることを辛うじて防ぐ。

「…あの野郎…　あの、野郎！　陽の下に出て来れないような蛞蝓が、意味もなくのこのこ森から出てきやがって…　ラス、お前のことがどうしても恋しかったらしいな、あの曲者は。

邪魔はさせん、もう貴様なんぞ俺には何の関わりもないんだ、その薄汚い姿だけでも見たくないというのに、せめて殺さないで済ませてやったと言うのに」

「ここは僕に任せて。父さんが何を考えているかわからないだけに、消耗は避けたい。お兄も僕もあれから更に強くはなったが、灰色巨人だけでもてこずるのに、あの人を敵に廻したら、拠点で休ませなければならない状態の全軍の壊滅は免れない。それはわかってくれるだろうね」

化猫の出現はあまりにも不気味であり、せっかく懸命に積んだ石を全て崩してしまうような無慈悲と狂気の破壊を意味しているような気さえする。ラスは内心の戦慄を巧みに隠して柔和な表情で父に近づき、恭しく礼をしようとする。それより相手の方が先に動いたので、思わず雉猫は仰け反る程に驚き、武具を掴んで歯を食いしばる。だが、その次の驚愕の方が別な意味でもっと大きい。ピサも何事かと急いで隊を引き連れ、弟に並ぶ――跪いている、ウムポ・ルサが。彼の軍団をそれに倣わせて。

「哀れにも冗長しすぎ、自分達だけでは滅ぶことすら困難になった数多の生物社会には、誰もやりたがらないがぜひとも必要なことがございます。そのような、面倒この上ない外科手術といった作業を引き受けようというゴミ回収業者にも似た素晴らしい心意気に惹かれ、このウムポ・ルサ、馳せ参じてまいりました。北圏交正軍総督ピサラス閣下、この志小さく地神すら恐れぬほど力だけが巨大な我等を、その志大きく力は弱い軍団の端に加えていただければ、真に幸いでございます」

ピサは恐ろしい形相で、あまりにも無頓着な表情を浮かべる化猫の内心の薄笑いを今にもかき消してやろうと飛び掛りそうになる。弟が彼の窮地を救う、それは悔しいかな、幼少期の軋轢が蒸し返して抑制が効かなくなった当の兄にも、救いの一言と認識される。「兄さん、感動にふけるのはわかりますが、

父上の御前ですよ」

ピサは目を伏せて灰色の空を軽く仰ぐ。そういえば地上の昼の空をあまり意識してこなかったが、ずっとこういう無味乾燥な色ではなかっただろうか。それは確かに豪雨や雲や日照りや、その激しさや美しさ、そしてそれを運ぶ風などに彩られてはいた。しかし、自分の心には常に代わり映えのない遥かに高い樹木の葉のざわめく重なり程には強い印象を与えなかったから、どれもどうでも良い景色であって、その象徴的な様子をたまたま今の上空が宿している。

心配しながら弟も兄の目線を追い、同じような認識を得る。彼にとっての思い出は地内の星空のほうが強いようではあったが――ピサは顔をゆっくり下ろし、しかし弟がするようには体までは折り曲げず、下賤な者を不適に見やる王者の眼差しで、光彩が黄色を帯びる黒目だけを父に注ぐ。

「汝の従軍を認めよう。汝の功績は地内の噂で聞き及んでいるし、その部隊の兵員の独自性からも第六軍を考えるに足るであろうから、その軍団長として尽力するが良い。その間に学ぶことも多かろう、例えば森の中にしばらくの間とはいえ篭りきっていたがためにリハビリも必要であろう。様々の常識を得、我等が軍団の強さと遠征の意義深さを知ることもできよう」彼は後ろを振り返る。「我が同胞の偉大なる力を宿した勇士諸君。新しく心強い仲間の着陣を祝い、異邦の作法と哲学による表現に、我等が地神の寛大を示そう」

ウムポは何も言わずに両目を嫌らしく細め、赤い口を少しあけて舌先を鼻につけ、唇の両端を下げて黒猫を見やっている。しばらくそのままで鋭い三角の眼で睨む長男の視線から逃げずにいたが、何事か思い出したように、急に後ろを振り返る。

「…先ほど閣下から突然の、狼狽するしかないような光栄極まる紹介をいただきましたが、私ごときがそのような大任をどうして受けられましょうか。しかし、閣下からそのような信頼を示していただけたことを無碍にお断りすることもできませぬから、一段とその職務に相応しい人物を推薦させていただきます。希代の英雄、スパイルト・チルグ殿でございます」恐るべき術士が上半身を折り曲げたままに立ち上がって左腕で差し示すと、紹介された、既に一際巨大な容姿で誰の目も引かずにいられなかった灰色巨人が前に進み出る。彼が半歩進めただけで地鳴りがするかと思われるほどで、それはすでに一般人類種にとっては化物の領域に達しているといっても失礼にはあたらなかっただろう。さしもの怪物的な才能をもつ兄弟も、口を半ばあけて、その不遜な肉体と馬鹿げたほどの腕力を抑えきれぬように肩を揺らして荒く呼吸する巨人を黙って見上げている。

「この方こそは、あの広大な無意味さのおかげで最も過ごしやすい地域と思われる場所に賢明に留まり続け、自らの王国が最高潮に我が世の春を謳歌していると言える現代の南方の平野、すなわち無政府主義国家の第一人者として、まさに日々血で血を洗うといった活動をなさり、真の知性にも勝る肉体の予感によって、来るべき浄化の戦いに備えて力を培ってこられたのです。彼以外の同胞はみな、偶然と自らの僅かな特性、例えば卑屈であったり若干の強さと引き際であったり、不思議なタイミングで芽生えた友情なりで彼と争いながら、挽肉と挽肉が叩き潰しあって粘土のごとき一つの塊になるように、その中に混じり、一体と化した結果、ここに立っています。彼らはどのような理由であれまさに運命による

襟抜きの者達でありますし、無数に殺戮された者達に推された代表者であり、今、あなた方に受精することのみを目的としてきたとさえいえるのです。これが、彼らの漲る戦争への決意です」化猫は再び目を細める。黒猫はビスタンやイムといった旧来の、心を常に打ち明けていたい友人がこの場にいなくてよかった、こんな頭のおかしい奴と若干でも繋がりがあるということを彼らに再認識されるのは面白いことではない、とふと思ったが、それ自体があまりにも小さい俗な考えだと思って、頭を軽く振る。

灰色巨人はリーダー格でも喋れないようであったし、どうせウムポの操り人形であろうとラスは溜息をついたが、仲間を食事の対象として見なさないかどうかは大いに懸念の余地があったので、油断なく怪物どもを観察する。その父親に匹敵せんとする知識の倉庫では、こういった怪物が暴れた時にどのように対処したら良いものかの検索作業が続けられているが、彼が独自の統計学によって弾き出した結論のように、そもそもそういうことが起こらないことを前提にしなければ、夜もおちおち眠れたものではなさそうである――濁声にも洗練されているようにも聞こえる話し手は、アンガルスト城を指差す。

「ここに辿り付くほんのちょっと前、私達は荒野でばったりと巡り合いました。ある大きな出来事とは意外にもこうした形で、心楽しい不意打ちを食らわしてくれるものです。彼は彼の流儀にしたがった挨拶を私に、全力で奉仕してくださいました。あとは、ある程度世の理について知ることのできている方には簡単にお察しできるように、私達の間には何者にも代え難い、一定の密約とも取れる深い深い友情関係が芽生えました。世の人がそれを隷属化とお呼びになるのは全く構いませんが。

しかし、真理の普及には程遠く、その素材にも乏しい人間社会のことを寂しく思い返す時、このスパイルト・チルグ殿と言葉を介さずに話すことは何よりの励ましとなります。世の中を破壊すること、それが正義であろうと無秩序であろうと、概念であろうと腕力であろうと、そのような要求が依然として世の中に民衆と混在し、英雄化し、今にも明日の生活を、隣人を破滅させたいという欲望となって思念の根底を支配し、それら同士が見えざる梵子的な位置で手を取り合い、胎動していることは、まさにそれを産んだ地の意思を反映させているかのごとくに――」

「もう、たくさんだ！」黒猫はついに叫び、武器を抜くことだけは必死に抑えたが、脚を一度振り上げて土を突き、巨人がしたよりも激しい印象を与える。「詳しい紹介は後に征伐が一定の落ち着きを得たときに催す宴会でご披露いただくことができる。早速軍務に就きたまえ、それとも、その点について今度はこちらから長ったらしい講釈を噛ませぬとならんのか」

「いえ、ご心配には及びませぬ、本当にもう、最初に言うべきことは全て出し尽くしすぎ、ご自慢の、私が最も楽しみにしている濁酒の振舞われるであろう秘密会議で、私の出し物がすっかりなくなってしまうことを恐れなければいけないところだったのですから。ところでそれにも関わらず、いわば部隊に属する者の責任として、これは上官にご報告申し上げねばなりますまい、我が部隊が中立的な立場にあったとはいえ、尊敬申し上げる一軍に牙を向いていた、その理由を。

それが敵意からでは決してございませぬことを、どうかその寛大さとやらでご理解いただきたいと願うのでございます。我が部隊にはそもそも崇高なる原初的な使命、偽りの社会を破滅させる意義しかなかったのですから、それほどの具体的な目標もなく盲目的に見出した小屋を寝泊りの場所にしようと欲

したのみにございまして…、我が挨拶代わりの紹介するのもおこがましい、たかだか山一つを粉砕するぐらいの威力しかない簡便な術が、内部から捻出された精一杯の薄い膜で防がれたのを見まして、小屋の中身がなかなか捨て置けない一軍であることを知りました。そこで何とはなく、夢遊病者が何かのきっかけで彼の精神を取り巻く世界とは違う現実世界の状況に即して行動するように、相手様の主力部隊を待つことにしたのでございます。

しかし、すでにそのときは中に入れるような状況ではありませんでして、口下手な私ではせいぜい我が力を善意によって抑えて差し上げることが精一杯でございまして――あとは、必死に仲間に入れてもらおうと戯れに小石を投げて邪魔する者を叩きだそうとしたり、皆様の軍事訓練にそうやってお付き合いしたりするなどの友好的な努力をしながら、暇を潰していたのでございます。意外にお早い御着きでようございました、そうでもなければ危うくせっかちな私の友人達が、門をノックする力を思わず強めてしまうことにもなりかねませんでしたから。ところであのちっぽけな街も、我が同胞――早速このような親しげな言葉を恐れ多くも用いさせてもらう光栄に与ることをお許しください――によってすっかり『はかなくなりにけり』といったところですな。謹んでお祝いを申し上げます」

化け猫が深々と頭を下げつつ、巨人族どもに目配せして何事か命じると、彼らは城の前から立ち退き、固まって待機する。遠くに砂塵が上がっている。ヴュイタマから来たイムの使いから、味方が被害を出しながらも街を制圧したことを知った両総督は、いくつかの短い言葉だけで――それはなるべく父に悟られぬようにと配慮されている――相談し、お互いにやってほしいことを教えあうと、第六軍を右弦に編成して城に残し、戦後処理のために左弦はヴュイタマに留まることに決める。その父親が簡素な指示に大仰な拍手を送ってみせる。「それでは、この私自身、特に何の軍団にも編成されてはいないと思いますが、職務の希望を述べさせていただけるならば、ぜひ、左の閣下のお膝元で働きとうございます。我が術力のみで全ての戦功を取り上げるようなことのなきよう、十分に注意する所存でございますゆえ…」

ラスは唖然として、同じく目を丸くし、次には顔を俄かにしかめる兄の顔と、予想外の提案を示す父の顔を見比べたが、直感的に思案した結果、それが決して悪くはないと合点し、微笑んで同意する。それで兄の不審は弟にも注がれ、舌打ちし、『お前、嫌な奴を俺に押し付ける気か、まだ俺よりはお前の方が御し様もあろうが』という憤懣を隠さない表情で睨みつける。弟はそれに気づかない振りをする。「左には術と謀略のエキスパートである参謀がぜひとも必要だと思っていました。左弦総督の偉大な実力とそれが結びつけば、いかなる敵も恐れるに足りますまい。これで僕も安心して存分に働けます。言うまでもないことですが、既に編成された第六軍の指令権利はこの僕にいただけるのでしょうね」

ウムポは美しい息子ににこやかに、これは本気で思わず知らず微笑んだようで、その無邪気さがかえって相手には不気味なほどである。「その点、もちろんぬかりはございませぬ。軍団長はすでにご紹介差し上げた通り、あのように大変思慮深い方でありますから、言葉は通じなくてもある一定の簡単な音声で通じあうことができましょう。それはまるで将棋の駒を動かすように、文字通り指先一つのことでございまして――あとは用兵法次第でございますから、右弦総督にお任せしておけば安心でございます。

それはつまり、どんなに鍛錬し尽くされた指令系統よりも優れた、左右の総督の作戦会議にも似たる程に洗練された意思疎通となりましょう」

思わず兄弟は嫌そうに目を細めて顔を見合わせ、急いで同時に父に向き直る。相変わらず、薄笑いを無理に引き締めたような、ぞっとさせられる表情で二人を同時に眺めている。黒猫はもはや反論する気も失せてしまい、早くこういったわけのわからない会話に終わりを告げようと、背を向けてさっと腕を振り上げ、出立し始める。

ウムポは指令用の合言葉が書かれた汚い紙切れをラスに渡すと、彼の頭を軽く撫で、本当に優しげな、心の篭った眼差しで雉猫を凍らせるようにする。その時間はお互いに永遠のように感じられるほどであったが、実際にはもちろん、ほんの一瞬である。「それでは、右弦総督閣下」とウムポは言わなかった。「ラス」彼は目を細め、暖かな息子の毛ざわりをもう一度確かめるように自分の手を握り、腰に当てる。「ラス、また会おう」雉猫は父を呆然と見送る。化猫の超高度な梵子操作ですら予見できなかったのだろうか――それとも、できたゆえにだろうか――その別れの挨拶が現実を皮肉に見立てることを。

６、苦みの中核

堅実な、賢明な、至上の、といった形容詞がつく目的への一般的な道筋を、兄弟のそれは全く凌駕し、問題とはしていない。それは簡単に種明かししてしまうと、こういうことになる――主力の左弦が諸悪の根源と定めている女帝を倒す特殊部隊のようにひたすら突き進む。その後を右弦が固めて、邪魔する地上のあらゆる勢力から自分達を守る。さらに偉大な運命を持つものに予期せず投下される運命的な支援としてウムポ・ルサの一団が加わり、莫大な戦力となる。左弦は緊急事態と称して道を問わずに突き進み、道阻むものには自ら避けて通ることを期待するのであるが、もちろんそうはいかないので、いたるところで戦闘の火種を振りまいていく。天才的な軍略家として後世に軍神として掲げられるほどの名を残す雉猫が真価を発揮する。敵を見つけては速やかに蹴散らし、口実を見つけて侵略し、降伏した者の中で見所のある者を説得する――他方、恐怖政治の国家に敗北して散在する勢力を次々と味方にして、彼らにはある約束をして友軍として自由に戦わせ、援助も惜しみなく供給する。

一方、地内には戦況が報告されるだけでなく、水上鏡でするように覗かれる情報網で多くのことが伝わり、そういった約束ごとも噂で伝わり始める。地内の望む以上に混乱した地上の情勢が地内にも不利益を呈する危険があると、俄かに北圏交正軍を連れ戻すべきだという論調が高まる。しかし遠征軍の左右はすでに地内の援助を体内の何割かにしかないほどに膨れ上がっているので、そのような批判にも鈍感にならざるを得ない。例えばヴィムディンゲルゾースの国内で苦戦を強いられている左弦に兵力を供給しつづけているものの大半は、右弦軍団が自ら他国から奪ったものである。すでに右と左は全く別々の軍隊と化し、あまりにも離れた地で戦っていたためにほとんど会うことはなかったのだが、彼らは暗号を必要としない短い単語や適当な染み、冗談めいた落書きの絵が書かれた、たわいもない手紙だけで

お互いの全てを察することができたためにその動きには無駄というものが一切欠落していて、敵勢力には不気味に感じられる。

例えば右弦総督が送ったとある手紙が、破り捨てられたようにして届けるという遣り方で左弦総督に承認されたので、ラスはヨルコンに使者を送り、いつまでも不明に敵対せずに自分達の聖戦に荷担し、地上の正義の誉れを全て手中に収めるべきだと説得する。一方北の地では、邪悪な殺され方をしたために、その復讐をしてくれるはずの他国の戦士にすら襲い掛かって、哀れにもその死後の安らぎとなるべき時間をも暴虐者に提供する大量の亡者の群や、召還され、無秩序な下僕として敵軍だろうが同盟国だろうが味方だろうが形振り構わず襲い掛かるこちらも劣らず多くの怪物どもが主だった障害として、ピサの進軍を阻む。彼は弟と相談し、進路を変えて東の荒野へと立ち入る。

性質はともあれ、実力は大いに期待されていた化猫は、しかしその力をほとんど振るうことなく旅行者のようについて廻るだけで、時折いつもの皮肉やら悪態やらで指揮官の邪魔をするくらいのことしかしない。しかし、後世の研究家も明らかにする通り、参謀によってやる気を削がれ、断念させられた作戦の多くが、軍略の大家であるラスならばしないような、見込みのないものばかりであったらしい。また、彼らがこれほど邪悪のひしめき合う地で敵に連続して会わなくて済んだのは、ウムポが命令系統に従事せず独断で密かに構築している強力無比の広大な範囲を守る結界のおかげである。

こうして迷走するように敵を食い散らかしながら進んでいく左弦はアンサ・ルタムスを包囲。この街の住人の大半は虹蛙者であったが、彼らはすでに無秩序化し始めている国家には見切りを付けて自治体制を取っていたために、ピサに相応の貢物を持たせた使節を遣し、血を流すことなしに従属する。蛙者の長老達は勇士の勢を、世の滅亡を救うために河童神（闇+土+水の教義を持つ古い信仰だが、現代では土着信仰対象の総称として使われる）が遣わしたものに違いないと考え、秘伝の薬草を渡す。それを携帯しておけば、梵子術では治しきれないほどに傷ついていく消耗品である兵士を、医者という前線では足手まといになる非戦闘員の手を借りずに、自分達で戦いながら癒し、すぐに戦列に復帰させることを可能とするから、あまりにも価値の高いものである。

黒猫はこれを搾取せずに、それを隠し持たなかった彼らの如才を底意のない友情の現れであると表現し、右弦から資金を借りて薬草を大量に買い付ける。足りない分は、何か願いことがあればそれを叶えることで代償としたいと持ちかける。すると、蛙どもは浮かない潰れたような顔をぱっと輝かせてぴたぴたと飛びつかんばかりに擦り寄ってきて、お付きの軍団長達は思わず顔をしかめそうになるが、黒猫は笑って彼らを受け入れ、黒い毛並みを毒の体液で濡らす。

「ああ、申し訳ございません。河童様のお子に、我等の毒々しい汗をつけてしまうなんて。好意が余ってこのようなことをしでかしてしまいまいした。どうぞ、この私をお切捨ていただき、お気持ちをお鎮めくださいませ。お持ちの高貴な武器を穢れさせたくないのであれば、断罪の刃をお持ち致します。それは、我等のごとき這いつくばる宿命の、間違いを起こしやすい部族はいつでも持っていなければならないし、そうやって失われる命は部族全体にとっては維持に必要な生贄に過ぎません。どうぞ、お気兼ねなく…」

黒猫は、この種族の卑しさはその卑屈さゆえに発生する印象であることを、彼なりのわかりやすい親

しげな言葉で教え諭す。

「幼き頃よりはるかに強い毒草の絨毯を優しい毛布のように感じていたほどの俺が、どうしてこの程度のことで取り乱したり嫌がったりできようか。この俺は多くの者と親しく交わり、統べなければならぬと考えてきたのだ。それにしても、諸君等の優れた薬草の知識は我等のそれをはるかに凌駕し、いくらかは人よりその道に通ずると思っていた俺も、全く驚かされることばかりだ。諸君等ははもっと自信を持ってもらいたい、そして、我等と共に正しき道を模索していこう」

女騎士は、ピサが弟から学んだような、とってつけたような雄弁を駆使しているのを面白いと思って聞いているだけだったが、彼女よりもっと古い友人であるビスタンは、殻を破り始めている兄弟の真の狙いが僅かに露出しているこの何気ない言葉を聞いて、はっとなる。やはりそうなのか、と彼は小さく呟く。俺はどうするのだ、いや、もうその答えは、俺が坊主に首を掴まれたときからとっくに出ていたのだから悩むことなど何もないと瘤取者は考えている。

その間にピサは部族の悩みを全て聞き出し、彼らが東の山に住む種族に脅かされていることを知り、その討伐を快く引き受ける。蛙と敵対関係にあった手掻者の集落とは激しい戦闘になったが、ピサは行軍しにくい地形に大軍を投入せず、精鋭部隊を隊ごとにわけ、いくつもの集落を同時に襲撃する。彼らには策謀を使わずに正々堂々と宣戦布告をし、勇敢に戦うことだけを指示していたのだが、その単純さがかえって功を奏し、敵はそもそも少なかった部族間の団結の機会を完全に失って個別に戦うことを余儀なくされる。苦しんでいる味方の部隊には後方の指示系統が援軍を出して支える。こうしてほとんどの敵を短い間に逃がさずに縛り上げると、強さと寛大さを示すために、これを赦す。

「我々は君達に敵意があるわけではないが、友人のたっての願いで、争うことを余儀なくされた。願わくは、付近に住む者同士なのであるし、平地に住む部族と仲良くやってもらいたい。そうすれば、君達をできれば助けてやりたいと思う俺の顔も立つのだが」という黒猫の提案を容易く受け入れるほど、問題は簡単ではない。あんな下賤な種族を地神の体の上に残しておくくらいなら、自分達が滅亡し、その命を捧げることでお許しをもらおうとするほうがいくらかでもましである、と彼らは唾を吐く。

「まさに、仰るとおり」白猫が口を挟む。「部族間の歴史に根ざす争いは子供のチャンバラや、性質の変わりやすいどうでも良いような細菌の生存競争ではない。別種同士がめちゃくちゃに混じりあってしまった今の世の中にあって、伝統の集団に対する誇りに命よりも重きを置くということはそれだけで大きな価値がある。その点を総督殿は全く理解できていないようですが…

そこでこの私めに提案がございます。嫌いあう者同士が隣に座りあうことこそが不幸であって、この場合、悪の根源とは互いではなくてその距離そのものであると、梵子学的論法では結論することができましょう。原因さえわかれば解決など容易いこと。この地を離れ、新天地を見出せば良いのです。その冒険は、きっと、あなた方の種の遺伝子を鍛えてくれることでしょう。どのような優れた種も、最初は実にたわいもない、たまたま産み落とされたような奇形児であったのですが、それが追いやられたり失敗したりしながらも必死に迷走した結果、気づいた時には強い自分を見出していた、という具合に進化してきたのです」

ピサは反論ばかりする参謀を黙らせてやろうと拳を握り締めていたのだが、最後の方では森の中で本を読んでいたときのような気持ちになって、口を少し尖らせるようにし、父を凝視している。彼は自然とその言葉尻を拾い上げるように、棒切れのような姿の生物どもに従軍することを薦め、それは全く驚くほどに円滑に受け入れられる。極めて古い時代から地神に仕えていたと言う自負のみがその精神基盤であるとさえいえる手掻者は、かつて我が世の春を謳ったこともあるが、社会的種族の繁栄する現代では隅に追いやられて数を激減させている。しかも、その中でも更に小さな無数の部族に分かれ、結託すべき時代にも瑣末な仲間同士の小競り合いを続けていたために、その滅亡をさらに早めているような節がある。彼ら自身の特質のためにそれは避けられないことのようであったが、どのような種であろうと、生物がこの世を去るときには、自らを構築する有機体の健気な活動の、純粋な生存と遺伝への固執という慎ましくも凄まじい願いを感じ、傷ましく思い、最後の抵抗を試みずにいられない。

突然の侵略者達はまさにその救世主のように彼らには思われ、部族同士は黒猫の一様の家来となることで、一族全体が一つの旗の下に集うという悲願を達したように感じられる。もちろん、この種が一つの大集団としての形を完全に費やすには、あと百年という短い時すらも必要とはしないように、その意志と実行が幸福に彩られた成功に直結するという保証は何もないのであるが。数百の手掻者が兵団に加わり、ウムポは直接それを指揮する権限を与えられる。といっても、この特殊極まる兵種を使いこなせるのは、兄弟の軍勢にいかなる優れた勇士が多数いようとも、恐らく彼くらいのものであった――彼らは蛙との約束を果たしたが、変則的な方法でもあったために、約束の品を手切れ金のごとくに頂戴して早々と送り出される。黒猫も十分な成果を上げたのだし、こんな僻地には頼まれても二度と訪れる必要はなさそうであるから、その点では利害は一致したと言っても良い。

一層に強力になった左弦に、ラスは、北からヨルコンを圧迫してほしい旨を伝える。地内の名を借りてザイマーン地方を独立州としてまとめあげた右弦総督は、彼らの軍勢に特に親しくしてくれる地内のいくつかの国家とだけ優先的に交易し、エスパイアと本格的に争うために東の大国を味方につけてしまおうと考えたのである。彼は異様な雰囲気を醸し出す第六軍を使者に出し、半ば脅しで、優柔不断な議会から妥協的な穏健路線を引き出すことに成功する。ヨルコン合衆国はついに、無理やり同盟を締結させられていた周囲の二国を敵と認識し、地内との友好を再び確認し、自浄能力を失った地上軍に代わって地内からでてきた独立州を、友好国として認める声明を出す。雉猫はこれを、地内から与えられた使命の一つの達成として自ら賛美し、地内と地上の国交回復を祝福されるべきものとして連合院に報告する。

しかし、すでに連合院は激しく動揺していて、彼らの中ではもはや兄弟に対する最初から冷え切っていた好意や友情は完全な意味で猜疑と敵意に変換され、指示外の妙な働きをして力をつけすぎている彼らの先手を打ってその動きを封じ込めるべきだと思われている。無邪気な独立宣言から感じられる意図は、地内の支配階級にとっては操り人形の暴走、新薬の危険な副作用でしかない。彼らは兄弟を自分達の崇高な狙いにはちょっとした利用価値のある、力自慢の勇士であるとしかおもっていなかったのだから今更慌てるのも無理はないが、兄弟は、最初の内から連合院の、いや、あらゆる組織の意義だけでな

くその嫌らしい面も直感的に知り尽くしていたのである。だから彼らの、上院に対するある種の冷淡さを責める権利は長老達にあろうはずがない。そして言うまでもなく、より上手で利用されていたのは紛れもなく連合院の方であった。

だが、彼ら自慢の、蚯蚓が伝えてくれるような土竜の情報網のおかげでまだいくらでも手の打ちようがあると思われたので、連合院はヨルコンとの国交回復を一つの達成点として遠征軍を祝福し、莫大な報酬を約束して彼らを呼び戻そうとする。ラスは、未だ果たされぬサイルゴッツの討伐、エスパイアとの国交正常化を理由に、『これでは真の和平を得たとはいえぬ、あともう少しでそれは達せられる』と、作戦を続行する姿勢を崩さない。次の地内からの通達には、軍は地内の所有物であり、これの返却を持主が迫っているのだから速やかにそれを果たさねば、規則として、英雄が盗人扱いされるというあまりにも悲しい事態が起こりかねないといった内容が書かれる。

右弦総督はこれを一笑に付して破りすて、返事の代わりに、約束していた兵の増員はどうなったのかと聞き返す。そして院の答えはついにこのようなものとなった。『地内の命令に従わぬ場合、いかなる理由があろうとも反逆罪と見なす。よって、帰還するまで一切の援助は凍結する』――これは最大級の脅しであったから、兄弟は粛々と帰ってくるしかないはずである。そうしたら彼らのために最も荘厳な祝勝の期間を設け、遠征軍が凱旋した日が全地内の祝日とされ、彼らには約束の恩賞よりさらに多めに様々の物が与えられるだろう。地内はそういった恵みに事欠かない。名声は院の栄光というオブラートに包まれて人々の心に出荷されるだろう、そして、用済みの役者達は早いところ舞台から降ろされるであろう。

『長期戦となったことは認めますが、それゆえにも一層に苦しいのは戦いに出た我らの方でありましたでしょう。しかし、我等はこの戦を栄誉あるものと考えているので、実際には辛く思ったことは一度たりともありません。地内の歴史と深度と同じほどに深い故郷への愛情から、この度は援助を出せないほどに地内が疲弊していたと考えざるを得ず、地内の敬愛する連合院の裁定を留保します』

この手紙が出されると同時に、ヨルコン北部地域は、異様な部隊を率い、倒しても倒しても薬草で復活する気味の悪い軍隊に侵食される。同盟すると言いながら陰では地内連合院と結んで暗躍しようとしている彼らを牽制するためである。辛い戦の連続を勝ち上がってきた兵士達はもはや百戦錬磨という言葉で表しきれないほどに熟練されており、他国との優柔不断な協調路線を図ってきた国の、数だけが多い兵団では全く防ぎようがなさそうである。

北部の強国も舌を巻いていた、最も合衆国で強力だと言われていたアプンヘッサの城塞都市があっさりと黒猫の手に落ちたとき、当然のごとく、議会上層部は真っ二つに分かれる。とてつもない軍事力の塊として国境の間をさ迷う亡霊のような連中と手を結んで利益を拡大するべきだという声と、伝統的な繋がりを守り、今こそ連合院によってまとまりつつある地内との友情を示し、現在の権益を失わぬように固めるべきだ、という声。民衆の意見も割れ、八州のうち、東部山脈の貧しい地域が新たなる作用に明るい未来の展望を賭け、北の敵を歓呼して迎え入れようとすれば、地内との交易をしっかりと握っている南部、エスパイアとの結びつきを絶たれて従来の交易が難しくなってしまった西部では徹底抗戦が

叫ばれる。ラスは結論を無理に引き出そうとはせず、少なくともまともな反抗はしばらくできそうにないほど混乱した人々を打っ棄ってしまって、エスパイアとの戦争に集中する体制をすっかり整える。

対する方は長い間敵対してきたケチアナイ共和国に使者を出し、彼らが独占してきた地内との交易の一部を自由とする約束で一時的な同盟関係を結ぶ。だが、ケチアナイの兇空(くうあ)兵団は国民の種族比率を反映し、ほとんどが栗犬者か毛長鼻長で、その組織力は乏しく、自らの体内に生まれた時から植え付けられ、仲間を裏切ると爆発すると言う誓いの石の恐怖によって律せられなければ、自分の利益ともなる隣人との共同作業もできない――このようにして半ば強制的に結託した彼らの群を、兇空と呼ぶのである。彼らは大した力もなかったが、そのまま海岸の崖となるバーフェルン山系の険しい地形を利用してエスパイアと張り合ってきたといえるので、外に出て真価を発揮できるとはあまり思われない。

ケチアナイ軍が無理を押して仇敵でもある隣国の援軍となったのは、彼らが神化して崇める犬や狼といった小獣を、かつての猫族が飼いならしてきたという伝承を背景としている。猫達は犬をペットとしてむしろかわいがっていたくらいだったのだが、犬の系列にあるこれらの種族は、愛玩であろうとも、自分達の神が従属や支配に屈し、文字通り尻尾を振らされてきたことに我慢がならなかったのである。しかも、一般人類からすると随分と複雑に思われることだが、彼らは忍従につきものの苦役を美徳と感じても、快楽による心からの屈服を、古い猛々しく狡猾な祖先の優れた血を薄める忌まわしいものとして認識するらしい。対して猫族はよく知られているように、毛色や大きさの違いはあれど、二足歩行と四足歩行を両立させ、かつての祖先の姿を変える必要もない最も優れた要素としてほとんどそのまま持ち込んで人類種の仲間入りをし、単一化された血族として現存している。それは高次元において最も血の力を発揮しやすいと思われる彼らが、あまり難しく考えず自由気ままに進化したことによるのであろうが、そういった面では、犬族はかつての粗野な性質を誇りとする知的――といっても、知性を自ら否定しているので一般人類種の仲間には入れられそうもないのだが――な人型系と、祖先のちっぽけな姿の二派だけでなく、大別の中にも多くの分類を設けねばならなくなってしまっている。これは血の捻じれ、血の悩みとも表現できる現象である。

犬族は歴史を重んじ、思考は古代に還っていく。そして最も原始的な姿をとり、瑣末な限界ある知性を捨て去らせ、退化すると言う究極の進化を遂げたように彼らには感じられるあの小動物を原初の状態、すなわち神の写しだと考える。それはある奇妙な天空論で、夜空に散りばめられた光の色や大きさがそれぞれの光源の距離を反映し、最も遠い星の光を見れば宇宙開闢の状態を知ることができると言う創作的な学説の概念に似ていて、極めて興味深いものではある。しかしこの世界においてその最もらしい論文が事実と全く異なるように、アナケーの説が信じられている現在では、最も科学的な面から言うと、過去を継続する小動物と、それといくつかの特徴から同類項に置かれると思われる人型生物種の関係を犬族のするように考えることは、そのような『興味深い』という印象の域を出るものではない。歴史に無頓着で、あの兄弟の活躍ですら後世においてほとんど墓碑とともに置き去りにし、何となく血の中に覚えてはいるが、現在の自分と過去はあくまで赤の他人という顔をする猫族の冷淡さ――そのためにこの物語の作製も、著者を他の種族に求めねばならなかった――つまり彼らの高貴性を低める性質である

と言われる思考の持ち様は、それに比べるとむしろ真実に対して従順であるとさえいえそうである。ともかくはっきりとしていることは、犬族の猫族に対する一方的で激しい嫌悪感はこのように深いところに根ざしていることである。それは久しく歴史の主要舞台から姿を消していた猫者の率いている軍団に、闘争心を掻き立てるには十分であったのだろう。

ケチアナイを敷地だけ広い無味な地に住む田舎者と決め付けていたラスも、兇空の群が自分達に牙を剥いていること、しかも、それが油断ならぬ様子であることを直ちに察知する。彼は兄に頼んで、これを自分の戦いの邪魔にならないようにしてもらおうとする。そのときの手紙には『吹き溜まりになっていた白い木々の間の、青と赤の渦巻く小石の中に…(ここで、面倒になったか時間がなかったのか、文章を書くのをやめてしまったらしい)』などとよくわからないことが書いてあるだけであったが、黒猫はすぐさま行動を開始し、参謀にアプンヘッサを任せ、東部の貧民を炊きつけ、共に不正な商法で財力を溜め込んでいると噂されるガッポの街を落とすように指示すると、自分は第一軍を連れて西へ急行する。

さて、ここで気になるのはこういった兄弟の手紙の暗号ではないかと思われる。機密文書と言うにはあまりにもお粗末なそれは実に無造作に扱われたので、ゴミの中から意外にも多く発掘されているのであるが、多くの研究者の熱心な努力にもかかわらず、未だ完全な解明には至ってはいない。いや、それどころか全く理解されていない――様々なオカルト的見解、アナグラムの論著が後世の書店に居並ぶ――のである。広大な地で多様な局面に連続して当たることを余儀なくされた兄弟が、息のあった戦いを展開できたのは間違いなくこの手紙のおかげであったところが大きいはずであり、それを解明すれば多方面から有意義であると思われたのではあったが。

しかし、歴史的な巡察だけでなく、梵子的な方法で現実を垣間見るという創作物語を材料の一つとして考慮に入れることが許されるならば、本書独自の以下のような推論を呈することができる――兄弟はそもそも暗号などは使っておらず、そのようなものを使ってしか意思疎通もできないような心に強い絆を持たない連中を嘲って、父とともに暮らした陰鬱な森での悪ふざけの延長を、より洗練され、大それたやり方で演じていたのではなかろうか。もしそうなら本当に、その内容は思いついたことを思いついたように書いているだけであろう。しかしそれは、どのような未来の環境においても汚れず、かつての姿を取りつづける記憶の清廉な泉の、今ではおおっぴらにできないような懐かしいものをお互いに捨ててはいないことを認め合い、自分の心底を判る最大の伴侶たる人間と一つになって精神的な毛繕いをしあうための重要な媒体でもあったのかもしれない。それは絆の梵子的な具現化であり、そういった見方でみるならば、一連の手紙における繋がりのなさにはかえって興味をそそられる。

彼らはそもそも自分が何をしたら良いのか、何をしたら相手を助けられるのかをわかるのには何の助けも必要としておらず、手紙は行動のきっかけを与える一つの実に簡便な信号弾であったに過ぎないとしたら、敵はその手紙のタイミングさえ計れば、何らかの危険を察知できるかもしれない。意外なところにこの伝達の盲点があった――…などと愚かにも早合点できるはずもない。どんな行動がどんな間合いで起こされるのかまでわかるならそもそも苦労などないのである。

つまり、歴史が結果的に描くように、彼らの戦略を凌駕することは極めて難易度の高いことであった

ので、軍事大国として周囲を威圧した人々の誇りが、ついに、地方からあの男を呼び寄せる。ヤンゴスギルブビツ・ラックソルバーケ新征東大将軍の着陣を聞いたとき、ラスは唇を真一文字に結び、そうか、ようやく着たか、とだけ言ったらしい。その言葉通り、彼はこの男を面倒な相手だと思いつつも、兄とは違った意味での、自分の得意分野で張り合える好敵手とも感じ、その登場を待っていた節がある。ヤンゴスギルブビツは、敵である兄弟の目から見てもお粗末に感じられた部隊編成を急いで改善し、要所をしかるべき手勢で守らせる。また、身分が低くとも国を愁う有能な将を役立たずの貴族と交換し、多くの人間の不興を買ったが、急務の事態が煽る彼を支持する風を受けて有無を言わせず、新たないくつかの軍団で右弦の拠点を攻撃したので、ラスも部隊を分けざるを得ず、一挙に敵の王宮を掠める事は望めなくなる。

雉猫によってこじ開けるように拓かれ、『アギロ・ザイマ(拡大する苦悩を溶かして癒す地下水、といった意味の造語とザイマーン地方の名を掛けている)』と名づけられた地域は、地内の独立州、地上の独立国家という曖昧な位置付けに甘んじているが、この兄弟の軍団が家とする地域と、その浸食を受けた諸国の争いはこうして一層の長期化の様子を呈し始める。左弦も何度もこの基地に入港して整備を受け、犬どもと激しい戦闘を繰り広げて、バランの要塞を果敢な突撃で奪取し、それで満足せずに、明らかに戦意を失った兇空兵団をしつこく追いかけていく。エスパイアの征東大将軍は同盟国の情けなさに憤慨しながらも、彼らを再び戦いに参加させるためにこれを助けようと北部に一軍を派遣するが、第一軍団長は間髪入れずに最も頼りになる小隊、すなわち千章将エルクソン・アフナース、バニヤ・ジフイヅゥ、そしてあの身固めの得意な栗犬者といった者達の部隊を繰出してこれを防がせ、邪魔をさせないようにする。これに南から、ラスの指示で第二軍の一部も応援に駆けつけたため、ピサは簡単にケチアナイの国境まで辿りつき、執拗な追撃で敵をすっかり疲弊させる。

西海岸の絶壁から出てきた軍団はすっかり役立たずになってしまったように思われ、ラックソルバーケ大将軍は新たな味方を、大それた召還術の成功を期待外れにも統制の効かなくなった国内の様子に替えている北東の国家に求める。彼がもはやヴィムディンゲルゾースの組織力に何の期待も持っていなかったことは、使者に渡した手紙に、『お互いのため有用に使うので、軍勢を輸出してくれ』ということが書かれてあったことからも見て取れる。その手紙が上層部に届いたかどうかは怪しいところだが、ともかく、命令系統がすっかり駄目になって久しく、かなりの軍事力を持ちながらもそれをどう揮えば良いか検討もつかなくなっていた各部隊の指揮官は同盟軍からの申し出を大変に歓迎し、状況的に不可欠なこととして、進んで鉄骨騎士団の中に編成される。ほとんど不毛な地と化している彼らの持ち場には、すでに自由な意思で手当たり次第に襲い掛かる中立的な連中が随分いるから、そこの守備はそういったものに任せ、――すなわち全く考慮に入れられず、超獣兵団は、エスパイアの防衛やアギロ・ザイマを攻略するために前線の各所に送られる。

また、かつての従属国にも近い関係であった国を再びその地位に戻して東西から敵を脅かすために、ヨルコン北部にあった最も強力な怪物集団には王国から連絡用の部隊が派遣され、持ち場を守って南部を攻略するように指示する。一度ある程度平らげたはずの北東部が整然と攻めて来ることはあまり考慮に入れられていなかったため、アプンヘッサを守っていた第二軍と参謀の少数精鋭の部隊だけでは多勢

に無勢という印象は拭えない。第二軍はこの時、機動力と防御力を兼ね備えた少数の機甲兵の他は様々な戦局に対応するための装甲歩兵を主に使い、手掻者の兵は左弦参謀が束ねている。

態度を右往左往する合衆国の上層部はまたもそそのかされ、北の地を勝手に侵略した者達を追い出す好機と考え、貴族のボーロトル・ホワル=ウィスに北伐の兵を起こさせる。樹曼の富豪ホワル=ウィスはガイモン山脈産の牛騎士という伝統の兵団を召集し、パウルリアンスに部隊を集め始める。彼にとっては憎むべき虐殺行為の末に誕生した軍も、自らを富ます自国領土を脅かす者どもも同じく敵であったが、彼は同朋の苦痛を悲しみながらも、自分がその犠牲者の名簿に載らなかったことを心ひそかに幸いと考えていたような人間であったから、別に第二の敵と共に、第一の敵を挟み撃ちにするような状況にもそれほどの拒絶反応はないらしい。この指揮官は、超獣軍団の指揮官、首無種(知性を持つ霊体生物だが、非常に邪悪)のビーギン・チアと相対しながら敵の城を囲む格好になる。ビーギンは狡猾な男であって、豪華絢爛な装飾に飾った牛騎士団の斥候と巨大な角笛を持った旗持ちなどに、自分の使命は我等の親しい仲を姦計で引き裂いたアギロ・ザイマを滅ぼすことであるから、我等は勝利の余韻だけで満足できる、今こそ共に戦い、貴国の領土と要塞を取り返すが良い、と持ちかける。ボーロトルは、地樹両神の寛大さを持って貴殿らを許そう、この戦いが復縁のきっかけともなるはずだと満足げである。

敵がアプンヘッサに迫ってきたので、その類稀なる剣の腕程に優れた人格者でもある砂魚者は、アギロ・ザイマに帰属した民衆を全て要塞の中に引き入れようとする。たちまち倉庫も庭も砦の中まで人で埋まり、喧騒が兵士の集中を乱していく。化猫がそれを見て嫌らしい笑いを浮かべているので、軍団長は眉間にしわ寄せざるを得なかったが、それでも落ち着いて、参謀の意見も一応聞こうと思いつく。もしそれが、どうにも聞き入れられないようなもの、例えば前にアイバン・クフグ=キャーイが吐いた味方を見捨てるような発言に垣間見られるような、彼の偏見の中では猫族に特有の冷淡さと映る意見であれば、彼は軍団長権限で参謀を無視して事を進め、後は上の沙汰を待つだけだとまで考える。

「ルサ殿、どうやら拙者の為すことがお気に召さぬようですが。戦う上で、彼らが気になっていては作戦を展開することも難しくなりますからね。確かに、ヨルコン軍は彼らを最初から全て無差別に殺戮することはないでしょうが、捕虜にはするし、無暗な簒奪もありえます。そして、北からの軍に至っては目も当てられぬような惨事を、我等が眼下に繰り広げようと努力するはずです。この人たちを戦場で守りきるのは苦労がいるでしょうが、我等の基礎を作ってくれる彼らを見捨てることは自分達の未来を見限ることになります。殺戮の映像を好む変質者や見地の狭い利己主義者ですら、彼らを助ける意義というものをどこかに見出せるはずでありましょう」

化猫は「ふむふむ」とか「ほう」とか、意味のない相槌をうって腕組みしながら大仰に頷き、少しふらふらと行ったり来たりしたので、話し手はいつも以上に苛立ち、話し終わると深く鋭い溜息をつく。それを聞いてはっとしたような相手は、充血して潤んだ目を大きく見開いてぐいっと上半身を突き出し、それでも足りない分は無意識に作動する浮遊術で補って、長身の逞しい軍団長の顔に自分のを迫らせる。砂魚者はもちろん嫌がって仰け反り、その引きつった苦い顔を、化猫が疑わしそうに覗き込む。「なるほどね、あなた。ええ、けっこうけっこう、ご立派なこと。しかし果たして、できますかね、剣豪殿。

できぬことは、やらぬことと同じですよ」

マイザブル・ビアツは体制そのままに、顔をしかめて唾をはきかけそうな勢いで答える。「最も装甲の厚い者と弓を取らせれば百発百中の者達を要所に配置し、荒ぶれる機竜を与えた最高級の、どれも一軍の騎士団長に相応しい実力を備えた数多くの騎兵が突撃の命令を待っています。それに、貴方の指示で、兼ねてから用意しておいた爆撃飛盤もございます。そしてこの私の前に立つ者は、何のまともな攻撃らしい行動も取れずに、次々と無意味やたらと倒れていくことでしょう」

「ほうほう、そうでしょうね、たっぷりと拝見させていただいておりますよ。しかし足りませんね、いや、むしろ、負けはこれですっかり確定したようなものです、控えめに言わせていただけるなら。そうでなければ、すぐさまこの場所を捨てるべきだと提案しなければならないのでしょうが、それでも勝てる、勝ちたい、逃げる勇気がない、と仰りたいのでありましょうから…」

軍団長は軍隊式のキヲツケの姿勢で武具を鳴らして硬直したようになり、その尖った二等辺三角形の目は、黄色の警戒光を放つ。「私は軍務につかねばなりません。老いたる貴方を危険に晒せば、さすがにあの優れた兄弟も悲しみに暮れましょう。あなたはどうぞご自由になさってください。どこへなりともお好きなように！」

化け猫は大きな身振りで肩をすくめ、眉根を吊り上げ、丸く短い舌を鼻へ突き出すようにして、胡散臭い驚きを示そうとする。「おやおや、これはこれは…　追放処分でございますか？　どうかあなた方が大得意とする『寛大な』ご処置とやらをここにも惜しみなく降り注いでいただきたいものです。ね、私の功績に免じて、…いや、酷いものです、私を、暇そうに路上の引っ込んだ陰に蹲る乞食か何かとお思いだ。ああ、あなたは空がいつも灰色がかっているのは、この定まらぬ、心を常に乱しつづける、散漫で愚かしい民衆を形成する一要因となっている気候風土の平均化だとでもお考えか」

ある思いつきに驚愕した砂魚者は化猫をそのままにして壁際まで走り、三階の吹き抜け窓から周囲を見渡す。「信じられん…」彼は思わず知らず呟く。梵子術の結界が、広大な支配区域の全体を、兵士が引き上げてきて曖昧になってしまった国境の線を、よく注意しないと見逃してしまいそうな鈍く揺らぐ空間層によって引き続き孤独に定義している。それはこの城を中心にドーム状になっている。敵がかなり遠くに陣を張ってもたもたしていた隙に軍団長は人々を助けることができたわけだが、それは彼の考えたような、敵のいつも通りの不正確な、素人的な動きのせいではなかったわけである。

「…お見逸れしました…」こういうのが、優れた剣豪にもやっとである。「しかし、これだけの莫大なものを創り、維持なさるということは…　いや、私は詳しくないので何とも申し上げられませんが」「いえ、十分な…　ご明察です」ウムポ・ルサは近くの薄汚れた肘掛け椅子に腰を下ろす。「老体には少々堪えますなぁ。何といっても貴方、さすがの私にも、これをやりながら他のいかなる攻撃にも転じられないってのはね。酒で集中力を欠きながら雑魚を潰したことはいくらでもありますが…　しかしこれは、あなた、私の体験したことのないような、実に貴重な意味での経験としての、最大限のくだらなさ…　すなわち労働の、その全ての要素を孕んでいます」

砂魚者は相手の言にはほとんど注意を払わず、顎に手をやって口を水かきで少しさする。「偉大なる

知彗の具象化とも言うべき参謀殿、貴殿の脳裏には私の及びもつかないような勝利への道筋さえ描かれているのではないでしょうか。私は民を助け、この地を守る使命を果たせればそれでかまわないのですから、どうか遠慮なさらずに仰ってください。我が鉄石のような心臓は、ちょっとやそっとの言葉の刃で傷つくものではありません」

「よく存じておりますよ、いかなる時にも動じないあなたの魂の強さ、つまり欠損の美徳でしょうか…？　いや、こんな言い方は貶したものだとお思いになるには及びません。あの灰色巨人の勇者に最大の畏敬を捧げ、瑣末な梵子言語なんぞとなまくら遊びを行うことに人生を奪われてしまったこの針金のような自身に嫌気を覚えている私には、この言葉は最も達成困難なバランス感覚の奇跡、最大の意味での美しい平均化、すなわち中庸の表現なのです。きっとあのちっぽけな愚息どもも、貴方を手本にして少しは学ぶことでしょう。貴方にはいろいろと感謝していることが多いのです、参謀としてというよりも、お恥ずかしながら、一人の私人として…　こんな時に告白するのも何ですが」

軍団長の眼はすでにいつもの穏やかな、海の青緑を取り戻している。「そうでしょう、拙者ごときが何らかの意味で教育者に相応しいかどうかは全く考慮に入れないとしても――子を持つということ、それは既に一つの人生の誇りです。うらやましく思いますよ、ルサ殿」

「何、どうということはありません。ぽんぽんと出来てしまうんですよ、糞尿のように必要不可欠な『輩出』として」

立派な砂魚者は、化猫の表現方法は極限の知性を持つ者ゆえの真理をついた言葉であって、一般人、特に自分のような軍人には難しすぎて良くわからないのだから聞こえないようにしておけばよいと考えていたから、もう一々反応することもない。この賢しい沈黙で快くも何か物足りない複雑な心境に置かれた化猫は、あたりを挙動不審に見渡し、場所がないのでこの重要な作戦会議室のある建物の中にまで奴隷のように詰め込まれ、項垂れて階段を上がっていく人々の群を見出す。再び満面の嫌らしい笑み。

「あなたへの恩義を返す機会を今与えられたと仮定しましょう。私は大変な正直者なので、忠義にかこつけて後払いの報酬を期待し、それが得られないと大騒ぎして下克上の本性を顕すようなことはしたくありません。つまり、前払いで…　おほん、おほん」例によってこれ以上ないというほどにわざとらしい咳払い。「これ以上言わせないでいただきたい。おわかりになるでしょう、…ちっぽけなものでいいのです。私はその日暮らしの快楽主義者ですから、行きもしない街で役立つ黄金など鉄くずにしか見えませんし、すでに世界最強の称をほしいままにしている今、名誉などただの子供の名札だと思うしかありませんので…」

開け放しにされている外では、高級の軍人が出入りしているのを見て恐れ入っていた人々も、指定されていた部屋に入りきらず他の建物に行くように指示され、無名な者どもが無知による蛮勇を発揮して先導の兵士達に文句を言っている。民衆を大事にする軍団長の手前、必死に穏やかさを繕っている兵士も段々と声高に命じるようになる。自分だけは入ると聞かない者がいる。それにつられて泣き叫ぶ子供達。ある虫者の夫人が、自分達は最も遠方のアルカンタシアからものすごい距離を歩いてきたのに、こんなにたらいまわしにされるなんて、とガラスに爪を立てるような甲高い声で叫ぶような呟くような、

とにかくぞっとさせられずにはいられない音を発する。

ウムポはそれを楽しそうに、口の端を歪めて眺めている。いつだってそうだ、この連中は。鑑賞するには飽きがこないともいえるし、一匹では無力で脆弱なこいつらも集まると実に小煩くて、近くに三匹以上置いておいたら、それだけで執筆に頭を集中させるなど全く望めない話である。創作は自然体で行いたいものだから、梵子術で周囲を遮断するのは簡単だが、そうもいかぬ――

あまり見かけない種族の娘が騒ぎ立てる男に鋭い言葉を持って注意し、彼をついに激昂させる。娘が掴まれそうになったのを見て兵士もついに顔を真っ赤にして剣を抜き、軍団長の手を煩わせることになってしまう。胸当てと兜に誇りある百章将のバッジをつけた青年は武神のように尊敬する対象の姿を見て直立不動になり、すでにこぼれてきた騒音によって報告の必要のなくなっていることを捲し立てる。

「わかった、お前は持ち場に戻れ。…諸君等、不便をかけるな」

「いや、俺は、みんなが座るところを得られればイイと思ってるんですよ。以前は、少なくともそれに困った試しはねぇんですからね」

無知は蛮勇を呼ぶ、これを再び繰り返さねばなるまい。さすがの正しい心の娘も、首を切られても文句をいえぬほどの彼の愚かさがかわいそうになったらしく、美しい唇を噛むようにして何も言わなくなる。自然と、最も優れた意味において逞しい砂魚の青年と、不思議な姿の娘の目が合う。

その娘の様子は、まさしく水美（すいび）（美を司る水女神についての形容から生まれた言葉で、人種基準にとらわれず、掛け値なしで美しい姿であるということ。一般的には後世に見られる平均容姿のことを指すとされるが、誤用）なりと言い切れると感じ、このような場面で予想外にそのようなものを見ることになったので、マイザブル・ビアツは非常な驚きを感じている。種族が全く違うのだから容姿に対する『美』の感覚は異なるはずなのだが、それはどこかに不変の、いかなる種族にも共通の要素をもつらしい。彼女は稼動気のようであり、その衣服も、ところどころは自作のものであって、その姿は、例によって後に人者と呼ばれる者のコピーのようである。その中でも恐らく極めて麗しい部類に入るであろう姿を、この不定形種は、何かのはずみで取らされているようである。それは恐らく生まれつきの、類稀に清らかな魂の反映であったのだろう。彼女の煌く金髪や透き通る肌は、文字通りに時折そのような無機質的な振る舞い――半透明の細胞は誤ってところどころ衣服の表現にも現れていたし、髪の部分は劇画のように束ねられて表現され、色を放つためにその部分の細胞には金属質が集められているようである――を見せ、彼女を多少は不気味なほどに、神々しくさせるようである。すでに便宜上『彼女』と表現されているこの人が、四つあるという性別のうちのどれなのかはもちろん全く見当もつかないが、その性質も容姿も、二大の性に遺伝子を分けることで進化の争いに勝利した種の末裔における、『女性』を表現したものであることは疑うまでもない。偉大な剣士はすっかり心を奪われ、同じく、降って沸いたような身分不相応な恋の兆しに慄く娘は、顔を赤らめて下を向き、その愛らしさを一層に増している。二人の様子に気付いているのかどうなのか、化猫が嬉しそうに叫ぶ。

「決めましたよ、夜伽の相手はこのスライムにします。この種は実に不思議でね、増えるために性交渉をするんじゃないんです。私自身はけっこう趣味の範疇なんですがね、好きになる、すると増える、っていう先祖代々の騙まし討ちよりはねぇ。まぁ、相手を愉しませるように自分を作っているんでしょう

からね、これだけ成長していれば」

ロンムーチョントの紋章を肩当に誇らしくつける男は、首を傾げる。彼は物思いに囚われていて意味がよく判らなかったらしかったので、化猫がうきうきとした様子で補足し、人々を掻き分けるのも手が汚れるといった様子で浮遊しながら娘に近づいていく。

「全て平らげて見せますよ、下の連中をね、なあに、それほどお時間は取らせません。二頭羊の毛を刈るより早いというものです。それまでの手続きも書類なしのごく簡単なもので、チャート式にご説明いたしますれば」ウムポは空中から娘の愛らしい曲線を描く顎を手で撫でるように捉える。「ええと、まず、あなたが軍団長権限を行使して参謀の手伝いか何かをこの娘にさせるという命令を下す。私達は宛がわれた粗末な個室でけっこうです、それなりに愉しむでしょう。その間、あなた方はもうこういう民族大移動みたいな羊飼いの真似事をせずに、のんびりと囲碁でもやっていてくださいよ。私はやおら寝室から跳ね起きて欠伸でもすることでしょう。それで覿面、敵の死骸が積まれるというわけです」

今度は砂魚者が納得する番である。「ははぁ、そういうことですか」彼は明確な決意を穏やかな表情に浮かべる。「実にありがたい申し出ですね、偉大なる仙猫様。謹んで、お断り申し上げなければならないのだけが残念ですが」

「私はかまいません、この人が好きになりましたから」聡明な娘は途中から割り込まされたにも関わらず、何が問題にされているかを瞬時に理解したようである。彼女の言葉も態度も極めて毅然としていたので、その本意を掴むのはほとんど誰にも難しい。明朗で堅牢な精神を持つ砂魚者も大変な当惑の表情を隠せなかったし、対する不老不死の猫の方も、本当の猫青年の姿を思わず知らず露出してしまったように、目を丸くしている。

「私、ピルクスティング村の人たちに拾われて、ずっと良くしてもらってきたんです。その理由も多分、私が単にそれなりに好もしい姿をしているというだけのことだったのでしょうけど、…私、幸せでした。私の外面が何を意味するのか、この私ですら理解していないのに。本来の私は形持たぬのでしょう、仙猫様。私の魂もそうなのです。自分だけが守られている理由を見出せません。だから、私は戦いに出られないのが残念でした。さっきあなたに――彼女は争った、痩せた長身の男を見上げる――突っかかってしまったのも、あなたが男で、棒に振ってはいますけど、栄えある戦に出る機会を有しているのが妬ましく思われたからなのかも。私、お世話になった皆の役に立てるなら、それで凄く幸せになれそうな気がします」

「つまり、正義の士にも、慰安の娼婦にもなれるというわけだ、君のような純粋の変幻自在の人格は。それは素晴らしい…　君は決っして行いによって本質が変わることはないのだ、それをぜひ私と共に示してほしい。これは決まった、左弦参謀の権限だ、軍団長のお墨付きをもはや必要とはしない」欲望をたぎらせた男は女を捕まえて唇を奪おうとする。彼女は抵抗せず、目を僅かに伏せて寂しそうな笑みを足元へ向ける。

「やめたまえ！」雷のような怒声が、最も苦しい戦場においても冷静なあの男の腹からついにしぼりだされ、付近の人々だけでなく、離れた場所で作業している者たちをもびくりと萎縮させる。「何が…　変

幻自在だと。好い加減にしろ！　そういうのは、全く誇れるものではない。自分の意志がない、取るに足らぬ愚か者の性質だ。娘よ、最初は見所のある女だと思っていたが…」稼動気の目が必死の形相で涙を堪えているのを見逃すほどにはマイザブル・ビアツの怒りも無情ではなく、彼は肩で息をつき、儀礼用のサーベルを拳で叩く。まるでその音で、信条とする冷静さを失った自分を反省させようとするかのように。

「では、こう提案を変えよう。娘、お前を私が娶るといっても、お前はその方に身を許すのか。どうなのだ、今すぐ答えよ！」

冷気の術でも受けたかのように、娘はがたがたと身を震わせている。彼女はうまくやれると思っていた、自分さえ犠牲になれば、親代わりの人たちが救われるはずだと。しかし、現実はそう甘くはない。彼ら稼動気の性は分裂増殖に有利に働くというだけのことで、その個性、すなわち精神というものは全く別のやり方で、種を選ばずに一般的な婚姻関係を結ぶことで受け継がれていく。多数の知的種族がある程度均衡して共存する世界で子を効率よく残すための生殖戦略として、似たような性の曖昧さを虫者等でも採用しているが、稼動気は単細胞生物の概念を包括している存在であることもあり、増殖と個性の伝達をほぼ完全に分けてしまっているという点で、その生殖システムは非常に独特なものであるといえる。

しかし、そういう生物種としての性質も、一度ある高尚な域に近づかんと形成された精神にとってはあまり関係のないことであり、彼女もやはり、他の優れた種の人格であれば同様に陥るであろうジレンマに悩んでいる。容易に想像できることだが、彼女のような善を尊ぶ人間に時として見られる傾向として、自分のしていることが汚いことであればあるほど悲劇のヒロインを演じている感覚に陶酔させられていたともいえなくはない。ところが、彼女は発生当初に本能的防御反応であきらめることに決めたマイザブルへの愛をあろうことかその本人に指摘され、逃げ場を失ったのだ。高貴な女の人格を持った不定形人種は恥じる余裕もなく涙をぼろぼろと流しながら、苦しそうに一言一言吐き出す。

「私…、軍団長様、酷なことです。もはや私の魂は、貴方の網に、捕らえられた、…蝶のようなもの。いっそ、…燃やしてしまった方が、楽なくらいだったのに」

「決まりだ、参謀殿。私はこの人を、…名を聞いていなかったな…」彼の瞳が、彼女に総ての将来を保障した瞬間である。「リュシュエ・ンサバと…　申します」状況が状況だけに素直に喜べないとはいえ、極めて甘美な幸福に酔いしれ、感情の奔流に支配され、泣きじゃくる体の反応を必死に抑えようと無駄な努力を続ける殊に愛らしい人を、勇士の中の勇士は愛情をもって穏やかに見つめ、抱きとめようと歩み寄る。

「何が…　です？」浮かんであぐらをかいている術者は、下を見てマイザブルに背を向けている。「決まり。ほう、このウムポ・ルサ、あろうことかこのウムポ…　ルサ様を、さしおいて。

…何が？　決済。誰が誰の権限で？

仙猫、だ…？！　ふざけるんじゃねぇ、俺を誰だと思ってる。化猫の、指の一振りで国家の一軍を消し炭と化すウムポ・ルサ様を、お前達は！」

彼がその息子を森で見出した時の癇癪を見たことのある者がこの場にいたとしたら、きっとそれを思い出したことだろう。さすがの砂魚者もぞっとして、猫の小さな体から強烈な勢いで噴出す梵子流の風に抵抗するために腕をかざし、わめいて押し合う人々を階段の上下に落ち着いて離れるように指示する。それはこの状況ではかなり難しかったが、人々は濃すぎる梵子濃度の影響で足がすくんだようになってしまって、ドミノ倒しにもなれずにその場でへたり込み、逃げる機会を失う。

「やめろ、ウムポ！　どうするつもりだっ、やめろ」彼は必死にリュシュエに近づき、彼女を自分の背後に匿う。その様子がかえって化猫を怒らせたようにもみえる。彼は左腕を突き出す。そこに異様な唸りを立てて七色の光りが周囲から集結していく、巨大な球状に膨らんでいく…

「おおお、どうなるか見せてやるぞっ！　死ねぇいっ！」

さすがの剣豪にも何一つ打つ手がない。彼は娘をかばいながら伏せ、その上を、爆音を響かせながら何かが過去っていくのを感じる。城の壁が半壊し、化猫が自分の身を守るために反射的に出した防御壁が飛んできた瓦礫を粉屑にしていくのを、這いつくばりながら呆然と眺めるしかない。何の術かはわからなかったが、とにかく巨大なエナギー弾であることは間違いない。軽く城や山を吹き飛ばす、というのは全く伊達ではなさそうである。その着弾点では、不幸なヨルコンとヴィムディンゲルゾースの連合軍がたまたま突撃前の団結式を行っていたらしい。そこまではさすがに遠目の効く軍団長にも、見張りの報告が来るまではわからなかったのであったが。

「…興醒めだ。軍団長殿、私は休みます。お昼寝タイムというやつです。どうにも、術を使いすぎたようなのでね。しかしながらまたも大変いまいましいことに、沈着な私には似つかわしくない短気で自分の部屋を壊してしまったようなので、貴方の部屋をお借りしますよ。もちろんこれくらいは許可申請書無しで通ることを期待してもよろしいんでしょうかね。それとも、まさかそのままの体制ですぐにお使いになられるということもありますまい」

慌てて第二軍団長は娘を助け起こして立ち上がり、人々が無事なのを確認しつつ、化猫の様子を恐る恐る見やる。彼はまだかなり苛ついているような表情である。触らぬ神に祟り無し、という言葉はこういうときにこそ引かれねばなるまい。

「拙者も、職業柄、疲れを癒すことに関しては人並み以上に気を使います。もちろん我が寝室はベットメイクをさせたばかりの状態でありますし、日頃から、ちょっとでも寝にくい状況があれば、神経質な患者のごとく、細部を指摘することも怠りません」

彼は自分の口調が思わずウムポのそれに似たことに、心の中で噴出しそうになる。僅かでも影響を受けたというよりも、相手に合わせようとして自然とそうなったのだろう。自分ともあろう者が…　しかし、明確な意味での敵でもない相手と、しかもこれほどの強大な力を持った男と、いつまでも自陣で争い続けるのは何と言っても不毛である。それに、なんだかとてもさりげなく、大きな事情の変化が戦場に起きてはいまいか…、だとすればもちろん自分には、寝ている暇などない。

ウムポは多少満足したように、背を向けてふわふわと、少々ふらつきながら階段の空間を降りていく。彼は一度振り返り、眠そうな顔で欠伸を一つ。「軍団長、一つお願いがあります。お仕事が終わったら

披露宴をすぐに企画してください。久々に濁酒がたんまり飲める口実を得られそうだ」

その控えめな願いは数日後、すぐに叶えられる。敵は大変に哀れな状況に陥っていたので、実力に見合った気高い誇りを持つ第二軍団の機竜装甲騎兵団もあまり深追いせずに敵を蹴散らして戻った。だが、敵は数で勝っていることを良いことに、すぐに後退して補充を受けると、また性懲りもなく攻めてくる。もはや梵子の壁もなかったが、軍団長は自ら最も巨大な雁機竜を先陣に駆って少数精鋭の部隊を展開させる。一般兵士の質としては恐らく最高峰であろう彼らは、機動力、装甲、そして突貫による破壊力も全てが群を抜いており、敵は一兵を囲んで倒そうとするが、一人一人が一小隊のように奮迅して敵を追いやり、あまりにも多い数で囲まれた者や未熟な者のところには、機動力を活かしてすぐに応援がやってくる。特に以下の千章将達の活躍は目覚しい。騎馬の扱いには軍団長にも匹敵するザウナ・ガリソはもちろん、黒猫が世話になった国で彼と懇意になり、山賊達のようにその実力を引き出されたガヒジ・セクレンとコブ・マシャルダはお互いを良い意味でライバル視していたので、軍団長に自分こそが一番の部下だと思われようと、この個人技を試される戦場にいつも以上の武勇を発揮する。彼らは一人で『何人倒したか』ではなく、『何小隊潰したか』を競うのである。

だが、効果は高いかもしれないがあまりにも危険すぎるこの特攻作戦を助けたのは、以前・以後はもちろん、この一連の戦争においても、この戦闘以外ではほとんど使われなかった秘密兵器である。術が得意な手掻者と手の器用な指者の工作兵を協力させて参謀が作らせたこの虚品は、中に歯車のような構造があり、動きを計算して回転を与えて投げやると、空気の流れに乗って漂い、予め仕組まれたタイミングで、上空から爆薬を落とす。角度や勢いなどの狙いは敵の動きと気象条件を見ながら作成者であるウムポのような特殊技能を持った者が直接指示しないと自分達にも被害が出てしまいかねないが、彼の読みは恐ろしく的確なものである。正体不明の小円盤に上空から爆撃される敵兵士達の心細さは誰でも思いやることができるだろう。こうして士気が落ちた部分に最強の兵士が突撃するので、敵はさらに怖気づいていく。戦場では物珍しいせっかくの牛どもも、緩慢な声で泣き叫ぶことができるのみである。

そして、化猫に宣言した自己表現が控えめだったと言うしかないほどに、マイザブル・ビアツの駆け抜ける後には敵の亡骸だけが大量に崩れ落ちていく有様である。倍以上の敵兵力が先鋒の敗走で崩れだすと、軍団長は城に隠しておいた兵団を出して本格的に追撃し、激しい攻防の末に再び相手を破る。騎兵は遠くまで追撃し、しばらく立ち直れないように敵を叩きのめす。エスパイア・ヴィムディンゲルゾース連合軍は高慢だが愚かだったボーロトルを見捨ててそれを盾にするようにして逃げ延びる。樹者の貴族は北の国を恨んで死んだが、それは少々遅すぎたので、彼があの世で仲間達の同情を得ることは難しそうである――

戦勝会では、すでにあの嵐のような騒ぎで噂されていた英雄と勝利のきっかけを与えた美女の結びつきも一緒に祝される。マイザブル・ビアツははにかみながらも、今や、あのときの危なげな状況に身を躍らせたとは思えない、穏やかな美しさを湛えるリュシュエを生涯愛することを兵と民に宣誓する――宴もたけなわで、新郎がたくさんの兵士に囲まれて戦の話をせがまれている頃、一人で隅の木陰で飲んでいる男に、新婦が酒を注ぎに来る。

「ふった男に慰めの酒とは、お優しいのですな」ウムポは顔を赤くしていつになく上機嫌で、まんざらでもなさそうに杯を差し出す。今宵のリュシュエ・ビアツは美しい金髪を後に束ねている。
「…こんな言い方をすればあなたは…　どうか聞き流してくださいまし。でも言わせてください、本当に、有難うございました」彼女は控えめに笑って首を振る。「でも、ウムポ・ルサ様、貴方ほどの方が私ごときを…　いえ、だめですね。マイザブル様の伴侶として相応しい気持ちと、それに見合う心を身に付けなければ」
「悪いが、俺はいつでも本気だね。それとも、息子を持ったから俺は急速に老いねばならんのかね、恐ろしい見張り番のような妻もないのに」
　リュシュエは何を言うべきかわからなくなって、幻惑されたように青年を見つめている――そう、そこに座っていたのは老いたる嫌らしい化猫ではなく、恐らく彼本来の偽らざる姿であって、ちょっと頼りなさげな目尻ではあるが、まるで本当にその愛らしい息子達と血が繋がっているかのように魅惑的な目線を彼女に投げかけている。束の間とはいえ、彼女は自分が何に心を奪われていたかに驚き、顔を真っ赤にして――その反応は血流による生理的反応というよりも、コピーとしての色素反応、癖のようなものである――目をそらす。
「私、…でも、貴方様にはきっと、…そのときには、ぜひお呼びいただき、祝福させてくださいまし」
　猫の男は彼女の様子をからかい半分に眺めていたが、ふいに真面目な顔をして満天の星空を見上げる。
「月並みな発想ですが、次は君達の子が楽しみだ。自家分裂生殖の君に、相手がいかなる者であろうと必死に自己主張する砂魚の強い遺伝作用が働けば…　さしもの私もどのような子になるかは容易には想像がつきかねますが、いずれにせよ、本当に楽しみだ。まるで養子のような…　失礼、これは、私にとっては一つの誉め言葉のような表現でして…　なぜなら君、真の子とはね、生じるもんじゃない、与えられるものだからですよ。しかし、…まぁ、そういう思いつきの想念に過ぎないことは、メモって後でまとめることにしよう」
　彼はいつも肌身話さず携帯している不思議な形をした石を幾度か軽く力を込めて握る。すると、そこに記憶や思考が流れ込んで、後で好きなときに望みの部分を取りだすことができる。他人の見方はどうあれ、彼は自分の本職を創作家だと思い込んでいるようなので、こういう品は何よりも役に立つのだろう。詩や散文のきっかけやアイディアは何気ない散歩や全く関係の無い行動の途中などにも不意に発想されることがあるが、そういうものは大抵の場合すぐに消え去ってしまう。もちろんその場合でもそれほど悲しむことはない、なぜなら浮かんだ想念の泡は溶けるだけで消えはしない。それは思ったほどには熟していなかったのかも知れないし、再び別の形で、より成長した表情で浮かんでくることもあろうから。
　それでも、短期記憶を長期記憶に変える行為は意識的にされるべきだというのがウムポ・ルサの持論である。評判の良し悪しはともかく、賢者と呼ばれて然るべき莫大な知識を持つ彼は、他人には信じがたいことだが、自分の記憶力の無さを心密かに重大な欠点だと把握している。だが、彼はそれを恥じたりせず、当然のことだとも考えている。そのおかげで、脳の表面を舐めっただけの瑣末な情報や生存に

邪魔な強すぎる記憶を少しずつ消し去ることができるし、必要に応じて、もしくは全く予想外の素晴らしい発見として重要な情報を引き出したり連結させたりすることもできる。この精神的な恵みは自然の創りだした素晴らしい回路の賜物である。ただ大量の知識を正確に刻み付けるだけなら堅い石にもできるわけで、いかに知識を自分のものとして会得し、それを何に使っていくのかだけが高次の問題においては重要となる。しかも、真実とは世の中に散在するからこそ意義深いのであって、それを一挙に小さな自分に集めようなどとは甚だ愚かな傲慢であるといわれるより他は無い。それに俺のような真の賢者はいかなる片鱗からも総体を見通す力を持つのだから、その必要も無いわけである――とまで徒然と考え至った自分自身に彼は肩をすくめる。

このように自負心が強いほど、我が作品が世に出れば生意気な作家となじられようから、心配がないわけでもない、と彼の思索は続く。それでも、書き続けねばならぬと何かが心の中で急かす。科学者やら宮廷術士やら、辛い浮世と怠惰な散策人生を代弁するようなアルバイト職――それでも、低俗な戯れの創作職に就いて道を違えるくらいなら、苦労も経験の内と唱えて忍従した方が良いに違いないのだが――に、自分がつくことはもはやないであろう。俺が自分を理由も無く作家だと決めた初期の時点で俺はすでに完全な意味において作家だったのだ。その決議の前では他人の評価など付属要素に過ぎない。俺はどのような時にも作家であり続けるだろう、商業的に奉られてのぼせ上がった身分の連中と一緒にしてもらっては困るのだ――これではますます評論家に嫌われそうだが、俺の論調を好んでくれる勢力が皆無ではないと信じるしかない。世の中に、それこそポンポンと生み落としていきたいと野望する、子供のような作品達のためにも――彼は色々と思索を巡らせながらもう一杯乾すと、ごろりと横になる。構想は完成しているのに形となっていない作品達を子供に見立てたことで、程よく酔った彼にはそれらが現実の息子達と区別がつかなくなり、とにかく全て大事なものだと認識されてまとめられる。

「君、マイザ殿を頼みますよ。彼には、あの子達の事をいろいろ手伝ってもらわなければならんのだから…」ウムポはそれから何事かをむにゃむにゃと言っているようである。自分達の創り上げた栄えある戦場を闊歩する息子達のことを夢見ているのだろうか。それにしても、このいつも眉間にしわ寄せ、人を傷つけることばかり考えていそうな男の、何と言う無邪気な、幸せそうな寝顔であろう。彼は長年孤独だったから比較検討してみる人はいないのだが、このような彼が時折見せる安らぎ、もしくは弛緩といった現象は、ごく最近になって見られるようになったことである。リュシュエはしばらく彼の傍に傅いてから、小さな声で、最初に彼女の存在を発した時のように決然とした意思を込めて、広範的な愛の繋がりに身をゆだねるような心持ちに浸りながら肯くのだった――

東が片付いたことを第二軍団長から報告された雉猫は、その救援に向かわせねばならないかどうか悩んで北方に待機させていた左弦の主力を自らの戦場に投入することができるようになり、ほっと胸を撫で下ろす。さすがの雉猫にも、父の行動は未知数に感じられていたのだ。アギロ・ザイマ軍は間髪入れずにオンフォルクサスを落として広大な地を手に入れるが、それは彼らの総合力の高さゆえではなく、敵が南の鉱山の守備に早々と武力を移動させていたゆえであったから、手放しには喜べないものである。

もちろん、ラスが何度か攻め入り、その度に思わしい成果を上げさせてはくれなかった六基の機動要

塞さえ克服できれば、敵の軍事的栄養源を全て手中に収めることができると思われている。エスパイア王国の始祖は、鉱山に住んでいたこれらの機械生命体を倒して下僕とすることで永久にここの利権を独占し、国を富ませたが、支配下に据えたはずの連中はむしろその真の居場所を見出し、有機体の社会に塗れて寄生生活を送る口実を得たようなものである。この守り神を気取るロボットどもは、全民衆を貧困から解放するという王の理想を喰い、軍事力という糞を垂れ流し続ける。

一方、生者の数以上に多くなる死者の数を反映して世の中に溢れかえる霊体生命体には、彼らが生まれながらにして死んでいるという、生物としての本質を裏切った性質があるためにまともな人権を認めることは難しいが、着渡炉石（きどるいし）を混ぜ、これまた有機体の一般種族からすると違和感を覚えさせられる存在である前述の連中の分類に放り込んでやると、彼らが優れた兵士となるために重宝がられ、国の一員として曲がりなりにも認められることになる。

誰かの死によって死骸という物質が発生することは言うまでも無いが、死んだ時点で、その人の魂とその物質の関係は完全に断裂する。魂は別の次元に混じり、肉体も元素に還るからだ。それは輪廻を否定すると同時に肯定もする、非科学と科学、考え方の異なる宗教間の中でもおよそ認めることのできるであろう根本原理である。ゆえに基本的には生と死は連結せず、隣り合う他人のようなもので、その関係は深いと全く無いとも同じようにいうことができる。一説によると、これほど露骨に大勢で実在し、見慣れた人には何の不思議も感じられない亡霊という存在は、生前の人格とは何らの関係も無い電気的、梵子的な干渉によって生まれた独自の存在ではないかと言われる。極めて多様な生物科目の中に、矛盾を承知で霊魂が混ぜられているのはそのためである。その学説によると、生物は死ぬ時に生存のための反応の名残として期せずに極めて特殊な波動を世界に投げかけるが、それが何かの偶然や強い想念で異常化し、いわば遺伝現象の奇形として、世に霊という個性の子孫を残していくというのである。想念の独立化である彼らは、その独自な存在から多くの物理干渉を超越し、素通りさせることができる。こういった面では、彼らは化学元素を構成物とする気体生命体などに非常に近いとも言える。ただし、元素系の分類種は結合した高度の有機体を持たずに素梵子他象のようなメカニズムで生まれ、活動するということを除けば一般生物の概念とほぼ同じであり、霊体種はその抱える矛盾の部分で他とは大きく異なっている。生前の肉体や何かこだわる物質に取り付いている霊体種も多く、その物質を自己存続の仲介としている者の場合、それを壊せば霊を霧散させることもできるが、そのような目に見える物質を伴う場合でもあくまでこういった本質は同様である。

霊を浄化したり滅ぼしたりすることが難しいのは、彼らが負の生命力を持っており、正の生命力を持つ一般の生物には光と闇がお互いを苦手とするように、できれば避けて通りたいような、お互いに理解しあえない部分があるからである。一般生物が死ぬことは滅ぶことを意味するのに、霊体生物は死ぬことは絶対値が零になるものの、尺度としてみると、上昇していることになる。絶対値零とは死後の世界、もしくは生まれ変わりのことである（後のことは各宗教に委ねよう）。負のベクトルであろうとも、彼らが『生存』にこだわり、しかもその概念の矛盾に苦しんで『まっとうな方向に』生きる者全てを憎むのも全く頷けることである。霊的存在の能力の一つである『物理攻撃無力化』も、皮肉なことに、現実

世界のルールが適用されないつまはじき者としての孤独感を一層募らせるものでしかない。

しかし彼らがそうやって憎みつつも一つの生物として生者の活動に興味を抱くこともわからないでもない。霊媒師というフィルターを通したり、化物として争ったりするような異常な存在としてでなく、あるがままの状態で自己が社会に受け入れられる事を知ったら、例え利用されて身を改造されると言うことを知っても、あまり悪い気がしないのだろう。鉄骨兵に『出家』した者達は、餌を貰いながら毛を刈られる二頭羊のように、ほとんど無抵抗だったようである。それに、知的生物においては死という必然的現象を必要以上に恐れる傾向があるのだが、生と死とは表面上では複雑に絡み合って癒着しているように見えるために、死者として生きる者達の戦場に対する抵抗感はほぼ皆無であっただろう。さ迷うより仕事をしていた方が『生きがい』を感じるというものであろうし。

悲壮感のようなものすら漂わせて迫り来る彼らは全くやりにくい相手であって、さすがの兄弟も勝つには勝つがいつも嫌な思いをさせられて、個体の戦闘力においては骸骨どもを凌ぐ怪物どもの方がましなような気さえしている。エスパイアを黙らせるにはどうしても鉱山の奪取か無力化が必要なことであって、すでに二年が経過する長期戦に疲れが見え始めている味方、不和になりつつある地内のこともあるから、いつまでももたもたとしているわけにもいかない。右弦総督はついに右左の境を外した大侵攻策を敷く決意を固める。

ある良く晴れた日中、ラスはカムナートの砦に陽動作戦の得意な第三軍を派手に突撃させて首都を狙っているように見せかける。夕刻に差し掛かると、雉猫の読み通りに遥か西方の南北不和が引き起こしたような激しい雷雲が暴れ、戦どころではなくなって両者引き返す。しかし、夜闇と悪天候に紛れ、左弦総督が第一軍と第四軍を率いて密かにクスンツンに襲い掛かった。ここを守っていたのはあのマルチーヌ・ヌイプであったが、彼の行動は敵ながら真に賛嘆に値するものであって、大変な混乱の中にも落ち着いた対応を見せて兵士を要所に配置し、黒猫の部隊に激しく抵抗する。

「竜騎士どもが華々しく戦功争いをしたというが、対して俺達はこんなところで泥んこ遊びか」疲弊した小隊を救出し、一時的に本陣に帰ってきた瘤取者がそう言ってにやりと笑う。

「俺達には似合いだろうが。栄光の何たるかは本分じゃないさ」黒猫も笑って、しかし、次には目を尖らせて小柄な彼には大きすぎると思われる巨大な盾を軽々と持ち上げる。彼の最高の友人であり、最も信頼する部下でもある巨漢は、猛々しい戦意を示す作法に倣う。左弦総督の盾と第一軍団長の打撃武具の柄が何度も打ち鳴らされる。次いで大地を震わすかのような猫の雄叫びが総攻撃の合図となって響き渡り、兵士達は一騎当千の武者に自らの武勇を見せる機会を逃すまいと、敵の雷雨より激しい投擲にも尻込みせずに突撃する。

ビスタンは敵兵士を相手にせず、焼石と編草で組まれた防壁に直接取り付いて武器を何度も激しく打ちおろす。敵は最初、彼が何をしているのかわからないが、すぐに思い知らされる。凄まじい威力の打撃は、突破するにはよじ登るか門をこじ開けるかしかないと思われるような分厚い壁を攻城用兵器の仕業のように容易く砕き、敵が予想もしないようなところから味方を引き入れる。敵の指揮官は隊伍を組ませて必死に防ごうとしたが、その隙にピサの主軍が扉を破ってなだれ込んできたので、もはや敗北は

時間の問題と悟ったらしい。ビスタンはビュイタマ戦で見かけたことのある、この良く戦った指揮官に降伏を呼びかけるが、彼はそれを潔しとせずに自刃。

勝利者達は獲った街には見向きもせず、最低限の補給だけ受けるとすぐに北に進路を変え、カムナートを襲う。オンフォルクサスに駐留していた第三軍も再び出撃してこれに加わり、エスパイアの要害は危機に陥る。鉱山に至る道の主要な砦の一つであったクスンツンを落としながらのアギロ・ザイマ軍の動きを見て、ヤンゴスギルブビツはついに首都を守ることを優先と考えて腰を上げ、主要な軍を動かしてクスンツンを再占領しつつ、ピサの部隊を背後から襲わせる。また、ラッタリハームからの援軍もようやく到着し、ピサは三方から囲まれるような状況に陥るが、死神に憑りつかれたかのようにその不利な戦場に執着し、密集陣形から部隊ごとに突撃させるなど、ラスの戦を見ながら彼流にアレンジした独特の戦法で必死に戦い続ける。

その頃、万が一のために第四軍団に国の守りを任せ、右弦総帥自ら、第五、第六軍団を率いて兼ねてより用意しておいた裏道を通って直接ペリルメカに侵攻している。守る兵士は少ないが、『動く塔』と呼ばれる六基が自分達だけで十分とばかりに動き出す。敵の攻撃は理不尽なほどの威力を持って大砲から吐き出される球電や振り回す分銅、ギロチンであり、これらが作動するとその仲間の兵士も近づけないほどの無差別的な暴れぶりで、アイバン・クフグ=キャーイは部隊を分けてうまく一体一体を誘い出して破壊しようとする。これに第六軍団の巨人達が、ラスの発するキーワードでばらばらになり、第五軍団の小隊に組み込まれて助ける。ある程度動きが鈍り、主要基盤の入った部位の装甲が弱った相手に、ラスが長時間をかけて方陣を組んで練り上げた術による爆撃が止めを刺していく。四基破壊したところで、遅ればせながらも策に気づいた敵の本軍が最速で駆け戻ってきたので、ラスはこれを引き際とする。それは鮮やかなもので、さすがのヤンゴスギルブビツ・ラックソルバーケも追撃すらできず、地団太を踏むしかない。

南方に上がった花火のような光を見て、ようやく黒猫もカムナートを諦めて退却の合図を出す。だが、こちらはそううまくいきそうにもなく、軍事国家の威信を傷つけて自らを脅かそうとするアギロ・ザイマ憎しと、敵の守城軍まで打って出てくる。ビスタン・ケイマリッチが殿を買ってでて、彼が目を掛けて育てていた若い勇士であるブースナン・フィアンの部隊だけを連れ、崖に左右を阻まれた狭道に留まって敵を一撃で数人ずつなぎ倒し、遠くから撃とうとする敵はその弟子の青年が得意の弓矢で先に倒していく。その美しい銀色の弓には時空矯正を行う梵子力が宿っているので、彼の類稀な才能と相まって、恐るべき命中率を誇っている。彼は三根土も離れた目標に命中させるために狙いを遥か上空に向け、放物線状の軌跡を描いて上空から矢を降らせるといった神がかりの暗殺技能も有しているといわれているほどである。もちろん二人の働きで敵は大いに怖気づくが、それでも数を頼ってあきらめようとしない。そこに第三軍から出されたいくつかの部隊が崖の上から雪崩れ込み、追撃兵に大変な痛手を負わせる。こうして彼らは辛くも多くの味方を失わずに逃げおおせる。

戦としては何も得ずに逃げ帰ってきたようなものだったが、兄弟にとっては十分すぎるほどの成果である。『動く塔』が六基も守備範囲に穴なく配置され、敵の大部隊と組まれて守られたらどこにも活路

を見出せそうになかったのだが、それが半分以下に減った今、数だけ多い敵の部隊などは今まで幾度となく蹴散らしてきた相手の繰り返しに過ぎなくなる。着々と、今度は大っぴらに鉱山占領のための作戦と部隊編成が準備されていく。エスパイアの命運を委ねられた男は苦悩した末、アギロ・ザイマに講和の使者を出す。兄弟はこれを予想外のことに思ったが、敵の指揮官が全く油断ならぬ男であるから、こういうことも起こり得るだろうと話し合う。

敵は確かにまだまだ戦えるが、これ以上疲弊して本当に破滅する危険性を呼ぶよりも、耐え忍んで力を蓄えようとしているのであろう。しかしその条件には、鉱山の一部の権益をアギロ・ザイマに渡すことも約束されているから、猫達としてはまんざら悪い話でもない。敢えて相手を力づけるようなことを易々と許すとは、敵に何か策があるに違いないとも二人は思ったが、いろいろと思案した結果、まずはこの話をそのまま受けることにする。敵さんは敵さんで、自分達は自分達で策を練りあい、それがお互いに披露されたとき、その質の高さと武勇の総合で決着がつくことになろう。それは望むところだ、と。

こうして仮初の和睦が結ばれ、二国――といっても、エスパイアはアギロ・ザイマを国として認めておらず、あくまで地内の遠征軍としている――は本当に簡便な式典と文書間だけの親交を持ち、それらはすぐに国境警備兵の鋭い目つきに据え置かれる。兄弟は久しぶりに同じ宿営地で過ごし、直接語り合うことで、離れていた間に心まで遠のかないように埋め合わせを行う。二人は軍務の傍らであの手紙の延長線上にある実にたわいもない話で盛り上がり、大いに興じて腹を抱えて転げまわったり、ひそひそと悪戯っぽく笑って肘で互いの腹をつつきあったりする。なるべく兵士達にその様子を見られないように注意しているようにも、そのような振りをしてわざと垣間見せているような時もある。お付きの優秀な兵士が怪訝そうな顔で陣幕の様子を覗き込むと、もちろん、非の打ち所の無いほどに優れた彼の上司たる英雄達――と彼は信じきっている――はしゃんとして難しい顔をしながら机の帳簿に向かっている。首を傾げて持ち場につく彼の奇妙に歪んだ顔を上目使いで覗きながら兄弟は必死に笑いをこらえ、彼が去るとそれを爆発させて互いに叩き合う。しかも時によっては、もうこんな年代ではありえないだろうと思われるような事態も引き起こす。本陣の狭くてか弱いテントが幾度か崩れたことがあったが、何とそれは、彼らの取っ組み合いのせいであったのだ。

「やめなさい、また、あんたたちはっ！　仲間の戦士達に恥ずかしくないの」姉か母親のような女騎士のお叱りくらいでは、彼らの争いは終わらない。引っ掻き、かーっと赤い炎でも吐きそうな口を開いて脅し、掴み合ってごろごろと転げまわる。平坦な見張りに疲れた兵士達が大将の披露する慰労の見世物に大喜びして声援を送れば、それに応えるように彼らの戦いは激しさを増す。いつも決着はつかない。あの陰惨な殺し合いにも見えるスタジアムでの戦いとは違ってラスは梵子術を使わないし、ピサはすぐに取っ組み合いに持ち込んで、彼の得意とするフットワークを使った本式の戦術を使わない。彼等は対等に渡り合える喧嘩という交流手段を再発見したようである。腰に美しく細いたくさんの指を当てて唇を歪めるイムの肩を、ビスタンがポンと叩く。「あいつら、あれが性分なんだ。所詮はああいう連中なんだよ」「そうみたいね、二人合わさると強い時もどうしようもない時も本当に大したもんだわ」

喧嘩の後はパンツァウォルズの温泉で傷や疲れを癒すのが決まりのようになっている。二人は少年ら

しさをこのように残しながらも、悲しいかな、やはり大人であることを偽れない。小さな負傷は自分で申し分なく毛繕いして治すことができたので、少々酷い手傷がいくつかは必要だと思われるほどである。それは他人に、否、兄弟にやってもらうことができる。彼らはそうやって、毛並みだけではなく、失いつつある何か大事なものを必死に繕おうとしているかのようであったが、幸運なことにそれに気づいているのはせいぜい彼ら自身くらいである――理解のない人にその心理を知られたら、くだらない忠告を聞かされなければならなかっただろう。

二人一緒に風呂に入ることはほとんど無かったが、あるとき、多くの兵士達と共に慰労と仲間意識の増強をお題目にして湯につかったとき、弟は兄の世話をしながら、彼のいつも落ち着かずにふらふらとする尻尾を捉えようとして、素っ頓狂な声をあげる。

「うわ、兄さ…　尾の先が…　無いんじゃないか！？」兄は弟の驚きに怪訝な顔を差し向けただけだったが、途端に合点し、苦笑いを浮かべる。

「ああ、お前のいなくなったすぐ後か、あれが起こったのは。少なくとも、戦場の傷ではない」黒猫は、長い毛に囲まれてはいるが、骨の先が露出したままで癒えた尻尾を自分で掴まえると、それに語りかけるようにして思い出話を始める。それはウムポが病床に伏す息子を気にも掛けずに出払った時のことである。原子と原子の間を通り抜けるような、ほとんど有り得ない確率で梵子障壁を潜りぬけた森の怪物が一匹、家の中に閉じ込められて路頭に迷った蝿のようにうろつき、ピサの枕もとに立った。すぐに異常に気づいた友人が駆けつけてこれを駆逐しなければ、彼のそもそも危うかった命はそこで完全に絶たれていたであろう。もちろん黒猫は何の抵抗もしなかったのだが、悪運の強いことに、何かが化物を躊躇させたのか、額の擦過傷と、尻尾の先を噛み千切られただけで済んだのである。彼自身良く覚えていないが、死を半ば夢見心地で受け入れんと考えていたので、歓迎の印とばかりに、蒲団の脇から尻尾を出してポンポンと楽しげに動かしたことが、かえって怪物の注意を引きつけて彼を救ったのかもしれない。

「俺の尻尾の先が生まれつき鉤状に折れ曲がっていて、お前のようにしゃんとしていなかったのが随分気に食わなくて、こんなもの切れてしまえば良いのにと思ったことが何度もあったが、それが本当になってしまうなんて、さすがに今思うとぞっとさせられるよ。それにしても、お笑いなのがあの糞野郎の振る舞いさ。奴は駆け込んできて、大騒ぎしながら肉や血をくっつけた俺の尻尾を掴んで、そこに変なひりひりする水を塗ったり包帯を巻いたりして何度も様子を見にきた。実にうさんくさい偽善ぶりだったが、俺にはその理由がはっきりと見えた。奴はご自慢の梵子術がしくじったことを必死に隠そうという虚栄心のために、俺の気をそういう事実から、悲劇と情愛の演出で逸らそうとしたのさ。付けられては取っ払ってやったが、しつこくまた巻きやがって、ウザったいことこの上なかったね」

ピサは自分の推論には正直なところ自信が無かったのだが、お伺いを立てるように、にやついた笑いを浮かべて弟を見る。だが、弟はそれに何か言いたそうにしただけで、「そうなんだ、とにかく大事に至らずに良かった」と言うに留める。雉猫は父が、どうやっても死なないはずの、親馬鹿なことに時代の寵児であるとすら考えている息子に、思わず運命の裏切りと理不尽な根拠で決め付けたくなるような

予測し得ない手順で訪れた死の影に戦慄し、激しく動揺したに違いないと思っていたが、そういう推論は兄をきっと喜ばせないだろうと考えて控えたのである。彼には何となく、ピサに対する父親の異常な厳しさが、彼の特別な想いの裏返しのような気さえするのである――弟の思索に気づかず、兄は楽しげに話を続ける。

「しかし、人には個性があるように、肉体にも個性的な特徴というものが必ず一つや二つあるものさ。それが欠点だとしても、俺には完全無欠の平均体は単なるマネキンだと思えるので、それを決して批判されるばかりのことではないと思うんだ。例えばあのかわいい人を射止めたお前も、肩に不思議な毛の痣を持っていたっけね。でも、例えば木乃伊として埋葬された時は、こういう腐敗対象の特徴も後世に自分の生きた証を伝えるメッセージとなるだろうから、俺にはどうにも捨てがたいと…」

「何だよ、痣って。肩だって？　何も無いじゃないか、僕は両肩の毛繕いは特に入念にやると決めているくらいなんだから」雉猫は兄の言葉に強い口調で割って入る。ピサは頭を抱えるようにして額を激しく掻き、耳をひっぱったりしている。

「…いや、待てよ、不思議だ。俺はこのことを…　ああ、いろいろと思い出したぞ、そうだ、お前の右肩だった。ある一部分に、黒い長い毛が密集して、楕円形の黒い痣のようになっていたんだよ。お前、随分小さい頃にあれを気にしていて、悲しがっていたじゃないか。それこそ、俺の尻尾の比じゃなかった。そうだ、あの日の…　驚くべきことは、お前も同じようだが、何で、あんなに印象深い体験を今まで一切思い出さずにいられたんだろう！」ピサは叫んでお湯からざばりと立ち上がり、彼らの話を面白がって聞いていた周囲の兵士達の驚いた眼差しを一身に受ける。ラスは術を使って念話のデバイスを兄に連結し、彼に密やかに喋ってもらえるように手配する。念話に慣れていないピサは、全く喋らずに想念を強く思い浮かべれば良いだけなのに、難しい顔をして少し口をぱくぱくさせたりする。

『あの日俺は、どこかに遊びに言っていろ、夕刻まで帰ってくるなと言われて追い出されてしまった。俺は虫の知らせがしてすぐに戻った。お前の悲痛な泣き叫ぶ声がする。俺は魂消て中に入って助けてやろうと思ったが、結界がいつもより強すぎるようだった。奴が出てきたとき、その手は少し血にぬれ――俺は毛布をかぶせられて蒼くなって寝ているお前を見て仰天し、お前が悪魔のような男の犠牲になったと思って奴を激しく罵り、俺も死んでもかまわないからせめて少しでも仇を討ってやろうと思った。だが、奴は俺をひっぱたいて冷たい声で命じた。――お前の優れた弟の憂いは除いた。しばらく、そうっとしておいてやれ。特に、傷口には触るな、菌が移って弟が病気になったらお前のせいだぞ。お前が看病してやるんだ、いいな――そして、奴は去った。俺はつきっきりで世話をした。お前は意識が回復し、三日も経たぬうちにすっかり元気になってしまった。何も起こらなかったかのように…　しかし、…そうだ、それ以来、お前の肩の痣を見ていない』

『記憶封じの術だ…』弟は片目を閉じて俯く。『何というおせっかいなことを。あの人ともあろう賢者が、子への偏見で真実を見通せなかったというのか…　あの人は僕を気づかうあまり、全ての悲しみ、現実、過去を封じ込もうとしてしまったんだ。だが、あの人、いや、あいつにはそういう思いやりなど、滑稽で全然似合わないことだ。そんなことをやらかすから、かえって事態がややこしくなる』弟は決し

てお湯のせいだけではない上気した顔で立ち上がり、念話を切って叫ぶ。「だからあいつに相応しい、悪しき事態を招くことになるんだ！」

弟はさっさと自室に篭ってしまい、取り残された兄は呆然としながらも、不思議そうにしている部下達に肩をすくめて見せる。「いやいや、風呂の中でも喧嘩するんだから、俺達の結束は疑う余地もないようだ」彼もまた程なくして風呂を出ると、自室で理由もわからずにそわそわしていたが、ふと思いついて、聖い対象がいくつも掲げられた、部屋の住人の願いで宛がわれた最も粗末な物置小屋のような部屋の門を叩く。

中にいる徳高き人と黒猫は部隊編成のせいもあってあまり話をする機会がなかったが、その必要は、良くも悪くも、お互いにあまりないように感じられている。自分の生き方を各々の仕方で貫いている彼らは、尊敬すべきだが親しく交わったり争いあったりはしない、遠い場所で雲を突きぬける鋭い頂上のようなものであって、お互いを会釈して通り過ぎる相手と感じている。例えばピサは本能のままに生きているような部分が多いし、それでいて哲学を自分から見出していく厳格かつ叙情的な部分をも混在させており、彼自身が一つの教えを宿し体現しているようなものである。神性を人生行路そのものによって散漫に意識する人は司祭の助けを病院代わりに都合よく借りるのみで、導き手達も、そういった『迷えぬ連中』にはあまり興味がないのである。それに、視界を遮るもののない青空の中に暮らす二つの頂は互いのことが良く見えるものだから、お互いを自分とは違った道で立派に生きている人として率直に理解する。ピサも、フアンホ・ラップァ・マーヒの部屋を久しぶりに訪れた時は畏敬の念が強く働いていて、思わず彼を『賢者』と呼び、すぐに『第一位枢司教』と言い直す。

「ふぉふぉふぉ、お気になさらずに。両者の職業的特長に共通項があったとしても決して不名誉には当たりません」地内でも大変高貴な身分であり、王侯ですらその大きな手に恭しく額をつけて祈りを捧げると言われる彼は、しかし実に簡便な衣服と、居間にいながらも鎧や盾を身に付け、帯剣もしている。これがこの男の独創的な態度である。彼は無論、血を好む狂信者などとは最も遠い対極に存在する。普通の人徳を売り物にする人々は言うだろう、剣で相手を傷つけることは罪である、親兄弟を思え、敵にもそれがある、彼を隣人として愛せよ、と。しかし、彼は言う、では、汝、その戦をやめさせてみよ。現に歯止めのきかぬ戦は生じたのだ、大地の上に夥しい量の血が流される。偽善者達よ、生きるための必要から戦場についていくことを余儀なくされたくせに、自分達の職務を満足させるためだけに兵士の行為を咎めるのか、実際に血を流すのは彼らなのに。我は剣と盾を持って彼らと混じり、彼らと共に戦い、この体躯より血を流し、敗北も勝利も分かち合おう。いずれにせよ、少しでもそれらを早く終らせよう。そして、剣より逃げず、それを見事に支配して見せよう。見よ、我が腰の刃は、力持ちながら、悪しき行為に使われることはない。学べ、悪いのは道具なわけがない、いかなる場でも心を正しく保つ模範はある――彼の行いはあるがままの形でピサには判り、それに必要以上の意義を持たせたいとは思われていない。

司祭の方でも黒猫の優れた部分を知りながら、自分が神の名の下に教化する必要のある相手ではないと感じている。大男は彼の体重で哀れにも支柱の曲がっている椅子から動かずに、同じように腰掛けに

くそうなものを念力で総督に薦める。ピサは苦笑いしてそれを断り、勝手に埃だらけの床に座り込む。司祭もそれに倣って椅子を降り、胡座をかく。

「そうしてみると、黒いダイヤで作られた異教徒のモニュメントのような御姿ですな」

「なんだか、誉められているのかどうか、難しいご意見に聞こえるよ」

「ふぉふぉ、皆さんそう言いますね。ところで、この、これ以上ないというほどに素晴らしいあばら屋をご来訪いただいたのは、まさか、観光ということもありますまい」

——ピサの話を司祭は最後の一句まで黙って聞き、相槌も打たない。彼は弟のただならぬ様子を心配する男に、万事自分に任せるように言い聞かせて安心させる。客が出た後、ラップァは机の中をごそごそとやって、いくつかの古文書を引きずり出す。一度目を通しただけで書を暗誦するといった極端な知能の一面を持つ彼にはそれを開く必要もない。ただ、彼はその使い込まれ、年代を経たものに備わる美しさを醸し出す壊れやすい紙の束を眺め、次第に目を閉じ、次にそれを胸に当て、深く深く息を吸い、静かに浅く吐く。別の場所でも書庫の検索を、雉猫が必死に行っている。ある項の挿絵を見てぞっと戦慄したり、良く読むとそれが自分の探しているものとは異なる内容であったことを知って首を振ったり忙しく、控えめなノックではなかなか彼の関心を得ることができない。留守かと廊下の男が去ろうとしたところでようやくラスは気づき、司教を中に招く。

「第四軍団長か、悪いが少々難儀しているところでね、手短に済ませてくれると有難いのだが。用件は何か」

「その解決になるかどうかは別として、鍵になると思しきものをお持ちした次第ですが、ご照覧いただけますかどうか」

ラスは座面を回転させて客に向き直る。「そうか、貴殿こそは地内の最たる賢者であった…」

「奇遇なことに、そのようらしいですね」ラップァは、言葉に反して何も持ってきてはいない。しかし、彼の脳内に保管されている古いことに関する知識が、きっかけとなる情報や書物によって引き出されようとしていることが雉猫にもすぐにわかる。しかし、お互いに何が問題とされ、何が必要な証拠となるのかといった、会話に必要な共有観念が欠けている。どちらかというとラップァは聞かれる方の立場だし、推測で物を言い過ぎるのも良くないので、ラスが切り出すまで黙し、差し出された簡素ながらも高級な譜避(地内にしか生えない有用樹木)の座椅子を壊さないように軽く腰掛けている。二人が無言なので、遠い兵舎の方から勇ましい訓練の掛け声の音波が伸びきって届き、安穏とした昼間の民営放送のような雰囲気に変わって上官の部屋の静寂に添えられる。ラスはこういった物音に自分の声を混ぜるようにして何気なく切り出す。

「地内の人々が我が軍の戦いの意義を湾曲して捉えてしまっているということは大変に悲しまれることだ。もちろん第五軍団長からは様々な報告を受けている。貴君の方からも何かあることとお見受けするが、いかがか。…いや、結構だ。そういった意見のすれ違いというものは、我等がたまたま地内の願いを叶える使命のために出てきた、この地上と言う場所と故郷に等しい地内が別世界であるがゆえに生まれたもので、ほとんど必然的に発生してしまう現象である。それは煩わしいものであるが、乗り越え

ていかねばならないし、成功の暁には、我等を送り出してくれた人々もわかってくれるだろう。何しろ、魂の世界から孵化した生命がいずれはそこに分解されて還っていくように、我等は地内から出ては来たが、送り出した者すら忘れた意義を持ち続け、いずれまた地内に帰るのだから。彼らは先に約束されたような小さな満足などではなく、大きな満足を我等に与えられ、我等もまた、彼らの喜びのために真の栄光に包まれるであろう。

地上と地内の併合！　地内が下位であるということはたわいもない腐れ犬どもの思い上がりである。彼らの中でも優れた一族はとっくに地中に潜っているが、それより数万年も早く、最も思慮深い人々が地内を拓いた。同じことがかつて、深く広大な点では地に負けず劣らずに偉大な海洋という世界から陸を支配した、鯨類の一族の繁栄にも見られる。

卑俗な者どもの楽天地である地上からの離脱とは、肉体的進化よりも劇的で極めて尊い精神的進化そのものである。人々は地や海といった元素の世界から生まれ、その上で暮らすようになったのだろうが、そこへ、生の放棄ではない形で再び還ろうとした試みは、退化などではなく、最も究極的な意味での進化であり、別世界に旅立って十分に学んだ者が、自分を生み出した者のところへの回帰点を打つことでもあった。陸上生活になじみすぎた者には困難が大きかったが、先駆者達はそれを乗り越えた。海洋の超巨大帝国や地内の国家群はこうして生まれたという歴史の見方もできよう。だが、その裏づけとなる証拠が発掘されると同時に、その反証となるものも同じ地質からいくらでも出土している。世界は最初から混ざり合った状態から始まって、似た者も異なる者も問わずにほぼ同時期に無関係に発生したという…

失礼、話が横道に逸れているな。しかし言うまでもないが、貴殿のような、私より遥かに道理に通ずる方に恐れ多くも不必要な解説をしているわけではない。私は悩む時、私の最も興味のある世界の秘密に関する議論を頭に思い浮かべ、それと対比させながら思考をまとめる癖があるもので。私個人としては順路を追った派生の説を好み、その経路から学び取ることの重大さを強調したいのだが、そのような趣味的な話はともかくとしても――事実としての現状を先の理想論に比較してみれば、先に述べた海の人々も今は影を潜め、地内の者も地上に抑圧されていることが悲しく思われずにはいられない。

海も、地の器がなければ流れ出して失われる。地はそういった意味でもより根源的な力を秘め、地内はその優れた力に守られているがゆえにまだ漸う現存しているともいえよう。私に最長老様が最初にお話になったことだが、そういった祝福の地である地内も、祖先の試練の記憶を忘れ、楽観して事態の困難を侮れば危うき事態を免れぬ。

かつて、地上を支配した我が種族の祖先は地内もわけ隔てなく掌握したというが、私はのべつそれを取り立てて自分の手柄のように捲し立てようという気はない。だが、あれほどの栄光を保ちながら波の泡のように消え去った者達のことを教訓とするならば、地内が今一度力を取り戻して一層に深い意味での発展を遂げるためには、温故知新の心がけが必要であろう。…教えを請いたい。地内は言うに及ばず、恐らく地上の賢人をかき集めても貴君一人には及ばないであろう知慮をその一身に宿した偉大なる司教殿、我が一族の栄光と衰退はいかなるものであったか。

およそ、他人とはある人をその人自身より良く知るものだが、同時に、ある程度の部分は自分でも把握する努力をしておかないと、他人に見えない部分は、全く他人に理解されないままで消えうせてしまう。現在の自己を過去とする未来の自己ですら、そういった他人の一人である。優れたる特質を多数持ち合わせているだけに大変残念なことながら、我が一族は自身の歴史にあまり興味を示さず、それに対してあくまで無関心でいたがる。それは、滅び行く定めにある者を一々取り上げて恥じさらしにしない配慮の裏返しでもあるのだが…」

雉猫はあまりこの司祭を好きではなかったので、軍団の中では部下だが、しかし身分や人徳の面では非常に高い位置にあるフアンホ・ラップァ・マーヒに対してどうしても、自分でもあまり相応しくないような語り口になってしまい、どこかで無理にべた褒めしたりして帳尻を合わせようとする。瘤取者の司教はそれを、眉を吊り上げて見下すように感情を一切込めずに聞き流す。例えば彼は、知恵と術においては自分など当の右弦総督にも、ということはそれ以上と噂される父君にも遠く及ぶはずもなく、世辞であることを除けば、自分が閣下に勝っているのはそのような段階付けを正しく行うことができることのみであり、ゆえに自分が閣下に教えられることはそれほど多くないために喉が渇く恐れが少ないのは確かに幸いである、とだけ言う。しかし彼は遠まわしに持ち出された本題を彼好みの一層の遠まわしでは受け止めず、素直に受け返す。なぜなら、彼にとってその話題は全く真面目なもので、他人事ではなく、それどころか彼自身の人生に深く関わることですらあったからである。瘤取者は立ち上がり、目を閉じて斜め上を見て、まるで詩を吟じるように語りだす。

「混沌の時代を生き抜いた獰猛な種族、肉体と術の力において猫に優れ、配慮と知性の面で猫に劣る者達、地神に弓引くことあり。地神、土くれと巨人の大軍を持ちてこれを滅するが、罪深き者でも地の子であるが故に哀れに思い、彼らから牙のような強すぎる力を抜いて小さな無数の体に分割し、肉の暴走を御する中庸のバランス感覚をどのような種族よりも優れて優美な身のこなしに宿して与える。こうして生まれし真愛らしき猫者等、心を入れ替えて敬虔な神の信徒となる。

しかし、このような異例の、地神につきものの気まぐれな強すぎる思い入れによって、彼らにもその性質が宿り、それは種族内の怠惰な側面となって現れはじめ、彼らの社会は地の神が望むゆったりとしながらも時として劇的な、最も優れた形での平和を当たり前のように漂わせることができたのに、才を持ちながらも彼らはそれを維持する努力をせず、より強き者どもに排斥されていく。滅びに瀕する彼らを哀れに思いし地神、対極の神に願う。天空の虚神、父なる神のために運命の胎内を漂う、生まれた当所から最大限に進化した精神の遺伝子に、ほんのわずか、指で勢いをつけてやる。すると、種はある子に宿った。彼は英雄となりて仙猫達を指導し、同種、他種問わず、人々を導きて今ではその名も失われし巨大国家を創り上げる。

政無く王無く其の民　ただ手を取りあいて　互いの幸を見つけしむ――このような奇跡の時代は五つの千年紀を越えてすっかり風化したが、それは揺り篭の記憶のように人々の理想郷を指す。その主たる民は地内にひっそりとした国を余韻のように残す。その名をア・ルプ・パンチノ」

お愛想的に聴き上手なところを見せてやる態度を必死に繕っているのに、生理反応とは嫌なものだ、

と、ラスは自分の喉が嫌な音を立てて鳴ったことに腹を立てながらも、彼の話に真剣に耳を傾ける。無論、こちらはこちらで自分ごとに真剣になっている話し手には、そのような細事を皮肉ったりする余裕など無い。

「今は失われし古獅語で『変わらざる居場所』という意味のア・ルプ・パンチノ。サモルジルニール八世の時、彼は邪悪な性質で、地内を自らの奴隷の穴にしようと企てた。他国の人々は連合院を作ってこの敵に当たる。その際たる功労がゼイダキャトの宮廷梵子学者、貴殿方ご兄弟の父君、ウムポ・ルサ殿である。

ア・ルプ・パンチノ出身にも関わらず、同族が故にその悪を一層に許せず、彼は元の仲間に裏切り者と罵られ、新しい仲間には疑われつつも、連合院についた。彼は矢面に立って戦う資格はないと思っていたのでその英知を結集して優れた武具を創ったが、哀しい事に、連合軍の中にはそれを使いこなせる勇者が無い。武具が使えないので彼本人が連合院に仙猫と称えられ、ルサ殿は押されるように、敵の王を操る実質的権力者の占星術師にして彼の師匠、恐るべき虚実体術士マータルアストーロ（この特殊虚実体は『腐土神』を名乗り、大地の神を憎んでいた。彼は邪神に操られていた哀れな男だった可能性もある）と、その幻術によって莫大な報酬を夢見ている粗野な部族達と戦った。敵は強大であったが、仙猫はもっと強く、彼は勝った。マータルアストーロは死に、ア・ルプ・パンチノはゼイダキャトなどを他国に取られ、一時的に味方となっていた部族にも見捨てられて縮小化する。

ところが、憂いがなくなっても欲望の炎は消えず、他の者に飛び火する。ゴルフィ共和国の実権を握る者達は、表面上でア・ルプ・パンチノと争いながら密かに敵の妖術師と交渉して得た知識を基礎に、猫族の力の源を抑える秘石を研究開発していた。そして忌まわしきあの日、土龍歴（地内連合院が始めた暦だが、連合院の権力弱体化とともに使われなくなった）六千九百九十九年七の月。ゴルフィ共和国は一帯の権益を収めるためにア・ルプ・パンチノに数十年前の戦争のことで言いがかりをつけ、同盟国の反対を押し切って一方的に侵攻を開始。

仙猫と謡われし者はこの暴威に反抗して今度はかつての祖国に味方しようとする。彼はこの時に多くの暗い衣を着せられた…　己が身も顧みず、祖国のためと思い、敢えて祖国の敵になる悲しみを背負い、二十四年もかけてマータルアストーロを激戦の末に破ったあの最も気高い人は、その長期戦であったことそのものが敵と内通していた証拠であり、今こうしてまたゴルフィを裏切って敵についたと罵られた。噂は狭い坑内を反響のように捻じ曲げられて伝えられ、彼は自分の都合だけで味方を変え、誰とでも争う忌まわしい化猫として恐れられるようになってしまった。しかし実際は――」地内の多くの人間が重要視しない罪の記憶を決して忘れようとはしない大男が、何かを強く噛み締めるような表情で僅かに浮かせていた腰を落としたので、椅子が苦しそうなきしみを上げる。

「私の近年までの調査では、戦いを長引かせていたのはゴルフィの方であったことが明白になっている。増援の出し惜しみ、そして、最も汚いやり方である敵との裏取引…　このせいで、彼の卓越した軍略がなぜか敵に簡単に看破されたりもしたのであろう。初期の最も清らかな意味で優れた精神を持っていたがゆえに、皮肉にも味方を疑うようなことは、例えそれに違和感を覚えたとしても、自ら封じていたのかも知れぬ。

しかも、一軍に匹敵する彼の離反もまた、既に計算されていたものであった。秘石の力によってウム

ポ・ルサの戦闘力を奪った侵略軍はア・ルプ・パンチノを滅ぼし、彼の持つとてつもない威力と価値を秘めた武具を得ようとした。それを扱う勇者が自国にいなくとも、軍事国家などに売れば莫大な利益となるからだ。だが既に、彼は縛鎖から辛くも抜け出し、地内を永久に去っていた。彼がそれから人を疑うことしかしなくなったことも、私には何の不思議とも思われない。悲しいことだとも思われないのだ。当然そうなるべきであったし、悲しいのは、ただ私たちの忌まわしい愚かな精神の血である」

聞き手の青年は目を丸くし、片方の眉を吊り上げている。到底、世間の道徳を代表する司教の説教とは思われない。それは、ある一人の、一般を越える真理を見据える男の率直な意見であったが、まだここで何かの結論を出すことはできないので、先を黙って聞くのが正しい態度だと思われる。雉猫は膝を叩いて相手の話の内容だけでなく、その朗々たる話し振りや知識量についてもそれとなく賛美し、感嘆の意を示す。

「全くもって驚かされることばかりです。少しも言うべき言葉が見つからないほどで、私としたことが思わず口を半開きにしたままでしばらくいたようです。父の古い活躍は聞き及んではいましたが、まさか、そこまで人々のために尽くそうとしていたとは…」

「その記憶が歴史より失われたのは、彼の働きへの感謝が生まれ、伝えられるよりもはるかに早いことでした。私も地内に住む者として、欠点あらば倍の美徳有りとかばいたいところなのですが、そもそも我々の言語体系にも見られるように、指導的立場にありながらすっかり時代遅れになってしまった憲法にしがみつく連合院を含め、閉鎖環境にある地内の人々は、他人を貶すことは得意でも、その良さを認めることはあまり重要視しないのです。

無論、追われたのは父君だけではありませんでして、王家の者も例外なく処刑台に登らねばならないという憂き目に遭います。そこで、まだ赤子だった双子の王子と姫が、猫族のやんごとなき血筋を後世に残すために、従者によって密かに逃がされました」

司教はここまで息もつかないようなペースで話してきたのに、急に口をつぐんでしまって、遠くを見るような不気味な無表情を雉猫の顔に投げかける。ラスはそれを睨みつけ、拒絶しようと試みたが、歯軋りをして、ついにはわなわなと揮えながら伏し目がちにする。

「…兄に聞いたのでしょう。自分でもこの肩に過去映像再生の術をかけたり、自身に退行催眠などをかけたりしてみた。兄はああ見えて驚嘆に値するほどの梵子抵抗力を持っているので記憶封じの術のかかりが薄かったのだろうが、念入りにやられていた私は普通の方法ではその記憶の片鱗すら引き出せなかったのだ。もはや言うまでも無いが、そうして得られたおぼろげな形と、いつかエルフムの…　ロンムーチョントの王女の体に見た毛並みの模様は、酷似していた…

私のは二重の意味で巧みに消されていたのに、彼女は勘付いたようだな。だから、突然に余所余所しく感じられるようになったのかもしれない。ふっ、認めたくは無かったがね、こんなに馬鹿げた悪戯のような事実が僕を捕らえていたなどということは。証拠が少ないことを良いことにその反証を必死に探していたのだが、どうやら無駄な逃げ道は貴殿のおかげで一気に崩されるようだな」

「父君をお恨みになられるでしょうね。しかしそれは、私がまだ本当の罪の告白をしていないからです。

私が貴方に関する事を良く知り、それに非常な関心を向けるのは、仰るような私の能力の如何によるものではなく、私がその事件の当事者であったからなのです。

あの時、私のもとに気高い身分の、不憫にもすぐに親を失った二人の子を抱いた乳母が助けを求めに来ました。彼女は敬虔な信者であり、追手から逃れ、狭い地内のあらゆる国の者が敵というあまりにも難しい状態だったので、せめて神に仕える者の慈悲にすがろうとしたのでしょう。

しかし当時の私は今以上に魂の修練が未熟であって、目立ちすぎる身分の自分が彼女を助けようとすればかえって逃亡者のためにならないという意見を述べ、その実は自分の出世を心の奥底で心配もしつつ、彼女にアドバイスをするに留めました。赤子には恐らく宮廷術士の技だと思いますが、強力な幻影の術がかけられていたので、子供達は実際の毛並みとは違う容姿であったようでした。私は彼女が地上に逃れる手はずを密かに整え、どのようなしつこい者も容易には入り込めないようなあの森への道筋を教えてやりました。でも、それ以上はできないことだと思われました。

後のことは、詳しくはわかりません。彼女は森の中に入り込み、哀れにも力尽きたのかもしれません。たまたま捨てられていた黒猫の赤子が入った箱は森の中に無造作に置かれていて、彼女は泣く泣く、それを最終的な託児所に見立てたのでしょう。仲間は多いほうが寂しさを和らげるだろうとか、他の子に紛れた方が見つかりにくいだろうとか、何らかの口実を作って。しかしもし彼女が途中で重荷に疲れ、そういった哀れな自己欺瞞の考えによって辛いが高貴な使命を投げ捨ててしまったのだとしても、その罪は彼女だけでなく、多くの人々、特にこの私にこそ帰するべきでしょう。…三人の幼子のうち、一人が何かの弾みで外に出て、偶然通りかかったロンムーチョントの王妃に拾われたのかもしれません。そして他の二人は、ウムポ・ルサ殿に育てられることになったのでしょう。

ピサ殿の話から推測されることですが、王子と王女を守るためにかけられた幻術において、特に血筋を示す紋章の浮かぶ毛並みの部分は恐らく最も手の込んだ方法で隠され、ただの真っ黒の痣にでも見えるようにしたのだと思われます。それはある程度年月が経つと自動で効果が消えてしまうものだったはずでしたが、お父上には、まさか自分が守ろうとして果たしえなかった国の血族が、運命の糸に引かれて自分の元に預けられたなどということまでは、さすがにわからなかったのです。

…仕方が無かったのだと思いつつもどこかで常に気がかりで、猫者種が特別珍しいというわけではないと知りつつも、あなた方が起たれたときにはよもやと思わざるを得ませんで、その興味を私が遠征に従軍した理由の一つに数え上げてもあながち誤りとはなりません。しかし、私自身が幻惑術の影響によってあなたの特徴を覚えていなかったこともあり、今まで明確な答えを出せずにいました。

もはや言い訳をするつもりはございません。このようなことになるとは…　しかし、この私の罪などは…　私のことよりも、ただ、あなたの…」

「…ありがとう、フアンホ第一位枢司教様。あなたの配慮は、あなたが誰の上に立ったとしても不思議ではないようなお力と精神に相応の高貴なご身分のことを考慮に入れないことができたとしても――こういう言い方が許されるとすれば、何も身に付けぬ素の魂の交流における、決して偽ることのできない思いやりの心そのものだと思われます。

父のことや貴方のこと、私を逃がしてくれた人々のことも、哀れな湾曲した捉え方で認識するほどに私は愚かではなく、過去を知れば知るほど、感謝の念しか浮かびません。しかしながら、それとは別に、今の私は戦わねばなりません。我が兄弟は、まともな相談もしたことはありませんが、歴史に影響されることを免れぬ魂の根源に描かれた未来図の読み方を知らないわけではありません。私達が人を裏切らずに常に善意だけで動いてきたかどうか、それを私は必要に応じて尊い神に宣言することができるでしょうが、その時、私の心の片隅で何かがちくりと冷たく痛むことを否定しません。私は軟弱な女子供ではないのです、生まれながらの戦士なのです。やらねばならないことが、命をあの恐るべき骸骨の神の祭壇に幾度もくべなければならない機会が、今後も山ほどあるのです。

…私の運命は皮肉なものであったかもしれません。ええ、確かにそうでしょう、私は自分がどのような苦境にあっても、それを乗り越える実力と気概を有しているがゆえに、幸福な人間だと思っていましたから。私はあの人を愛しました、私の姉か、妹かといったあの人を…　しかし私は戦士なのです。私の状況を、たかだかこんなちっぽけな悪戯のようなことを、地神の与えた試練であるなどとは夢にも思いたくはありません。どうか、そういった泥人形の美化はご免こうむりたい！

司祭様、私の中で急速に冷えていく何かを、あなたはご覧になることができるでしょう。私はそれを他人のように眺めやっているだけです、悲しくも、しかし、それほどの執着もなしに。どうしたことでしょうか、ただこれは、私が戦士であるからだと結論したい。他のことを今は考えたいとは思いません。つまり私は肉親を恋人にさせられようとした、よかろう。しかしそれは、繰り返させていただきますが、悲劇どころか、決して珍しくも無いような、巷に汚物のように打ち上げられている大根芝居の大好きな運命による三流のメロドラマか何かに過ぎない。そうだ、あれはマスタル(ゴルフィ共和国の街)の古本屋だったろうか。ろくに何も読んだことのない、悩んだことも無い、そういう輩が書いたようなどこぞの小説にもそんなことが書かれていましたっけ。…本当にこれで、気が晴れました。私は今日にも、あの新しい家族のような親愛によって結ばれた人々に、特に最初は多くの忌々しき事態を考慮して彼女の父親に手紙を出すでしょう。

私の恋は終わりました。そう、我が体内の細胞たちが結集した議会における裁決は下され、我が道に迷い無きことが立証され、我が高貴な精神は冷淡に忌まわしい事態を拒絶しました。彼らが許すなら私はあの人たちを家族であると思い続けるでしょうが、しばらくは戦争が都合よく隔たりを設けてくれるでしょうからそれほどの心配もありません」

フアンホ・ラップァ・マーヒは目に涙を浮かべて青年の虚栄的な寒々とした満足に戦慄し、懇願するように両腕を差し伸べる。「肉親との婚姻が認められる地域も多くあります。それは遺伝的な面で都合が悪いために道徳で縛められてはいますが、このような場合、それは誰にも許容されるような例外ですし…、それに、あなたがこの事態をそのように仮に表現するとしても、それならそれで、逆の方に思考を廻してみる――例えば、血が近くとも他人であることに変わりはなく、しかも遠い地で環境的には完全に離別して育ったのだし、問題と思われることもほとんどないことだ、といった風に考えることも…」

「仰るとおりです。そして、そのような可能性が私を喜ばせず、むしろ面倒ごとを増やすようなことに

しか思われないことを、あなたがなさったように告白をすれば、あなたはもう私に軍務以外の面で精神的な骨折りをしたいとは思われなくなるでしょうね。何となく想像はつくでしょうけれど…　…うむ、少々我々は雑談をし過ぎたようだ――ごまかしはやめます。そう、何も今、突然何かが変わったというわけではない、戦場の忙しさと日々の危険は私達を必然的に疎遠にして久しいのだ。面会はもちろん、文通のやり取りは回数を極端に減らし、お互いに愚痴や不平、使命に邪魔な憧憬を筆に託さぬよう抑えるので精一杯。最近では、恋人がいなくて寂しいなどと舌をペロリと出して自由にやっている兄のことが羨ましくさえ思われている程であった。つまり良いきっかけ、別れの口実が得られたといった具合なのだ――ほら、血の気が引いたでしょう。涙も乾くというものでしょう？」

しかし瘤取者は一層に心を痛ましめているだけである。雉猫は多少狼狽しながらもこの長い対話を終わらせて仕事につかねばならないと思い、椅子を押して立つ。

「それに私が亡国の王子であったということは全く歓迎すべき事実であり、いずれは知らねばならないことであったとも思われる。私はこのように、それを聞いてもあまり驚かない。兄との違いは誰の目にも歴然としていたし――それゆえに良く似ている部分というものが一層に微笑ましくも思われるのだが。我が力が何のために使われるべきであったか、我が血に何が託されていたのか、私はそれを女々しさで事態の困難を詩に変換することなしに、力強くあるがまま受け止めて克服しよう。我が行いは正当性を一層に増すのみである。いずれ人々は、我等が道の成功と軌跡が何によって作られてきたか知ることになるだろう」

折しも軍議の時が近づいている。ラスは軍団長に必要な書類の準備を命じ、軍服を手に取る。もはやラップァは何も言うことができず、いつも血の気が悪いような色の唇をより醜い死人のような色にさせたままで自室に戻る。彼は神に祈ろうとしたが、すぐにそれをあきらめて仕事に取り掛かかかる。「行いで変えねばならぬ。涙は、拭かれなければならぬ」と呟いて。

7、魂の血脈

ラスがア・ルプ・パンチノの忘れ形見であったことは彼自身から実に簡単な会話の中で兄にのみ伝えられる。それは彼らが陣内の見回りをした時にいつもより灰色が深いがそう大差はない印象の空に初雪を認め、互いに顔を見合わせたときである。森には雪が届かず、いつも陰鬱な状態ではあったが、それなりに最低限の状態で過ごすことのできる気温が保たれていたから、彼らには何度見ても雪が珍しく心躍らせるものに思われるのである――言うまでも無く、戦場の陰惨さぐらいでは彼等の水晶のような心に染みをつけることはできない。

その年は常に雨がじとじとと降り続け、土砂災害が多く、作物も根腐して不作による困窮が酷く、敵も味方も内部事情で苦しんでいて、あの仮初の協定以降に顕著になった戦線の停滞を更に強めている。黒猫は「せめて今年の雪くらいは豊作でありますように。願い叶うなら、今後の戦いは雪合戦で勝敗を

決めるという条約を締結しよう」と手を合わせて拝む仕草をして、弟を涙が出るほどに笑わせる。ラスは体を揺すりながら雪を捏ねて投球し、それを術によってどこまでも遠くに飛ばす。

灰色の空に溶け込む白い軌跡を目で追う兄に、弟は自分が秘密を持っていると仄めかす。おどけて懇願する黒猫に、彼は率直に言う。「僕ね、ア・ルプ・パンチノの王子だったらしいんだよ。大したもんだろ？」彼は兄が面白い冗談だと受け止めると期待していたが、ピサは一瞬ぎくりとした後、寂しそうな表情を浮かべ、すぐに顔を明るくする。

「そうか…　すごいなぁ。何と言っても、いや、すごい。俺とは出来が違うわけだよ」語彙の少ない表現は彼の衝撃を如実に表している。それは、彼が弟との血縁をか細いながらも信じていたのを、今それが淡くも打ち砕かれて愛する者から遠ざけられてしまったような感じを受けたからであったが、弟の方では、兄は単純に何でも物事を受け入れられる素直な人間だと少々見下したように羨むだけである。その後、彼らの間に交わされる暗黙の了解の一つに、このことをある程度事が成就するまでは味方にも隠しておこうという約束が追加される。この棚から牡丹餅といった名札は、後で大々的に公布した方が効果的に自分達の役に立てることができるだろうと思われたからである。

彼らは軍を再び集めて侵攻の準備に取り掛かる。鉱山から得られた鉱石で作られた武具が兵士達に支給されたが、それは彼らの増強にはさほど役に立ったというほどでもなく、その意義は、敵の主力を減らし、弱体化させたことにのみ求められる。着渡炉石が軍団長級以上の役に立ったのは、第一軍団長が旧来の武器を度重なる戦功のうちに壊してしまったので、代わりに巨大な戦斧を特注させたことくらいである。それにはラスが丹念に梵子力を注入したので、揮っただけで赤い光の残光が程走り、彼の得意とする一挙に数人の敵をなぎ倒す攻撃を補強することができる。ビスタン・ケイマリッチはこの新しい武器をたいそう気に入って兄弟に感謝する。

彼の大きな功を思えば実に安い報酬ではあるのだが、彼にはこれがただの武器ではなく、自分の思い描いたように、世の中に立ち上がった猫達が一つの区切りを得た証のように思われたのである。しかし、雉猫が司祭に思いの丈をぶつけたように、事態を過大評価することを自己に許さない兄弟には、何一つ果たされていないに等しく思われている。それどころか、今のように戦乱でかきまわしただけでは、世の人々が我慢していれば何となく大衆根性でやり過ごすことのできたかもしれない状況以下でしかない。戦乱の火蓋が再び切って落とされるのは当たり前のことで、それがどのように行われるかだけが焦点となる。

先に動いたのはエスパイア軍である。十分に戦力を回復し、アギロ・ザイマのこれ見よがしな軍備を見て先制攻撃をかけねばならないと思ったラックソルバーケ征東大将軍は目論見通りに鉱山に穴を開けてアギロ・ザイマ領となった方の穴から這い出てソーパプリケンの砦を落とし、アンガルストに迫る。ラスは大仰に、今や既成の事実となってしまった協定の破棄を一方的で悲しむべき敵国の暴威であると断じ、すぐに彼らが忘れた我々の力強さを思い知らせ、今度こそ悪事を働けぬように我等の威徳を彼らの地に敷かねばならぬ、と味方に宣言する。

こちらも準備されていたように何の焦りも見せずに部隊が展開し、アンガルストでは第一軍団と第三

軍団が協力して防ごうとする。侵攻部隊を率いるビーギン・チアは減少した虎の子の兵士の代わりに、それと不気味さの点では少しも劣らぬ怪物どもを従えて少数精鋭で数において勝るアギロ・ザイマ軍に当たる。ラスはこれを簡単に防げるものと思ってそこを二軍に任せ、乗じて動く可能性のあるヨルコンの動きを封じるために第一軍だけでは心細しと第五軍も合衆国付近の国境警備に当て、オンフォルクサスに駐留させている第四軍団と第六軍団を呼び戻しもしない。しかし、これはこの偉大な軍略家には後にも先にも無いと言えるほどの局面的ではあるが完全な失敗となる。

予想外だったのかもしれないが、敵の部隊にはかなり凶悪な戦闘力をその牙や息吹に秘めた龍族や一気に広範囲の攻撃を可能とする高水準の梵子術を知る闇の生物達が含まれていて、いつもは数で負けている戦局を何とかやりくりして打開してきた彼らが、逆に、数に勝ったことで奢ったわけでもないのだが、結果的には敗走の憂き目にあう。ビスタンも新しい斧で多くの敵を倒したのだが、一人で獅子奮迅しても大局で完全に負けていてはどうしようもなく、彼の武器はお披露目の戦場で苦い洗礼を受けることになる。第一軍団長はこれも経験だと考えて、負けを認めようとしない頑固な女騎士の部隊を押し出すようにしてクルバーニュまで戻る。他の場所でも不穏な動きが目立ってきており、内部に入り込んできた敵にばかり味方の主力を当てることは極めて危険だと思われたがゆえにラスは他の軍団も動かせず、慌てて首都のハガルクラから彼自ら援護に出る。

それでも彼らは苦戦を強いられたが、皮肉にも、これは敵将の戦功とはならない。――首の無い、自身も共知種族に化け物と呼ばれてしまうような容姿と、それに見合った残虐な性質を持ったビーギン・チアが戦争を仕掛けようとしない大将軍を遠まわしに批判したので、臆病者と思われて仲間から見放され、団結を欠くことを恐れたヤンゴスギブルビツは首無者の立案した化物を使う奇襲作戦を承認せざるを得なかった。ビーギン将軍はこの戦で大勝して人気を得れば大将軍の座に昇ることも難しくはないと考えている。彼の策、というほどのものでもなく、ただ凶悪な怪物を選りすぐってきただけのことだったが、確かにあのラスを本陣から引き出したのだからなかなかの戦果と言えよう。しかし、それをもたらしたのは怪物そのものであって彼ではなく、その証明とばかりに、皮肉にも、彼に浅ましい栄光の夢を見させたものの手で、彼はその欲望と共に灰となってしまう。それは興奮した偽神煉獄龍が誤って後方に火を吹きかけたためで、それまでもそれほど役に立っているようには見えなかった敵の大勢はこれで算を乱して戦の舞台から降りたが、そもそも今回の戦闘はこの怪物一匹で十分だったのであろうから、龍がこうしてめちゃくちゃに侵攻過程で暴れていることを、エスパイア軍に叱る権利などなかったであろう。

「こんな化物がまだ世の中に現存していたとは…」ラスは図鑑でしか見たことのないこの超巨大生物を、珍しい虫を子供が見出した時のように興味を引かれて見上げる。「それにしても、これを従属させるためにサイルゴッツはどれだけの樹人を犠牲にしたのだろう」

しかし、今は物思いにふける場合ではない。そもそも、彼は兄と風呂に入ったあの日から少し調子が悪いようである。それは抑圧した心の傷の悲鳴であり、敵を国内に入れてしまうといった彼らしくない失敗も、そういう心の隙が起こしたのかもしれない。この全く信じがたいほどの戦闘力を持った怪物に

も知性があるのか、突然に龍は向きを変えて総大将と見える者を襲う。ラスの防御が一瞬遅れ、彼も敵将と同じ運命を辿ったかと思われ、味方の悲痛な叫びが上がる。だが、彼は紙一重で勇士に庇われる。遅ればせに発動したラスの大量の氷塊を降らせる術や稲妻招来の最大級の術法を食って弱った竜を、士気を盛り返した兵士達が包囲して襲い、ようやく勝利が見え始める。

全身火傷で息も絶え絶えの戦士とは、かつて姫を探していた時に毒沼に落ちた、あの実際的にも人生においても落伍者であった男であったことが判明する。彼はラスの膨大な脳内に在庫する情報の中の一つにその名を埋もれさせてしまった存在の一つであった。しかし、やはり彼なりの人生がどこかにあって、今こうして、死を媒介として再び運命の申し子のもとにお目見えする光栄を得たのである。

「僕はどうかしていた…　一度救った男に、結局は命を捨てさせるようなことになるとは。いかなる理由があろうとも言い訳に過ぎぬ。気を引き締めなくては」雉猫は決意を新たにし、死にかけた兵士の頭にかがみこむ。「お主、苦しみぬいて生き残れるかどうかわからない細道を行くか。それとも、このまま栄光の戦衣に包まれて先に旅立った仲間達の元に行くか」

「ラス…の旦那…　俺は、旦那に助けられた後は、旦那の盾となることばかりを夢見てきたのさ。だから、混戦の今のような戦は、実にチャンスに富んでいたね。もしまた…　機会を与えてもらえるなら、何度でも、…例えこの身が醜い土くれ人形のようになろうとも、…それが、俺の生き甲斐なんだ」

ラスは確かに勝敗の見えた戦をそっちのけにして、あの時のようにして献身的に彼の看護に当たる。兵士は随分苦しみ、火傷はほとんど治らずにお世辞にも美しくなかった風貌は前以上に醜くなったが、死線を乗り越え、以後、彼はアンフ・シーバという名を誇らしくも大きな見出しをつけて偉大な人間に覚えられ、ただの足軽から、右弦総督近衛兵団の旗持ちへと飛び級で出世する。兄と違って細かいことを気にするラスが、例外的に身分的な言葉遣いの間違いを許すのもアンフだけである。彼は以後もラスのお付きとしてどこにでも従い、最初から見所のあった腹心とは違って実にくだらないことを喋り散らす癖も大目に見られ、ある激戦で言葉通りにラスの盾となって遂に力尽きるまで、誰にも胸を張れる人生を歩む。

それにしてもラスにとって意識の舞台へのアンフ・シーバの再登場は、最近の争点となっている個人的な問題を思い出させずにはいられない。彼は運命が答えを強要するそれから逃げるように仕事に打ち込んできた。彼ほどの聡明で実力のある青年が、小さな私事の処理に困るということは不思議に感じられるかもしれないが、原因に当たるようなことは特に無い場合や、それが普通は全く問題にされないほどに小さい場合でも、物事がこじれたり全くうまくいかなくなったりすることがある。それは小さな部品同士が僅かな不良で噛みあわなくなったことで全体が壊れてしまった機械構造のようなもので、最初のきっかけは小さくとも、一つの矛盾が次の矛盾を呼び、脳内のエントロピーが拡大していって処理不能になっていく。

地内で評判を刻々と貶めている彼へ、その行為自体が他人の目を非常に気にしなければならない困難なことであるにも関わらず、相も変わらず可能な限りエルフムの思いやりの篭った手紙は出され、その一部は戦場の陣幕へも届いているのであろう。そのことに関して予測するしかできないのは、恋人がそ

の内容を確認せずに署名を見ただけで、封も開けず、無造作に机の引き出しに入れて鍵を掛けてしまうからである。それは強い決意や底意といった何らかの根拠を持った行為ではなく雲煙過眼で、どうしてそういうことをしてしまうのか、彼自身にも良くわからない。確かに一つ一つの行為は取るに足らぬ小さい罪であるし、雲間から差し込む光のような運命の恩寵が彼を守っているかも知れないが、それでも防ぎきれない破滅を小さな悲しみの積み重なりが生み出すような、何か取り返しのつかないことをしているのではなかろうかという予感は、幸か不幸か、彼の自負心や虚栄心が『女々しいことだ』『忙しいことだ』などといった決まり文句を借用してかき消してしまう。偉大な軍略家は雑念を振り切ろうとしていつも以上に体や心に鞭打って働き、おかげで戦は二つの騒ぎを呈する。勝利に湧き、お祭り騒ぎのような味方の軍勢、巣を踏みにじられた蟻の群のような騒ぎの敵勢。

ヤンゴスギブルビツ・ラックソルバーケが憂慮したようにエスパイアの開戦は時期尚早であったのかもしれぬ。ラスは失敗を力に変える手本を示しすように速やかに軍団を動かして防御を十分にすると、兄を総大将とした大軍を派遣して報復攻撃をしかける。ピサの勇猛さは、後世に彼が『炎の剣を帯し獣戦士』と伝承などに詠われることからも推すことができるように、この頃にようやく完成の極地を見たようである。彼はいわゆる大器晩成といったタイプの人間であって、弟の最初から天性の素晴らしさを期待できた才気溢れる様子とは好対照である。実際にはその武具は、多くの物事に大らかで無頓着な彼らしく、身分と実力に相応ではない粗末な手槍であったのだが、世界中の武力を総合させると現出させられるといわれるほどの闘神の姿と重ねられるほどに彼は何者よりも強かった。

左弦総督はいささか古風な仕来りに従いながら威風堂々と敵に迫っていくのみであるが、これが敵にはどうにもやりにくい。部隊のどの部分も極限まで鍛えられた鋼のように隙が無く、ビスタン・ケイマリッチ、イム・リバオヤは黒猫に負けじと奮戦する。

ピサは何度かヤンゴスギブルビツの計略に掛かったが、その度ごとに獅子奮迅する兵士達の武勇がそれを補い余りある働きを見せたので、結局は策の効果はほとんどないようなものとなってしまう。しかも、策に頼る者というのはどうしてもそれに期待して弱腰になるものなので、大逆転劇を狙う敵勢は苦境を制した者達に返り討ちにあってしまう。恐るべき勇猛さからは想像できないほどに気さくな黒猫は部下から当然のごとく慕われ、ピサもまた厚く彼らを信頼していたので、彼が先陣に出ることは決して多くなかったが、その本陣は最も目立ち、攻め込まれやすい位置の丘に臆せずに立てられ、彼の姿を見ただけで敵はすくみあがる。場合によって彼が出なければならない時は、その小さい体にどうやってこれほどの力を秘めているのかと、敗走する敵が感嘆の溜息を思わず知らず漏らしてしまうことも少なくない。当時、数百人で周りを囲んでも彼一人に勝てないとさえ言われたが、それが誇張か本当かはともかく、少なくともピサは一般的な水準の人類種の戦闘力をとうに超えており、先の例のように何か巨大な生物や神のようなものを連想させるほどなので、彼をどうにかしないことには軍事国家と名高いエスパイアともあろう国が、正統な力によってねじ伏せられるのも時間の問題である。

敵の総大将は再びアギロ・ザイマとの講和を検討に入れるべきだと考えたが、もはや苛立った国の情勢がそれを許さない。彼はできることなら避けたかった選択肢を選ぶために北東の地域のどこかに潜伏

する女王に会いに行く。それは味方であるはずの使節団にとっても危険が伴う旅となり、また、彼の思う通りにはならないかもしれなかったが、制東大将軍は幾多の困難とドラマを乗り越えてサイルゴッツに謁見し、斑気な恐女王の本格的な協力を取り付ける。

そのような語る価値のある大きな物事が視野の偏りによってあまり取り沙汰されないのに、一方では、ラスがある時に書いた手紙がふわふわと取るに足らぬ枯葉のように舞い、地内に分解しながら溶け込んでいることについては詳しく言及しなくてはならないのも、物語の常というものでどうにも致し方が無い。エルフム・ヤスは誠心誠意に美青年を愛したに違いなかったが、行為は必ずそれに見合った報いを返されるわけではないから、彼女が心密かに恐れていた別れの手紙が愛の返歌の代わりに彼女の冷たい土製の机に置かれたことも、無情なことではあれ、奇異なことではない。

『愛する家族のような君へ』等といった文句で始まっていたその数枚の便箋は、彼女の涙を受け止める皿の役目を負わされ、吸水率の面において開発されているわけではない上級皮紙は激しく震える持ち手のせいで溜まりから川のような筋を作って床に滝を結ぶ。

『…僕達は遠く離れてしまった』――ラスよ、聞き飽きた理由だ、お前の力さえあればそんな障害が何だというのだ、もっとうまい言い訳もあろうに――『私は戦場のどこかで君を思い出すだろう。しかし、君はもう私を待つことは無い。私もまた、君の元には還らない。私はビルドモンソを愛する、そしてその中に咲いた花、我が姉である君を忘れない』――婉曲的で、思いやりが無いでもない表現ではあるが、どこかぶっきらぼうで、早く面倒ごとを終わらせてしまおうという退廃的な感じも読み取れる文章が長々と続く。はっきりと別れを告げれば良いものを――しかし、もうこれ以上、無遠慮な取材者のように普通に悲しむ人を覗き込むのはやめにしなければならない。なぜならこれは随分個人的なことで、ある二人の拗れた関係を露呈するという痴話に過ぎない。少なくとも当事者の一人がそのように考え、臭い物に蓋をするように現実から目を背けているのだから、その意向に反して患部をほじくるようなことはすべきではなかろう。

しかも、小さな絡まりから救いようも無くもつれてしまった思考の結末とは、偉大な人格者である雉猫にはあまり関係の無い小さな偶然の仕業で、彼の本分に関わることではない。だから、エルフムの嘆きから眼を背ける前に手紙の一文のみ引用しよう。――『僕達は別たれ、再び血によって結ばれ、血によって分かれんとす。しかし、我等が邂逅の時は永遠なり』美しい文脈が、期せずして兄の体得した結論を言葉に紡いでいく。彼はまるで兄の幻想を実世界に移すために活動したかのようであったが、その劇は夢で見たものを起きたときに思い出すとそうなるように、彼自身に言わせればすっかり茶番そのものとなってしまった。彼が手紙を付き人に渡し終え、独りになってすぐに帳簿に向かった時、わずかに肩をすくめて鼻で笑って見せたが、彼の性質を誤解されることはないと思いつつも、それが哀しい虚勢であると代弁してやらねばなるまい。あの大柄な体躯いっぱいに気高い精神を詰めている人間の嘆きが聞こえてきそうではないか。

とにかく雉猫がどんなに自分を偽って否定してみせたとしても、それが一つの小さな悲劇であることは間違く、兄弟の歩みにおいて取り沙汰すべき効能をこの事件は秘めている。それは巨大な悲しみを引

き出す地獄の門の鍵となったのだ。その鍵は兄弟の、いや、猫の三人、森から栄えある戦場へと生活空間を移した家族を分岐点に導くきっかけでもある。だが、このような分析は、現在が過去となったときに赤の他人が本来切れるものではないものを分類し、勝手にレッテルを貼りつけた時にそう思われたに過ぎない。当時者達にはそんなことは知る由も無く、例え知るところとなったとしても一笑にふされ、何の意味も持ち得なかっただろう。それが正しい反応というものだ。だから、それから何の音沙汰も無く、二ヶ月以上も偽りの平穏がラスを支配し続けることができた、遅ればせながらに兄が異変に気付くまでは。その頃に地内で本格的にアギロ・ザイマに敵対せんとした国の同盟リストに、ロンムーチョントが加わったことが、黒猫を酷く驚かせたのである。

「どういうわけなんだ、あそこには、お前の婚約者が、…エルフムがいるだろうに、王は気が変わったのか…」黒猫は報告書を握りつぶさんばかりの剣幕で、黙って座る弟の前を右往左往する。「いや、あの小国、押されたか。ゴルフィを抑えてほしかったのだが、仕方ないな。エッセヴァリナが二の足を踏まぬように先手を打たねばなるまいが…

お前、何を平然としているのさ、…そうか、そうだよな」彼は表情を全く変えない穏やかな弟の前で恥かしくなって床にあぐらをかく。「なるほど、何もかも平常運行、というわけだ。全て手を打ってあるのだな、お前のことだもんな。知らぬは他人のみ、いや、そろそろ種明かしをしてくれても良い頃だろうに」ピサはにやりとしながら弟に目配せをするのだが、それにも何の反応もなかったので、一瞬目を床に落とし、片方の眉根を上げて訝しそうに相手の顔を覗き込む。弟は兄に悪いことをしたような気持ちになったので、溜息をついて椅子を立ち、自分も床に座る。

「僕は何だか話し足りないことがあったようなんだ」ラスは首を少し傾げて驚くほどの美しい眼差しで兄を見つめ、彼が忌まわしいことだと思い込んでいることを、必要に迫られて仕方なくするように、淡々と告げる。兄の驚き様は大変なもので、それを話し手に気取られぬ努力のせいで、彼の爪は逞しく太い腿に深く突き刺さっている。弟は、もし兄さんが、と付け加える。

「もし兄さんが、まだあの人を愛しているというのなら、…僕は姉さんを任せるにこれ以上ないという程に相応しい人を見出したことになる。しかし、これは何と言う身勝手なことを言ったのだろう。ごめん、僕も少しは動揺しているようなんだ。そう怒らないでくれたまえ…」

無論、兄の厳しい表情は怒りなどではなく、むしろその全く正反対の気持ちのせいであって、弟の言う混乱を、本人よりも深く見抜いているゆえである。兄は何を言うべきかゆっくりと整理するために何度も深呼吸を余儀なくされたが、一度決めると、心の底から単純に生まれる言葉だけを使って、忌まわしい縺れを解くための説得を試みる。そう、忌まわしいのは事態ではなく、縺れそのものなのだ、何と言うことはない、種族に関わらず人間には良くあることだが、苛立ってかき回したり放ってしまったりするから解けないだけで、落ち着いて少しずつ向き合うなら自ずと良い状態に還るものなのだ——彼の言ったことは様々であったが詰まる所そういう意味であって、それは一度司祭が動揺しながらも試みたことであったから、期待は薄いというものだ。

だが、さすがは肉親——義理の関係であっても、血縁より濃い間柄になれることはここで例を引くま

でもない――である。この場合、ピサの純朴な性根から紡がれる捻りのない言葉が、かえって弟の心を打ったのだろう。驚くべきことに、弟はかなりあっさりと考え直し、自分はどうしてこうも物事をおかしな方向に考えていたのだろう、などと楽しげに喋る。

「あれから随分と経ってしまったから、エルフムは僕のことなんかどうでもよくなってしまったのかもしれない。そりゃ当然だけど、でも、僕はあきらめない、彼女から最後勧告をされるまではね」

「格好悪ければ悪いほど、今のお前には似合いさ。それくらいの罰は安いくらいだぜ。まぁ、俺はいっつもそんな感じで――お前にはそういうのは随分不釣合いだけど、だからこそ、お前は泥に塗れて彼女に想いをぶつけるべきだ。どういう結果になるにせよ、それが、お前の誠意そのものとして、彼女に届くことは間違いない。さもないとご推薦に甘んじて、本当に俺がいただいちまうぜ」少々下品な黒猫の笑いを弟は半ば本気で怒ってみせ、兄を安堵させる。

ところが、こうして得られた小さな合意、前進は、すでに決定された悲しみの軌道の上に置かれた小さな慰み事に過ぎず、色々と気侭に言われていた地内の相手の方では、兄弟の想像をはるかに越えた深刻な状況に陥っている。あの手紙を見て涙する娘を偶然に見つけて驚き、心を痛めた王は再び寝たきりになってしまっている。彼は死期が近いことを悟り、苦渋の決断ながら、娘に配下の男を薦める。友好を取り戻すためという理由でゴルフィから派遣された指者種のパフォム・ヒェダという長身の騎士で、王国の再建に随分尽力してくれて、王や疑う民衆の信頼を勝ち得ている。彼の方では王女を気に入っているが、彼女の心はラス一筋で動かしようがない。それに、エルフムの純心は、内心の美しさを容姿に重ねる愛しい者とは異なる、ヒェダの英雄的な外面に潜む邪な心を見抜いている。彼女はラスが嫌いになって手紙を送らなくなったのではなく、状況の著しい変動のせいで、それが全く不可能なこととなってしまっていただけである。

パフォム・ヒェダは王の代わりに権力の杖を振りかざして予定通りにゴルフィに近づき、反アギロ・ザイマの旗を掲げたのである。王は心を傷ましめたが、王女に対する雉猫の冷えた関係性と地内の情勢、自国の癒えぬ傷口を考慮し、また、隣国の回し者に有る事無い事吹き込まれ、彼のするように任せた。気を良くしたパフォム・ヒェダはあろうことか、言うことを聞かないエルフムを力づくで自分のものにしようとしたが、王の枕元に優しく気高い妻が立って娘の危機を教えたために、虎者は跳ね起きて駆け、末期の病人とは思えない威厳で彼を鷲づかみにして投げ飛ばす。「汝の功績に免じて命だけは助けてやろう。二度と我が国の土を踏むんじゃない、この紛い物め！」彼は荒々しく吼え、娘には最大の優しさで慰める。だがそれは、彼の顔が彼女の前で苦悶に歪むまでのあまりにも短い間のことである。王の命を奪った刃を手にする邪悪な男は、鼻息も荒く、それを、倒れた父の巨体を庇うように抱きかかえる娘の鼻先に突きつける。

「へっ、くたばりやがれ、てめぇこそがな。老いぼれの癖にいつまでも現世にしがみつきやがって。さぁ姫、大人しく俺のものになるんだ、さもなくば、ここで首を切って国を俺のものにしたって同じことよ」

王女は目に父を失った涙を溜めながらも、冷静な口調である。「父は、いえ、この偉大な、巨大な方

は、ただ私のために、国民のために、歴史のために、辛くとも生き抜いてきたのです。多くの民が嘆くでしょう。その嘆きに比べれば私一人の悲しみなど、娘である私の涙でさえ、取るに足らぬものだと言えるほどです。これほどに慕われる王の中の王を、あなたは滅ぼしました。その責任はかつて百層を越えたと言われる古の最深層に達するほど、重く深い。僅かの救いだけでも求めようと願うなら恐れなさい。必ずあの高貴な人が戻ってきて貴方にその罪を償わせるのですから」

「俺はうまいこといっていろいろと親父から聞き出してやったぜ。あいつは戻ってきやしない、あんたは捨てられたんだ！」

王女の目は哀れなモノを見る眼差しへと変わっていく。「仰る通りかもしれません。今更自分の変わらぬ深い愛を知ってもらうことは願うべくもないでしょう。しかし、私は決心しました。せめてロンムーチョントの潔白を示したい。あの方がどのような未来を見据えていようと、私はあの方の道を信じます。この私も一国の正統な王位継承権をもつ者として、国の行き先は自分で決めます」

護衛騎士のアルサイドが異様な物音を聞きつけて駆けつけたので返り血に塗れた人間はその場を立ち去る。王女は父親の亡骸を後で正式に弔うことを約束して簡単に埋葬し、急いで僅かの兵を従えて国を出る。その判断は正しく、間一髪で彼女は追撃者を逃れて秘密の抜け道に潜伏し、地上に出る。王女は国民を心配したが、そのまま留まっていれば打てる手もなくなってしまうことは自明のことであったし、何よりも、彼女自身が愛する者に、他を犠牲にしても、どうしても会いたいと欲したのである。民衆は再び頚木につながれ、ロンムーチョントは実質的にはゴルフィの属国と化し、王の墓は掘り返されて辱められたが、それでも誰が、彼女の最後の個人的な我侭を咎められようか――立て続けに起こる身を引き裂かれるような悲しみ、せめてそれをあの人に慰められたい――そう、それはまさに最期の、だったのだ。彼女はきっとそのことも無意識で予感していたのではなかっただろうか、もはや生きては愛する者に再会できぬことを、それならば――と。

本人達が小さなきっかけを与えた問題があらぬ方向へ飛び火して巨大化し、まったくどうしようもなくなった頃合になってから初めて彼らの前に責任を突きつけるようにして現れ、その破滅を促すようなことが世間でもままにある。そういうとき、最初の火遊びをしたものは、自分がその他愛ない行為によって恐るべき爆弾の導火線に点火したなどということは露にも知らなかったのだからその頃に慌てふためいても遅く、唖然とする以外にないことで、傍目から見ると彼らだけに罪を擦り付けるのは甚だ酷なことであると思われる。

指名手配のビラが至る所に配布されていたので、地内から出てきた王女の一行は、特に本来味方であるはずの地内の者には絶対に見つかってはならなかった。ゆえに彼らは自分の素性をよほど安心できる相手にでもないと明かさないような身なりをしていたのだが、それが不幸にも、遭遇したヨルコン巡回兵の敵意を呼び起こしてしまう。合衆国にとって地内のいざこざなどはあまり関係がなかったのだが、彼らはこの事件から発して連鎖的に起こる大局的な歴史の変動に巻き込まれる不慮の口実を自ら作ってしまう。

この情報は大変迅速にアギロ・ザイマ両総督のもとに届けられる――無論、遅かったとしても全く同

じことだったのだが。皮肉にも、ラスが第四層へお忍びで入り込む手配を兄がすっかり整えてやった頃である。兄弟は最悪の事態が起こってしまったこと、もはやそれは避けられない過去のものとなったことを完全に予感しながらも、まだ何か救いがあるように、希望を捨てない振りをして最速の行動を取った。もちろん、全てが実にあっけなく終わって万事片付けられていて、予想通りの事実が到達した地点には転がっている。

英雄が姫の窮地を救い、拗れた愛が全ての障壁を乗り越えて真に結びつきあう、それを最大の理解者が微笑ましく見守る――現実の前にはあまりにも無力な黒猫の空想！　現実は物語より面白いというが、それは移し世にはえてして詰まらない幕切れが多いために、ちょっとでも奇妙なことが起こると興味深く思えてしまうからなのだろう。彼らは夢想した、そのときは良い、しかし――ピサは父の走り書きに書かれていた言葉を鮮明に思い出す。『放たれたブーメランは、忘れた頃に投擲者の元へ律儀にも戻ってきて、忘れた者への恨みを晴らすようにその首を撥ねてしまう』――その時人は自分の愚かさ、傲慢を知る。もはやその採決の前では努力も嘆きも滑稽さを帯び、冷徹な眼差しに嘲笑われるものでしかない。

つまり、協定も何かもを振り切って国境を蹴破り、死臭を好む蝿のようなか弱い烏合の衆をあっという間に追い散らしたラスは泣くこともできなかったのである、姫の埋まった盛り土の石積みを前にして。それは、少しは道理をわきまえた幾人かのヨルコン兵が、自分達の手に掛けた国籍不明の敵と思われた甲冑の中身が噂の姫君であったことを知り、不憫に思って作ったものである。地内とは微妙な関係にあるこの国では、できれば触れたくないことだけにあまり盛大なものはできないのであったから、それが例え黒猫が連想したようなかつての底辺層の仲間達を葬った方法と似ていたとしても、あまり悪く言うことはできない。

こうして一つの悲劇が、運命の満足げな笑いの下に完結したようにも見える。「そう考えることもできよう、真にけっこうなことだ。お好きにしたらいい、うまいことやったとせいぜい勘違いを繰り返すがいい」誰に言ったわけでもないのだろうが、血走った目の雉猫がぼつりぼつりと呟く。「僕は許されるだろうか。いや、この際僕の過去など問題ではない。この場合、未来のことが」

兄は白い牙を剥き出し、弟に心から同調する。それが彼にできる最大限のことであったのだから。「報復は戦士の当然の権利だ。…血を、流そう！　俺もこの人を愛していた、しかし、お前は…　お前を、ああ、もう多くは語るまい。俺は敵を誰よりも多く殺害するだろう、お前より僅かに少ないくらいに」

各軍団長も驚くほどの勢いで直ちに軍馬や兵器が揃えられていく。ビルドモンソ連合院は地上の動きを知ると、ロンムーチョント王国の滅亡とその領土をゴルフィ共和国のものとすることを認め、最も積極的に反アギロ・ザイマを訴えるこの国を同盟軍の盟主国とし、逆恨みを理由にいよいよ本性を顕したとみえる裏切り者の兄弟を本格的に迎え撃つ準備を整える。

この動乱は、極めて劣勢に置かれていたエスパイア軍には起死回生の機会と見え、兼ねてよりの約束どおり、間髪入れず、サイルゴッツ自らが率いる最強の超獣軍団が北方から攻め寄せる。彼女には、勝利した暁にはアギロ・ザイマが所有する鉱山の権益をそっくり譲り渡すことになっている。ヴィムディ

ンゲルゾースには生贄と言う有機的な資源は十分なので、あとは無機質的なものが加われば非常に有難いことだ――という建前の口実を、枝穂の女王はエスパイアの使者に嬉しそうに伝えたものである。もちろん、この邪悪な存在はアギロ・ザイマを滅ぼすだけでなく、その後に弱体化したエスパイアもすぐに乗っ取ってしまおうと企んでいるのだが。全てがうまくいっていると感じ、彼女は満足の哄笑に浸る。黄圏皇帝の時代から久しく失われていた地域統一を自分の手だけによって為しえる――しかし、この巨大な邪悪の塊である不可思議な生命体の、あまりにもわかりにくい理想論を披露するのはここでは相応しくないから、これくらいにしておく。

ラスはすぐにでも地内に攻め入りたかったのだが、状況が切迫してきたことで今まで作ってきた砂の城を最後の癇癪で潰してしまうようなことのないようにしようと、冷静さを失わないように努める。しかし、兄は猛々しくそれを否定する。――感情に従うことはそれに溺れることとは違う、本能の真髄を導くことは、盲目になることとは違う。我等が目的の達成のためには、サイルゴッツやいずれは敵対するしかないと思われていた地内も避けて通れぬ相手であることは間違いなく、逆に考えれば、なかなか対極に置いて争えなかった勢力の中枢をようやく一度に引きずり出したとも言えなくはない。今こそ、これまでの労苦や業績の集大成として最大限の奮闘を見せ、完全にあらゆる敵を平伏させる時である――兄は、弟が気持ちを抑圧して心に癒しようのない罅が入ることを心配していたのだが、それでなくとも、彼の言うことは慎重派と強硬派という路線の内の、天才の兄弟に最も相応しいと思われる道を示しているから、ラスはこれを厳粛に受け止め、兄の配慮に感謝もする。

弟もまた、頷いて意見を述べる。――どちらかに向かえば後回しにした方が背後を衝いてきて、きっと煩わしいことになるに違いない。それなら、この時点が自分達の勝利を掴む時だと思い込んでいる連中の裏をかき、一挙にどちらも叩いてしまおう。それは甚だ困難なことであるかもしれないが、それに怖気づき、達成できないような自分達ならすでにこの場所、この地位に立ってはいない――ラスは地内攻略に集中し、ピサは地上最悪の敵を迎撃する。二人は固い握手を交わし、悪戯っぽく笑おうと試みる。堅い苦悶の表情が兄弟の顔に浮かび、それを見たことで第二の、小さな嘆きのような苦笑いが起こる。

「では、地内の爺さん連中によろしく」

「女王様に剣を持って謁見する時は、間違って惚れないようにね」

黒猫が舌を出しておどけた顔を作ってみせる。――いよいよ、もう二度と会えないかもしれない。いや、きっとそんなことはないし、そうなるかどうかなど実にくだらない悩みだ、今までの綱渡りの生き方、これから自分達が計画していることの達成、その後の莫大な仕事、そういう展開に鑑みれば。だから、もし…、と悪い方向のことを考える必要はない。一度決まったら、あとはただ最善を尽くせば良いだけである――そうわかってはいても、何か別の憂慮が、悲しみが、予感的な何かが、彼らの胸を時折刺すように締め付ける。

それは例えばエルフムの死、まだ、ただやるせない気持ちだけを浮かばせ、ほとんど実感を伴うことすらできない広漠とした悲しみ、そういった目に見えるような性質のものではない。当然二つで一つであるべきものが、いくらでも越え様のある距離などの物理的要因ではなく、致命的な心の別れという形

式を帯びていくという…

あの愛すべき女性の死についてまだ心的整理がつかないために、どこかに散らばる五つの秘玉を集め、ある大掛かりな儀式を施すことで初めて可能となると伝えられる蘇生の術といった奇跡がまだ施しようがあるに違いない、などと楽観的に考える余地をすら彼らは残している。無論それは、様々な状況を慮れば零より低い確率でしかないことも、知らぬわけではないのだが。そもそもこの術自体がある民族に伝わる伝説で、具体的な術詞は失われて久しく、必要な品もどこにあるかほとんどわからない(亡骸は死んだ場所から動かさない方が魂を繋ぎ止めやすいとも言われ、兄弟は一時的に墓をそのままにしておいたようだ)。また、現在では様々な奇跡を術によって起こすことができるゆえに道徳的規範の整備も同時進行でなされているが、それによれば死者の復活などという行為は、生と絡み合って対極に置かれる、一つの尊い自然現象を個人的欲望によって否定する忌まわしき行為としてほぼご法度とされている。だから、彼らの内心は絶望とまだなんとかなるという二つの考えで入り乱れている。こういうときに最も信頼の置ける人間と離れるのは甚だ不安なことであるが、彼らも勇士の鏡である。お互いに背を向け、達成難易度極大の戦いへしずしずと足を運ぼうとする。

その時である。劈くような音を立てて上空から光の柱のようなものが、強力な遠隔攻撃の術法のごとき勢いで飛来し、陣営の天井、床をほぼ同時に抜いて土中に突き刺さる。土煙やざらざらと音を立てる天井の瓦礫や欠片に取り巻かれたそれは、忘れもしない初期の小さな模擬戦で、苦い敗北によって得ることのなかったトロフィー――紛れもなく、彼らの父親、ゼイダキャトの超天才科学者が開発した二本の武具であった。子供達はしばらくそれを眺めているだけであったが、どちらからともなく歩みより、思い思いに、好みがかち合うこともなく、一本ずつを柄に手をかけて引き抜く。

それらは馴染みの、懐かしい小石や草で作った拙い玩具のようにしっくりと感じられ、彼らには初めて手にしたとは思われないほどである。その不思議さは、きっと命に賭けて守りつづけてきたこの宝物を、死地へ旅立つ子に送りつけたあの男にも感じられているのだろう。それは、最初は広漠とした思想や大筋しかなかった創作が、書かれるうちに次第に著者に命を吹き込まれ、彼自身思いもよらぬほど、多くの人の心に染みる作品となる一部始終にも似ている。

ピサは手にした変わった形の武器を難なく腕にはめ込み、備え付けられた幾つかのスイッチを押すと、ベルトが自動で程よい具合に腕を締める。それは手に持って扱う指者等が好む一般的な武器とは異なり、腕との一体化が最大限に思慮されているから、彼にとってはまるで爪がそのまま強化されたような感覚で、ピサの得意とする肉弾戦の邪魔にならずにその威力を増大させられる。そして、ピサが試すように腕に力を込めたり抜いたりして闘気を軽く流してやると、扇形で褐色の、幅広い丸型の刃が電撃を流されたような光沢を発し、その破壊力に武器自身が熱されたのを抑えようとするかのように、小手を兼ねる腕巻き――性格的に特攻しやすく、時に防御が疎かになる彼には、このような邪魔にならない盾代わりが大変な助けとなるであろう――に付けられたいくつもの管から得体の知れないガスが音を立てて生じる。これが一体どんな効果を有しているのか、さらなる力が秘められているのかは、解説書を添付するほどの親切を製作者に期待していない息子は、深く追求してみようとも思わない。

「アプンヘッサにゴミ箱は置かなかったか？　こんなところに捨てないでほしいものだね」ピサは言葉

に反して嬉しそうに装着した左腕を振るう。
「まぁ、せいぜい使ってやるか。…お前の方が、立派な感じだな。俺のは小さいや。まぁ、重いのはだるいから嫌なんだけどよ」配下の兵士達が数人で持ち運ぶのにも苦労するような鎧を着込んでいるくせに、といったところであるが、彼の言うように、この品は重量を軽減させる梵子反動機構が埋め込まれているので、何にも増して軽い。それは弟の巨大な槍についても同じことである。

いかに優れた軍略家であろうとも、彼が敵兵士にぶつからないという保証は戦場ではできないことである。ゆえに、ラスはすでに戦士としてはピサの二の次になってしまってはいるが、力強い武装がぜひとも必要である。今までは自分で調達したそこそこ使える打杖を使っていたが、父の武器を得た彼は使い慣れた旧来の物をその場に打っ棄ることに何の未練も感じていない。彼の槍には切り払うことのできる刃と敵の武器を挟み込むための突っかえがつき、その部分を器用に使えば殴打攻撃も可能。彼のように、様々な武装戦術に長けた者こそ、この武器の真価を引き出せるだろう。また、竿の部分には多くの薄気味悪い飾りのようなものや紋様がついているが、それぞれに天才的な製作者による複雑な意味が込められている。そのため、ボディランゲージも重要なデバイスとなる梵子術の発動には邪魔になるとされる大型の武器であるにも関わらず、この槍は使用者の念を強化し、術発動までの手順を助けてくれる。父が培ってきた知恵の継承者のごとき雉猫にはまさに打って付けの武器と言える。
「おとう…」ラスは思わず知らず、壊れた部分から灰色の空を見上げ、『父上』とか『お父さん』とは言わず、甘える時の呼び方で呟く。彼は自分の頭にまだ何か柔らかいものが乗っているかのような感触を味わっている。「おとうの傑作、使わせてもらうよ」

ところで、いつも以上に神経を使うのが右弦軍団の部隊編成である。かなり前から、味方である地内の者との不和が味方の中でも動揺を招いていたが、今度は本格的に戦争をするのであるから、士気の低下、最悪、裏切りもありえる。対策としては、左と右の軍団編成を一時すっかり取り消して、都合の良いように組替えることにする。まず、軍団長や主力隊長が地内貴族ゆえに、特に心配のある第五軍をピサのお膝元に付ける。国の守りは左弦総督の片腕、巨神よろしくどっしりと構える大男に任せ、右弦総督の愛弟子を参謀として付ける。雉猫青年のことが心配なのか、フアンホ・ラップァ・マーヒが地内侵攻軍についていくと強く主張したが、ラスは迷った末、第四軍団は宗教という理念に仕えて国家権力に癒着していないものと信じられると考え、彼らを連れて行くことにする。その他、ラスしか扱えない第六軍はもちろんだが、足の軽い、狭い地形でも器用に立ち回れる第三軍も、ラスの作戦の主力として右弦に編成される。強大な超獣に当たるには量より質という特殊部隊が必要で、極限まで鍛えられた第二軍の騎兵はピサの先陣を切る事になる。

第五軍団の兵士は、守城軍が不十分だという理由で第一軍団に一部廻されているので、もともと数の少ない第二軍と合わせても、兵団としてはかなり小規模になってしまう。しかしそれには、ここ最近、初期から目立っていた不平不満が一層に顕著になってきたアイバン・クフグ=キャーイを信頼できないために、その力を弱めておきたいという隠れた意味がある。実のところ、兄弟は前のように第五軍団を守りに就かせてビスタンをサイルゴッツ戦に起用したかったのだが、これ以上守備などの消極的な仕事

――彼に言わせれば――を嫌う彼に強要できないし、万が一侵攻中に内部が乱れたら仕様もない。かといってアイバンの人脈や財力、勇猛さは、良きにしろ悪きにしろまだまだアギロ・ザイマには不可欠である。そこで、兄弟は厳しい戦況を虎猫に話して彼をうまく持ち上げながら、部隊を様々に動かす代わりに第五軍を最も誉れある作戦の主要軍とし、勝利の暁には最高級の武勲を約束して何とか彼を操っている。

厳しい戦いの予想される左弦はまさに少数精鋭が過ぎる感は否めない。そこで、左弦参謀という役職に従って、一人で大軍以上の戦闘力を有するウムポ・ルサが再び黒猫に付き従うこととなる。ラスは嫌がる兄を「負けるよりはマシだろう」と適当に宥めすかし、さっさと『ほの暗い港』から潜っていく。

「閣下から直々にお召しいただけるとは、真、光栄の至り。そろそろ年金暮らしに飽き飽きしておりまして」いつの間にか、転移の術で時空を越えた化猫がお馴染みの嫌らしい薄笑いを浮かべて黒猫の背後に立っている。ピサは吐き掛けそうになった唾を飲みこむ。

「呆け対策にはちょうど良いだろうよ。まぁ、お互い邪魔しないようにがんばることとしよう」

「そうですねぇ、いつもながら、左弦総督の超素晴らしい知略には頭が下がります」

ああ、不快だ不快だ、と、ピサは嫌そうな顔を第二軍団長に投げかけ、同意を求める。しかし、マイザブル・ビアツは仲人もやってもらった上、いろいろな衝突やら協力やらでウムポとわかりあってしまっているので、ふいと、決まり悪そうに親子の痴話喧嘩から目を背けるだけ。黒猫は少しぽかんと口を開けて得られなかったものを虚しく追いかけるようにしたが、何となく合点し、今回の作戦に連れて行く奴等は誰一人面白く話せる奴がいなそうだと一人憤慨する。

サイルゴッツの兵団はゆっくりと自信を持って近づいてきて、ヤンゴスギブルビツが守りを固めながら消極的に行動しているのも一々咎めない。対するアギロ・ザイマの左弦軍団も隊列を組んでこれを正面から迎え撃つ。エンゲージポイントは今では単なる無法地帯と化しているヴィムディンゲルゾース領の、『猪の丘』を中心としたポゥロ草原辺りになりそうである。猪者どもの短い往年の夢の跡が遮蔽物として乱立しているために、草原とはいえ地形を制した方が戦局を有利に運ぶことができよう。両軍は四根土離れて陣を張り、敵の出方を窺う。

一方、地内遠征軍が転じて侵攻軍となった者達は、ラス個人の恨みを前面に押し出すわけには行かないので、敵の『裏切り者』という野次に対し、『ロンムーチョント王国を滅ぼしたゴルフィ共和国の不当性』が『連合院の採決にも大きな、不公平な影響を及ぼしている』ために、『ビルドモンソ連合の友好国であるアギロ・ザイマに戦争を仕掛ける準備を行ってきた』と論理を弄くって、自分達の侵攻作戦を正当防衛であるとしている。ゆえに、彼らの目的はゴルフィ共和国からロンムーチョント王国の領土を奪還すること、および、地内との和平条約を締結することである。

右弦軍団は武装して中に入っていきながら、連合軍に半ば矛盾した『武装解除』を何度も呼びかけ、拒否されることで建前を固める。――状況が緊迫しているため、連合院との交渉において自分達には自衛程度の武力が必要――確かに、連合軍の数は侵攻軍の数十倍なのだから多少は頷けなくもない。だが、地内連合は前々から指摘されているように各国が自分の権益を気にするあまりに結束力が弱く、弱点を

突かれるとただの烏合の衆となる危険性があるし、すでにして遠征時に、ラスの精強な軍隊が幾倍もの兵力を破って地内を地上の支配から解放したことを考えれば、おいそれと恐るべき侵攻軍の要求に従えるわけがない。

それならば仕方がない、要求を突き通すために少々手荒な真似をしなければならない。本来分かり合える者達が、地上と地内に住み別れたためにこのような悲しむべき事態が起こってしまったが、遠征の試練を乗り越えた我々の正しさが再び地内の人々に判ってもらえる日も決して遠いものではあるまい。――などと並べ立て、右弦軍団は連合院の本拠が移ったマルニキュを目標とするが、第四層までいくということは、その間に立ちはだかる者全て敵というわけであり、つまりは、雉猫はこの機会に様々なしがらみで攻めにくかった地内の権益を洗いざらい手中に収めようと狙っている。

彼はその考えに乗ってくる国を柔和な態度で迎え入れる。力と守りやすい位置のために独自の立場を取り、連合院には爪弾きにされていて面白くないと感じていたエッセヴァリナ王国はもちろん、ポイラルドも消極的ながら、第一位司教の説得――このとき、彼は正義を説かなかった。時勢の変化に即した兄弟の崇高な視野と、それに味方することの有益さを王に巧みな弁舌で描いてみせた――でアギロ・ザイマに味方することになる。ラス総督はこの二国が、規模や地内全体への貢献度から言っても最も大きな主権を与えられるべき国家であるのにそうなっていないのは、深層の不当な支配のせいであると説いて共同軍を煽る。

このように、お互いに理由付けの応酬を交えてはいるが、要は争わないともはや二進も三進もいかないといった状態であることには変わりなかったから、戦いは最初から熾烈さを極める。連合軍の主力は侵入してきたアギロ・ザイマ軍を殲滅するだけでなく、追い立てて地上まで攻め取るつもりであり、ヤンヤン地方に配されていた兵力は莫大なものであったからだ。

地内と地上の玄関口に生き、慎ましい生活を度々の他国による蹂躙に任せることに悲しくも慣れているミルジリンカ族は、すでに北のムロランまで退いて中立を決め込んでいる。彼らは領土を最初から全く躊躇せずに侵略者に渡す代わり、立退き料、宿泊料のようなものを要求する。それを払いさえすれば全く便利な連中であるが、もし横暴にも、足元を見てはいるが決して高すぎるものではない見返りをすら侵略者が支払わない場合は死力を尽くして抵抗する。このような特殊な処世術といざという時の戦術を彼らに教えたのはムロランに住む珍しい種族の『怠者（おこたりもの）』族であり、それゆえに彼らはミルジリンカに崇拝されている。

三日月型に広がる戦場で、ラスは圧倒的に数の多い敵に囲まれないように第四軍の術士達の力を束ねて巨大な障壁を幾つか作らせる。そして、地内の者には番犬同然に軽んじられていたミルジリンカ族に目をつけ、地上でしか手に入らない珍しい貢物を、障壁に使者を隠しながら第六軍団長に届けさせる。もちろん、この喋れもしない息荒い怪物の姿を見て快く思う小さい種族はほとんどいないのだが、遠く巨人族の血筋にある怠者達は彼のごとき巨大な人型種を尊敬しているので、いつもそこからほどんと動こうとしない苔むした揺り籠兼棺桶の岩から降り、スパイルト・チルグに跪く。これは電撃的な作用をミルジリンカ族に及ぼし、自分達の生神より崇高と思われる灰色巨人を急いでもてなす。おかげで、本

来他人の争いには見向きもしない彼らが全面的にアギロ・ザイマに味方することを約束し、その誓いとして、『静謐の籠』と呼ばれる虚品を献上する。部族の小さな援軍には興味なく、ただこれだけを求めていたラスの喜び様は大変なもので、単純なお使いに行っただけなのに優秀な外交官のような働きをした灰色巨人は、彼なりに首を傾げるほど誉めそやされる。

「ほれ、うまくいかないことばかりと思っていても、こうして思いもかけぬほど速やかに狙い通りに行ったりもするものだ。悪いことは覚え、良いことは都合よく忘れて欲するのは低級な本能に過ぎぬ。悪いことも良いことも、いかなる時にも冷静に受け止め、有利に物事を運ぶために利用することこそ肝要なり、だ」

まるで辛い経験をより高次の思考で克服したかのような青年の様子を、ラップァは少々度が過ぎるようにも感じたが、一先ず同調する言葉を述べる。ラスもそれに満足げに頷き、早速、それをするにはまだまだ困難が続くと思われていた作戦を実行に移す。右弦総督は中央大陸から取り寄せた最上級の虫脚を駆って敵兵の前に踊り出る。あまりにも大胆な動きに、敵兵が目の前の目標に策有りと勘ぐってざわざわと退く。ラスは茨を模した支柱で複雑に組まれた籠を掲げ、その力を発動するキーワードを交えた戦いの歌を第四軍の術士達に詠わせる。第四軍は結成当時から軍楽隊のような機能も兼ねていて、殊に、千章将の虫者マフィナ・フランツームは自慢の羽で戦士の士気を高揚させるだけでなく、その細胞の働きも直接活性化させる虚音楽の類稀な使い手である。彼が作る歌曲の効果や基礎的なものに芸術性を与えるのは、若かりし頃に音楽の世界で活躍せんと欲したが、聖歌を作りながら次第にその中身の教えに傾倒していった第一位枢司教自らが行っている。『大地、御身とこしえに』や『聖宮謳歌』などの名曲が実例としてあげられるように、ラスの意志に従って彼らが生み出したものはただの軍歌を越え、戦時という特殊な時代に生まれた恒久的な効果と魅力を持った芸術文化そのものとして後代に引き継がれたほどである。

残念ながらこのときに作られた歌曲の詳細資料は見つかっていないが、『土竜の誓言』という地内に伝わる民謡にその面影を見ることができる。その歌は意味を単純な恋愛歌に置き換えられてはいる。――ある恋人が相手も自分を愛している、愛して欲しい、愛していないと許さない、…等と自己中心的に捲し立てて、相手は嫌がるが最後には適当にそれを受け流していれば、まんざらでもない楽しみを得られるものだという結論に至る――随分と卑俗で退廃的なものである。しかしその内容だけでなく、この歌が当時侵攻軍の敵国であったはずの部族や国家にも当所から受け継がれていたらしいことからも、その本来の意味とラスの作戦がいかなるものであったのかを推測できる。

優れた虚音楽に包まれた敵味方はそのあまりの荘厳さに心を奪われて陣営に留まり、同族同士が敵としてまみえる悲しさを嘆き、また、それでも避けられぬ争いを、せめて正々堂々と戦おうという謹厳な気持ちに浸る。しかしこれは気分の問題だけではなく、虚音楽の効力と、それによってラスの掲げる品の力が引き出されたから一層に強まり、別の作用も引き起こす。

この世界には独自の哲学や生存方法を持つ数多くの生物種や部族があり、その中で生き抜くためにそれぞれ工夫がなされている。ミルジリンカでは、自分達の土地に攻めてきた者達がいかに有無を言わせ

ず略奪するような邪悪なものであったり、頑固な哲学を主張したり、言葉の通じぬ種族であったりしても、古来より部族に伝わる『静謐の籠』の力を発動し、その漠然とした作用で自分達の揺るぎ無い正当性を主張し、独自的な交渉に役立ててきた。ラスはその力を利用して、敵の中に芽生えていた自分達への心の牙を抜き、自軍兵士の士気を落としていた戦いの意義への疑いを晴らす。それは、ラスには何にも増して、どうしても必要なことであったのだ。敵に何か戦いの原動力があり、味方に足を引っ張る要素があるのでは、いかに鍛えられた武勇も練り上げられた策略も功を奏さないのだから。

彼はさらに駄目を押すように、このように宣言する。「我、地内の正統なる王家として滅びしア・ルプ・パンチノの血統を継ぐ者なり」ゆえに我、地内の事々に物申す権利有り、というわけだ。早速に敵の中で、特に考え深い者や国を越えた信仰の絆で第一位枢司教を崇敬する多くの人間がこの戦に疑問を持ち、アギロ・ザイマの話し合いの要求は必然的なもので、それに応じず、ゴルフィ共和国一つに操られているような連合院に疑いを持つ者達が多数生じる。

おっとりした甘い魅力を湛える顔に、時として鋭い知性を示す眼光を宿す雉猫が、そういう敵の隙を見逃すわけがない。彼らは間髪入れずに第六軍を前面に押し出して敵陣の真っ只中に突撃する。狼姿の獰猛な巨人どもには、白い死装束のようなものを着せて鬣を振り乱させ、全く意味のない記号や言葉の羅列を書いた大きな旗を持たせている。それを見た敵勢は、歌によって自分達の正当性を疑っていたこともあり、地神が過ちを犯した者を懲らしめるために鬼でも遣わしたのかと怯え、大軍をうまくまとめきれない。既に鉱山戦で試したように灰色巨人達は散らばって第三軍兵士と共に敵を分断しながら戦い、第四軍団がそれに後方支援を行う。

地内のじとじとする雨が雨樋のような機能を持つ多くの溝を伝ってより深層の地下川に注がれる中、長い戦いにもいつしか終結点が見えてくる。そもそもこの戦、地内の者には不利であったのかもしれない。遠征で勝利するために、主要な、優れた指揮官はほとんど後のアギロ・ザイマに提供してしまっていたのだから――敵は第一層から退き、ザフ、エン、ベルカイ、アルツォ、トリといった、第一層の共和連合の小国がことごとく今回の戦に中立の立場をとることを宣言。第二、第三層では大国がアギロ・ザイマ軍を受け入れて他に睨みを利かすので、連合院の軍勢は一気に最後の砦である第四層にまで退く。しかしここには、初戦のような統制の取れない穴だらけの大軍とは違って、数こそ少なくなったが質の良い兵団と優れた指揮官がいるから注意が必要であるとラスには思われる。

国の権益を重視する政策の善悪などこの期に及んではもはや問題にならない。戦争を仕掛けている者が何を言っても無駄というもの、古来よりいかに謳われようとも正当な戦争など実在せず、そこにはただの殺し合いが転がっているばかりである。しかしそれは茶番などではなく、個人や集団の、必死の生存闘争の行き過ぎであり、姦計を用いたとはいえ、ゴルフィ共和国の野心にも、最深層に住む者の虐げられた感覚――上層に住むほど敵だけでなく益ある交易にも触れる機会が多い。中間層はそういった意味ではぬるま湯に浸かっているとも言え、エッセヴァリナのような国はそうして富を集めてきた――や古い時代から受け継いできた貴族主義が抗し得ない理由として含まれていたのだろう。それは対する兄弟も同じで、彼らはそもそも初期のうちから、自分達の崇高な目的のためにどうしても倒さねばらなら

ない相手としてこの国をターゲットに据えていたのである。

だから、ラスはもはや正義を語らない。因縁が巡り、雉猫とゴルフィ軍が再び自然の要塞で激突する。敵勢の中にかつては戦友にもなった優れた者達の姿が見える。老いた体に鞭打って連合軍の総司令官を務める栄誉騎士。心に突き刺さるような核心を突く療法ではなく、その効果は多少薄まるが、人の良い慰めでラスの話をいつまでも聞いてくれた第三位司教。――彼らは自国の兵士達と共に勇敢に戦い、望むように戦場で死んだ。

いかに敵の数が多く、地形において有利であろうとも、広大な地上での辛い戦いに何年も耐え抜いてきたアギロ・ザイマ軍に、地内で安穏としていた者達がかなうはずもなかったのである。激しい戦いの末に連合軍は四散し、議会の主要な者たちは彼らの同盟国であるロンムーチョント王国を不当に占領した責任を問われて軍事法廷にかけられる。ほとんどの者がすぐに処刑されたが、ラスの復讐を恐れたパフォム・ヒェダは祖国を見捨ててかなり前から姿を消しており、右弦総督の勅令で多額の報奨金が掛けられたお尋ね者となる。

占領地には議会に実権を摂られていた王が取り立てられ、アギロ・ザイマ指導の下に暫定政権を与えられる。さすがに連合院の長老達に刃を向けはしないが、アギロ・ザイマを国家として正式に認めさせ、地内連合をエッセヴァリナ王国、ポイラルド王国、新生ゴルフィ・ロンムーチョント王国を主導国とした組織に変えるようにさせる等、望むままに圧力をかけ、調印させる。

勝利の後こそが非常に大変であったと思い出されるほどに戦後処理を纏め上げるのには苦労が要る。反乱勢力を抑えるために各国に速やかに協調方針を打ち出させたり、貢物を送ったり出させたり、人質の意味をこめて懇親会を開き、主要な家族のものを駐留させたり――雉猫は思い出の染み付く地にいながら、悲しみに心を引き裂かれるような状態になることを多忙な仕事によって婉曲に避けることができた。それには、フアンホ・ラップァ・マーヒが何も言わずに細心の配慮を彼の身辺に注いでくれていたからでもある。第一位司教自らが指揮をとり、アインダー・ゼットコウロ、ヒューリ・エングラムなどの、かつてラスに近しかった敵の勇士のために盛大な最上の敬意を示す葬儀が行われる。それは国民感情を鎮めるのにも一役買っている。家族同然の付き合いをしていたヤス家の者達やその近衛騎士達の墓も壮麗なものに移され、雉猫の弔問を待つばかりとなる。

果たして、激務の合間を縫って彼は英霊達に挨拶をしに訪れる。彼はそれぞれの墓を申し分なく、しかし多少淡々とした機械的な作法で全て廻ると、実に立派な弔いがなされたから、優れた人々の御霊もお悦びのことでしょうとだけ述べ、すぐに仕事に戻る。黒猫の最大の理解者ビスタンと同じ種族で好対照といえるラップァは、今や雉猫に対して同じような位置関係にあり、彼も多くを語らず、青年の職務を助けるために心魂を傾ける。

右弦軍団が地内に入って敵勢力の制圧を完了するまでに約三週間かかったが、その電撃的な勝利が地上に伝えられるちょうど二日前、膠着していた左弦側の戦線がついに火を吹いていた。しかし黒猫にとって、戦い以外に心を暗くさせる事件がその前日に起こっている。それは直接対エスパイア・ヴィムディンゲルゾース連合軍を迎え撃つ彼らの軍勢の損害ではなかったが、左弦総督は難しい戦局に立たされ

ているであろう右弦総督の心をかき乱さないようにと配慮し、それを報告することを遅らせる。

守備軍の総括参謀ハーン・サイバルの死――その悲劇は以下のように段取りが組まれ、演出されている。

――サイルゴッツが動いたと同時に、ヨルコン義勇兵団の残党が愛国決死の旗を掲げて首都のセコンゲッシュを目指した。それはヨルコン政府の指示ではなかったので、守備軍には全く不意なことではあったのだが、ハーンは落ち着いて対処し、心配してアプンヘッサを動こうとした第一軍団長にも持ち場を守るように指示する。ヨルコン正規軍の動きは鈍く、義勇兵を抑えるつもりだと言いながら隙あらば彼らと共謀してアギロ・ザイマを攻撃しようと狙っていることは明白である。守備総長を任されているハーンはなるべく急いで敵を叩き、自分達の力を示してヨルコン軍の中に湧き上がってきた悪い虫を挫かねばらないと感じる。彼は主力を部下に任せて別の各所に分けて配置し、自ら指揮を取ってユンドルビアースヌの砦に少数精鋭の部隊を置く。この砦は彼の尊崇してやまぬ雉猫自らが設計した極めて堅牢なもので、ここから出ずに敵を誘い込んで戦うようにすれば決して東から国内を荒らされるようなことはないと思われている。

だが、敵の総大将が誰であるかの報告を受けた時、彼は体中の皮膚が粟立つのを感じる。「豚がわざわざ、昔年の恨みを晴らしに来てくれたとはな！」青年の目はぎらつき、武者震いに襲われる。その嫌悪の入り混じった興奮も束の間、第四軍団から異動してきた別の部下、旧来の仲間でもある千章将ンゴバルケブ・ソアが顔を真っ赤にし、憤怒の形相で敵陣の状況を伝えるまでのこと。ヨルコン義勇兵団の総大将モロサイフンガルは、かつてハーンと共に戦って命を落としたコンドリムスの墓を暴き、その腐乱した頭蓋骨を赤い直垂のかけられた台座に突き出た二本の針の一本に突き刺していた。もう一本にはハーンの首を突き刺す予定であることも敵兵の噂でわかっている。激越な逆恨みの表現である。モロサイフンガル・バイオーフはこの日のために義勇軍に入り、既に機能性を失って助成金を食い物にするように腐敗した組織の中で頭角をあらわし、最も憎しとするハーン・サイバルに復讐する準備をしてきたのである。

指者の青年もまたンゴバルケブと同じように激怒するが、自分の重要な立場を思い出し、必死に我慢して防御に徹する。砦に留まっている限り、実力において数段格上であるハーン・サイバルに邪悪で低俗な豚者などが勝てるはずもない。しかし、青年は飛び出してしまう。浅ましい心に狡猾さを備えた豚者が、今度は合衆国内の地中で雉猫の凱旋を静かに待っているエルフム・ヤスの墓を暴くために別働隊を派遣したためである。遂に正義感の強すぎる青年の堪忍袋の緒が切れ、自ら少数の部隊で別働隊を先回りして叩こうとする。彼はそこに待ち受けていたヨルコン鷹捷兵団に囲まれ、いつか聡明な巨人が自分を評したことが当たっていたことを実感し、勿体無いほどの信頼を寄せてくれた雉猫に申し訳なく思ったが、それでもアギロ・ザイマの勇士として恥じない最期を見せた。

報告を受けて歓喜したモロサイフンガルはヨルコン軍と共にユンドルビアースヌを陥れようとする。復讐は見事に果たされたし、総大将のいなくなった守備軍はきっと乱れただろう。アギロ・ザイマを倒してヨルコンの権益を奪還すれば英雄化されて出世できるに違いないと、鼻息荒く涎を垂らす。だが、

自分の死期を悟っていたハーンはンゴバルケブ・ソアに最後の計略を託しており、砦の守備軍は整然と防戦して敵を追い返す。さらに、悲報を受けた第一軍団長が報復攻撃とばかりにアプンヘッサから打って出ると弱腰のヨルコン軍は忽ち退却し、義勇軍とは名ばかりの、邪悪な男に相応しいならず者集団も大きな被害を出して退く。

「真に優秀な男であった。あまりにも惜しいことである。しかし、彼が最後の最後まで勇ましく戦ったことは、報告を受けずとも明白に我が眼前に浮かぶようである」左弦総督はハーンの死がサイルゴッツに対する兵士達の士気を鈍らせることのないように味方を鼓舞する。

「彼の命を奪った隣国との戦、右弦総督が対する地内との闘争、あらゆる争いの元凶は我等の対陣する邪悪、サイルゴッツ率いるヴィムディンゲルゾースと、それに味方するモーフ王のエスパイア王国である。諸君、正念場である。ここまでの戦いの全てはこの戦の勝利のために成されてきたものであり、至上の勇士として散り、天土に憩う同朋の英霊達も見守っていよう。ここに集めたのは我が軍きっての精強部隊、可能性はただ一つ、勝利のみ。力を振り絞れ！　我等が正義の道が邪悪を一掃し、真の平和が遍く地上と地内に齎される日の訪れは我等の双肩にかかっているのだ」

サイルゴッツの軍団とピサの軍団が激突し、双方激しく傷つきながら死力を尽くす。自らが巨大な移動要塞(彼女は数百の従者に巨大な台座を持たせ、その上に載る。たまに腹がすくとそれを刺して食うため、『つまみ食いの御輿』と呼ばれた)のような女王は何千本も絡み合うように生える枝や根を恐るべき破壊力を備えた触手としてしならせ、射出し、多くの兵士を同時になぎ倒す。しかしその対極では、サイルゴッツが近縁種を大虐殺して得た自慢の巨竜を、黒猫が父の作った武器で一刀の下に切り捨てる。前線に出すぎる彼に、忽ち周囲の邪悪な怪物どもが苛烈な攻撃を浴びせるが、彼はウムポの強力無比の防御結界に守られているために全く無傷で、縦横無尽に暴れ、古代の暗黒時代を生き抜いてきた強大な生物達を戦慄させる。最強の剣豪という称号をほしいままにしている砂魚者も負けじと自慢の竜騎士達とともに突撃し、龍や怨霊生物、殺戮機械兵、第六軍の構成員達よりも巨大で獰猛な巨人族を相手に一歩も引けを取らない。

また、第五軍団長の働きは、黒猫が自分の印象を改めねばならないと反省させるほどに目覚しいものである。兄弟の心配に反し、アイバン・クフグ=キャーイは地内の親族を裏切ることにそれほどの抵抗感も感じておらず、最近では、地内だけでなく地上に荘園を持つのもまんざらでもないと新たに欲望し始めている。彼はここで第二軍団長以上の戦功を立てんものと奮起し、ヴィムディンゲルゾース軍との戦線から少しずつ外れていく。黒猫は最初、それを彼のやる気のなさや裏切りだと思ったが、参謀の馬鹿にしたような表情とわざとらしい溜息を見て、第五軍をそのまま虎猫の指揮に委ねる。すると第五軍団長が睨んだ通り、形振り構わずに怪物との争いに夢中になっているアギロ・ザイマ軍の側面を突かんものと、ヤンゴスギブルビツ・ラックソルバーケの派遣した部隊が回り込んでくる。伯爵は陣形戦術でこれを誘い込んで一網打尽にすると、すぐに戻って総督の許可も受けずに――といっても、味方同士がほとんど連絡を取れない乱戦状態になっていたが――最前線に出て行き、敵兵には目もくれずサイルゴッツの首級をあげようとする。彼の貴族的な自負心は味方の不興を買い、時に兄弟の邪魔にもなったが、このような戦乱の時代には一つの役立つ能力として機能することもある。彼の野心に共感できる部分が

ないわけではないと、後に兄弟は虎猫を追悼して思い至る。そう、アイバンもまた、死んだのである。

囲みさえ突破すれば女王を倒すのはそれほど難しいことではないと思った虎猫は、過小評価している自軍の主力を盾にして敵の中枢に潜り込もうとしたのであったが、さすがに一種一個体のサイルゴッツだけあって、その強さは彼の予想をはるかに上回っていた。うまく背後を取ったアイバンは、樹者系の弱点といわれる根を中心に攻撃させ、触手攻撃をかわせるように部隊を散開させ、相手が弱ったところで自ら果敢にも巨体に取り付き、胸の双丘の合間に深々と月身剣を差し込む。この剣は、本当はヨルコン北部を制圧した後に民衆から黒猫へ献上されたものであったが、剣に詳しいという虎猫は一目見てすぐにそれに掛けられた呪いを看破して預かった。実際、確かに何らかのペナルティを所有者にもたらす効果はあったのだが、それを解除するのはラスやその父、第四軍団長なら容易なことであったし、民衆が思い込んでいたように、この妖刀がとてつもない威力を秘めた価値の高いものであったことを彼は最初から知っていたので、自分の部下に命じて街で呪いを解除させ、隠し武器として所有していた。

アイバンはその威力を戦場で度々試し、密かに、これは兄弟が手に入れた化猫の武具よりも強いはずだと思い、自惚れの強い彼は、所有者の実力が上、武器の威力も上ならば、サイルゴッツを倒せるのは自分しかいないと確信したのである。果たして、枝穂の女王は悶絶し、息絶えようとする――演技の後、動きをぴたりと止め、唖然として刀に手をかけたままの小物に無気味な笑いを送る。

「汝、木っ端…　心の臓、頚椎、脳…　そういうものを一突きされればたちどころに機能不全に陥るような劣等種と、我を一緒に考えたようだが」彼女の声は重く陰鬱に響き、無意識に多くのものに悪影響を与える低周波音のように、戦場のあらゆる者が聞くことができる。なお、このときすでにアイバン・クフグ=キャーイの体躯は吸血や猛毒注入の効果をもった夥しい数の触手に刺し貫かれ、痙攣している。

「生憎、我は世界最上級の生物神、お前達とは違うのだ」

枝枝がごみを振り払うようにしたので、バラバラになったアイバンの体が味方の上に降り注ぐ。敵勢は軍隊としてはあまりにもお粗末なまとまりではあるが、王がこれほど強大なのであれば、守ってやるという必要もそれほどないのかもしれない。それでも、ようやく背後を取られたことに気づいた多くの怪物どもが第五軍団に襲い掛かる。指揮中枢を失った軍団兵は章将達の元に集まって必死に突破しようとしたが、ほとんどが恐慌状態になってしまい、無残に引き裂かれ、灰になっていく。だが、サイルゴッツが腕を振り上げると怪物の兵士達はぴたりと大人しくなり、左右に分かれて黒猫の主軍に道を開ける。それを見た黒猫も自軍に攻撃を休止させ、遠くから彼を見下ろす冷たく淀んだ眼を堂々と受け止める。

「一騎討ちをご所望というわけか。卑怯者としては随分名高い女王閣下が、これは思い切ったものですな」黒猫は皮肉の台詞とは裏腹に、アイバンの仇討ちを誓って強く拳を握る。

「…木っ端の王。さっきの木っ端といい、貴殿といい、勘違いも良い所だ。貴殿等は何も知らない、世界の裁定…　それを、貴殿らの最期に、お話しておこうと思っただけだ」彼女の声は陰鬱な――母代わりの――森の木々が擦れあい、ざわめく音に似ていると黒猫は不謹慎にも想像し、頭を振る。女王は誰の様子にも構わずに一方的に話を続ける。

「お前達動物種、動き回って我等の周りをうろつき、我等の維持のために循環作用を作り、その進化を助けるためにコマのように働きつづけることを余儀なくされた奴隷種ども…　お前達はいつしか主従の関係を忘れたが、それも我等の狙い通り。悠久を生きる我等にとって、最初も終わりも同じこと。終わりとは、今、我が目的の達成とともに訪れる。

汝ら動物どもの腐敗は地に染み付き、我等が土壌を汚染してもはや救い様もない。自然の最終的な実験段階、植物の動物化、樹神と、その細胞たる樹曼ども。あの薄汚いモルモットどもは、究極の生物、植物でも動物でもない、唯一無二の生物、すなわち神そのもの、神が現世に定着した姿であるこの私を高みまで押し上げるためにのみ存在した。彼らの犠牲も貴殿らの滅亡も我が生に受け継がれよう。ゆえに、何の心配も要らぬ。ただ我に祈れ。さすれば、植物のために欲望のまま働き、自滅できるように導入された行動抑制スイッチである痛みを司る神経系、それが苦しみを訴えぬうちに生命維持の装置を破壊してやろう」

女王の奇しくも美しい中性的な顔立ちが怪しい笑みを湛え、唇が光を帯びる。術だ、危ない、と黒猫が味方を退かせようとした瞬間、ざわりと枝が動き、敵兵が避けた道筋を巨大な火柱が猛然と伝播する。だがそれは、味方の目の前で地下水の放出のように発生した同じぐらいに大きな水柱によって弾かれ、対消滅する。

「小癪な…　化猫風情が」女王は頭部の至る所に導管の筋を浮かべ、もはや先ほどの冷静さはかなぐり捨て、狂気の残忍さを互い違いの方向を指す瞳と歪んだ口元に露見させる。

「炎術。好きですがどうにも我が友人たる紙切れどもが嘆きましてね。水はふやけさせ、風は吹き飛ばし、土は汚すといいましても、燃やされるのには敵わん、と。まぁ、皮膚をそういう方面に輸出しがちな連中と閣下は賢くも相対なさっているということですから、理解できぬのも無理はありませぬが」などと駄弁を弄しつつ、ウムポ・ルサはあぐらをかいたまま、焼け焦げた草原を漂う煙の中を敵の方へふわふわと浮遊していく。

「待て、参謀！　奴は俺が倒す。お前のような老いぼれは黙って後ろで見ているがいい。敵兵が動いた時に牽制するのがお前の役目だ」ピサはウムポの肩を抑えようとして駆け寄ったが、白い鎧に代表される虚品づくしの装備に身を包んだ男が振り返って威厳に満ちた眼差しを彼に注いだので、黒猫は以前弟がそうなったように、凍りついたようになってしまう。

「ピサ…　お前には、まだ無理だ。俺が奴を倒したら、残りの敵を全力で叩け。…父の戦い振り、とくと見るが良い」

敵兵の全てがウムポ・ルサに襲い掛かろうとした瞬間、彼は短く梵子言語を唱えて体中から生気を光のように放出させて空を猛然と進み、一気にサイルゴッツの頭上高くに飛び上がる。

「サイルゴッツ、貴様は言うほどの神々しさはないが、確かに世を滅ぼそうとしてきた暇人の一人であり、危険な存在であることは認めよう。しかし我もまた、同じ穴の狢よ。世の中の邪魔者同士、仲良く果てるとしようぞ！」

空中のウムポを中心として凄まじい梵子エナギーの波動が一帯の空気や大地を揺るがし、暗雲が立ち

込めて妖しく光る。女王は仙猫の防御解除術を無効化して嘲笑うが、そんなものは上空の猫にとってはお義理のアトラクションに過ぎない。間髪入れず並の術士なら一発打つのも全力で成さねばならぬ程の凝縮エナギー弾が次々と放たれて強引に障壁を打ち破り、女王の体に突き刺さって炸裂する。

「我が恩寵たる破滅により、微細で愚鈍なる人間どもの永劫的汚辱と輪廻は浄化されるというのに、あろうことかこの大いなる存在に傷を付けるとは！」対して、彼女の放った最強の暗黒爆撃は、白猫の爪弾き一つであらぬ方向へ飛んでいく。

「煩いネェ。そんなに羨ましいかい、俺らのちっぽけさがよ」お馴染みの個性的な笑みで彼が応じる。

「安心しろ、すぐ肥料に還してやる。運が良けりゃ、雑魚どもの養分に混じってとびきり面白いことにでも巡りあうさ」

サイルゴッツも必死に応戦するが、苛烈極まる猛攻を支えきれない。彼女も術には自信があったが、しかし、噂に聞いていたとはいえ、化猫の実力は完全に予想以上であった。皮膚代わりの木部が砕け、導管から体液が流れ出る、そこに新たな破壊力が襲ってそれをすら許さない。ウムポ・ルサは敵の強さを知っていたので、女王が油断しているうちに一気に滅ぼしてしまおうと考えたわけである。それは本当に正しい判断というものだ、と、絶望的な状況にありながら、女王は実に冷静に事態を受け止めている。

「唯一我を心配させていたもの…　『猫族に気をつけよ』の占星術の結果。

そう、さっきの木っ端などではない、この恐るべき戦闘力と判断力を備えたお前こそが、わが道を阻むかも知れぬ唯一の脅威であったのだ」女王は胸を打ち震わす笑いを抑えきれなくなり、爆光の中に破裂させる。

「うふふふはははははぁっ…！　しかし、やはり我は達成する運命にあった。お前を、早いうちに始末しておくことができるのだからな」

猛烈な爆風やスパーク、それの巻き上げる土煙で何も見えなくなり、敵も味方も術士達の戦いの結末を待つしかなくなっている。無論、煙幕を作っているのは一方的なウムポの攻撃であり、勝者は誰の目にも明らかに思われる。敵将が倒れても油断するな、との指示が背後から総督の耳にも聞こえ、思わず黒猫が一般兵のように頷いてしまう。しかし、ゆっくりと白い幕が上がり、アギロ・ザイマ軍の期待を裏切る現実が突きつけられる。

サイルゴッツの腕から出る無数の枝が絡み合って一本の太い触手となり、その先端が白猫の腰に巻きつき、締め上げている。――そして、無知な幼児が小虫を潰すように、無情にも息子の目の前で、彼の体は上半身と下半身に分かれて地に落ちた。そのゆっくりとした落下の軌跡を黒猫は一瞬夢の中の光景のように思ったが――「親父ーっ!!」盾をかなぐり捨て、体は反射的に敵の真っ只中に飛び出そうとする。

「来るな…　逃げろ、逃げるんだ…！　ピサ…　は、早く…」

「喋るんじゃねぇ親父、待ってろ、すぐにっ…　…うぐあああっ？！」

ピサは父の傍による前に突然猛烈な虚脱感に襲われ、思考が麻痺し、がくりと膝をつく。全細胞が震

盪して体中の血管が浮き出てくるような状況に陥りながらも、必死に比類ないと自負する気力を振り絞る。だが、全く歯が立たず、身じろぎ一つできない。

「こ…　これは…　術なのか」術法について詳しくはないが、黒猫はその波動を見て避けたり弾いたりする超常的に鋭い眼力を持っている。その彼が、前触れすら掴み取ることもできなかったものの、自分と、恐らく父親をも脅かしているのであろう力の源が、サイルゴッツの指代わりの枝が持つ小さな円筒から発せられていることに気付く。その思念をサイルゴッツが読み取ったようである。

「良い勘をしている、黒猫の坊や…　さすがに化猫、いや、かつては仙猫と呼ばれたウムポ・ルサの息子よ。

この筒こそは、かつて仙猫によって救われた者どもが、彼を裏切り、滅ぼそうとして開発した秘石機具。あの時、汝は滅ぶべき小国を見捨てることで何とか逃げ延びたが――虚実体術士マータルアストーロに召喚されたが滅ぼされた化け物が亡霊となって我にこの『作品』の在り処を教え、仇討ちを託したのだ。因縁よのう…　しかし誤解しないでいただきたいものだが、我は別に汝等の間柄に興味もないし、個人的な恨みもない。これは、我が必然的勝利のために自然が我に与えたのだ。

この小さな物体には汝等猫族の力を奪うためだけに設計された梵子技術の粋が集められている。突然変異で化猫やら仙猫やらと呼ばれる力を持った者が生じる、時代に応じて都合よく変動できる猫族特有の遺伝子の特性を利用し、…遺伝変換信号に擬装した効果を与える波動を送り、体細胞のいくつかの遺伝子情報を一時的に組替え、抑制する――救世主を衆生が愚かにも傷つけるような、お前達動物の歪みが生み出したこの小物は、しかし、我に役立てられることで、一つの偉大な芸術品のように、高尚な意義を持つのだ…」女王は自分の傷を術で癒しながら、筒を愛しいものであるかのように頬擦りする。その間、怪物どもが動き出して味方に襲い掛かっているが、第二軍団長が決死の覚悟で敵陣に飛び込んで総督を後方に退げ、味方を奮起させ、敗戦色濃くとも最後まで決して諦めることなく戦う。だが、対地上軍の中には地内作戦に参加させると郷里への思いに囚われてしまうと思われた相当数の猫者種が編成されていたので、彼らも恐るべき円筒の力を免れず、兵数は更に減ってしまっている。

サイルゴッツはすっかり安堵して、回復の術すらも封じ込まれ、ゆっくりと生ゴミのような様で苦しみながら死に行く自らの脅威を、敢えてすぐに殺さず、甚振るように眺めやる。だが、巻き添えを食って這いつくばっているはずの全く問題外の黒猫が、ふと気づくと、所定の位置に居ない。はっとなって視線をさ迷わせた末、女王は愕然として筒を落としそうになる。

ピサは、父ですらその効果を受けた時にたちどころに麻痺してしまった波動の中で、体を痙攣させ、歯を食いしばりならも、じりじりと四つん這いで動き、虫の息の父親に寄ろうとしている。

「親父…　親父…　おめぇを殺すのは、俺なんだ。死ぬんじゃねぇ、死ぬな…」彼の視野にはすでに敵も味方も映らず、その瞳は、幼い頃にその爪を立ててしがみついた男、痩せこけてはいるが、赤子にとっては温かい毛布のように大きく広い背中、その上で何度も眠りこけた脛や腿、平手打ちを食わされたり時折撫でられて不気味な程甘美な感覚を与えられたりした猫にしては指の長くごつごつした手、そういったものだけを捉えて離さない。

そして父親をも慄然とさせたことに、黒猫の額には似つかわしくない奇妙な白い角が、幼児の生え変わった歯のようにちょこんと頭を出している。それが美しい光を放つ度に、じりっ、じりっ、と動くことを許されているようなのである。それを見たウムポは、不意に全てのことを悟り、自分が今まで何のために苦しんで生きてきたのかを理解したような気がした。もはや時代を越えて復讐を果たした裏虚神(マータルアストーロを利用して地神を越えようと復活したが、ウムポ・ルサ等に倒された)の邪霊のことも、それどころか自分の死ですら眼中にはない。溢れ出た涙が頬の毛並みに筋を作り、その部分にだけ熱い生の感覚を戻す。

「何と言うことだ。これが、奇跡か…

こういうものを目の前に突きつけられたら、我が最強の術など取るにも足らぬ道化技に過ぎなくなる。『真に偉大なる魂の血族』… 俺の強さなどは、お前の存在の前では小さな小さな吹けば飛ぶ紙切れに書かれた玩具の証明書に過ぎぬ。だが、それが無性に嬉しい。俺は間違っていなかった。俺はお前に会うために、お前を育てるために、お前に託すために生まれてきたのだ。俺は、間違っていなかった…」

必死の形相で近づいてくる息子に彼は腕を差し伸べたようとしたが、すでに体は波動の力がなくともほとんど自由が利かないほどに体液を失っている。彼は無駄なことはやめたが、かといって何の絶望も感じることもなしにまた呟き始める。

「あの愛らしい子には多くを託した、そして、実に小憎らしいお前にも…」ウムポは朦朧とする眼をかっと見開く。仙猫と同じように黒猫の異常な様子に気づき、真に恐るべき相手を見出したサイルゴッツが、まだその驚異的な潜在能力を目覚めさせぬうちに完全に滅ぼしてしまおうと、彼を分断した恐るべき兵器をしならせたからである。

「そうはさせんぞ！」ウムポは息子の奇跡を真似るように、しかし今の彼にはそういう才覚はなかったので、かつて同様の状態に置かれた時には逃走のために使った、命を燃やすことで発現させる非常用の梵子力を最大限に引き出す。彼はそのために梵子濃度が濃い場所でしか生きられない不随の体となり、十年以上もの間、森でのリハビリを余儀なくされた。あの時は若くて困難を乗り越える生命力に満ちていたし、自分はまだ死ぬわけにはいかぬと予感してかなり早いうちにその力場から逃れることができた。それからは罪悪感や無力感、使命感に板ばさみとなって心をすり減らしていった。――だが、息子達が、光栄ある戦場という舞台を作り、俺の人生の華々しい最後の扉への階段を作ってくれた。何と言う幸せであろう、何と言うほどに溢れる愛おしさであろう。…ピサ…、ラス…。

「この大事なものに指一本触れさせるものか。識ったのだろうサイルゴッツ、せいぜい足掻くが良い、お前はもう終わりなんだ！」

ウムポの上半身が爆音を響かせてピサの前に飛び出し、血に汚れた白い鎧の砕ける音が黒猫の耳を支配する。同時に、彼の心臓に自らしかけていた強力な梵子爆弾が炸裂し、凶器の先端を砕き、逃げようとして暴れる触手を爆裂させながら伝って本体を襲おうとしたので、サイルゴッツはやむなく自らの片腕を切り落とす。

ピサが無意識に抱きとめためちゃくちゃになった父親の胸部には、僅かの救いか、頭部と片腕が、ほぼ無傷でくっついている。ウムポ・ルサは、息子が完全に立ち上がって駆け寄ってきたのを最期にはっ

きりと見ることができたので、何の心配もしていない。――期せずしてラスには別れの挨拶をすることができた気がするが、この愚息にはそういえばまだだったな。

伝えたいことが山ほどあるのだ。聞け、ピサよ、親父の真の職業は術士などでも化猫でも仙猫でもない、ただのしがない作家だった。

俺は書きまくったのだ、甲斐性がないので全部完成の前に駄目なところが見えてくしゃくしゃにしてしまうのだが。前にちょっと、フアンホ司教と酒を飲みながら若い頃の芸術志向の一致を知って、笑ったものだ。だが、お前は笑うなよ、俺のは趣味なんかじゃない、他の連中が諦めても、俺だけは夢を追いかけ、誰とも会わなくなっても、読者の一人もいなくても、俺の創作意欲が消えることはなかった。戦場で、敵兵を相手にしながら全然別の詩の構想を思い浮かべ、慌てて石(『記憶の石』のこと)にメモしたことも何度もある。関係のないことをしていると、不思議と色々なことが思い浮かぶものだなぁ！

まぁ、こんな時だからあまり長々と喋れないのが残念だが、要は、俺がどれだけ真剣に――そうだ、真剣といえば、俺はお前達を愛して止まなかった。どうしてこうなっちまったんだろうなぁ。何かが噛みあわなくなって、俺達はいがみあうしかなくなったわけだが、俺にとっちゃお前達は俺そのもの、生きる意味、世界の総てだった。おかげで有難いことに、それまでの長ったらしい人生なんぞは思い出せもしないくらいだ。特にお前は俺に似ていた、臆病なところや無鉄砲なところや考え無しの所が俺の若い頃にそっくり、嫌なことを全部思い出させられそうで、殺してやりたいくらいだった。息子なんてそんなもんか。…これだから俺はつくづく親に向かない。

でも、やっぱりお前は俺とは違うんだな。時には紆余曲折しながらも困難を確実に乗り越えていく。…あのかわいい子のことはお前が守らねばならぬ、お前なんぞ放っておけばどうにでもなるんだからな。しかしあの子は心配だ、美しすぎる子は死神の寵愛をも受けやすいのだから…

糞オヤジだぁ？　ふん、俺だっておめぇなんぞを息子と思ったことは一度もねぇ、糞ガキめ。さぁ、おめぇのごわごわした手触りの悪い頬を撫でさせろ。それにしても、おめぇの耳の尖った様子、おめぇの時折考え深ぇ眼差し、なんと絶えがたく、…　――ウムポは息子と酒を交えながら解りあい、黒猫の額を、背を撫でてやろうとして、目を細める――つもりだったのだが、眼だけは嘘をつけぬというもの、酒の席などありえぬ妄想で、片腕はだらりと下がったまま、半開きの目はとっくの昔に生気を失って瞳孔を開かせている。つまり、何一つ伝えられることはなかったのだ。…非道なこともしてきた彼への報いであっただろうか。否、全くその正反対である。彼の想いは不思議なデバイスを通じて残らず黒猫の心へ染み渡っているはずである。その証明に、息子の心からは父への憎しみが一切、きれいさっぱり消えうせてしまっている。

歯をカチカチと言わせ、放心状態の黒猫は泣くことも忘れて、幸せそうな死に顔の父を大事に、ゆっくりと地に寝かせる。父が夢想で撫でた影響もあってか、彼の額からは螺旋状の美しい白い角が完全に生えきっている。サイルゴッツは激しく慄き、黒猫がゆっくりと歩いて近づいてくる様子を凝視し、確かに発動している筒を何度も小突いている。死霊生物種の占星術師が出陣を止めるように進言してきた時、全軍の士気を落とすものだと嘲笑い、彼の首を切り取って犬に食わせたのだが、今、その言葉がま

ざまざと思い出される。

「何をしている…　殺れ、その黒猫の首級を挙げれば我が支配する闇の世界で、欲しいものは意のままぞ」だが、怪物達は全身で拭い様もなく実感していたから動けない、目覚めさせてはいけないものに、取り返しのつかぬ刺激を与えてしまったことを。

「愚か者どもめ、こんなチビが、何だというのだ！　仙猫すら倒したこの女王の道を阻むものなど」

サイルゴッツはありったけの梵子術と触手を駆使して黒猫を潰そうとした。深い悲しみに縛られている彼は避けようともしない。「ふはは、やはり、まだ自由に動けぬのだ！」馬鹿笑いが、すぐさま死の戦慄に代わる。黒猫は父親の作ってくれた腕の武具を、軽く一振りしたつもりだったらしいのだが。絶大な得体の知れない力を、ウムポの武器が余すところ無く純粋な破壊エナギーに変換し、腕を取り巻いた蒸気のようなものが無尽蔵に膨れ上がり、何物をも貫通する稲妻のごとしとなって一挙に遠方に到達し、たちまち夥しく枝分かれし――こういった白光に巻き込まれ、サイルゴッツは完膚なきまでに破砕されながら、呟く。『嗚呼、やはり貴方様は…　あの巨大無政府国家を樹立させた……』

樹曼の犠牲が万が一にも邪なる女王のためのものであったとしたら、彼女の滅亡もまた、黒猫の覚醒のためであったのだろうか。その問いも、ピサの角の謎も、この時には解かれる術もない。女王を失った敵兵は戦意を失って自分の土地に還っていく。サイルゴッツへの恨みから解き放たれた霊魂達が勇んで霊界へと踏み出し、闇に汚染された土地が瞬く間に自浄されていく荘厳な光の帯を、マイザブル・ビアツと生き残りの兵士達が呆然と眺める。霊となれば犠牲者も殺戮者も等しい立場となるというある宗教の冥界観におけば、サイルゴッツの受難は今始まったばかりと言えよう。――そしてピサの様子はすぐ元に戻ってしまい、彼自身もあの時自分に何が起こったのか理解していないためか、味方にも多くを語ろうとはしなかった。

一先ずここで、物語の幕を降ろそう。なぜならもう、兄弟は子供時代から夢想してきた目的を、一通り妥協線までは果たしたも同然なのだから。ヴィムディンゲルゾースを併合し、地内の権益もほとんど手中に収めたアギロ・ザイマは、モロサイフンガルの侵攻に対する報復を理由にヨルコン合衆国に侵攻し、その主要な３州を領土として獲得。その際に豚者は生け捕りにされ、最もむごい処刑方法を知る警吏の手に委ねられた。その後、新生地内連合院の認可の下、地神教を枢軸としたビルドモンソ神聖帝国と名を変える。兄弟の不思議な慣例に従って領土が北部と南部に分けられて各々に統治され、年度交代制で第一位皇帝と第二位皇帝の座が入れ替わる。

性質の違う二人の相互補完的な統治は全く足りぬ部分が見つからぬほどであったので、遍く民衆も貴族も満足させるものとなり、戦争の疲弊はたちどころに回復され、圧力に屈したヨルコンは従属国となり、一帯では、エスパイアだけがこぢんまりとして、友好関係を取り繕うのに必死である。それでも国を維持できたのは言うまでもなくヤンゴスギブルビツ・ラックソルバーケのおかげであったのだが、彼は惜しくも熱狂的な愛国者集団に、軍事大国の総大将を任されながら敵国に言いようにされていることを恨まれて暗殺されてしまう。ほどなく失意の中でモーフ王も病死しており、兄弟がエスパイアを攻めなかったのは、もはやそのままにしておいてもほとんど無害だと感じたからに他ならない。

彼らの父親の盛大かつしめやかなる葬儀が行われたのはその数年前のことである。化猫と恐れられたウムポ・ルサ。しかし、彼の内実を知るものだけでなく、敵味方問わぬ多くの一般民衆が比類なき賢者としての彼を慕って進んで喪に服した。それは、息子に対すると同じように、大衆を侮りながらも愛さずにはいられなかった彼には、皮肉にも、慰めにもなったことだろう。そして、後世が取り沙汰する歴史書には、ピサラスの帝国同様の格付けで、彼の生涯の教えが尊きものとして位置付けられるのである。

８、積み木の帝都

聖功暦十一年。ビルドモンソ神聖帝国は地上と地内の権益をほぼ掌握して我が世の春を謳歌し、遠くアダーバルッシュから国を富ます方法を知るために使節が送られてくる程である。いずれはエウレウ王国と競い負ける運命にあるこの国であるが、当時はゼレファス地方の多くの部族国家の中でも有数の実力を持ち、ルプル(エウレウの民である半漁人。水辺でないと生活できない)国家の数倍の国土を有している。派遣された者達は、北方では珍しい飛竜者種。詩人サンドル・グハティヤとお付きの翼騎士達は、兄弟の盛大な持て成しを受ける。サンドルは用意してきた二大皇帝の賛美歌だけでなく、即興で宮廷詩人達と歌合せをしたりして、特に北懸皇帝となったピサを喜ばせる。弟皇帝も詩人や騎士が語る空飛ぶ兵団の戦術に大いに興味を示し、今後の積極的な人材交流を真剣に検討したりする。

ところで壮年期に差しかかった黒猫は職務の傍らに美術や音楽、彫刻等、様々な分野の芸術を奨励し、積極的に鑑賞もしている。『才能が無い』と言って自分で作ることはしないが、時折垣間見せる詩的な才能は彼の芸術家達を驚かせ、何かの決意があってか薦めを頑として聞こうとしない皇帝の作品を見られないことを非常に残念がらせてもいる。だが、彼自身が芸術家に指示して作らせることは多くあり、その作品からは、他人の腕を介して顕現する黒猫の優れた感性がはっきりと見て取れる。『鉄は咲き誇る(仙猫の思案が生み出される様子を表現した抽象画。不定形種の画家が、画板に肉体を押し当てて描いたとされる)』の作者も、他人に褒められるとこのように恐縮したという――私に幸運か実力のようなものがあるのだとしたら、それは唯一、陛下のお傍にお仕えできたことだけです――いずれにせよ、ピサの趣向は平和な時代に突然発したというよりも、前々から知らず知らずに父親の影響を受け、潜在していたものだったのだろう。

弟も何度かお相伴し、作品に冷静な批評を加え、一目で、何度も漠然と眺めているはずの兄以上の慧眼を示す。「そうなのか、そういうことを言いたくてこの絵は描かれたのか」ピサはそういうときに実に嬉しそうにして、弟にもっと詳しく説明するようにせがむ。しかし弟は、『そんなこともわからないのか、兄さんにはあまり芸術は向かないようだが、素人的に眺めて愉しむなら害もない』と思って、職務の都合を理由に、芸術に詳しい先生を調達してやって宛がった――北懸皇帝は先生のご高説を傾聴するものの、とっくの昔にそういった水準の鑑賞方法を超越してしまっているので、寂しそうな目で作品と、もしくは故人となってしまっている作家達の魂と直接対話する。確かに彼は作品に対する前知識も、規則的なことの妙味も良く知らないのであるが、彼の内外の精神世界に完全に開かれた心は芸術を受け入れるためにそういった技術を全く必要としないし、欠点を多分に残しておくのには、どこか意図的なところがある。知ることで偏った先入観を招いてしまうから、…いや、そういう難しい話でもないのだろう。もっと単純に、作品を愉しむために誰が隣に居ればいいのか、ということが――

このように、初期から顕著だった――ゆえに強く結ばれあっていた――兄弟の差異は、この頃には深い溝のようになって久しい。それはもはやあきらめによって了解済みのことでもあろうから、癒合して古くなった傷のように、むしろ強い安定を生んでいるようにも思われる。民衆は、初期にこそ二大皇帝の代わる代わるの政治が不況の原因となるまいかと慮ったが、彼らの特性は時と共に如何なく発揮され、

すぐに新しい状態に慣れてしまう。民衆は賛美歌に綴る―― 一人でも素晴らしい王が二人もいて協力するのだから、我等の幸福と平和は未来永劫約束されたものだ。神界から見下ろすのに苦労を必要としない位置付けにある二つの椅子に力と威厳のある黒、知性と優しさを漂わせる灰褐色が並ぶと、それだけであらゆる人間が心から人生を愉しむことができる。

あの苦しく長かった戦争の記憶が、ほんの数年で人々の記憶から抹消されてしまうほどに国の発展は目覚しかった。ラスだけでなく、今や神聖帝国の最上級階位の大司教となったフアンホ・ラップァ・マーヒが街の再建、道路や上下水道の整備に勤しみ、その優れた無駄の無い計画と弛みない実行はいかなる困難をも乗り越えた。多くの少数部族や共存可能種族外の者達が虐げられもせずにそのまま国民として存続することを許されたが、足りぬところの無い楽園のような状態をほとんど体験したことの無い彼らは、かえってしばらく生活になじめなかったほどである。法整備も必要を先んじてぬかりなくなされる。それにはもちろん皇帝同士の合意が必要であったが、ほとんど兄は弟の提案に調印するだけで、不承認で却下されるものは無きに等しい。

その代わり、北懸皇帝は旧来の仲間を一軍人から大臣に引き上げ、彼らと共に、あまり大勢に影響の無い小規模な物事や立法に目をかける。例えば鐘楼大臣イム・リバオヤと話し合い、市場の中にかなり細かいモラルを書き込んだ『市法書』なるものを導入させた。それによると、『何でも売ってよいというものではない。売る者には責任がある。流れ者を妄りに作り出すような似たり寄ったりの商店が軒を連ねるのは控えなければならないし、珍奇なもので人の目を惹き、その有用な活動時間を奪うようなことばかりに留意してはならぬ』等といった主旨の元、法書としてはほとんど実行力をもたない文章が延々と無駄口のように書かれている。だが、ピサはこの書の曖昧な抽象性を利用して平和の裏にどうしても巣食ってしまう闇の商人達を自ら次々と捕らえ、有無を言わさず罰していく――闇社会に大変恐れられた同書は、しかし、ピサの遺言でその死後に実行力を完全に消滅させられる。濫用や悪用を恐れたのであろう。

その他にも、『実験による不測の公害を防ぐための、新梵子術開発に関する百か条』、『騒音公害を防ぐための、詩句を吟ずる時の最大声量』、小椋大臣ビスタン・ケイマリッチの『警吏へ、鞭打ち刑の最大回数および最大強度』等など、後世のいかなる国にも伝えられないような奇抜な規則がビルドモンソの法律書の片隅に載せられていく。その優れたる部分を必死に探しあてる研究者もある。確かに、上記のような法には他の為政者の誰も考えつかないような有用性もあろうが、他にも明らかに役立たないような法律も無数に作られ、寺子屋の先生を悩ませている。しかし、生徒達はその玩具のような法律の意味を自分達だけで話し合い、想像し、知的な時間を愉しむ。自分も一児の親となった黒猫は、その様子を微笑ましく眺めていたに違いない、多忙極まる生活中であまり外に出られなくなった壮麗な宮殿内から。そう、彼は六年前に弟と合同結婚を開催し、それぞれ、兄はゴルフィ・ロンムーチョントの、弟はヨルコンの王家の娘を引き受けている。

この政略結婚は兄弟揃って恋愛感情等に疎くなった証明にもなっており、二人はそれを一仕事片付けるように為し、さっさと後継ぎを得ようとした。ピサの相手、指者種の皇后パダルニーナはそれなりに

聡明で控えめな性格だったので、皇帝の立場、自分の立場をわきまえ、深い愛を得られずとも良しとしたし、ピサもそんな彼女に常に最大限の配慮を払ったから、二人は短い間だったが、別に不幸せというわけでもなかった。というのは、彼女はピサに息子を与えるという偉業を成し遂げたことで満足したかのように、あっさりと流行り病で世を去ってしまったのである。

一方、弟の方は皇后マルタスと実質的に別居状態で、子にも恵まれず、この愚かな女性が享楽に耽るのに任せている。自分も多くの側室を抱え、そういうものをもたない黒猫に何度か自分の屋敷の一つを譲ろうとした時もある。そういうとき兄は、魅力ある男としての弟の女性に対する権力を羨ましがるだけで、自分は遠慮する。密かな罪悪感に悩まされ、明らかにお世辞と思われることを言って悪事の仲間となってくれない兄に弟は内心で舌打ちしたが、兄の方では本当に、いかなる捻くれたやり方であろうと、弟がいつまでも過去の女性への想いを大事にしていることを素晴らしいことだと感じている。

このような中、兄は弟との仲が離れれば離れるほどに、前述のようなわけのわからない法律を増やしていく。頭の固い連中を悩ませるような、もはや弟が見向きもしなくなってしまった、森での悪戯の最も洗練された形として、雉猫への、自分の変わらぬ心の表出として。

弟との結びつきへの執着に見られるように、そもそもピサという人間は諦めの悪い方である。彼はさっぱりした性格を持っているので、諦め、忘れているように見えるが、実際にはいつも心の中に留めていて、機会あれば思い出して何も無かったかのように再開しはじめる。何事も一元的な論拠で説明するのは不可能であるという一例だが、それでも簡便に言うなれば、『乾いたしつこさ』というところであろうか。そして、その素養が発揮されるのは、ピサが大事なことだと感じた物事にだけである。例えば兄弟に幼少の頃から漠として掲げられてきた目標といえば子供らしい意味での『全世界の統一』であったのだが、ラスはすでに神聖帝国の偉大な覇業で現実的に満足し、次にはこれを維持発展することに尽力しなければならないと感じているのに、ピサはまだ初期の目標にこだわっている節が各所で見られる。

アダーバルッシュの使節団が持ち帰ったビルドモンソの風評がその近隣にも伝わってあることないこと噂された影響で、当地においては権益の望みを立たれた小部族が新天地を目指したという小事件が起こったときも、ピサのそういった志向が如実に現れている。パンダンタという小国を形成していた虫者と飛竜者の混合民族であったが、彼らは大方の少数部族の辿る道筋を歩んでいて、付近の国にいつ呑まれてもおかしくない状態であった。だが、彼らの民族主義は古の時代の勇者に連なる者としての伝承から来る誇りによって極めて強く、併合されるのを潔しとはせず、神聖帝国の力を借りて、新しい場所に自分たちの国土を求めようと考えた。彼らは小さな船団に女子供まで乗せ、空挺部隊を使って海岸からケチアナイを襲う。兇空達は見慣れぬ敵の戦術に最初は戸惑い、かつてピサが対したような連中だったら簡単に追い散らされてしまっただろうが、彼ら犬族の誇りとなるような若き勇士が幾人か育って国を守っていたので、次第に体制を整えてパンダンタの部族を本当の滅亡へと追い落としていく。

建国後三年目の遷都で宮殿がヒョンプリズナに移り、そこには地上の楽園というほどに幻想的な空中庭園をはじめ、雉猫の梵子技術趣味が大いに活かされている。この美しい帝都を訪れたパンダンタの使者が最初に謁見できた時の第一位皇帝はラスであったが、彼は犬の国などに興味は無かったので、取る

に足らぬ小部族の願いを遠まわしに断ろうとする。しかし、パンダンタ族が北方に違和感がない理由の一つとして、彼らは地神を信仰することで団結していたから、ラスもその部分だけで多少同情し、一軍を貸し与える約束だけは交わす。このことを聞いた第二位皇帝はわざわざ北の別邸のあるビビスベイから早馬で首都に着き、もっと積極的に支援し、ケチアナイの領土を少しでも手中に収めるべきだと主張する。

ラスは犬族については、蚤取りもしない実に薄汚い連中で、教養も無く、従属的でしかも傲慢だと決め付けている。それが国民として交じる分には一行に差し支えなく、彼自身も犬を飼ってはいるが、かといって犬だらけの国に踏み込むことも、その不毛な地を無理して手に入れることも全く意味の無いことだと考えていたから、いつも通り、少々冷たい受け答えで、理由も禄に述べずに、お話にもならないといった感じで対応する。これで兄はすっかり自分の考えの浅はかさを恥じて引き下がるはずだったし、いつもそうなっていた。

だが、この時は違った。第二位皇帝は、まるで決め事の階位など関係なく、幼い頃から服してきた生まれの早さからくる順逆を武器とするように強引に意見を述べ、頑として曲げようとしない。もし第一位皇帝が乗らないなら、北だけでも、軍団を引き連れてケチアナイを取ってみせると黒猫は息巻く。だが、弟の方も幼いときに山賊の家で臆病だといわれた時のようには引き下がらず、兄の蛮勇を全く相手にしない。二人はついに感情を顕にし、お互いにつかみあうようなところまで昂ぶる。兄は目を輝かせるようにして一層に無理難題を主張する。

ところがラスは鋭く一息つき、手の平で自分の額を激しく叩くと、音を立てて椅子に深く腰掛ける。「良かろう、兵団を動かしたまえ。ケチアナイ共和国攻略作戦、…いや、パンダンタ族との同盟…　アムヤーラ、使者はまだ官邸にお休みだな？」呼ばれた南懸丞相の若者は恭しく頷き、必要なものは何一つ抜かりなく揃えられることを付け足す。第一位皇帝は苦虫を噛み潰したような表情の第二位皇帝を見下ろし、激した感情を冷ますようにゆっくりと宣言する。

「今回の軍権発動を国家として認め、全指揮権を貴帝に認めよう。だが、我が主軍は国の守りに必須である」後に引けなくなった黒猫は鼻で笑い、そんな大仰なものが無くても自分の僅かな手勢だけで十分だ、軍神と呼ばれた我が力を見せ、一層に国を富ませるとしようと声高にわめくようにして、為政の間を退出する。その後ろ姿を見て、生意気な黒坊主だと感じた弟はまた沸沸と怒りが燃えてきて、彼を呼び戻して今度こそ取っ組み合いで決着をつけてやろうかと思ったが、その内心を察したように、虎猫の姿をした丞相が優しげな声をかける。

「南が北より富むのは必然と言えるかも知れませんな」その声は柔和だったが、内容と表情には押し殺すようなところがある。それを聞いたとき、愛着のある国土を弟に与え、自分は厳しい開拓地へと赴任した兄のことが、弟の脳裏から不思議なほど急速に消え去っていく。「そうだな、国土の広さはあちらの方が上なのに」雉猫は軽い頭痛と眩暈を感じ、早めに休むことにして人を呼んだ。

後に残った男は、先ほどまで線のような細い目に優しげな表情を浮かべていた様子とはうって変わって、その小さな目を開け、濁った赤い瞳を皇帝の椅子に投げかけている。彼はかつてのアギロ・ザイマ

第五軍団長の忘れ形見で、家督を継いでいたが、アイバンの最後の活躍を聞いた南懸皇帝が彼を呼んで父の功績を称えた時に、故軍団長の勇猛さを頭脳に変換したような機知を見せて雉猫を喜ばせ、何かと付き添いをさせられることが多くなり、いつしかこの座まで上り詰めていたのである。確かにアイバンの息子はそれなりの教養を有していたが、彼が用いられたのはそのためだけではない。恋人と死に別れ、戦から帰ってみれば愛弟子と父を失っていたことを知ったラスは、せめてハーン・サイバルの後釜のような、自分の傍で片腕として傅き、苦楽をともにしてくれる友人的な若い部下を探していたから、たまたまタイミングが合ったというだけのことであろう。

ラスの伯爵への嫌悪感が転じてその息子への愛着に代わったのであったが、その幸運な寵愛を受けた方はそれを偶然とは思っておらず、戦時中、悲報を信じられずに戦場へ赴いた時からすでに、自分が地内の貴族だけで終わるわけにはいかないと考えていた。「今こそ、その機会が来たのだ」アムヤーラ・クフグ=キャーイはいつも礼装の装飾が施されたマスクをつけていたが、今はそれが取り外され、美しく白くあるべきはずの猫の歯が、お歯黒によって全て塗りつぶされていることがわかる。彼の赤い眼は一層に濁り、能面のように笑う真っ黒の口から枝葉のような不気味に別れた舌がちろちろと覗く。

北の主要都市ゼダに帰った北懸皇帝はほとんどの軍勢を聖帝軍総監代理パワルス・ヒードゥ・ネセカに任せ、留守中、有事の際には南の主軍を束ねる総監のマイザブル・ビアツに指揮を委ねるように指示する。そして自分は本当に僅かの、たったの五万にも満たない兵数――それまでの軍勢に比べれば多いくらいだと感じるかもしれないが、彼の力を持ってすれば何十万と召集することは容易いのである――だけを連れ、左弦大将軍にビスタン・ケイマリッチを、右弦大将軍にイム・リバオヤを置き、他にも彼やその友人が目をかけて育ててきた勇士の指揮官に部隊を振り分ける。

国民は久々の戦争を恐れるどころか特需景気の訪れを予感して大いに湧いたが、第一位皇帝がそれをあまり奨励しなかったために、特に南側では、民衆が異様な雰囲気を不安がるほどにその出陣への式典は簡素化されたものとなる。だが、もたもたしているうちに、わざわざ滅亡の舞台を遠い南国から北の果てに移してきた者達が倒れれば戦の理由がなくなってしまう。このような見送る者達の様子は北懸皇帝の得体の知れない苛立ちをさらに募らせたが、目的外のものに対する持ち前の鈍感さもあり、勝利の帰還後、あの強情な弟を始め、数多の民衆が歓喜して我を迎えよう、と考えてさっさと出陣していく。

迎え撃つ兇空兵団の方では、高慢な面持ちで堂々と進軍してくる、ほとんどまともな理由もなしにこの機会に攻めあがってきた僅かな軍勢を、相手の総指揮官があの黒猫であるというだけで大変に震え上がったが、それでも、三柱犬将の一人、化猫ならぬ化犬といった呼び方をしても遜色ないほどの術士である若き粉犬者ジィホ・チルザンデスを中心として兵士達を激励し、軍を二つに分けて対応する。三柱犬将のうち、勇将と誉れ高い毛長鼻長者モファーナス・フィゾが大半の７万の軍勢を率いて得意とする地形の峡谷に兵を伏せ、ビルドモンソ軍に相対する。

黒猫は勇壮な指揮官を多く連れてはいたが、知恵の廻るような者はそれほどいない。皆が彼の指示で全て動くような状態だったので、多少の不安もありはしたが、実にやりやすい戦場だとピサは開放感に浸り、自分の力を存分に邪魔立てされずに試すことができると考え、威勢良く峡谷の真っ只中に進撃す

る。彼が敵に向かって時折叫ぶ通りに、敵の犬兵士達は為す術も無く死体の山を積んでいく。

かつては、彼がそうやってどんどん敵の只中に進む時、誰か思慮深い者が止めてくれたり守ってくれたりしたものだった。至高の賢者と名高いウムポ・ルサは息子の浅はかさを嘲弄することで彼の道を矯正し、悪態とともに密かに繰出される術はその強靭な盾となり鎧となった。そして、山族との戦のときから、いつでも周到な雉猫が彼を後ろから援護し、知恵を授けてくれた。だが今、彼はそれを感じず、目の奥で生産されては体内に戻される液体をごまかすように盲滅法に突き進む。敵は大して戦いもしないうちに退いたので、聖帝軍は相手に降伏勧告を突きつけると、自軍の余裕をアピールするかのように敵が恐々潜んでいるであろう砦の前で堂々と酒宴を開く。黒猫皇帝は兵士達に混じって濁酒を苦そうに口にし、時折飲みきれずに、口に含んだだけで叢に吐いたりする。だが、それでも彼には酒の味がわかってきたような、少なくとも、酒好きな連中はともかく、どうしてあの嫌らしい男がこれを愛して止まなかったのか判ってきたような気がし始めている。

「インスピレーション…　これを、刺激してくれるのだ、この飲み物は。どうした、貴殿等、これを乾すことのできぬ者がどうして勝利を得られようか」

しかしピサに付き添う旧来の友人達はそれを全く聞き入れない。黒猫は誤解されて病人のように扱われたと感じ、自分が本当に酔ってなどおらず、むしろその成分で一層に知覚が増したことを示そうと考える。「じゃあ、どうして貴殿らが聞かない敵の足音を、この俺の両耳がしっかと捕捉しているのか。俺はもう、あいつらが下手糞な忍び足でこの付近を囲もうとしていることを、酒宴を始めようと準備していたときからすでに勘付いていたし、その動きもほぼ正確に知っているのだ」

もちろん左右の大将軍はそれを冗談だと思いたかったが、黒猫の据わった目がいつまでも発言を否定しないので不安になり、各々聴覚に自信がないわけではないので、立ち上がって耳を傍立てようとする。何の音もしないし、見張りの兵士もまだ気付いていないようだが、いわれてみれば、何か殺気めいた雰囲気がひしと周囲から伝わってくるような気がする。

「お、おい、本当に敵がいるのか？　だとしたら…　こんなことをしている場合じゃないだろう！」ビスタンのしどろもどろな言い方やもっともな怒りを黒猫は腹を抱えて笑い、やおら立ち上がると、寝る間も風呂でも、ほとんど肌身離すことの無い父の武器を右手で叩く。

「そうだなぁ…　そろそろ、ハンディキャップも程よい具合だろう」

「冗談じゃないわ」イムは溜息をつくとすぐに目を四方に遣って小走りに地を滑り、興じたり寝たりしている部下を叱咤して武具を持たせる。「何なの、あいつ。父親に悪いところまで似なくたって良いのに！」

果たして、四方の峡谷からなだれ落ちるように現れた敵勢に酔っ払いの軍勢は包囲され、たちどころに殲滅されるかに見える。ところが黒猫は酔って益々意気盛ん、縦横無尽に切り結び、敵陣深く入り込んで相手方を混乱させる。しかも、時折わけのわからないことをしでかす困り者の首領をそれでも強く慕うがゆえに、その酒の効能についての意見を立証しようとしたわけではないだろうが、全ての兵士達が混乱のさ中、部隊編成に関係なく付近の隊旗の下で次第に集結して陣を組み、敵に整然と攻撃をかけ

ていく。これでは敵も奇襲の意味がほとんどなく、逆に追い散らされてしまい、追撃されて多くの被害を出す。驚いたことに、イムが兵士を整列させてみると、味方の被害はほとんど皆無に等しかった。美しい曲線を描く一本足の腰に手を当て、ピサ達に出会った頃からほとんどその姿の変わらない右弦大将軍は頭を振って左弦大将軍を見上げる。

「…信じられないお方だわね。天才と何とかは紙一重ってのは、きっと本当でしょうよ」

「違いねぇ…　おーい、陛下！　すっかり片付いちまったが、どうすんだ？　まだ片付いてねぇ馳走もあるようだが、今宵は戦勝の飲みなおしか」

辺りはしんと静まり、返事は無い。彼らは最初、帰りが遅いくらいにしか考えていなかったが、どうしてもその姿が現れようとしないので段々に苛立ち、次に心配になり、そのうち冗談ごとでは済まされないような気がして、血相を変えて全兵士に松明を持たせて付近を捜し始める。捜索願の出ている男の方はというと、どさくさに紛れてどこぞの穴倉に放り込まれてしまっている。

以前弟から聞いた、酒宴の席を囲ませることで勝利したという自慢話を思い出し、あいつにできるなら兄である自分にもと対抗意識を燃やしたのも、この良くわからない行動理由の一つである。術の無い部分は自分たちの武勇で補って見せようとし、実際にその通りになったのだが、少々気合が入りすぎたようだ。黒猫は奮戦しているうちに味方どころか敵すらも、周りに人の子一匹いないことに気がついて、これはしたりと思ったが、どうやら味方の方が無事立て直したようなので、そのまま迷子のような気分を楽しみながら当て所も無く歩いた。

すると、一度は訪れてみたいと思っていた犬の国、プルファイハルナの街が見えてきたので、いてもたってもいられず、敵は出払っているだろうし、砦をよじ登って音も無く乗り越えれば潜入できるだろうと考えた。だが、彼のしなやかな真っ黒の肉体が世闇に溶け込めても、世間の作りだしたその荘厳な鎧がどうしても炬火を反射してしまう。彼はそれを気付いてかいないのか、少々寂しそうに首を項垂れて登攀できそうな部分を見繕う。こうやって門の前をうろついているうちに、モファーナスに夜襲の策を授けたチルザンデス導師が彼を見つけ、驚きを抑えながら人々に指揮してその周りを囲んだ。黒猫はすぐに手を上げて捕虜になるから矢を放たないでくれと懇願した。こうして彼は武装もわずかの携帯品も全て剥ぎ取られ、頚木に繋がれたわけである。

そしてピサは犬の美女達に囲まれ、眼前には見たことの無い馳走が並ぶ――黒猫の妄想があともう少しで最高潮に達するかというところで格子戸が開けられたので、彼は無様な締まりの無い顔を相手に見せず、相応しい不機嫌そうな顔を作ることができた。「いやいや、随分と丁重なおもてなしで。わざわざ東から来たかいがあったというものだ」

「皮肉ですか、皇帝閣下。しかし、事実その通りなのですよ」目が少々ぎょろっとしすぎてはいるが、ジィホ・チルサンデスは実に小さく愛らしい姿の犬面で、その顔より大きそうな尾はきれいに梳かれて歩くたびに左右になびく。その後ろに、灰色巨人族をそのまま小さくしたような、屈強な狼のような連中が息荒く棍棒を手にしている。

「我々があなた方を酷く憎んでいることはご存知ですね？　我々とて捕虜を扱う最低限の作法を知ら

ぬわけではありませんが、しかし、それを鑑みても、殺さないのがやっとというところで、その状態でも、最大の優待なのです。それに」知恵だけでなく、恐らく高貴で正しい精神を内在しているであろう眼差しを、彼は寂しそうに床に落とす。

「我等の土地は古きより誰の手にも渡らなかった代わりに、本当に恵みの少ない、お世辞にも住みよいとは言えない場所なのです。他のどの部屋も、いや、我が街のどこを見渡してもこの部屋と同じ水準だといっても、決して言い過ぎには当たらないでしょう」黒猫は何か言おうとしたが、粉犬者は小さな手を突き出してそれを制する。

「いえ、そういったところで、我々は自己卑下に陥っているわけではありません。むしろ、このような昔から代わることの無い慎ましい生活を続けることのできる自分たちに誇りを持っているのです。この誇りは他の種族、特にあなた方猫者種にはご理解いただけないでしょうが」彼は話に夢中になってきて土の上に座り込み、聞き手の顔を覗き込むようにする。

「我等の誇りとは忠誠の美徳です。原初祖先、古きその教え、我等を守りし要害のような厳しい自然、不毛ゆえに敵の欲望を掻き立てることの少ない土地…　それら全てを、我々は分け隔てなく尊崇するのです。ところが、あなた方は富み、堕落することばかり覚える。…ほう、笑いますか」導師が黒猫を睨みつける。

「…いや、ちゃんちゃらおかしいんでね。富の恐ろしさを知らぬことが、それを克服することより優れているとでも？

　貴殿らも一度俺の宮殿にお越しいただきたいものだ。さすればすぐに金に溺れて驕慢になり、我等がどれだけ富に対して自制心に溢れているか知ることになるだろう。何しろ、俺の国にどれだけ威徳による治安を行き届かせても、僅かの夜盗といったものはどうしてもなくならない。その首謀者が犬族だった、なんていうことも、ちょっと多すぎるような感じがするんだよ」

「盗賊の編成率なんてものには興味が無い、そんな風に思うのは、あなたが偏見を抱いているからです！」わなわなと揮えて、唾液を零しながらジィホが立ち上がる。だが、次の黒猫の一言が彼を我に還らせる。「ああ、あんた等もな」――小さな男が座ったので、彼は言葉を続ける。

「俺達はお互いに深刻な悩みを抱えてる。何かの小さなきっかけで絡まっていき、そのうちすっかりもつれてしまう。だが、ちょっと紐解いたり、後ろ側から覗いてみたりしてみれば、なんてことはない、実にたわいもないことばっかりだ。

　でも、一番不味いのは、諦めて受容することだ。何とかしようと四苦八苦して途方にくれて、疲れてふと視野を遠くに飛ばすと、自ずと何かが見えてくる。直接の解決に繋がることでなくても、その問題自体を打っちゃってしまって差し支えないような、本当に見出すべき真実が。…俺等猫族が何をしたって？　古い人々の争いごとは水に流そうや、なぁ」

　警戒心の強い粉犬者が、ついに姿勢を崩してあぐらをかく。「一体、貴殿はここに何をしに来たのだ。私は見抜いているぞ、貴殿はいざとなったら重いものがなくなったのをむしろ幸いとばかりに、その丸い手の中に隠しているもので大暴れできると思って好き放題に言っているんだろう」導師はまた手を突

き出したが、よく見るとその指は長くはっきりと四本に別れている。「この手の平から突き出しているものを見たまえ。指者種を彷彿とさせはしまいか。我が種族は原初神の個性を引き継ぐことを恐れ多いと考え、誇りゆえに自分たちをその姿から遠ざけ、神に仕え、賛美する活動に役立てられるようにしたのだ」

「確かに、君たちのは南国の飛ぶ連中が持ってきた歪な形の像よりは見てくれが良くて万人受けしそうだ。でもなぁ、あの指長の人々のことを持ち出すとは。俺からすれば、連中は俺のような種族の者に憧れを抱くしかない位置付けにあると思っているんだがね」

「それがあなた方のしがない傲慢そのもの。彼らこそは大陸のみならず、全世界での成功者であろう。そう考えてみれば、少しでも指が長く、多いほうが何かと便利な気がしてくるというものだ。しかし、…私はあなたに違う質問をしていたのだった」

「今さら言わすなよ、本格派石騙し、――碁石が一個でも多くほしいってのが人情ってもんだろう」

「我が国土はすでに繁栄の著しいあなた方に何をも齎さぬであろう」

「そうだよなぁ…」

「考え直してはいただけぬだろうか？　もし貴殿さえご承諾いただけるなら、私は命を賭して他の二将を説得してみよう。彼らは貴殿方に大変な憎しみと妬みを募らせていて味方の私でも手に負えるかわからないけれども…」

「…」

「皇帝殿…！　早くしなければモファーナスが帰ってきます。報告によると残念ながら夜襲は失敗、彼は苛立っています。見つかれば、たちどころにその剣があなたを貫いてしまうでしょう」

「そんなことになれば、俺の古い奴ら、下手すると俺より恐ろしい、俺も何度か殴られて引きずられたり首を閉められたりしたようなあいつらが、血の涙を流して雪崩れ込んで一人の降伏も許さずに皆殺しにし、貴殿らの国土を焦土にしてしまうだろうよ。それでもよければどうぞ」

「この際、脅し合いは止しましょう！　お互いのためになることを冷静に考えたいのだ」

「…ううーん…　だめだ、どうしても、だめなんだ…」

「一体、何故なんです…」ジィホは黒猫の飾らない雰囲気から彼が大変に善良な人間であることを感じ始めていたので、なぜお互いの利益になる自分の想いが伝わらないのか理解できず、すっかり参ってしまっている。ところが、困っている様子なのは黒猫も同じで、暗闇でわからなかったが、彼は顔を赤らめながらついに白状する。

「つまり、なんだ…　夢にまで見たような美女だったんだよ。彼女の願いは…　――」彼の声はむにゃむにゃとなってかき消えてしまう。高貴な知性をもった小さな男は顔をしかめて、よく聞こえないからもっと大きな声で言ってくれるように願う。黒猫は観念して、牢獄の壁にもたれかかる。

「パンダンタの、カモシカみたいな足した使者の女…　弟に無碍にされて俺のところに泣きついてきたんだが――最初は、俺も第一位の年じゃないから無理だっていったんだ。でも、何ていうかな…　色白で、胸元がすごくて、聡明で、それでいてちょっとおっちょこちょいな感じの…　言うなれば、可憐な

一片の花のような？　こりゃ月並みな言い方を失礼！」
「まさか」小さな犬がふらふらと立ち上がり、捕虜を見下ろす。「貴殿は、いや、そんなことはあるまい」黒猫は恥かしそうに、しかし少々嬉しそうに小犬を見上げる。
「スイミレちゃんとか言ったかな――彼女にぞっこん惚れてしまってね。貴女のためならこの不詳ピサ、命をも惜しみませぬ、と」
「冗談じゃない！」ジィホがもしイムやビスタンの立場を知っていたら、きっとそれに共感できたことだろう。「女の事ごときで、人々の死が、争いが、恐怖が、憎しみが積み上がったと言うのか！」
「ごとき、とは何だ！　俺は一目惚れだろうと、一生懸命、真面目に愛してるんだ！」
「貴殿は子供か！　信じられん…　買いかぶりすぎていたようだ、これではお話にもならぬ」
「…そう、こんなのは、戦争なんてものは揃いも揃ってみんな悪い冗談みたいなもんだ」ピサの口の端が彼の父のように歪んでいるが、目は笑っていない。
「縮図だよ。…我が国の学会が地震予知をやらかして、『あと数十年内には 30%』『百年以内には 60%』とかって言ってたけど、そういう役に立つような立たないような、でもすごくドキドキさせられる考えを思い出させられる。その言い方を借用するなら、『あと五年以内には 50%』『十年以内には 100%』ってところかな」
「一体…　何がですか」こういう相手に出会ったことのない若き聡明な男は、すっかり顔をしょげさせてしまい、わけのわからない筋道に振り回されている。
「貴国と我が国の戦争の発生確率、転じて貴国の滅亡する確率だよ。弟は興味なさそうだけど、俺の住処は貴国に近いから内情は手にとるようにわかる。貴殿の指摘した、我が国への憎しみがもう限界まで募っていることもね」
　ジィホは膝から崩れ落ちるように再び座り込む。立ったり座ったりですっかり疲れてしまっているようである。「我が国が貴国に伸るか反るかで侵攻し、自滅してしまうというのか。そこまでお見通しだったとは…」
　そのとき、外で大きな怒声や悲鳴、剣のかち合う音が交じり合って巨大な響きを立てる。「モファーナスが来たか！　まずい、ピサ殿がここにいるのは彼に告げるな、私がうまくやる」
「俺の鎖を外せ！　さもないと…」
「静かに！　あなたのことは私が責任を持ってうまく隠します」
「そうじゃない、外の音を良く聞け、あれは俺の部下だ！　さっき言った通りになっちまうぞ、俺をあいつらの前に出すんだ！」
　血眼で黒猫を捜していた軍勢がついに砦まで辿りつき、捕らえた敵の噂から彼が囚われて処刑間近だという歪んだ情報も聞きつけ、息荒く、このぐらいの砦など木っ端微塵にしてやろうという勢いで攻め寄せている。城壁からは必死の投擲が続けられているが、炎の死神に取り付かれたように怒り狂った二人の大将軍の軍団はそれを意に介さずにものすごい勢いで特攻してくる。間一髪で門から黒猫が出てきて、彼らに落ち着くように言う。だが、興奮した兵士達にその声が届かない。

「者ども、朕は無事だ！　戦は中断、これよりケチアナイ共和国と和平協定を結ぶ、整列せよ！」

木々がなびき、野山が震えるような威厳に満ちた大声で、敵も味方も一瞬にして毒気を抜かれたようになってしまう。締結されたケチアナイの街の名を取って『マソンニー条約』と後世に呼ばれる彼の言う協定の骨子は大きく三つあり、一に『ケチアナイ共和国とビルドモンソ神聖帝国の不可侵』、二に『自由貿易の関税化、および自由交易道の確保』、三に『パンダンタを国家として認め、旧マスターニ州をその国土とし、ケチアナイ連邦に加える』というもの。実に彼らしく、特に第二と第三の内容は個性的で俄かには理解しにくい感が否めない。

彼はケチアナイとの友好を作ろうと考えていたはずなのに、関税化とはいかなることか。ただ交じり合うという面なら、今までの通りに自由にしておけば良い。しかし、貧しく産物の乏しいケチアナイは貿易において常に帝国に対して不利な立場にあり、他国文化が入りすぎることで彼らの独自な文化が淘汰され、薄まっていく傾向にあった。このような状況が力のある古い国民の反帝国感情を育てており、そのような状況を考慮したというのも理由の一つではある。だが黒猫は、犬族独自の誇りの文化に触れ、自分たちにはない彼らの優れた部分を知り、彼らが無理を押してでも望む慎ましい生活を含め、それらを文化遺産として後世に伝えるべきだと思い、敢えて、物流の面でブロックを掛けたのである。おかげで犬種は世界中のまとまった人類種からすれば大変に数が少なくなり、知性を捨てて野蛮化する傾向――彼らにとっては、それが進化を意味する――にあったが、ケチアナイの民は永きに渡って純粋文化を守り、その後に他国の町の一つとなったときも、その子孫が引き継いできた民謡には、彼らの祖先、犬種に限らないあらゆる人類の勇士を称える詩句が刻まれる。

それは、大きなラインでの物流が途絶えたことによって心まで通わないことにならぬように『自由交易道』がいくつも整備され、人々の往来が増えたことの影響が大きい。旅人は異文化にふれ、それを祖国に持ち込む。もしケチアナイがそれで自分から裕福な方に憧れ、流出して衰退するなら、それも仕方のない時勢というものである。だが、皇帝達を後に賛嘆させるように、犬達はそのような試練を立派に乗り越え、確かに祖先の生き様への忠誠を頑なに守り、旅人に彼らの飾らない節度ある誇りを見せる。逆に、面の斬新さに定評のある彫刻を中心とした彼ら独自の芸術が神聖帝国に紹介され、大きな流行や文化運動を引き起こす。

一方、国土を得たパンダンタはケチアナイと共和制を組んでいた北のパルツとともにその小さな隣国となる。しかし国土に誇りを持つ犬達が、強国の介入があっては仕方ないなどと言いながらむしろ嬉しそうに譲ったように、そこは祖先のしがらみで居続けなくてはならなかっただけの、断崖絶壁と邪悪な生物の好むじめじめした暗礁地帯、険しい山脈、不毛の砂浜といったものがひしめきあう地域であったから、移住者にとっては大して喜ばしいことにはならなかった。しかも、更に攻めるにもケチアナイは今回のことを教訓にすっかり防備を固めてしまい、かといって戻るにも戻れず、普通なら仲介役を恨んでも仕方ないというところである。しかし、北懸皇帝は小さな約束をあの交渉役の美女にしていたので、部族の長の娘でもある、実りきった果実のような三つの乳房を苦しそうな白い修道服で縛っている虫者の巫女は、丸く愛らしい瞳を濡らして、彼に熱い抱擁を与え、こう言い残して国へ去った。

「神に仕えるものは愛する男性と一緒になれませぬが、近いうちに私が務めを果たして次の者に使命を託したなら、その時は鳥を放ちます。きっと、迎えにいらしてね――」

「『迎えにいらしてね、私の勇士様』だってよ、おい、モテる男はこれだから困っちゃうね」

一人悶絶して喜び、頭やら背中やらを引っ掻く黒猫を放って、戦後処理に忙しくしている二人の友人は兵士を引き連れてさっさと国を目指す。イムの不機嫌がビスタンにも伝わる。黒猫が政略的なものとはいえ、結婚することを友人達に発表した時も同様であった。ビスタン・ケイマリッチは友情との板ばさみになりそうな恋の病を克服し、黒猫推薦のお見合いでエクミ・キャル出身の女性と結ばれてすでに五児の父だったが、時折、今だ独身を貫き、ピサの下に男友達のようにして居つづけるこの女性に、友情を越えた深い思いやりで接してしまいそうになる。こういう問題は非常に微妙なものなので、自分のような粗忽な人間が介入してはならないのだろうが、せめて同じような気持ちの態度を示してやることで、ピサの気を変えられないとしても彼女の気持ちを分かち合ってやれるかと、ビスタンは黒猫が慌てて彼らを追いかけてきても、そっけない態度をとる。

「何だよ、お前達までケチアナイ戦は無駄だったと言いたいのか。教えただろう、これには俺にしか思いつかないような、凄い裏の狙いがあるのさ…

ラスだってきっと泣いて喜ぶに違いない。優れた指揮官はそうそう内面を仲間内といえども披露しないもの。今は内緒だが、そのうちわかるって。お前達は楽しみにしてれば良いんだよ」

黒猫の軍勢が意気揚々と引き上げている頃、セコンゲッシュの宮殿では第一位皇帝が、兄の軍勢がケチアナイを取れずに引き上げてきたという報告を受けている。それは直接のものではなく、一度丞相に届けられ、彼が間接的に伝えたものである。

「ほぼ敗残に等しいな。我が神聖帝国ともあろうものが、犬の群れ相手にか…」ラスは最近まどろみの波のように押し寄せては返す頭痛を抑えようと手を額に当てる。「丞相、汝の考えを聞こう」

「北の支配力も軽くなり、地より離れたということではないでしょうか」唐突であった。彼が内部に邪なものを抱えているにしても、思慮深い雉猫に対する発言としてはあまりにも性急で、愚にもつかぬ表現といえる。ところが皇帝の方は、部下をぼんやりと輝きの薄れた目で見つめ、その言葉を理解するのに幾度か反芻しなければならぬように、天井を見上げて口の中でもごもごと何事か繰り返す。不意に彼の心の中で、悪夢を振り払うように悲鳴を上げた何かの煌きが弾け――雉猫は悪寒に喘ぎそうになり、それを悟られまいと口を真一文字に結んで肘掛を強く握る。すると、暴言を咎めようという気が不思議と起こらなくなっている。

「困ったものだな。あの黴菌や蛆虫だらけの染みったれた――シミッタレタだと、兄のような表現だ…――ゲルペンフユの森の中は、あれでいて風邪や病気になりにくい環境だったのかも知れぬ。常に健康体だったので、体が少々驚いているようだ」

「たちの悪い流行り病でございますからな。しかしご心配召さるな、名医どもの英知を結集したこの薬湯を飲みつづけていれば、あと数日もしないうちに克服でき、陛下の血中に住まう強兵達の輝かしい戦歴の一つに数え上げられることでしょう」

「免疫機構か…　まこと、我が精強なる軍のごときよのぅ…」皇帝は空咳を何度かし、顔を背ける。

アムヤーラは運ばれてきた茶碗の液体にマスクの穴から突き出した舌を何度か差込んでみせてから、恭しく差し出す。この毒見の時に毒を入れているなどということには、さすがのラスも気付くことができないでいる。本来ならば、兄と共に毒草の毛布の上で遊び、あらゆる分野の知識も豊富な雉猫ほどには、生体を脅かす成分に対して知恵の面でも肉体の面でも強い耐性を持っている者はいないはずである。しかし彼も老いたということなのだろうか、その自信がかえって災いしている。

彼は今まで多くの者を疑わなければならない立場にあり、それに比べれば兄はどれだけ気楽だったといえよう。ゆえに兄は弟への感謝を忘れたことはない――そういう張詰めたところのある人間は、時として息抜きをしたときに非常に脆くなる場合がある。アムヤーラ・クフグ=キャーイはその間隙を突いた。

マスクの裏でお歯黒の不気味な口を開いて声もなく笑う彼は、自分の言いなりになりつつある優れた男を眺めながら、父将軍を探して荒野を当て所もなくさ迷ったことを思い出している。――砕け散った枝穂の女王の残骸、その中に入り混じったのであろう父の遺骸も見出せずに泣き暮れているとき、彼は偶然にも、圧し折れて土に埋もれている小さな筒の破片を発見した。彼は魅入られたようにそれを拾い、後にそれがサイルゴッツの持っていたものであり、密かに黒猫が部下達に探させていたものであることを知る。この虚品はすっかり壊れてその主要な機能性を失っていたが、材質や部品に梵子的に染み込んだ猫族に対する特効作用が僅かに残っていた。それがわかった理由は、この品を持った辺りから不思議と、彼の出世を妬んだりそのおこぼれを頂戴しようと欲望したりしている仲の悪い家族や親戚が、彼の言うことを従順に聞くようになってきたからである。彼は心術と呼ばれる分野に精通し、その方面に関してだけは術の大家である雉猫の教師となれるほどである。陰鬱な人間関係の展開する地内の貴族社会の中で、彼はほとんどいつも自分の心のうちを隠し、気付かれぬほどの弱い心術で相手の心を操作して自分の都合の良い対応をさせてきたので、癖のようなものなのであるが。

彼はこの筒の欠片をいろいろと試すうちにある結論に達する。――この虚品はまだその性質を失ってはおらず、周囲の猫者の梵子力抵抗、精神的な抵抗の能力を弱めてしまうのではなかろうか。それゆえに、その影響下に落ちる猫者種には、我が無意識の精神操術が強い作用を及ぼす。単に相手の抵抗力を落とす攻撃系の効果をもった品なら他にも強力なものがいくらでもあろうが、この品の波動は猫族の遺伝子に直接に作用する。それゆえ本人だけでなく、僅かの異常梵子力をも検出する数多の宮廷術士の目もすり抜け、相手は全く理由もわからずにじわじわとその支配下に陥ってしまう。しかも、例え見つかっても小さくて一見してただのガラクタにみえるし、半壊してしまったから効果は弱く、気取られにくい。その能力をうまく使い、得意の術と組み合わせていけばいかに聡明で用心深いラスといえども、術中に落とすことは決して難しいことではない。

しかも、彼は自分の抵抗力に自信があり、かつ心に癒しきれぬ傷をいくつも負っている。自分もそれを幼少の頃から受け続けてきたので同類として感じ取るから隠しても無駄である――彼は『同類』と表現するが、しかし雉猫と違って彼の場合はその傷を乗り越えずに悉く敗北し、邪道に踏み入ってしまっ

た。心の僅かな裂け目こそ、邪悪の付け入る絶好の裏口となるのだ。虎猫の丞相は波動の力をある程度意のままに操作できるよう訓練し、他の猫宮廷官等に気付かれぬよう、ラスだけにその効果を集中させている。

確かに、雉猫の免疫機構が自信をもって判断するように彼の飲んでいるものは、薬湯とは名ばかりのただの渋茶で、毒など入っていない。それゆえにこそ、この場合では何よりも恐ろしい毒となり、ラスはアムヤーラの三文芝居によって彼を不必要なほどに信頼し、催眠術の魔の手にどんどん陥っていく。しかし、それはアムヤーラが聡明な雉猫より上手であったということを意味するものではない。口には出さないが、ラスは恋人の死を、知力に頼りすぎて人を疑ってしまう傾向のある自分のせいだと背負い込んでいたので、彼の優れた内面が僅かの警告を発しても、悔い改めのつもりでそれに目を瞑ってしまっている。不運が重なったにすぎないのだが、いずれにせよ残念ながら、結果的にはしてやられたということになる。

『調教』は用意周到にじわじわとなされた。まず手始めに、更に抵抗力を落とすため、雉猫の近年癖になっていた何気ない空咳を指摘し続けることで次第に本当の病に掛かっていると信じ込ませて体調を崩させ、次にゆっくりと、北と南の差別化を、兄皇帝の愚かさを教えていく。催眠術は、最初は弱い効果でも複雑に掛かっていくほどに術の効果が相互に絡み合って心をがんじがらめに縛ってしまう。これは梵子の力を借りなくとも調合可能な毒草と同じようなもので、人に安らぎを与えたり、心の傷を癒したりする善い技にもなるし、一つ用法を間違えば誰しもが陥る危険性のある恐るべき罠ともなる。

それを悪しき技に転用している男は、北懸皇帝の帰国が間近いことを知って仕上げを急ぐ。彼はラスにあることを思い出させる。彼が由緒ある王家、ア・ルプ・パンチノの血筋であることを。そして、切々とした猿芝居の訴えが続く。――悲願果たして国を作ったまでは順調といえましょうが、一緒に暮らしてきたというだけで、血の繋がりも無い乞食か何かの子に、国土の半分を取られたままで良いものでしょうか。座位の入れ替わりの規則をないがしろにする彼の身勝手さにはもはや懲りたことでしょう。そして、あなたの愛し続けているエルフム王女の命を奪ったのも、強いて言えば、あの唾棄すべき邪悪な性質を体毛の色に表す黒猫が段取りを組んだものなのです――

アムヤーラ・クフグ=キャーイに何か一つ客観的にいって本当に優れている部分がないか挙げなければいけないとしたら、相手の心底の傷口を読み取る力しかないのではなかろうか。もっとも、彼の場合はその能力を癒すためではなくて傷を膿ませることに使ってしまうのだが。ラスは朦朧とする意識の中で必死に自分を探そうとした。彼の良心は声にならぬ声で兄を呼び、泣き叫ぶ。しかしこの場合、相手が邪悪すぎたし、彼はサイルゴッツ戦の報告を父の死のショックが強すぎてまともに聞いておらず、予備知識があまりにも少なかった。彼は不覚にも敵に屈し、まどろむような目つきで、濁った小さな赤い目の男に親愛の眼差しを送る。アムヤーラはもはやお歯黒を隠そうともしない。

「…おわかりいただけたようで、何もかも…　嬉しく思います、聡明な、世界の帝王よ。王は一人で十分なのです。紛い物を、我等が手で潰しましょう」

速やかに不穏な動きが帝国全土の物陰に蠢き、最大の悲劇の準備が為されていく。それは丞相が長年

にわたって計画してきたものだったのでその様子に気付いたものはほとんどいなかったが、もはや仙猫が世を去った今、同時代においては彼以上の者はいないであろうと思われるほどに優れた人格者、フアンホ大司教の慧眼が宮殿の黒雲を看破する。神の前での正義を命より重んじる敬虔な幾人かの信者がこのいと徳高き人に皇帝の様子を伝える。彼の知性はその断片的情報だけで、南懸皇帝が北軍を出迎えると見せかけてそれを包囲攻撃するという最悪の事態を予測する。

「何たることだ、ラス…　それだけは、絶対に防がれねばならぬ」

　彼は雉猫のためには命を惜しまぬと決意し、作戦を辞めるように嘆願書をしたためて宮殿に赴かんとする。彼こそはラスの唯一最後の希望であった。ラップァの目が迷える雉猫に注がれ、その悟りから生み出される気高い言葉が厳しさと優しさを込めてかけられたなら、きっと彼をもう一度引き戻すことができたはずである。だが、すでにアムヤーラの放った間者は至る所に配置されており、特に危険視されていたかつての第四軍団長の周囲にも目を光らせている。もちろん司教も間抜けではなく、自分の目的を果たすために最大限に注意を払っていたのである。だが、さすがの彼も他でもない雉猫のためと感情移入しすぎて、目が曇ったのかも知れぬ。彼に情報を与えてくれた者、命を賭して密告者となってくれた味方である信者に、邪悪な蜘蛛の糸がつけられているとまではわからなかった。

「大司教殿。今宵は、祈りを貴殿のために捧げさせていただきたく、参上いたしました」大聖堂の裏門から出ようとした瘤取者の司教を、南懸丞相と近衛騎士達が取り囲む。大柄な知恵者はその一同をぐるりと見渡す。

「そうか…　いかなるところにも邪悪というものははびこるものだな。立派な騎士達よ、盲目的な忠誠を教えたのは、しかし我々なのだ。君達だけの責任ではない。

　それにしても、祈りの代弁者、仲介役でしかないこの儂に、奇妙なご用件ではありますまいか、丞相殿」

「とぼけないでいただきたい。あなたの懐にしまっているものが、偉大なる唯一皇帝となられるラス殿下のご意向に対する謀反を示すものであることは、この忠臣がすでにお見通しであるのだ。今までの貴下の偉大なるご足跡に免じ、手荒なことはしたくない。それをお渡しいただきたい。貴下の前で破って見せよう。貴下も誇りと地位のあるお方だ。それだけで過ちを捨て去り、我々は思いを同じくすることができるはずだ」

「…ふっ…　ふっふっふっふ…　ふわーっはっはっはっはっは…！」フアンホ・ラップァ・マーヒの大笑いが辺りの騒音に溶け込む。奇しくも両皇帝の威徳を称える街の祭りが最高潮で、美しい花火が夜空を飾っている。民衆は席を外している方も直に帰ってくるものと信じて馬鹿騒ぎに興じている。その喧騒に紛れていこうと狙ったのだが、かえって裏をかかれたわい、と瘤取者の司教は半ば観念してしまっている。だが、最善を尽くしてみるしかない。自分のことなどどうなったっていい、あの愛すべき雉猫のためにも――

「そうかそうか、サイルゴッツ、まだ生きていたのか。性懲りも無い奴だ」

「何だと…？！　わけのわからぬことを、私のことをいっているのか、この南懸丞相クフグ=キャーイ

のことを」彼は理由もわからずにぎくりとし、目がずり落ちそうなほどに震え、怒りと恐怖に捕らわれはじめる。その様子を司教が睨みつけ、説教壇に上がった時のように重々しく話す。

「貴殿、出会った頃はラス殿を任せるに足ると思っていたのだが、いやいや、儂も耄碌したものじゃ。それを考えてみればサイバル殿は、運命の悪戯を思わせる実に勿体無いことであった。あの青年ならばラス殿とともに少しずつ成長し、頼もしく任せられたものを…　たまたま地神がお仕えになる者を求めていた、夭折した彼にとっては名誉あることだと考えるしかあるまい。しかし貴殿には、彼ほどではなくとも少しは何かの足しにもなろうと期待をかけていたのに、実に愚にもつかぬ奴だったとは、幻滅させてくれる。

失敬、丞相殿、こうなってしまっては貴殿の存在などどうでもよい、こんな面倒なことを貴殿ごときに準備できるはずもなかろうからな。他人を操っているつもりだろうが、とんでもない。お前さんのほうこそが、もっとネクラでどうしようもない悪の火種に、そのちっぽけな精神を乗っ取られてしまっているのだ」

ラップァ流の辛辣な言葉がついに邪悪な人間を激昂させる。「その侮辱、発言には責任を取ってもらうぞ。すでに死罪を通り越したものだ！」しかし騎士達が動くよりも早く、巨漢の法衣がゆらめく。

「宮廷の影に隠れられていてはやりにくかった。儂を抑えるためとはいえ、こうしてのこのこと出払ってきてくれるとはむしろ好都合！　儂を見くびったな…」最高位の術方を自在に操る司教の組んだ法印から梵子力が発動し、丞相お付きの精鋭達全員が一瞬にして見えない鎖で呪縛される。「ちょっとあっけなかったかね。まぁ、これで堂々と皇帝に謁見できる。土産は貴殿の首…　とまでいくと穏やかではないから、素直についてきてもらえるだろうな？」

「見事だ、一筋縄では行かないと思っていたよ。もちろん、『お前達賢者』の裏の裏をかくには、まともな技ではな…」

「……？

？！　っ…これはっ…！」

巨大なフィナーレの花火が上がった。地震のような轟音が早すぎる音波の到着のように辺りを包み、ラップァの足元に地割れが走る。土の裂け目から、消えていく火花と入れ違いに鎌首の先端が突出して彼を捕らえ、万が一のために身に付けていた法鎧もその逞しい肉体も貫通して内臓を砕く。彼はそのまま少し空中に引っ張られたが、引っかかっていた衣服が引きちぎれ、大蛇に似た化物の作った溝の中にどさりと落ちる。夥しく露出したものやらがそれを満たそうとするかのように広がっていく。

「…こ…　…んなものを…

貴…　様、生贄を使っ…　たな…」

「そんなにすっぽりとはまって、お気に召したようで嬉しいですよ、その墓穴が。ちなみにご心配いただいているようですが、大したことではありません。

あなたの引き合いに出したすでに滅び去った敗北者、我が父の仇、いや、家を顧みなかった父のことなどすでにどうでも良いのですが――あの秘術は別に彼女の専売特許というわけでもありませんから、

ちょっとその解説書と材料を裏から仕入れれば、それほど難しいことでもないのです。宮廷で、ちっぽけな意気地なしの癖に変な気を起こして生意気な反対活動やら、ついでに私の地位を掠め取ってしまおうとか、馬鹿な連中、その家族、そういったゴミを薪として火の中にくべてやりましたよ。まぁ、幾人かはそのまま見逃してやって、貴方のところに駆け込ませてやったのですがね」

丞相が屈みこみ、司教の真上の闇に赤い両目だけが爛々と浮かぶ。しかしそんなものは既に眼中にもない瘤取者の老人は、ウムポ・ルサのことを思い出している。——罪悪感ばかりではない。儂は職に没頭しすぎて子を持てなかったが、ラス殿のことがまるで実の息子のように感じられ、どうしても気になっていた。酒が気を大きくし、そのことを正直に仙猫殿に話したとき、彼は思いやりの篭った眼差しを向け、こう言ってくれた。『司教殿。そう思った刻、既に貴殿は彼の父母なのですよ』

あの方に育てられてきた貴殿方兄弟は、幸せだ。いや、あるいは不幸せだったかもしれぬ、あの方は、尊敬する儂が言うのも何だが、自分の状況からくる精神的危機を抑えきれず、か弱い子供達に随分辛く当たったのだろうから。それでも、彼は自分の存在全てを使って精一杯貴殿方を愛したのだろう。そして、運命の力によって高き目標に引っ張られていく子供達のために短い間で何ができるか、彼なりの答えを精魂込めてぶつけていったのだ。儂には、そういうところが欠落していた。彼を羨ましく思った。だが——

フアンホ司教は体の主要な部分を巨大な結晶石の牙を持つ首長龍に噛み千切られているにも関わらず、全く諦めていない。その震える手が、ラスの、愛する息子の敵を掴もうとゆっくりと上に伸ばされていく。

「おっと、怖い怖い。こんな芝居がかったやり方でも、一掴みされればどんな最期の呪縛をかけられるかわかったもんじゃない」虎猫は嫌味を込めてそろりと僅か後ろに退く。彼の宮廷衣装が風になびき、血に塗れた太い指が掠っただけに終わる。

「さぁ、埋めますよ。祈りの言葉はお得意でしょう、自分のために捧げてくださいよ」

「……」

「何か言いました？　この世への未練なら面白いから聞いてやりますが」

「猫兄弟は…　真の友愛に…　包まれん」口から血の泡を吹きながらも顔を歪めて嘲笑い、はっきりと宣言する。「そのために霧散する哀れな暗雲よ、先に地獄で待っているぞ！」

「ちっ、喋れるのか。やはりお得意の道化芝居だ！」再び龍の無慈悲な頭部が穴にぶつかり、何もかもが静けさを取り戻す。祭りも終わっているようであった。彼は司教の言葉を負け犬の遠吠えだと思ってすぐに忘れてしまう。それが彼の狙いだとも知らずに。

しかしアムヤーラは第一位司教の死を利用して雉猫に止めの一撃を加えることは忘れていない。「国民には病死であると…　混乱を招かぬよう、真相は伏せてあります」と、丞相は薬湯の杯を取り落とした皇帝に密やかに声をかける。

「特定の武具によって何度も切り裂かれたようです。その傷跡は、残念ながら殿下がかつて兄と信じこまされていた男の所有するものの刃跡と合致します。ご乱心と…　いうより他はありませぬ。殿下のよ

うな生まれながらにして人の上に立つ宿命を帯びた者ではない、生半可な人間が為政者になった場合、様々な理由からこういうことが起こりえるのですが」しかも、彼は抜け抜けとこうも付け加える。「お聞きになったでしょうが、北の皇帝が戦時に見せたという額の角――忌まわしき者の象徴であり、邪悪な女王に乗り移られた証ではないかと…」

もはや誰が聞いてもアリバイも真実味も何もない嘘っぱちでしかないことなのだが、少しずつ腐食されているラスの心には、自分の最も頼りたいと思っていた存在の死そのものが致命的な打撃となり、そんなことにかまっている余裕は無い。いかなる時も悲壮な想いを胸に押し込めて、力強く縁の下で彼を支えてくれたラップァに、彼はいつしか感謝だけでなく、自分の実の父に対するような感情を抱いていた。彼はそれをうまく伝えることができずに、お互いに職務も忙しく、会うことも無いままに時が過去っていった。それでも彼は近いうちに、自分の近年の辛さを告白するだけでなく、その機会を通じて、今までの自分の過ちを認めて償っていくことを大司教に誓おうと思っていたのだ。彼はラップァの気持ちを知らなかったが、この二人の、遠く離れていてもその心が間近く寄り添っていたことを知る者ならば、その際に彼らが真の意味で父子の契りを結ぶという微笑ましい想像をも付け加えることもできよう。だが、もはや大柄な徳高き人は世を去ってしまった。

「もはや戻らないのだ、何もかも。…もう良い」何が良いのか、彼にはもはや全く判らなくなってしまっている。「出撃だ。総監を呼べ。ピサ軍に宣戦布告する」

「いけませぬ。皇帝閣下は国の要、お大事になさらねばなりませぬ。偉大なる神聖帝国に付着したゴミ掃除くらい、我々だけでもできます」彼は雉猫をすっかり支配しきったものの、その抑えきれない誇りや知性を恐れているのだ。そのせいでラスは、敵に恨みをぶつけ、心の靄を発散する機会すら奪われてしまう。こうして邪悪な男は今回の軍団編成と総指揮を自由にできる権限を得ると、早速マイザブル・ビアツに勅令を出す。彼らは帰国する兵団がワイテの街を目指していることを知ると、付近の国境を封鎖し、至る所に兵を伏せる。

百万規模の軍勢を束ねる地位に就いた砂魚者は、しかし、それに奢ることなく常に一軍人の気持ちで精進を怠らない日々を送っている。彼も色々なことを聞かされたが、素朴な彼にも明らかに俄かには信じがたいことばかりである。そう思ったところで詮索することが性分ではない彼は、かつての同志への友情と国家の命令との間に挟まれて悩む。心優しき妻がその隣に来て彼を慰める。だが、リュシュエに打ち明けるわけにもいかず、マイザブルは平然を装う。聡明さをその形態に示す稼動気は、悪いとは思いつつ、彼の肉体を包み込む時にその思念を読み取った。

「あなた、私をぶってくださいませ。ふしだらな女でございます。私はあなたを信じられず、生まれつきの技を使ってあなたの心を覗いてしまったのです…」妻の声は密やかで、驚いた夫も自分たち以外はいないはずの家の中とはいえ、一応すぐに辺りを見回して人影がないことを確かめる。

「お前、…なんということを。知らぬ方が良かったものを。しかし、私の浮気を疑うなどかわいいとさえいえるよ。…本当にそんなことが理由なら、お前は騙されたとしても私を信じ続けるだろう。私の表情から別の懸念を読み取ったのだね、賢いお前は」

生体活動が常に新しい細胞を表面にかき集めるので、リュシュエ・ビアツの容姿からは老いをほとんど感じ取れない。彼女は慎ましさを忘れぬように注意しながらも、夫となる騎士と出会った時に見せた清明な態度で述べる。

「戦や政に疎い私が意見することはできませぬ。でも、私達を結び合わせてくださった仙猫様がもしいらしたなら、私達になんと仰るか、もう一度お考えくださいまし。私の夫は正しいものの考え方のできるお方。あなたのお考えになら、私、他人がどのように誹ろうともついていきますわ」

彼は誰にも相談できなかったし、すべきではないと思っていたのだが、それでもこうして心の清い人間に聞いてもらい、問題を共有できるということは何よりも有り難い事で、肩の荷が降りたような気楽さを覚える。彼は丞相に呼ばれた時に耳打ちされて以来、一度もまともに笑っていなかった表情を緩め、アプンヘッサで共に戦った懐かしいウムポ・ルサの姿を思い浮かべる。

「愛しいお前よ。予期に反して彼ならこういうだろう。『偽善など無駄ですよ。自分の身を守ることは最優先、どんな悪も受け入れるべきです』とね」

「ええ、そうですわ。口の端を歪めて、さも私達の心のさもしい部分を先見しているかのように。正しい人の反骨精神を呼び起こそうとなさって」

総監は力強く頷いて彼女を抱きしめ、熱い口付けを交わす。――生きて還ってこれぬかも知れぬが、正義を貫くために皇帝に我が意を上奏しよう。もしかしたらラス殿も、昔のよしみでお考えを変えてくださるかも知れぬ。いや、そういうことはむしろ本当にありえることだ。あの方にはずいぶん長い間直接には会っていない。私は弁舌が得意ではないが、その分飾らぬ言葉がきっと彼の心に届くだろう。躊躇させ、時間を稼ぐだけでもいい。後はあの、おどけた所もあるがなかなかに抜かりの無い兄皇帝様が何とかしてくれるはずだ。とにかく、ケチアナイに向かった同朋を壊滅させるということにさえならねば良いのだ――

総監が謁見の前に精神を統一するために訓練所で汗を流し、戻ってきてみると、いつも出迎えるはずの笑顔が無い。居間の机には、宮廷の秘文書を示す紋章の織り込まれた羽飾りが突き刺さっている。『忠誠を。しからば澄み晴れ渡る』短い言葉が、羽毛の裏に貼られている皮紙に書かれている。たったのそれだけなのに、彼は今まで数多の戦場で受けてきたどのような傷よりも痛烈な衝撃を受ける。…即座に周囲を見渡す。人の気配は無いが、窓が少し開いてカーテンが夕風に吹かれている。鍵の部分に穴が開いているのが認められる。

一人残された男は、忘れることのできなかったエルフム・ヤスの悲劇を妻に重ねる。王女を国王に任され、身分を越えぬ愛情の度合いに自制して見守っていた砂魚者には、彼女が兄弟の急進的な歩みの犠牲になったと思われて仕方がなかった。老いても力が衰えぬ砂魚者も、心の歯車がどこか軋んでいくのを感ずる。――これ以上大事な人を失うわけにはいかない、例えそれが、信念に反することになろうとも。

「リュシュエ…すまん」その謝罪は、彼女より正義を優先するためのものではない。妻なら喜んで自分の命を投げ出すことであろう。だが、自分は――「私にはできぬ。私は自分が強い人間だと思っていた。

間違いであった。お前を、愛しているのだ…」

彼は決意し、羽を戦衣に刺して武器を取る。彼のような人間が一度思いつめたなら、もはや容易に思い留まることは無い。それゆえに彼の行動は迅速確実になされ、黒猫達が気付いた時には遠征軍は数十万の、物々しい様子の味方にすっかり包囲されている。

北領の兵士達は前後左右から次々と現れる味方の盛大な出迎えに目を白黒させ、最近には平和で忘れ去られていたであろう聖帝軍の武勇を示してきたという名誉にはにかんだり、謹厳な面持ちを作ったりしている。だが、北懸皇帝と両大将軍はすぐに事態の異常に気がつき、将兵達に伝心して部隊を密集させ、警戒体勢を取らせようとする。

「敵が動いています。わざと突破されたいのですか」マイザブル・ビアツが隣の機竜に乗る丞相に杓上で小突かれる。「そんなことになったら責任は重大、それを支払うのは貴方ではないかもしれませんよ」

聖帝軍総監は観念し、振り上げた拳に握られた槍を罪なき同朋の一団に突き出す。戸惑っていた主力軍の兵士達も演習ではない命令に意を決し、怒涛の勢いで中央に転がり込むようにする。

「どういうことだっ！　ピサッ、こいつら気が狂っちまったのか！？」呆然としてその光景を眺める黒猫を押しやるようにビスタンが前に出て、部下だった人間の頭部を二つ三つ叩き割る。その周囲では酔ってすら比類なき武勇を見せた者達が、このあまりにも非道な不慮の出来事に何の対処もできずに次々と倒れていく。女騎士は側面の最前線に出て戸惑う味方を奮起させ、結集して活路を見出そうとする。

「上層部に何かあったに違いない。おのれ雉猫め、裏切ったのか」

阿鼻叫喚の乱戦…「隊伍を崩すな！　国へ、東へ向かうんだ、突破しろ！」瘤取者の怒声が虚しく響く。それは無理というものであるし、こうなってしまってはどこに行ったところで落ち着ける場所があるとは思われない。あの最も恐ろしい戦闘力を有した女王が相手でも全く怖気づくことすらなかった頼みの綱の黒猫は、事態を把握できず、把握したくも無く、ただ虚しい想いを込めて、これが何かの悪い夢であってほしいと願ってでもいるかのように目を右往左往させている。それでも、彼と共に成長してきた虎の子の兵団は皇帝の盾とならんと、そして、自分達に刃を向ける盲目の味方に武器を向けるのを快しとせず、健気にもただひたすらに防ぎ、死んでいく。その様子が若干でも攻める者の勢いを削ぐとはいえ、兵数において全く勝負にすらならない状態だったので、味方の兵士達は家畜の毛が刈られるように急速に減っていく。作戦を変えるためにビスタン・ケイマリッチが主軍を集める。

「…これまでか。イム、ピサを連れ、精鋭の一隊で北へ突破しろ。山脈地帯に逃れれば潜伏できるかもしれん」

「あんた、どうすんのよ。これくらいの囲み、全員でやれば逃げきれるわ」

「駄目だ。黒猫の再起には兵士が要る。全滅に近い状況は避けなければならん。

各指揮官に伝えろ、俺と決死隊で波紋の陣をやるから、その隙に各々後方から別々の方向に放射状に牛蛙陣で強行突破し、一軍でも多く生き残り、北懸皇帝の命を待て、と」

「嫌だわ、私も残る！」

「議論の余地は無い！　俺は今までこの野郎に活かされてきた。今度は俺がこいつを生かす番だ。それ

に勘違いするな、俺はみすみす死に行くわけじゃない。こんな状況じゃ、どこにいっても待つのはまともに行けば死ばかり。誰でも良い、この不条理を許さぬためにも、一人でも多く生き残らねばならん。

…黒坊主」巨漢は屈みこみ、子供のように震えて涙ぐんでいる皇帝の両肩を力強く握ったが、しかし、その目は咎めるものではなく、最大の優しさに溢れている。

「今は辛くとも、必ずまた希望の光が闇の向こうに見える。あの時、お前はそれを目指して森を出て行ったのだろう、俺を連れて。

座りこんだって良い、でもいつか必ず起て。約束しよう、俺はいつでもお前の傍にいる」

イムは思わず顔を背けたが、泣き濡れたままでぱっと跳ねて爪先立ち、巨大な友人の唇に自分のを重ねる。「おいおい、俺は妻子持ちだぜ。まぁ、悪くは思わないがね」彼は顔を耳まで赤紫に染め、逞しい手の平で指者の美しい女の頭を撫でる。「さぁ行こう、生きて会うために」

ビスタン・ケイマリッチは彼の第一の部下であった比類なき弓使いブースナン・フィアンを黒猫についていかせたかったが、彼は自分の父のように尊崇する戦士と最後まで戦うといって頑として聞かない。ビスタンは止む無く彼の部隊を後方に置いて援護させ――誉れ高き英霊のため、次に名を挙げる者達の名を記憶せんことを――千鬼軍将バーファール・グラン、千鬼軍将ミルモリ・セイドート（虹蛙者）、千鬼軍将ワン・ドゥ（手掻者）、千鬼軍将モンドーローフアナ・ピヨム、千鬼軍将ファイドル・グラフマン、良きライバルであった千鬼軍将ガヒジ・セクレンと千鬼軍将コブ・マシャルダ、そして、軍団長級軍人としては最高位の階位である壇二覧騎将まであがった山賊時代からの部下、サイモン・アームン、マーシャン・ギャリド・エブナ、ザウナ・ガリソの三人といった歴戦の勇士達の命を貰って、一斉の波状攻撃をかけて敵の大軍を一瞬押し返す。決死隊に選ばれた者達は誰にも顧みられなくとも、自分たちがその至高の誉れを認め合っている。

「俺等みたいなのがこんな立派な紋章をつけて戦に出るなんてよぉ。親分、今まで楽しかったですぜ」三人の壇二覧騎将は突撃の前にビスタンの下に集う。「野郎ども、『禿鷹と屍』の根性を見せてやるぞ！」

その間に各師団が乾坤一擲の突破作戦を展開、イムも旗を隠してピサとともにその中の一つに混じり、北を目指す。突破を試みた部隊のほとんどが中途で全滅したが、彼らは自分たちが敵を引き付けることで北懸皇帝が逃れることを戦神に祈り、自分をその達成のための生贄にするかのように最後まで諦めずに奮戦した。

ビスタンを守るため、命令に反して前線に出たブースナンを始め、決死隊の勇士達も次々と力尽きていく。その中で、小鯨大臣という仮初の位置を与えられ、要は黒猫の真友として傍に居続けることをのみ嘱望されて、いつでもその最大の力になってきたビスタン・ケイマリッチは体中に何十という刃と矢を突き刺しても倒れず、術士の砲撃を気合で弾き、咆哮の振動だけで大勢を驚愕させ、――武器をもがれると素手で掴みかかって投げ飛ばし、鎧を板切れ同然に拳で叩き割る。

「…ちっ、時間を稼がれすぎている。だが総監、貴殿ならあの化物を倒すのは容易であろう」邪悪な者が、最も安全な丘の上から戦況を眺めている。常に敵を恐れずに向こう見ずな黒猫と同様に最前線で戦ってきた生粋の軍人は、彼が仲間の近くに行くことで心変わりすることを恐れる丞相の命令でその近く

に留まり、歯軋りしていた。アムヤーラの赤い目が妖しく蠢く。
「何をしている、このままではあの邪悪な黒猫が逃げてしまうぞ。偉大なる大帝のご意向に背くおつもりか！」だが、遠くからでもはっきりと見える戦友の命を燃やす戦い振りが、マイザブルをついに突き動かした。
「すまぬ、ビスタン…　イム、ピサ殿。私が間違っていた。拙者はとんでもない過ちを犯したのだ」彼は激しく頭を振るって停戦を示す白旗を付けた槍を握り、丘を一気に駆け下る。
「待て、貴様、命令違反は死罪、貴様の愛する者も同様だ！　最悪の辱めを受けて殺されるのだぞ、いやそれだけでは足りぬ、戻ってくるのだ！」
　だが、砂魚者は鬼の形相でそれに答えずに振り切り、絶叫する。「神聖帝国の正しき兵士達よ、我々が殺戮しているのは味方だ、味方の英雄達だ！」しかし混戦の兵士達の命令系統が麻痺していたので、彼は気合とともに馬を跳躍させて戦の中央に踊りこみ、槍を振るって各部隊長に直接指令する。
「おのれ、愚か者めが…　こうしてはおれぬ」アムヤーラ・クフグ=キャーイは自分の兵団を連れて踵を返す。戦場では喧騒が次第に収まり、血みどろの輪の中に虚しさだけが漂っている。その中核では聖帝軍総監が、力尽きようとしている瘤取者を抱き起こしている。友人のために命を惜しまず、致死相当量を越える出血をしても最後の最後まで倒れようとしなかった男の前に、マイザブル・ビアツはただ恥じ入るばかりである。だがビスタン・ケイマリッチは、同族のフアンホ司教のような聖者にでもなったかのように、恨むどころか思いやりの篭った目で砂魚者を見上げている。
「…人質を取られたな。真正直な貴殿を動かすにはそれしかあるまい」総監はびくりとして目に力を入れて閉じる。「まことに面目ない。だが、もう私は決心した。遅すぎたかも知れぬが…」瘤取者が喀血して周りの者が慌てるが、彼はそれを意に介さずに話し始める。
「そうじゃ…ないんだぜ、剣豪殿」ビスタン・ケイマリッチは昔の流儀で親しげに総監を呼んだ。「お前さんはそれでも良かったんだ。仕方のねぇこった。俺やあんたみたいな力自慢には解けねぇ面倒事が起こっちまったんだろうよ。あの猫兄弟をすら欺いたんだ、どなたさんかは存じないが、一筋縄ではいかねぇ奴だ」彼はまだ戦い足りぬというような力強い眼差しでちらほらと雨の降り出した灰色の空を仰ぎ見る。
「さて、もしあんたが俺に少しでも何か思うところがあるんなら、ちょいと頼まれてはくれねぇかな」何度も頷く砂魚者に、ビスタンが耳打ちをする。砂魚者は目を見開き、思わず死に行く者を手放して立ち上がりそうになる。「いくらなんでも、そんなことができるはずがない！」
「やってもらわなくちゃあ、困るのさ。ピサの、ためにもな。…ゴボッ…」大量の、紫の体液が再び吐き出されて砂魚者の腕を濡らす。これは最期的なものであり、瘤取者の表情は先ほどとは打って変わって苦渋に満ち、目が閉じはじめる。「神聖帝国を…　作った英雄の俺達が、やられたまんま…　ってわけにはいかねぇだろ。俺にも家族がある、…守るべき者のためなら、お互い、今さら犠牲なんて惜しくねぇだろ」
　聖帝軍総監が深く頷いたのを見てビスタン・ケイマリッチはようやく安堵し、体を地に投げ出すよう

にする。その目にはもはや現世の何物も映らなくなり、代わりに、黒くちっぽけな、彼を正道へと導いた真友が、至極の栄光で燦然と輝いているのを見ている。

『…黒坊主…　お前と逢えて、俺は本当に幸福だった。

　…有難…うよ…』

「ケイマリッチ…殿…？」だが、もはや応えは永遠に返ってこない。

「…ビスタン！　…くっ…　…」マイザブル・ビアツは涙を押し殺して立ち上がり、付近で己の罪に慄く兵士達を見渡す。

「諸君、ご苦労であった。素晴らしい戦果である。辛い任務だったとは思うが、こうして、皇帝閣下の敵を駆逐することができたのは全て諸君等の戦功と言えよう。

ヒードゥ。この者を、一応敵とはいえ、戦衣に包み、奴隷兵の霊安所へ運べ」

飾り気の無い性質のビスタンと懇意に家族ぐるみの付き合いをしていた総監代理は、表情を強張らせたままで命令に従う。聖帝軍総監は冷徹な眼差しをちらと瘤取者の勇壮な亡骸に向ける。彼の死に顔は満ち足りた笑みを剣豪に返している。

「…言うまでも無いが、それ以上は必要ない。適当に放っておけばいい。野ざらしよりはマシだろうが。さて、私は丞相殿に戦果を報告してこよう。諸君等には相応の恩賞がもたらされようから、期待して待つが良い」

強くなりだした雨が、血に汚れた戦士達を清めていく。兵士達は命令に従いながらもせめて最大の敬意を払いながら慎重に小鯨大臣の体を布に包んでいく。砂魚者はそれを僅かに振り返って眺める。『貴殿こそ、至高の勇士なり…』

―――――

その約二週間後、ヴルラ山系の奥地に逃れた北懸皇帝の一団が聖帝軍の追撃部隊に発見される。敵を撒く術に関しては誰にも引けを取らぬイムの先を越えることができたのは、南懸皇帝が直々に指揮する部隊であった。ラスは巨大な節帆(足の付いた芋虫で、足は遅いが耐久力が高い)に乗り、配下には山岳地形に詳しい者だけで編成し、どんな険しい地形も切り抜けて逃亡者を追い詰めていく。

敵から逃げ切れないと感じたイム・リバオヤは、自分が陽動することで黒猫を逃がそうと思い、彼もそれをすんなりと承諾、二手に分かれる。ところが、黒猫は自分を執拗に追ってくる者の勘の異常な鋭さから敵の指揮を誰が執っているかわかっていた。彼はイムよりも早く追撃者にどんどん近づき、相手もあっさりと陽動策を見抜いていたので二人はあっという間に峡谷を背にして出会う。

これは、ここまでうまくやっていたつもりであった南懸丞相にとっては完全に誤算である。あまりにも強い催眠をかけすぎたため、ラスは宮廷に押し込められてじっとしていられなくなり、心を脅かす敵を自分の手で消してやろうと、アムヤーラが戻ってくる前に兵を連れて飛び出してしまったのである。あるいはそれは、優れた雉猫の防御本能が捻出した最終手段であったのかもしれぬ。とにかく出し抜かれた虎猫は慌てて、ラスよりも先にピサを見つけようと躍起になったが、兄弟の引き合う力に叶うわけもない。ピサはお付きの兵にも適当なことをいって他の方面に逃がしてしまっていたので、崖を背に独

りで、じりじりと追い詰められていく。ラスが眉間に皺を寄せる。「やっと見つけたぞ、裏切り者め…」

若かりし頃、地内の闘技場で再会したときのように兄弟が対峙している。威風堂々とした皇帝の衣装ではあるが、すっかり憔悴して美しい顔を台無しにしてしまっている馬上の弟を、逃亡の中で昔のように襤褸の格好になってしまった兄が見上げる。弟が動く。

「ビスタン・ケイマリッチは我が手で始末した。…憎いか？　だが、私はもっと貴様を憎んでいるのだ…！」

覚悟していたとはいえ、ピサはビスタンの死を知らなかったので体の芯を射貫かれたように感じたが、同時に、真友が彼のすぐ傍にいて屈みこみ、その両肩に手をかけているような心持になる。『黒坊主。死が俺達を遠ざけたって？　そんなことが何だって言うんだ。俺たちはそういった成り行きの邪魔立てを乗り越えて、現にこうして強い力で結ばれあっているじゃないか』彼は幻想の世界にビスタンのはっきりとした声を耳にする。『おい、悲しんだり憎んだりとか、ヘマをやらかすんじゃねぇぜ。あいつを助けてやれるのはお前だけなんだ』――黒猫は静かに伏せた目を開け、愛する弟を脅かす影の存在をはっきりと感知する。

「ラス。俺はバカだから、何一つ気付いてやれなかった。俺には優れた友人達がいたが、面倒ごとを押し付けちまったお前の近くには、得体の知れない敵が巣くっていたに違いない」黒猫は崖の縁で立ち止まる。からからと小石が深い深い谷底へと落ちていく。「でも俺はこうして、何度だって助けに来るぜ。兄ちゃんだからな」

「ふん、何を言う。助けに、だと？　追い詰められた鼠の言うことか」言葉に反してラスは激しく動揺し、心の中から何かが湧き上がってくるのを抑えられなくなっていく。「…何だ、くっ…　貴様、私に何をした…？！」

「お前の得意な魔法とやら、だよ、親父譲りのな。さぁラス、一緒に森へ帰ろうぜ」ピサが手を差し出す。ラスは理由もわからないままに体が勝手に動き、それを取ろうとする。

「危ない、皇帝閣下！　おのれ、賊めが！」あともう少しというところだったのに、遅ればせながらに一段上の崖の藪から現れた虎猫が弓矢で黒猫を撃った。しかし、どんなに不意をついたとしても、そんなひ弱なものが最強の戦士である黒猫に当たるわけが無い。ところが――

例年通り陰鬱な気候を提供してきた、長引き過ぎた雨季の影響であったのだろう。僅かに飛び退った黒猫の足元の岩が崩れ、あっと声を上げる間も無く、彼の姿が消えた。ラスはすぐに馬から飛び降りて崖下を見下ろすが、下には轟々と鳴り響く大河が僅かの糸のように見えるばかり。谷はそれに向けて狭まっていくように見え、ごつごつとした刃物のように切り立った様相を見せている。雉猫は飛び降りて追おうとし、兵士達に抑えられる。

「離せ、奴はまだ生きているぞ！　追わねばならんのだ、離せぇっ！！！」

雉猫は憎き黒猫の悪運の強さを思い出して叫んでいるのだが、兄と触れて取り戻した心の部分は、またも彼の運命星の下に繰り返された最愛の人との死別を嘆き、冷たく突きつけられている現実を否認している。

予想外の出来事に助けられて安堵した南懸丞相が皇帝を慰めにかかる。「いかなる魔物といえどもこの地獄の淵のような場所に落ちて生存することはできませんが、陛下の太陽より輝けるお知恵のご判断に従い、捜索隊を増員して探させましょう」――これで邪魔者は全て消した。総監はあの後私に服従の意を表し、ご機嫌取りで必死だ。イム・リバオヤ等がまだ見つかっていないが、黒猫のめちゃくちゃに潰れた死骸探しの者達がいずれ見つけるだろう――

（訳注：原文ではここに挿入文があるが、物語の流れ上、それを敢えて巻末に移して記載する）

…

さらさらと耳に心地よい砂の崩れるような音が辺り一体の世界そのものであった。その感覚世界は、それを定義する主体と客体に囚われずに確かに独立している。ところが、その素晴らしい認識に達した至福の瞬間、自らの存在を思い出して俄かに引き戻され、音が、川のせせらぎであったことを知った。感覚が辺りを見渡し、周囲を取り巻いて折り重なる緑色の細胞か何かの蠢き、それより遥かに高く果てしない塔の断続を網膜に投影する――絶壁が足蹴にするそよ風に揺らぐ樹冠らしいと判定される。皮膚が足下の川の冷たさを知り、光を感知する細胞が地下のような暗さの度合いを受容し、視野明度の水準を自動的に調節していく。暗がりなのに木々の作り出す淡い光が申し分なく辺りを包み、かといって一寸先ですらも完全には明確にしない。まるで朧月世の美観そのものの中に入り込んだかのようだと、『彼』は感じる。

そう、それ自体奇跡だと思うしかない体の申し分なく働いている感覚器達の健気な活動によって黒猫の心は再起動を果たし、生きている自分をはっきりと認識したのだ。もちろん体中が激痛に支配されていくが、それも正確な状況認識のために損傷報告を行う細胞たちの優れた活動の賜物、戦場で傷を受けることを恐れずに突撃していく彼にとって、それは健康そのものの証拠としか思われない。

「死んでも良かったのだが」彼は首筋をさする。「しかし、あんなワビサビの場面で綱渡りから無様に落っこちるってのは、別に自慢できるような最高の終わり方でもない」

ピサは自分がしきりに首の後ろを気にしていることに気がつき、はっとなる。彼が落下しながらも必死に奇跡の着地や引っ掛かりを求めて空気圧と格闘した数秒間に見た細い水脈は、間近でもそれと大差なくみえる、自分の体の幅とあまり変わらないこのちょろちょろとした小川と同じものではないだろう。彼の倒れていた部分には大量の草葉が溜まっていて、起き上がったことでそれらが少しずつ溶け出すように流れている。

「俺は流されてきたのか…？　この、葉溜まりの船に乗って」一際葉の盛り上がった部分があり、今それも崩れていこうとしているが、そこが彼の頚椎や後頭部に枕のように当たっていたに違いないと直感する。黒猫は赤子が親に首根っこを噛み挟まれて運ばれていく様を連想する。赤猫は自分の最も弱い部分を保護者に差し出して萎縮したように丸く固まる、それを噛み千切る顎の力を有しながらそうはせず

に、小さな者を優しく導いていく大きな者。その時二人の間に必然的に生じる愛という梵子力の煌きを抽出して見ることができるような気がして、彼は葉の一枚を拾い上げてみる。

それらは統一性がなく雑多であったが、彼はそのどれにも見覚えを感じ、思わず拾ったものを払い落とす。慌てて葉を掴んでいた指先を見る。何ともなっていない。「…毒が消えている…　流されているうちに清められたということなのか」黒猫は清らかな流れにかがみこみ、その姿勢から辺りを見渡す。すると既に、青春の挫折と幻想の恋という異色的な経験が舞台として選んだ光景が、何もかもを失った皇帝の眼前に広がっている。

「何だ、意外に近場だったというわけだ。俺の妄想もお安いもんだ」彼はゆっくりと大儀そうに立ち上がり、森の奥を見晴るかす。「それとも、世界で最も遠いのは自分の後頭部だとかいう皮肉か？」――子供じみた反抗をしてみようか――「…いや、素直に上流に導かれてやりますか」

黒猫は小さな流れの反対方向へ歩いていく。流れは道草を食うように蛇行したり伏流したりしながらいつまでも続くかのように思われたが、いつしか大きな河にぶつかる。どこも秘境中の秘境といった場所にあるから名など持たないが、そこは力強い暗黒の生物すらも住み着くのを憚るような、そのままにしておかねばならないと感じられる厳格な清らかさを湛えている。彼は本能に従ってさらに上流に向かって歩き、自分が落ちたであろう崖上も眺めやる。崖の中腹の土手に追っ手のものと思われる野営の跡が見える。降りることを諦めたらしい。ここは見るからに深く、流れも激しく、巨大な針のような岩が乱立して周囲に渦を作っていたので、その生存どころか遺体の発見すら絶望視されたのであろう。

黒猫は落ちる前に気力の喪失で意識を失うようなことは、自分に限って絶対にないと自負している。彼自身はっきりとその証拠を思い出せないのだが、ピサ皇帝の名誉のためにも明言しておくが、実際にその通りであった。自分を取り巻いてきたあらゆるもののために最後まで諦めの悪いところを披露しようと足掻いた彼は、そのせいで崖のどこかに頭をぶつけて早い時期から気を失っており、一切の恐れもなしに、非常に奇妙な体勢で落ちていったようである。それが少なくとも、彼に奇跡をもたらした一要因となったことだけは確かである。――だが、彼にとってそんな結果論はどうでも良いことで、一通り眺めやると、その場をさっさと後にする。

辺りの自然が一層に険しさを増していき、木々が姿を消して背丈の低いまばらな草木に代わり、寒さが彼の毛皮を通り抜けて皮膚を刺す。そして、鍛えられた彼の肉体だからこそ何の苦にも感じられていないが、そうでなければちょっと歩いただけで休息を取りたくなるような急勾配の坂道が続く。ところが、それらは全て偽りの間に合わせ、下位次元のミニチュアでしかなかったのだ。黒猫は何となくそれを予感していたので、突如勾配のゆるやかになったとある地点に辿りついたときも、別にそれほど驚かない。「へっ、俺の故郷には相応しいからくりだ」

下り坂が向こう側に続き、密やかな悪戯を見抜かれてこそこそとする子供のように、崖や先ほどに深く生い茂る森林の陰に源流への道筋が隠れていく。

水が下流から昇ってきている。重力の決め事がこの地では低俗なまやかしとして嘲笑われている。また見ようによっては、気侯を利用しないと達成できない大事だと思われている水の循環作用を、ここで

は世界の一部である地力だけで十分に表現できるという高次元の底力を自慢しているようでもある。ゲルペンフユの森の泉から湧き出した水はこの辺りの山脈を発端とするはずだが、そういったものの流れが降っていく振りをしながら少しずつ誤魔化していつしか高みへ合流し、転じてさも森を潤すために生み出された水のように振舞う。

彼はそのまま『上流』へ降り、知ったものにとっては無限の輪の一点でしかない場所に辿り付く。子供時代の探検で見つけたいくつもの泉、小川が、逞しくなっても内面の変わらない黒猫を喜んで迎える。全てがぐるぐると廻っていて、何も変わらないかのような錯覚を引き起こせる。

「しかしそれは嘘っぱちだ。そう見せかけて、実は何もかも途方も無く変わってしまっていて、ふと気付くと一切が手に負えぬようになっている。クソッタレめ、俺の人生のようだ」彼は吐き捨てるように言って、踏みしめる毒草の群生を見る。「だが、それが俺を残した。お前等、これ以上俺に何をしろって言うんだ…」

川辺の毒葉の一枚が風に揺られ、ほろりと何気なく切れ落ちて流れていく。彼は高度の自然と秘密を共有し、それを内緒にすることを誰にとも無く堅く約束し、再び歩き始める。

目標は無かった。だが、いつしか彼は迷うことなく小さな空き地に辿りついている。それはあまりにも小さい空間であった。何ともいえぬ嫌な、それでいて懐かしく、胸を一杯にさせる匂いが立ち込めている。

家を飛び出したその日のことすらまともに覚えていないが、それでも明らかに変わっていると思われるところが見受けられた。小さな机代わりの切り株の近くに見慣れた汚い茣蓙が敷いてあり、その傍に、おそらく洞の隠し部屋に収めていたと思しき書物が大量に重ねられ、いくつかは思い思いの項で開かれたままになっている。彼はそのうちのいくつかを眺めてみた。創作の資料だったのであろう辞書や文献の他は、先進的な著者のものはほとんど見当たらず、どれも非常に古い時代の優れた詩人や古典作品ばかりである。文語体を苦手とする黒猫はどれかをちょっとだけ読んでみようという慎ましい試みをすっかりあきらめて、その近くの、紙屑のゴミ置き場となっている場所に目をやる。

ゴミ置き場——黒猫は、父が座っていたであろう位置から、その方向をまじまじと見つめる。作が失敗した時に癇癪を起こして投げやるには空圧を計算に入れてもちょうど良い距離で、特に気になるようなこともないはずである。ピサはすぐに目を背け、他の色々な場所を眺め、弟との楽しい思い出に浸ろうとする。ラスの姿が目に浮かぶ——結局、俺はお前に何もしてやれなかったな…——だが、彼の目はいつの間にかまた紙屑の方に向けられており、夢想はうやむやになって消え去っている。

「ふん、結局何一つ書き上げることのできなかったヤツのでき損ないが雪のように積もってやがる」しかし、彼の表現は間違っている。それらは全くお互いに重ならず、位置的に混ざり合うことも無く等間隔に、よく見ると碁盤目状ともいえる様子で打ち捨てられている。彼はふらふらと吸い寄せられるように紙屑達の近くに四つん這いで近づき、目を凝らすようにする。

「何だ、こいつら。ゴミのくせに並べられてるみたいに…」ふと、幼少期の他愛ない記憶がよぎる。親父がさも面白くなさそうに、溜息混じりに何か書いてぽいと投げる。それはふわりと飛ぶが、突然びく

りと震え、不自然な動きをしてこっそりと落ちていく。

黒猫は無意識にそのうちの一つを拾い上げる。それが目を引いたのは、何かの折り紙のように丁寧に折られているようであったからだ。何故ならそれは、短い内容とはいえ、ウムポ・ルサがほとんど初めてまともに最後まで書いた詩の一片が書かれていたのだから、彼には記念碑的な意味があったのだろう。それを知らぬ息子の方も何かを感じたのか、大事そうに丁寧に開いていく。文字や文体は子供でもわかるような非常に平易なものが使われていた。

『果たしえぬ散歩』

無力な幻想　それは非現実である　妄想である
重ね重ね　無力であろう
しかし我々は歩こう　子供達…　微笑みあいながら
憎しみの時は降りしきり　苦しませ
しかし今は　止んだではないか
我々は歩こう　歩き続けよう
光届かぬこの不幸にすら
我等いる限り　至福の風が吹かぬ時はない
私たちは愛しあおう
当然そうあるべきだったように
慈しみ溶けあって
我等が歩みの前に　現実こそは無力だ
お前に何ができよう？
せいぜい我等を引き剥がしたつもりになっているがいい
我等は紛れもなく　共に歩んでいる
心で引き攣れる痛みだけを　その揺るがぬ証拠として

ピサの心の中で、黒いのと灰色いのと白いのが手を取り合い、美しい光の中を跳ねていく――黒猫は読み終わると再びそれを大事そうに畳み、慎重に元の位置に戻す。しかし違和感を覚えて、すぐにそれを取り直す。さっきと折り目が逆だ、どうやら畳み方を間違ったらしい。しかし彼はそのおかげで予想外のことに気が付いて顔をしかめる。紙の裏側に数字が書かれている。黒猫はそれがページ数だと不思議な閃きで思い当たり、本を漁る。

四桁台の書物はここには一つしかなかった。古獅語の辞書である。強く折り目のつけられていたそのページに、ペン書きの丸印に囲まれている文字がある。象形文字のようなとてつもなく画数の多いやつで、――とはいえ他種族と混じる時に、独自の文化にあっさりと見切りをつけて表音主体の前語(水の虚神が考えた泳語を基礎に改造されながら世界的に広まった。現代では後期共通語の『後語』に対比し、古い言語の総称として使われる。)に切り替えた猫族には、他のどんな文字であろうと面倒に感じられるのだ

が、たったこの一文字でいくつかの読み方や意味を一重に引き受けてしまうらしい。それは微妙に左右対称とはならぬ形であったが、ちょうど中心を真二つに割るようにウムポの縦線が加えられ、その左側の余白に『ピサ』、右側の隅に『ラス』と書き込まれている。

今ではほぼ失われてしまったに等しいこの表意文字(この辞書自体も、恐らくウムポのかつての地位だからこそ取り寄せられた、極めて貴重な一品に違いない)は、古代人が下位次元のとある叙情的な地域を覗いていた時にそこをたいそう気に入って、その言語や芸術を輸入したことが由来とされる。その時空水晶に映った光景には視覚のみで音声がついていなかったらしいので、表音自体はほぼ完全に古代人のオリジナルである。説明を読むと、この一字だけで、当時の読み方の一つが『ピサラス』となったらしいことがわかる。そして、その語意は――…――

黄ばんだ紙に、雫がぽたりと落ちる。黒猫は震える手で辞書を開いたままにして傍らに置き、父が死んだ時から抑えていた涙を全て解放するように声を上げて泣き続けた。それに誘われるかのように、この兎小屋のような場所に霧が立ち込めてきて、彼を包むようにする。――懐かしいしゃがれた訛り声がする。『…なぁ、ラスを呼びにいこうや。三人でまた暮すべ。今度は何物にも邪魔されぬように…』

９、泥の中の玉

――

ピサは涙を拭き、しばらくいろいろな整理やらを終えてから、またここに戻ってくることを誓って霧の中を進む。白い気体が、彼を惑わすどころか正確に最短距離で森の外へ導くように流れていく。彼はふと遠くに何かを感じて目をやると、小川の向こうで巨大な目玉に出会う。それはまさに体が巨大な目だけの姿で、見慣れた生物の一種である。呆然と立ち尽くしている妖怪に、黒猫は大声で呼びかける。「なんだ、修行したな？　傷もすっかり癒えて、ずいぶん逞しくなったじゃないか。いいぜ、男の勝負、受けてたってやるよ」だが、鞠陽はせっかく治った傷を今度こそ致死に相当する深いものに変えたいはずも無く、体中を真っ青に明滅させている。ピサは首を傾げ、いつまでもかまっていられないのでその生物を置き去りにしようとする。すると、鞠陽が飛び跳ねてついてくるのがはっきりと気配でわかる。振り返ると立ち止まる。

「…どういうつもりだ？　悪いもんでも喰ったのか、あいつ」

「あなたについていきたいと思っているのですよ。真に優れた力の価値というのは、種を超えて伝わるものです」

妙な奴に気を取られているうちに突如背後に出現した第三の気配に、黒猫は思わず爪を全開に出して身構える。「俺の背後を取るとはな…　大したタマだぜ。早速追っ手のお出ましか？」

そこには樹曼の老人がいて、白く枯れ萎んだ頭髪代わりの枝葉の下に見え隠れする柔和な目で彼を見つめている。「ご期待に添えず残念ですが、私は名をセドル・ヘムグ(当時の樹神ワーナーブの末息子で、独自の哲学のために勘当されていた。本稿の数千年後、別の宗派を立ち上げている)と申しまして、御父上の労作の最たる読者として、か細いながらも古くより有難い親交に預からせていただいていた者でございます。

北懸皇帝様、お目にかかる光栄を真に嬉しく存じます。最近ではさっぱりと森の外に出たことは有りませぬから、あなた方の幼い頃のことはよく存じておりますよ」

だが、ピサは彼と全く面識が無いように感じている。いや、確かに、思い出してみれば『おじさん』という固有名称だけが幼少期のどこかに壊れたブリキ人形のように打っ棄られてはいる。「無理もございません、私はウムポ殿の幸せな生活を邪魔したくなく、遠くから見守るだけで慎ましく満足していたのですから」老人が彼の必死に思い出そうとする表情から察してフォローを入れる。

「それで、何の用なんだい、おじさん」黒猫は爪を引っ込め、おどけて子供の口調を真似る。

「詩仙と尊崇してきましたウムポ・ルサ様がお亡くなりになられ、今またそのご子息の和が乱れたのを放っておくことができず、お節介なこととは思いつつ、僅かの兵馬をご提供させていただければ至極幸いに存じておりまする」

黒猫はこの好意を有難く頂戴することにして、彼の集落についていく。そこでは樹曼の勇者達が、郷土の誇りとなっていた皇帝の到着を今か今かと待ち侘びていた。武具に枝葉を巻きつけ、他種族なら抱えるのも難しい複雑な構造の剣を自慢気に突き出す巨漢もいたが、そのほとんどは術士のようで、自分の体から削り取ったのではないかとも見える思い思いの形をした枝のような杖を手に持ち、演奏家が音出しをするようにそれを振るって、梵子の現実と非現実の狭間に揺らぐ軌跡を描いてみせる。

「この私は見てのとおり薪にもならぬ老いぼれゆえについてゆけませぬが、我が弟子にして部族最強の戦士をお付けいたしましょう。ペンサバオム君…」エグルブブア・ペンサバオムが恭しく皇帝の前に跪く。ピサは「久方ぶりだな、変わらぬ壮健ぶりで何よりだ」と声をかけてやる。

「覚えておいでですか、光栄でございます。あの時は、お二人と決勝戦で戦えなかったことを悔やんだものです。自分が最も強い勇士に必ず敗れるために挑もうとしていることなど、恐れ多くも全く知らなかったのですから…　いえ、自分のなけなしの誇りのために申し上げることが許されるのであれば、本能的に気付いていたからこそ、一度は剣を交えてみたいと思ったのかもしれませんが」

「その心意気や善し」ピサはエグルブブア・ペンサバオムの節くれだった肩を叩く。するとそこに勇猛さを膿みだす瘤がいくつもついているように錯覚され――彼は少し溜息をついて頭を振ると、老人に向き直る。

「礼を言う、セドル殿。借りていくぞ」

「そのお言葉、嬉しく存じます。我等一族、運命に委ねるを旨といたしますゆえ、帝国と本人の希望が合致するならば送り出した者がそのまま外で暮らしても構いませぬが、全員が全員いなくなると、それはそれで寂しいものでもありますからな」

「ところで聞きたいんだけどね、長老…」儀礼的な挨拶を終えた黒猫が好奇心丸出しの表情になっている。「ここの奥地のどこかには、君達一族の卵、進化の失われた輪、『古樹の根元』があるんだろうね。そういうものの存在は盛んに伝えられているのに、当の樹曼族にすら、それは伝説の存在。でも、これほど深いところに、原始状態の一族だけの隠れ村があるってことは…」

「お父上より譲られし陛下の類稀な創造力を駆使するならば、事実以上の真実が得られましょう」老人

が悪戯っぽく笑ったので、極めて重要な秘密を容易には明かしてもらえないことを改めて認識しはしたが、やはり何となく諦めきれず、話を引き伸ばして遠まわしにヒントを引き出そうとする。
「じゃあ、質問を変えよう。貴殿が俺に兵をつける理由には、世を正す、ウムポに恩があるとかいろいろあろうけど――その中の一つにはやはり、サイルゴッツへの仇討ちを果たした俺への気持ちが含まれているのかね」
老人は髭を手でなぞり、意味深に目を細める。「さて、どうでしょうか…　少なくとも他人にはそういう気持ちもありましょう。貴方があの虐殺者を砕いた時、各地の樹曼達が自らの中で控えめに、死した同朋の痛みが少しでも和らいだであろうことを喜び、陛下に感謝したものです」彼は自分の勇士達を眺める。「しかし、それだけでございます。そして、貴方にお付けする者達には、そのようなものを乗り越える強さを要求しています。恨みからは何も生まれはしませぬからな。
それに、樹木が動物のように振舞うという難題を違和感が込められた化物の姿を取らずに、最も相応しい形で、あくまで植物であるという誇りを失わない微妙な位置を保ちながら達成しているという事実で、我等一族が世界に対して何らかの崇高な使命を有しておることも自明のことでございますから、軽々しい感情的行為は慎まねばなりません」
「バランス感覚…　だな。その重要性は我等一族も体現しているから、理解できるつもりだよ」
「周囲の樹木、草木をご覧くださいませ。彼らの何と慎ましく見えることでしょう。そして、音の無い音に耳を済ませてみてくださいませ。そこに何と言う静かな、それでいて狡猾で劇的な争いが展開しているかがわかるでしょう。このような植物界の事を我が先祖の偉大な詩人は、最も摩擦の少ない張子時計に例えています。しかし効率よく無限に続くかに思われる振り子運動も僅かの風を起こしていき、いずれは留まってしまいます。
陛下も『樹に悪しき者無し』という言葉があるのをお聞ききになったことがあるでしょうが、それは我等一族の名誉でもあり、また、問題点でもあります。我等一族は確かに清廉潔白をその主だった特性とし、その点画一化されているとも言え、他種族のような性質の多様性による悪しき個体の出現に部族の名誉を傷つけられることがほとんど無いように思われています。しかし植物も生物である限り、汚濁との混交を恐れれれば偏った醜い存在になります。樹曼種の存在自体に、どこか、その点に目をつぶっているところがあります。他人と共に汚れ、傷つくことを毛嫌いし、清らかな高みから愚かな衆を見下す隠者のような性質。それは一見他を越えた完璧な性質にも見えますが、実は、それを維持するために概念的レヴェルで、枯れた皮膚の悲鳴のような、腐敗臭のようなものが出ずにはいられないのです。
例えば頭部、あなた方のような種族の場合そこを断絶されればそれで命の終わりとなりますが、我々の場合、植物状態になりはしますが、必要な治療を施していればいずれまた生えてきて、復活を遂げることも可能です。我等にとっての頭部は、動物としての自分自身の振る舞いを象徴するものではありますが、生命維持装置としては二の次のものであります。それゆえ、我々は首を切られることをそれほど恐れないなどと思われがちですが、それは全く事実と異なる噂に過ぎません。
我等ほど頭部の損失を嫌がる種族はないでしょう。我等が頭部を失ったとき、肉体は確かに生きてい

ますが、我等が樹曼として生きている魂そのものは一時欠落した状態になります。後に完全復活できる保証があるならそれも致し方ない場合もあるでしょうが、いわゆる腹顔樹（首がそのまま生えず、体に邪悪の魂が宿って別生物として復活した妖怪）となる可能性があるように、魂が僅かに書き換わったりすることが非常に容易な状態になるので、肉体が失われることよりも強い、激しい嫌悪感と恐怖を覚えるのです。蘇った自分が果たして本当に自分だといえるのか、もしかしたら単に同じ『記憶』と『精神構造』を宿したコピーに過ぎないのではないか、自分は成仏もできずに哀れにも霧散し、『同じ他人』に取って代わられるのではないかという不安です。眠った後に次の日の自分をそう感じ、不眠症に陥る者もあるくらいです――これを魂の貴族性と表現することもできましょう。我が種族に限らない多くの哲学者が我等を賛美します。しかし、同族の長である私が言うこと自体が不遜なことではありますが、陛下には包み隠さずに申し上げましょう。私はこのような我等の特性を、実に不毛な、自己中心的なものとしか思っていないのです。

サイルゴッツはそのような不条理の積み重ねが生んだのではないでしょうか。彼女は自分が唯一のものとして生まれたと傲慢になり、樹曼種を愚か者と罵ってその悪しき野望に利用しようとしました。しかし、我々自身は認めたくない部分ではありますが、彼女が指摘した我等の愚かさ、まだまだ進化して克服していかねばならない欠点というものは、確かに在るような気がするのです。

彼女は我々の上に立っていると思い込んでいましたが、実のところ、私生児である彼女の胎とは、我等が樹液の淀みを無意識に吐き出してきた集積であり、その暴走は肥溜の奔流でしかなかったのです。だとすれば、彼女の悪しき魂も行いも、我等の一部となし、共に罪を償っていかねばならないはずです。しかし、世に出た多くの樹曼種が、我等に課せられた、他を包括しながら共に進化していこうとする種としての使命を忘れ、サイルゴッツをただ恨み、その死で喉元過ぎて熱さを忘れたような安堵感に浸っています。

食器一つ取ってみても、樹曼の文化として誇るべき漆塗りの物は古く、使い込まれるほどに味が出るものです。しかし動物の都会で通常に使われる、役目を終えた我等の体の一部を火力として焼き上げる陶器等はどうでしょう。汚れを嫌い、使用者は新しいものへ更新することばかりに目を奪われているではありませんか。代弁させていただきたいのは、確かに私達の種族には先に述べた欠点もありますが、美点はやはりかつてより間違いなく誇らかにその師管を流れていたのでありまして――近年にそれが急速に失われつつある（次第に顕著になりはじめた樹曼の動物化のこと。後にこれも『平均化進化現象』の一つであったことが明らかにされる）のは、我々が動物界の中では極めて異端的で、その中に入ったことによる不可抗力的な影響が他種族よりも極めて大きいためであります。しかしそれも樹神の与えたもうた試練だとすれば、私のようにそれを恐れて隠れ住まう枯れ木よりも、外の社会に溶け込んでいる若者達の方が尊い方向へ生長しているといえるのかもしれませんが…」

つい長くなりがちな老人の話のおかげで、ピサは長い森の出口までの道のりで退屈することはなかった。アンティークのコレクターでもある黒猫は彼の話を全て鵜呑みにすることはなかったが、犬族に対すると同じく、考え方の大きく異なる樹曼の長老にも敬意を示し、その志操を次代に継いで実行するためにも、今後も精を出してより多くの優れた若者を育てていってもらいたいと激励する。森が開けてきたのでそれがちょうど別れの時となった。老人の涙が彼のささくれだった細い枯れ枝を濡らす。彼は樹

神へと祈りを捧げ、自らに傷をつけて樹液を黒猫の頭に垂らす。

「おお　痛みを知る迷い子よ　深緑の衣着て　君はついに真理を得て旅立つ

　我が同朋の　知恵深く心気高き者の子　ピサ・ルサ――黒猫は今やこのような誤った(クナウザスでは名前の付け方が統一的でなく、姓名の他に『字』があったり、名しかなくてもかまわないし、子への継承もあまり重視されていない)呼び方にも心地よさすら感じる――

　汝の歩みこそは　五月雨のごとくに　我等を癒さん」

　祈りが終わると、ピサの体を支配し続けていた電気的警告が和らいでいく。福音の詞に表現されているように、彼は破損した鎧を捨てて樹曼の娘達(といっても、そう見えるだけで、彼らに個体別の性の概念は無い)の編んだ葉衣を着ている。「有難う、長老。このご恩は忘れません」

「陛下はこれから敵を討ちに行くのですね。どうかご武運を！　その点、我が信仰の流派はあまり助けになれないのが残念ですが…」

　黒猫は傷一つ付いていない左手のものを軽く振り上げる。「これと、皆がいてくれれば、恐れるものはありませぬ。それに」深く澄んだ黄色い瞳を遠い新居に向ける。「俺は弟を助けにいくんですよ。邪魔する者には容赦するつもりはないがね」

　セドル・ヘムグは目を細める。――仙猫の若かりし頃はさもあらん…――

　ピサの小さな軍勢が北東地域の要害都市ムリムンデュスに忽然と出没した時、ちょうど国は祭事の真っ最中であった。唯一無二の神聖皇帝となったラスの威徳を称えるための一週間は、北の者にとっては無理に明るく振舞うのが精一杯というところであったが、そうでもして同化に努力しなければ、南に隷属する立場に置かれることは日の目を見るより明らかである。

　病気がちの皇帝に代わって権力をほしいままにしているアムヤーラ・クフグ=キャーイは、性懲りも無く姿を表した数十人の兵団のことを聞くと、黒猫の遺体を見つけられなかったことによる僅かの不安をようやく解消できる時が来たと喜んだ。しかも報告によれば、ピサの姿はほとんど満身創痍といった様子で、かつてのような鬼神のごとき戦闘力は恐れるべくも無い。

　大自然や心清らかな樹曼達は容姿にこだわらないのでここまで語られずに来てしまったが、本人が堂々と明るみに出たのだから心苦しいなどと思わず、以下のような事実を詳らかにせねばならない。あの勇猛さと小憎らしい愛らしさを大人になっても持ちつづけていた黒猫は、彼が滅ぼした者の呪いを受けたかのように右の肘から下が圧し折れて今は無く、眼帯の下の左眼は醜く潰れ、両の逞しい足も肉が削げて骨が露出している部分がある。身に纏う葉が隠し切れないほどに墜落のダメージは酷く、生半可の癒しの術では治しきれないほどであった。

　もちろん、長老は集落で彼を休ませることもできたであろう。だが、出血を気力で止め、激痛をものともせずに険しい道のりを踏破してきた者の目の輝きを見たとき、そのような薦めが偽善じみた無駄でしかないと悟るしかなかったのである。

「否死め…　望み通り薄汚い墓に入れてやるぞ」虎猫の赤い目が、白い部分も全て血に淀んで赤くなり、レム睡眠状態にある者のように不気味にぐるぐると蠢く。

　もはや国には彼の声に逆らえる者はいなくなっていたから、すぐさま大勢の討伐軍が編成される。侵

攻してきた慎ましい兵数にはあまりにも巨大な数万の大軍が、祭りを中断して戒厳令の敷かれた街道を物々しく行進し、密かにピサの生存を有難い奇跡と喜んだ者達の心を暗くさせる。

だが、全てが邪悪な者の思う通りに運ぶはずがない。絶望に打ちひしがれながらもひたすらに北懸皇帝の帰還を待ち、潜伏していた忠義の者達があった。彼らは落ち武者として不名誉な生活に縛られながらも必死に生き抜き、汚辱を自らに注ぐごとに、もっと辛い目にあっているであろう皇帝のことを思い出して耐えた。その苦労が今こそ報われたのである。その軍勢がどんなに小さかろうと、皇帝がいかに傷ついた姿であろうと、彼らの喜びと燃え立つ戦意を押し留めることはできない。

石積みの下に眠る千鬼章バーファール・グランの友人、元千鬼章――ピサに味方した者でラス軍に帰属しなかった者は、死者以外悉くその地位が剥奪された――エリン・ザパリ・セイは自分だけが生き残ってしまったことを悔やみ、英霊のために祈りを捧げる毎日であったが、ピサ皇帝の生還を彼の味方である民衆から聞き、喜びに打ち震え、たったの一人で馳せ参じようとする。兜虫の様な姿の彼を鍬や竹槍を持った農民達が囲んで、自分たちも連れて行ってくれるように懇願する。このように、各地に逃れたピサの部下は少ないながらもそのどれもがうまく民衆を味方につけていたので、義勇兵団が続々と蜂起して黒猫に合流しようとする。

忌々しい報告に歯軋りし、どいつもこいつも火焙りで痛めつけて殺せと暴言を吐き散らしながらめったやたらに調度品を壊していく丞相に、聖帝軍総監が跪く。――人事異動があったようだ。総監はあの真正直な砂魚者ではないが、全くの新顔というわけではない。その邪悪な性質ではアムヤーラに負けず劣らず記憶されるべきである地内出身の指者騎士、パフォム・ヒェダその人であった。

彼は兄弟の不和を聞き、名を隠して丞相に接触、お互いに嫌な部分で分かり合っていた。丞相は邪悪な野望の片腕となるべき存在を探していたし、パフォムは失われた権益を別の場所に求めたために、彼らの利害は一致した。言うまでも無く、雉猫にとってこの男は許しがたい仇敵である。ラスがすでに心を失った操り人形でしかないということを知ったこの邪な指者は、その傍で白々しく仕え、彼を憎む者の権力で自分が肥太ることに意地の悪い喜びを見出しているのである。

「案ずることはありませんよ、丞相殿。総監代理に各地の軍団を展開させて一揆のごとき屑どもを鎮圧させ、その間にあの女はこの私が、黒猫は砂魚の壇二覧騎将にでもやらせましょう」

「ふん、ビアツが裏切ったらどうするのだ？　あいつはあれ以来すっかり不抜けたものの、頭が悪いために土壇場で何をしでかすかわからん」

「お互い攻めあぐねるでしょうな、しかしそれで良いのです、時間さえ稼げれば。面倒なのは不特定多数の雑魚どもであって、それさえ抑えれば僅かの枯れ盆栽など物の数ではござらん。

それより、黒猫の付き人…　生け捕りにしたら我が物としてよろしいのでしょうな？」

「イム・リバオヤか。好き者め。まぁ、ご自由に為したらよかろう」

「くふふふふ、無数の美女を膝元に侍らす方のお言葉とも思えませぬが。ではこれにて失礼、軍略を伝えてきますので」

パフォムはすぐに六万の兵を押す。一方、どこに潜伏させていたのかもわからない四千人もの精鋭部

隊でサオレスを陥落させたイムは相変わらず艶やかさにも強さにも飾りを必要とせず、このような一大事にも冷静そのもの、淡々と兵を動かしていく。彼女も黒猫の生還を信じていた一人であったが、その程度が並大抵ではなかった。彼女にとっては例え世界が粉屑と化そうとも、ピサだけは生きて戻ってくるものと確信されていたのである。――だから驚くこともない、来るべき時が来ただけで、自分は盛大に出迎えてやるだけ――リチャルド・ワイナンがピサの傷ついた様子を伝えた時も、彼女は表情一つ変えていない。「下手糞だけど、暇を見つけて治癒の術も勉強したのよ。良い実験台が出来たってものだわ」

女騎士は前に陽動をしたつもりがピサに欺かれてしまったということをちょっと恨めしく思っていたので、今度こそ自分の方に敵を引きつけて彼を助けようと、わざと大っぴらに大都市を手中に収め、敵の大軍を恐れもせずに待受けている。

一方、聖帝軍総監代理パワルス・ヒードゥ・ネセカは悩んでいた。勅令の達成は簡単である。百万の兵士に一発号令をかければそれで済む。だが、彼の脳裏からあの偉大な巨漢の壮絶な死に様が離れない。

彼はついに決意すると自分の信任厚い部下とともに反乱を企てようとする。その打ち合わせが蝋燭の僅かな灯りで浮かび上がる地下室で行われている時、アーチ状の扉が僅かに開き、誰かが覗いていることに騎士の一人が気付く。彼は顔を青ざめさせて叫び、剣を抜いて戸を蹴り開ける。そこには、冷めた目つきの元総監が腕組みして壁にもたれかかっている。

「…邪魔するつもりは無かったのだ。気にせず続けてください。三流以下の茶番劇の台本書き、さぞや忙しいでしょうからな」

「貴様、上官を愚弄する気か！」ヒードゥの鋭い口調からは、軍隊の上下関係における戒律だけではなく、やり場の無い怒りの矛先が向けられていることが窺える。

「いや…　だが、謀反を企てた者がいつまで拙者の上に立てるのかは甚だ疑念の余地が有るのでね」

「おのれ、こうなれば仕方がない、武器を抜いてもらおう。騎士らしく正々堂々と決着をつけ、どちらが目的を果たすかを武勇に賭けようではないか。いや、こうするべきだったのだ、もっと早くに…」

「決着、か。その結果がどうなるのかは、貴殿ご自身が良く知っているのではないのか？　貴官ほどに腕の立つものなら、相手との間にどれほどの力量差があるか、瞭然とわかるであろうに」

「…やって…　みなければ、わからん」そう言いながらも、味方として戦ってきたがゆえにこの砂魚者の凄みを身に染みて知る彼らにとって、剣聖とすら呼ばれたマイザブル・ビアツに一騎討ちで挑もうとするなど、国家に反するより分の悪い賭けにしか思われない。騎士達は剣を抜きながらもなかなか前に踏み出せない。砂魚者は彼らの胸の内を意にも介さず、淡々と述べていく。

「イム殿や落ち延びた各将軍がいくら奮戦したところで一矢報いるのが精一杯。何にもなるまい。貴殿等がしくじってくれるのは勝手だ。だが、勢い良く出てきたピサ殿の様子を見ても、彼が期待しているところ、すなわちこの戦いの鍵を握るものとは、あくまでも聖帝軍の内乱でしかない。機会は一度限り、責任は重大なのだ。うまくやってもらわねば困る」

「何だと…？　わかったような口を利くな！　お前のせいで、小鯨大臣は死んだんだ」

ヒードゥのかすれた叫びが、砂魚者の心に冷たく刺さるように染み渡る。

「その通りだ。そして、私はこれからピサ殿を討ちに行くのだ」

「くそっ、我が神聖帝国の命運もこれまでか…　素晴らしき太平の世の夢は、僅かの官の腐敗で脆くも崩れ去っていくのか」希望を失ってがくりと膝を突く総監代理を見下すようにしたままで、砂魚者はこのように言い残して立ち去る。

「どうせ間違いなく失敗するようなことだ。拙者はここで何も見なかったに等しいから、陛下に報告するまでもない。まぁ、貴殿は地位を保つためにも、何もしないことだ。私はどうせ全てを剥奪され、これからもすがるところすらない。いかなる無茶もできようが…」

パワルス・ヒードゥ・ネセカの八本指がわなわなと蠢く。「おのれ、私が地位を気にして正義を貫けぬ紛い物の勇士だとでも…？　それは貴様のほうだ。貴様にできることがなぜゆえ私にできぬということがあろうか」彼は砂魚者に聞かれたことは考えから抹消し、再び計画を一から綿密に練り直していく。

目を暗くぎらつかせるマイザブル・ビアツは、既にこの世への未練を完全に捨て去っている。『目には目を、だ。俺を適当に捨てて敵に帰順したように見せかけろ』というビスタン・ケイマリッチの入れ知恵も間に合わず、結局、リュシュエ・ビアツは自宅の裏側でどろどろに溶けた液体の跡だけで発見されたのであった。『夕玄病』という稼動気のかかりやすい病気ということだが、夫には彼女に何が行われたか大よそ検討がついた。その時から彼は心をすり減らすような芝居に芝居を重ねてきた。さしもの最強の剣士も権力の怒りを恐れて小さくなり、降格にも従順に従い、卑屈に生きているという――

「それもようやく終わる。我が命を捨てられる時がきたのだ。ケイマリッチ殿、お約束、確かに果たさせていただきますぞ」

彼は自らの巨大な馬上槍を手にとる。この日のために新調させたもので、先端には小さく妻の名を刻んでいる。「お前は許してくれるだろうか？　もしお前を見つけられないなら、私はその姿を永久に捜し求めて幽界をさ迷うことだろう」

彼が自分の小さな兵団を率いるために血の滲む色に似た夕闇の中を泳ぐように進んでいる時、兵舎と植木の間に、揺らめく人影を横目に挟む。何気なく振り返った彼は、ぎょっして立ち止まる。「…ラス殿…？！　いや、陛下…　なぜこのようなところに」

宮廷の自室に押し込められて祭事だけ僅かに顔を見せるに過ぎなかった雉猫が、寝巻き姿で、藪の陰から姿を見せている。…無言である。

「陛下、こんなところにいらっしゃってはお体に触りますぞ」近づこうと思ったが、なぜか体が強張ってそうできない。嫌な脂汗が額に浮かぶ――不意に、雉猫が小さなガラス瓶のようなものを手の平に載せて差し出す。

「…この中にリュシュエの基幹細胞をしまってある。貴殿の奥方は復活が可能だ…」

マイザブルは慄然として手を差し伸べる。「なぜ…　それは本当なのですか」彼が近づいてそれを受け取ろうと思ったとき、既にラスの姿は無かった。兵舎についた彼に、ラスの容態が急変したこと、彼を勇気付けて現世にひきつけるためにも早く勝利の報を宮廷にもたらすようにと通達が着ている。

百人以上の医者の力を結集しても皇帝の病を治すことはできなかった。彼の心に連結した細胞が生きることを拒絶し、自分が病だと思い込んであらゆる身体機能を麻痺させ、免疫機構が自己を攻撃する悪循環――その中で、ラスは無意識状態に陥ることが多くなっていった。それゆえ、細菌投与実験が行われた地下室から洩れた、誰かの魂が崩壊する小さな悲鳴を聞きつけたらしい。彼は監視の留守を見計らい、するりとベッドから抜け出して牢獄に潜り込んだ。信じ込むことで病気になっているので、何か別のことにとらわれると意外に元気に動くことができたようである。そして、溶けていく肉体のまだかろうじて生きている主要な部分を拾い上げ、遊離する魂を封印する術法――成仏する対象をアンデットやゴーレムの回路として利用する、本来は極めて邪悪なものである――で彼女の霊魂と一緒に小瓶に閉じ込め、永久保存術法を上掛けした。

どんなに抑制しても表に出てくる彼の高貴な精神がさせたこの行為は、しばらくして丞相の知るところとなったが、寝るときも常にこれを大事な宝物と認識して握りつづけている皇帝からは、なかなか奪うことはできそうにない。それにこのことをマイザブル・ビアツが知る由も無く、例え知ったとしてもこんなちっぽけなものが不利益になるとも思われないと考え――だが、今それが幻の姿を通じてその夫に伝わったのである。

『誰かが黒坊主に味方して反乱を起こそうとしたら、それに味方しなくても良い。見逃し、うまくいくように助言してやってくれ』これが、国の敵として、そして正しい人間なら誰しもが心の中で認める真の英雄としてこの世を去った男の遺言であった。マイザブル・ビアツは自分の最も信頼する友人や部下に総監代理の本心をほのめかし、その味方をしてやるように扇動した。――これで、アムヤーラの予想を裏切る相当数の騎士が黒猫に味方するだろう。自分にできることはここまで。いずれにせよ内乱が拡大すれば、平和と隆盛を永久に誇るかに見えた神聖帝国の安定はほんの僅かで終わってしまうことになる。

彼は思い返す――いつしか、遅かれ早かれ終わりが見えている仮初の自己中心的な平和に固執する井の中の蛙から脱却し、巨大な理想郷を建設することを兄弟とともに夢見るようになっていた。だが、それは拙者の本分ではなかったのだ。拙者はいつしか大事な何かを忘れていった。実直に生きるということ――もはや心残りの無いマイザブル・ビアツは、ピサに一騎打ちを挑み、潔く戦場に散る決意であった。そこに善悪など無い。それが自分の軍人としての本分だと信じ、誰に誹られようと、国家の一兵として敵に当たるのである。

「そういえば、ピサ殿とは一度も討ちあったことは無かったな。ケイマリッチ殿ともだ。彼との勝負は英雄的側面においてすっかり敗北したのだから今さらどうしようとも思わないが…、上にたち、後ろから指揮する立場であるにも関わらず、自らの肉体をもってして最強を自負するあの黒猫殿、ウムポ殿の息子に相応しい豪傑とは、この機会を利用して戦士としての甲乙をつけるのも悪くは無い。

だが、聞くところによると彼はかなりの痛手を背負っているようだ。それゆえ、丞相達は油断している。…実に愚かなこと。もし私が軍団を率いるなら決して手加減などしない。それでも全く勝てる気がしないくらいだ。あの方が、自らの姿を惜しみなく顕したのだ。負けるためにそうしたはずがない。む

しろ、重傷を物ともしない力強さというものを感じる。これほどの相手、まさに、拙者のいつまで続くかもわからない一生の時間を全て使ってもそうは探しきれるものではない。それなのに…」

ラスの幻のことが彼の決意をぐらつかせる。「ふん、今さら都合の良い思い込みだ。人間は弱くなったりどうしようもない状況を前にしたりするとさもしい防衛本能が働いて、こうした幻影を自らに見せるものなのだ」――だがそのとき、耳元にはっきりとした音声である言葉が響いた。

『そうじゃ…ないんだぜ、剣豪殿』

「…！」マイザブル・ビアツは辺りを見回したが、もちろん人影すら見当たらぬ。「…貴殿までもが…例え幻覚だろうと、従わざるを得ん」

その日、何もかもを捨てた一人の男が黒猫の陣幕を訪れ、迎え入れられる。出会い頭に首を切られても文句はないと考えていた砂魚者の曇った心は、皇帝に『兄弟』と呼ばれたことで完全に晴れた。ウムポ・ルサを義理の父のように感じていた彼にとって、その言葉は嬉しすぎて目が眩みそうになったほどである。付近の手掻者達もこぞって反乱勢力の味方となり、辺境に隠れていた千鬼軍将ヒョアン・ブリーツ、千鬼軍将ラーシャール・ミマエセン等が次々と仲間になる。北方の多くの街が南軍兵士を追い立てて歓呼とともに黒猫の部隊を迎え入れ、城塞を提供していく。しかし、その数合わせても三千にも満たない。マイザブルの代わりに他の騎士が三万の兵団を率いてこれに当たった。兵法云々の問題ではない、十倍以上である。丞相は当然の勝利の報告を待受けていた――結果、聖帝軍惨敗。しかも、たった一日半のことである。

「ふざけるな、貴様等は烏合の衆か、この役立たずめらが！」アムヤーラの怒りが爆発する。無理も無い、邪悪で姑息な手段には誰よりも長ける彼ではあるが、父親と違って自分が先陣に立ったことなどないのだから、全てが机上の空論、戦場でどのようなことが勝敗を左右するのかまではわからない。

マイザブルの思った通りにピサの力は前にも増して凄みを増し、相当の愚か者でなければ誰も敵として彼の傍に近づきたい者はいない。どこかふっきれた感のある砂魚者の剣聖も同様である。だが、最も重要なことは兵の気勢が全く違っていたことだ。これは致命的な差であった。砂漠で干からびそうな者が雨を迎えた刻のように、皇帝の帰還を神の降臨のように感じていた彼の兵士達は、飛び跳ねて敵にまっしぐらに向かっていく。対する方は黒猫の不気味な姿に怯え、様々な地域で実しやかに語られる怒れる英霊の伝承を思い出し、気が滅入る一方である。また、ピサ軍は手掻者や樹曼など、術方や特殊攻撃を使う者を多く含む混合兵種で、兵数だけに表せない戦力を換算しなければならない。ペンサバオムが仲間と合同で発した時空置換系の術法は多数の敵兵を一挙に行動不能にしてしまったし、あの丸っこい怪物も、初めて目にする人の地に臆することなく、種の感性を超えて心服した存在のために自慢の機関砲の広範な破壊力を披露した。

初戦の大敗に挫けた聖帝軍に、さらに追い討ちをかけるように各地で正規軍の反乱が起こる。しかも驚くべきことに、草詣大臣という良く判らない地位を与えられ、牢獄のような豪邸に結界術法で縛り付けられていたはずのスパイルト・チルグとその仲間の灰色巨人達までが自己意思で反乱に参加する。抑圧されてきた意識がついに皇帝の弱った力に反したのか、それとも、ラスの無意識が遠隔指令を出した

のか――ともかく、すぐに総監が兵士を招集してこれ等に当たらせる。

包囲されてさすがに虫の息になっていたイム・リバオヤの部隊はこの機を逃さずに打って出る。総監の主力と激しい合戦の末にこれを打ち破り、彼女は自分こそが黒猫を元の座に戻してやろうと深追いしすぎる。

「小賢しい女め…　だが、女なら誰でも良いというようなアムヤーラとは違い、そういう生意気な美女を手中に収めた時こそ、俺の偉大な欲望は満たされるのだ」パフォムの伏兵に囲まれたイムは、黒猫が着たのにあまりにも残念だが、敵に捕まって辱めを受けるくらいなら死ぬ以外にないと覚悟する。

そこに、東から誰の予測をも裏切った猛然とした速力でピサ軍が駆けつけ、敵の右側翼を衝く。だが、次々と増援の追加されるパフォムの主軍はいつしか八万にまで膨れ上がり、びくともしない。お互いにここが正念場と力を尽くしたので、兵数の圧倒的に少ない方が俄かに押され始める。

そのときであった。国籍不明の大軍が西の山道から押し寄せてきて、敵の左翼を押した。三柱犬将率いる兇空兵団と、パンダンタの翼兵達であると判明する。

「借りを返しに来ましたぞ、黒猫皇帝殿」愛らしい小さな姿のジィホ・チルザンデス導師が遠隔念話で話し掛ける。「それっ、聖犬の勇士達よ、比類なき武勇を示せ。死地より還った気高き王を助け、再び我が友好国の舵取りをしていただくのだ！」

パンダンタの巫女も従軍している。「ピサ様、説得に時間がかかりましたことをお許しくださいませ。でも、愛する貴方様のため、私、懸命にいたしましたの。任務も満期を迎え、今、剣を取って貴方の敵に向かいます。早くか弱き私を助けにきて、そのお傍に永久に連れ去ってくださいませ」ジィホの術を媒体としたこの南国人らしい熱烈な言葉は、当人だけでなく術の心得のある者なら付近の敵味方問わず誰にでも聞こえたので、女騎士は思わず顔をしかめ、振るう武具に力が入る。

こうなってしまってはパフォム・ヒェダがいくら地団太を踏んだところで何の効力も発揮しない。卑怯な騎士はまたもや自分だけ逃げようとする。

「貴様など、こいつを汚すまでもない」腰に剣を掛けたピサは低く唸るやいなや戦場を切り裂く黒豹となる。鼠は国でも最高の駿馬を懸命に駆ったはずだったが、完全に無駄であった。飛び掛ってきた漆黒の疾風に恐慌した馬に振り落とされてから落下して組み敷かれるまで、彼は何度あの鋭利なもので切り裂かれたことだろう。あとはその首を大きく開けられた口の中に挟まれて僅かでも動けば鋭い牙に射抜かれるしかなくなったため、早く自分を縛ってくれ、とヒェダは敵味方問わずに懇願した。

聖帝軍は再び大敗北を喫し、敵の残存勢力はヒョンプリズナに引き下がって篭城する。ピサは各地の反乱勢力に伝令を飛ばし、これ以上国内で争わぬよう、ラスの指揮下にある者達と対峙して均衡を保つようにさせる。首都を包囲したピサ軍は、相手の譲歩を引き出すために一日待つことにする。

その陣営宿舎の中、イム・リバオヤとピサが再会を果たした。さすがの女騎士も感無量となって台本通りに行かず、強がって涙を抑えることなどできなかった。味方の勇士達が暖かく見守る中で、泣きじゃくる彼女を皇帝が優しく抱きとめる。間の悪いことに、そこに虫者の美女、スイミレ・クッヒュが姿を見せる。

「陛下、お会いしとうございました…。その方の次は、きっと私の番を、もっと長い時間で、もっと深く愛する様式で、なさってくださいますのね？」

思わず勇士達が顔を赤らめ、思い思いに咳をしたり武具をがちゃがちゃ言わせたりして次々と退出していく。粉犬のジィホだけがそのタイミングを逃し、しかしこれ幸いと、食い入るようにして野次馬根性を丸出しにしている。しかし黒猫の返答は、彼の予想を全く裏切る内容であった。

「スイミレ殿、申し訳ない。俺はこの人に結婚を申し込むことに決めてきた。例え断られても悔いは無いし、もはや他の誰をも愛することはない」

「まぁ…　さすがは私の愛したお方、女々しい言い訳を仰らないのですね。念話の時に思念の逆流で何となく気付いてはいましたの…。でも、私、もしその方がお断りになるなら…」

イムが力なく首を振るう。外野からすればどちらとも取れる返答で、小さな犬が首をかしげて口をぽかんと開けている。指者の女の頭は相手の男より上にあったが、予測できなかった申し出によってさらにひどく感動してしまって、夫となる男に齧りつくように項垂れている。何の返答もできない状態ではあるが、それゆえにいっそう、答えは明白であった。スイミレ・クッヒュは寂しそうな、それでいてさっぱりとした表情で愛くるしい顔を明るくする。

「そう…　でも、私にも少しはあなたの愛情を得て、優れた子を残す権利があるような気がするわ。…少しくらい、良いでしょ？」何と言う自分勝手な考えだろう、これは南国の常識か、それとも虫者の思想かと粉犬が目を白黒させている。イムもしゃくりあげて、相手の言葉を理解してあげなければならないのかどうかの判断力を失ったまま、本能的に黒猫にしがみついたままで固まっている。スイミレが彼らの様子をからかうように薔薇色の果実のような頬を指差す。

「ここに口付けをくださるだけでいいの。それが良い思い出になるし、もしうまくいけば、私達の好きあった――悔しいけど、愛し合った、とまではいかないわね――ことの結晶が、どこかの森で実を結ぶと思うの。それはきっと尊いことだわ」

戦の前に下手するとそれ以上の修羅場が観られるかと期待していたジィホもさすがにあたふたと部屋を出る。しばらくの後、三人はすっかり打ちとけあった風にして出てきた。イムは目を腫らしてはいるがすっかり冷静さを繕い、皇帝より一歩後ろにさがっている。彼女は正式な結婚を待たずに、愛する男だけでなく国家主権そのものに返り咲くであろう皇帝に認められる形で既に正妻としての地位を得ている。後ろ手にして楽しげな様子を作り、豊満な胸の娘が新しい夫婦に別れを告げる。

「では私、国に戻ります。陛下のお陰で我が国は土地を得るばかりでなく、民族の誇りを失わぬまま、他の文化も尊重して共に助け合っていく新しい知恵を得ることができました。このご恩、一生忘れません。どうかお二人、私を差し置いたのだから、というわけではありませんけど、お幸せにならなければ駄目ですよ」

斑犬(雑種のこと)の老婆がゆっくりとした足取りで廊下を歩いてきて、背を向けるスイミレ・クッヒュとすれ違うとき、彼女の僅かに震える肩に優しく手を置き、慰めの言葉をかけたようだった。ジィホ・チルザンデスが老婆に恭しく頭を下げる。

「陛下、ご紹介申し上げます。この方は、ヤピ・チッレーレ殿と申される我が国民議会の参事長であります。また、私の術の師匠でもあり、共和国内では最大の聖者として尊ばれております」
「あらあら、この御転婆の婆やに、何と言う勿体つけた首輪だろうね。黒猫の坊や、気にしなくて良いんだよ。マソンニーでは世話になったし、さっきの娘に予めお前さん達の結婚を祝福するように頼まれていたもんだから、こうして老体を引きずってきたというわけさ」驢馬のように歯ぐきを剥き出してヤピ婆が笑う。慌てて導師がフォローを入れる。
「この方の口癖のようなものでございまして…　我等三犬柱将を派遣する決断を大統領に迫ったのも、この方なのです。あの、どうかご寛大に…」粉犬者の心配をよそに、幼少からおかしな連中には慣れっこの黒猫は何とも思っていない。
「これは、重ね重ね忝いご好意、痛み入ります」
「ふふふ…、お前さんと弟君を足して二で割ったらウムポ様にそっくりだねぇ。いやぁ、若い頃はあの人のストイックな面と自己中心的な中に潜む優しさ、繊細さにぞっこん惚れ込んだもんさ。恋は人を強くする、何歳になってもねぇ。…あの娘もまた一つ大人になったのさ」
「しかしチッレーレ殿、今は一般的なことを仰るためにここに来たわけではありますまい」
「せっかちなことだね…　意味も無くウムポ・ルサ殿のことを引き合いに出したわけじゃないの。あの方が、陛下のお手に備わっている刃の開発にどうしても必要だった超希少材質を求めて我が国を訪れた時、私はそのお手伝いをさせていただいたんだよ。
あの方は優れた科学者であり、最強の梵子術士であり、そしてまた比類なき詩作家でもあった。およそ精神の関わる部分で彼に聞いて判らぬものは何一つないというほどの。その彼が、どうしても判明できず、我が国の古い伝承にその由緒を求めたものがある。レアメタルを探すのはむしろその口実でしかなかった。
『真に尊き魂の遺伝子』等と呼ばれる未知の要素。其は種族も時空も越えて伝播する、世界の意志、すなわち総合神のごとき見えざる者、存在自体を知ることが全くできないという点で無、もしくは完全なる有に等しい者の導き手なり。我が一族は浅くか細い英知を結集させてこの有無の狭間にある最大存在を予感し、それに仕える忠義の思想を至高とし、原初へ還ることでその偉大な存在に近づこうと試みたわけだが――無論、今は我等一族の事を問題にすべき時ではない。
世界自体が一つの超々生物だと見立てれば、彼の成長、進化、完成のために超越的な仕事の担い手が必要だ。高貴な光を放つ白巻角がその使命を帯びた『血族』の象徴。これを受け継ぎし子は滅びを迎えんとする世を救済し、新たな時代を構築する導き手となる」
「それが、一体何だと…」
「謙遜しなくたって良いんだよ。陛下が最も優れた気高き人間の中でも飛びぬけた存在だということは、本人の意思に関係なく誰しもが認めなくてはならない、紛うことなき事実なのだからね。
その『先代』を見るには、名も無い理想郷が全陸地を統一した伝説の巨大国家にまで遡らねばならぬ。その前のこと、例えば暗黒時代の頃など、数多のそれと思しき伝承があり、仙猫様の研究領域ではあっ

たが、この私はあまり詳しくないから知りたければいつかお父上の蔵書を紐解いてみるが良い。

…かつて、貴殿等猫族の賢者達が民衆一人一人の自制心と隣人愛、高貴な芸術精神だけで統一化された国家を自然発生させた。お前さん方の長所と短所を利用して各所に配置するだけでなく、稀有の御業で均衡が保たれるように仕組んだためだ。その夢幻の理想郷はもっぱら猫族の手柄とされているが、我等犬族には知るものぞ知るこのような伝承がある。『角犬の聖者、総ての民を合わせて神の祭典と成す』――いつしか猫達に知恵を授けた聖者の偉業は忘れられ、誇りだけが形骸化して残存してしまった。犬族の猫族に対する理由の乏しい優越感や妬みは、その影響もあろう。

だが、私はこの言い伝えを聞いた時に思ったのだ。その聖者にとっては種族の壁など無きに等しいものであって――永遠に続くわけでもない不思議な社会を作ってその手柄を他種族に渡したのも、精神という宝を抱いて次代を生きる子孫達がいかなる種族であっても人生の糧と成せるように、歴史という一つの壮大極まる無形の彫刻作品を、時空そのものを材料にして彫り込むことそのものが理由であったからではないか、とね。

それは芸術精神における時代から時代への伝播にも似ているように思われる、とあの方も私に仰られた。――俺は実在の有無すら不明な『血族』のために武器を作っているが、かといって従者意識に支配されているわけではなく、俺も創作を志す限り、彼等世に選ばれし者に誇りの面では退けを取らぬ。先人達の打ち捨てられた気高き思想の込められた作品を心から分かる次世代が、全く違う時代、全く違う土地に全く違う姿で生まれ、彼の所業を引き継ぎ、自分の中で消化吸収して全く新たな活動として世に送り出していく。同時代の者に受け入れられなくても、その一見して繋がりがあるとは見えないのに実際には強い結合力で結ばれている、綿々たる巨大な活動に携わることは人として最高の名誉だ。

俺もその礎の一つとなろう。何も特別難しいことをしようというんじゃない。愚民どもの流行と同じで、使い古されていることでもそれが忘れられている頃に新たな価値を付随させて蘇らせるだけでもイイさ。また、わざと泣き叫んで人の気を引く、かわいいことを差し引けば愚かで浅ましいとしか言いようのない子供じみた現代人――いつの時代も、作品が生まれた当時にそれを囲んでいる当世人はこのように呼ばれ得る――に必要なのは、彼等を認め、媚び、満足させる逸脱ではなく、流れの船頭の思慮深い愛情からくる批判である――そんなこんなを積み上げていって総体としてみれば、そこには一つの壮麗な廟か、一尾の巨龍でもできあがっていることだろう。だが、愛されるべき我が野心は、我が子たるモノ達がその単なる鱗一つではなくて、心の臓や肺でなくとも、せめて口か目くらいの重要な位置を占めるに違いないと確信させる――」

それから黒猫は妻を従えてジィホを交え、ヤピと盛んに論じて彼女の意義深い話で世を明かしてしまい、短い仮眠でも多少魘されているように見えたので、出陣の時にはすっかり疲れてしまっている。それで別段困るようなことも無かった。日の出と共に宮殿から使者が、降伏の手紙を携えて出てきたからである。

黒猫はそれに一瞥くれると、すぐに激しい剣幕で破り捨てる。

「あいつが死ぬ？　好い加減なことを言うんじゃない。さっさと道を開けろ」

ピサの他、マイザブル・ビアツ、チッレーレ嫗、イム・リバオヤがラスを目の前にした。彼はまだ完全にこの世を去ってはいなかったが、地神教の慣例は、手の施し様の無くなった者に死後のための洗礼を先立って施し、安楽に息を引き取るように手配するのが常で、癒すためだけではない術を知る多くの司祭が痩せ細った弟の周りを囲んでいる。

「屑どもめらが」黒猫は鬼の形相で神の下部達を追い払う。「俺の弟をどうするつもりだ。やい、ラス、起きるんだ。俺だ、兄が来たんだ。兄の命令だ、起きるんだ！」

「やめろ、朕が司祭様達を呼んだのだ。貴様の顔を最期に見なくてはならないとはそれだけで忌々しいことなのに、これ以上の狼藉は許さんぞ…

聞け、ピサ。皇帝の座は貴様に譲る。アムヤーラの言うことを良く聞いて…」

「このボケがっ！！　いつまで寝ぼけてやがるんだ。誰が面倒事を一人で引き受けてやるか。お前もやるんだよ、一抜けた、なんて許されねぇんだ」瀕死の病人の首根っこを掴まえかねない勢いの黒猫を妻や丞相が押さえに掛かる。多くの人間を騙してきた男の猿芝居がまたも披露される。

「陛下、確かに南懸皇帝はご乱心なされ、人々は最も気高き血族にあらせられる北懸皇帝様に、こともあろうか牙をむくようなことをいたしました。しかし、それも病のためであります。どうか、ご兄弟として育ってこられた時間を思い出し、最期をゆっくりと過ごさせてあげてくださいませ。

私も命令とはいえ、今までのことを悔やんでおります。今後はかようの事なきよう、家臣一同誠心誠意をもって忠誠を尽くす所存ゆえ…」

「口を慎め、外道めっ！！！」ピサはアムヤーラの手を激しく跳ね除け、躊躇無く叫んだ。「ええい、目障りだ。誰でも良い、この痴れ者をどこなりと片付けてしまえ」

「何と言うことを言われます、一体いかなる根拠でそんな…」彼の赤い目がぎょろりと細い亀裂から零れ落ちそうになる。

「顔に書いてあるという表現は一般的だが――果たして、衣に書いてある、とはあの巨大な司教しか言わないだろうな」ピサが指差す先、丞相の白い潔白を示す衣服に、小さな小さな、紫の染みがある。言うまでも無く、徳高き第一位司教の指先が最期に触れた部分。あれよという間にそれが拡がっていき、邪悪な男の悲鳴とともに一気に衣全体を瘤取者の血色で染め上げる。芝居がかったおどろおどろしい声が一同の心に響く。

『黒猫殿、確証無き我が夢枕の言葉を信じてくれて礼を言います。

恨めしや、アムヤーラ…　汝が千万の肉片に刻まれようと、竜に何度も噛まれた傷の痛みは消えはせぬ。無造作に土中に打ち捨てられ、誰の供養も受けられぬ苦しみ、消えはせぬ…』

「…何と…　言うことだ…」全てを悟った雉猫が激しく震えながらも自力で起き上がる。

「あの心優しき高貴な人、我が父親にも等しい人、その命を…　奪ったのはアムヤーラ・クフグ=キャーイ、貴様だったのか！

おのれ、誰が邪魔だてしようとも、貴様だけは許さぬ…！」

「ところが有難いことに、邪魔なんぞしようという奴は誰もいないようだぜ。ラス、ほらよ」黒猫が、

雉猫がしばらく手にとることも無かった彼の槍を手渡す。心の病とともに死をも克服した弟はそれを片腕でしっかりと握り、仁王立ちでアムヤーラに迫る。確かに誰も、丞相お付きの兵ですら、眉根を潜めて悪人を睨みつけるだけで手出しすらしない。

丞相はわけのわからないことをぶつぶつと口篭もったが、ついに観念してすっとんきょうな声を上げる。マスクを剥ぎ取って耳まで裂けた口を開き、お歯黒のせいで不自然なほどに大きく開いたように見える口から枝分かれした舌を突き出す。

犬の聖人が一歩踏み出す。「む、まずい…　闇め、何かやる気だ」だが、黒猫は術印を組もうとした彼女を手で制し、弟のするように任せる。じりじりと追い詰められた邪悪な男は不意に紫の服を脱ぎ捨て、その下に隠れていたペンダントにつけられている小さな瓶を握り締める。砂魚者が思わず声を上げる。

「あれは、リュシュエの」

「貴様っ…　いつの間にそれを」怒りに燃え立つ雉猫も足を止めざるを得ない。ラスは瓶を握っていると思っていた、実際にはただ丸めて空気を込めていただけの右手を激しく自分の腰にぶつけて舌打ちする。

「くくく…　長い時間をかけてごまかしながら印象の暗示と摩り替え、万が一のために用意しておいたのだが、これほど早く使うことになろうとは。

…黒猫め、正直、甘く見たわ。サイルゴッツを殺った手管で、間抜けな弟なんぞよりも警戒してはいたのだがな。まぁ良い。余計な真似をしてくれたとは思ったが、こうなってはラスよ、お前のお陰でいろいろと楽しんで、最後も救われるわけだ」

――と、兄がゆらりと動き、弟はぎょっとして彼を止めようとする。

「待ってくれ、兄ちゃん！　あの瓶には、マイザブル殿の奥方を蘇生させるための鍵が入っているのだ。壊されるわけには…」

「そうか。愚か者とはいえ、切り札に使うのだから相当大事な物だとは思っていた。さすがにお前だ、苦しい状況の中で良くぞ抜け目無くやったな。後は俺に任せておけ」なおも彼はゆっくりと近づいていく。虎猫が慌てて後ずさりして叫ぶ。

「待て、ちょっとだけでいいのだ。別にこれで大事をどうこうしろというんじゃない。ほんのちょっと黙っててくれれば、俺は用済みのこいつを貴様等に投げ渡し、霧に包まれて飛び去るのだ。もし裏切って、砕いて渡そうものならお前達が例え地の果てまでも追ってくるのは目に見えている、俺もそこまで馬鹿じゃない…

…って、てめぇ、聞いてるのか！？　畜生め、望み通り壊してやる、俺を舐めた罰だ！」

全く歩みを止めない黒猫が眼前に迫り、ついに恐怖に突き動かされたアムヤーラが発狂した笑いとともに手のか弱いものを床に叩きつけ、…ぐしゃぐしゃにした。誰もがその光景と共に胸を破片で突き刺したように感じる。

「ざまぁみろ、ぎゃはははははははははっ…　…ははは…　…は？」虎猫は自分の手の中に持ってい

るガラス瓶を信じられないといった様子で見上げている。そう、腕はまだ振り上げられたまま。しかし彼には幻影術をかけられた感触は全くなく、術に詳しい者も含め、一同の全てが確かに巻き戻しのできないはずの悲劇を見たのである。だが、ともかく現実では黒猫だけが何ごとも無いようにその間も行動していて、犯人の頭を撫でるように優しく掴まえている。一つだけ前と違うこと――ピサの額に白い巻角が神々しい光を放って突き出ている――『血族』の力を目の当たりにした老婆が小刻みに震えている。
「時空を操る術法は運命の領域と言われ、あの仙猫殿でも、いや、虚神ですらそう容易く扱うことはできない。その術系の最高峰、もはや梵子術とすらいえない総体神の御業…」
「現実再構築…　だと…　いうのですか…」弟も震え、兄を凝視している。ピサはゆっくりと荘厳な様子で言葉を紡ぐ。
「マータルアストーロ、サイルゴッツ、…それだけではない。もし芸術精神や聖魂が受け継がれていくなら、悪の魂というものも同様に受け継がれていかなければ釣り合いが取れぬのかも知れぬ。お前はその一つだった。お前の方面は享楽的だったかも知れないが、拮抗を生むための闇として存在し、一般的にはいずれ滅ぼされるべきだと定義されているゆえに、哀れみすら感じる。
　だが、容赦はしない。我等の憎しみは溶け合う術も無く、どちらかが制圧しきることもないだろうが、妥協と爆発を繰り返しながら永遠に続けられ、世界の様相を定義していく。今この局面では、一つの決着がつくに過ぎぬ。
　完全に消え去れ、闇よ。さらばだ」
　ほんの一瞬であったが、凄まじい光が部屋中を、いや、国中、もしかしたら世界中の空を満たしたかもしれないと思われた。皆が我に帰ったときには、すでにピサはいつもの様子に戻っている。アムヤーラは呆けたように膝をついて、その間抜けに歪んだ口からは、銀歯に仕掛けていた忌まわしき筒の崩れた粉が混じっている涎を垂らし、首を傾げてあらぬ方向を見つめ、祈りを捧げるように手を組んでいる。ヤピ・チッレーレが彼の様子を調べ、振り返って首を振る。
「この男のちっぽけな魂は邪悪に完全に支配されていた。それまでの生き方も一緒くたに邪悪に吸収されるような陰湿なものだったから、闇が消滅するということは彼の魂そのものが消失したことと同じだったに違いない」
　黒猫は穏やかな表情で、精神の死に至った者を見下ろしている。「捨て子だった俺達も、ともすればあの虐待者によって同じような状況に陥るところだったかもしれない。だが、色々な不幸中の幸いが集まって、結局は何もかも俺たちのためになるようなことばかりになっちまったというだけで…」
　しかし、弟は溜息をついて腰に手を当て、さも詰まらなそうな表情を繕ってみせる。「だから理解を示そうっていうのかい？　甘っちょろいにも程があるね。僕がそいつを殺さずにそのままにしておくのはね、共感したからじゃない。心の消失が単なる処刑よりよっぽどこいつに見合った極刑だと思うからさ」
「俺もそう思うよ。…さぁ、もう一つ、復帰祝いに裁判沙汰が残っているんだ。昔はけっこうな額の懸けられた賞金首でね。お尋ねが解除されてなけりゃ、南から報奨金がタンマリともらえたんだがなぁ」

黒猫は残念そうに腕組みして頭を振り、兵に目配せをする。すぐに、幾重にもきつく縛られたパフォム・ヒェダが牢獄から乱暴に引き立てられてくる。

「…全く、もう少しましな見舞い品はないのかい」雉猫はとっておきの窯椰子を兄に内緒で父親にもらった時のように喉が鳴ったのを、冷静な表情に包み隠す。「そんなやつ、顔も見たくないね。適当に押し込めといてくれよ」

一瞬、弟は兄に意味ありげな視線を投げやる。黒猫は小さく頷くと兵に耳打ちし、今や羽をもがれた虻に等しい男を、ある特別な部屋へ運ばせる――この物語は何も聖人君主の賛美詩ではないから、彼等がこれから何をしようとしていて、どのような段取りで耳を塞ぎたくなるような罪人の絶叫がこだましたのかを詳細に述べることは自粛することにする。少なくともそれは仇討ちとか、死者の恨みのために行われたわけではない。取り返しのつかないことをしでかした愚者に、これから辛さを乗り越えて這ってでも生きていかねばならない者のために相応の責任をとってもらうということであって、そこには善悪の基準など皆無に等しい。

ともかく、雉猫は数週間の療養生活ですっかり健康を取り戻すと、ロンムーチョント王家、ゴルフィ共和国の英雄達、ハーン・サイバル、フアンホ・ラップァ・マーヒ等の墓を再び訪ね、じっくりと時間をかけて死者と語らい、多くの懺悔と感謝の言葉を胸に反芻した。そしてラスはエルフムの墓の前で、初めて彼女のために号泣した。それからも定期的に彼女の眠る地を訪れ、自ら摘んだ可憐な花――地内の深層に自生する様々の草花が選ばれた――を献じ、日々の報告をするようになる。彼は奥方と無理に離婚することで政治的な大問題を引き起こしそうになったが、兄の武力を盾にしたフォローでそれはうやむやにされる。

一方の黒猫は、これまで身を粉にするように働いてきた弟をこの機会に休ませようと自分が面倒ごとを引き受けたまでは良いが、最大の友人を失った穴を埋めることができずに大いに苦労する。部下にしようと思っていた樹曼の勇者エグルブブア・ペンサバオムも、ラスのために南に送ってしまっている。それでも、隣に座る女性がいつでも夫を優しく時には力強く励まして手伝い、内乱で疲弊した国土の回復に共同で力を注ぐ。ピサと共にいられるだけで幸福に満たされたイムが女としての全てを駆使して傅いたため、黒猫は晩年まで少々大変な程の悦びを味わった。

人々が自分たちの保護者のためにも、暗黙の中で忘れないようにして忘れなければならないと感じた南北戦争から一ヶ月後。雪解けの季節、蟹櫻満開の素晴らしい日和が宮廷お抱えの占星術士達に予報された期間を見計らい、友好関係を結んだケチアナイ共和国との合同で大規模なフェストが開催された。民衆は今か今かと待ち受ける、そしてついに、類稀なる二人の王が再び彼等の上に掛替えのない太陽と星空のように姿を表した時、盛大な拍手と歓声が国土を埋め尽くした。全土が沸いた。首都が人で破裂しないよう、皇帝達が逆に巡礼するように、祭りの主催都市を数回に分けて移動しなければならないほどであった。黒猫は弟の献身的な心霊治療による度重なる手術に耐えて失った部位を取り戻し、老いを除けば昔のままの、小柄にも関わらず雄大な山を思わせる姿である。弟の方は以前に若返りの秘術を幾度か試みており、健康を回復するとあまり以前と変わらない美麗な姿であったが、あれ以来、それを断

る兄の流儀に従って自分も老いるに任せている。
「さっさとくたばって眠っちまいたい、っていう後ろ向きなことだけじゃなくてさ」と兄は弟にはにかみながら語ったものである。「お前、いつだったか、俺に老化のメカニズムを話してくれただろ。何だっけ――生物の進化にとって、少しずつ変わりゆくことがどうしても必要で、次世代に受け継いだ後に古い個体がいつまでも残っているってのは生物界全体からすると停滞を招く良くないことなんだ、ってな。ということは、だ。俺みたいな単純な人間には、老いるってことも一つの尊い現象だと思えるんだよ。俺はそれも甘んじて受けて、その酸いも甘いも味わい尽くしてみたいと思ってるのさ」
「それとこれとは話が違うと思うがね。まぁ、どうぞご自由に」と、かつては冷たく見捨てるように言い放った弟であったが、最近では兄とともに過ごす時間を何よりも大事にし、一度ならず、北へ帰ろうとする黒猫を強く引き止めたことすらあった。密かに二人だけで、祭りの終わりを飾る花火を見上げている時も、ラスは理由のわからない苦しい想いを吐き出すように言った。
「北懸皇帝、そろそろ朕は、国民のためにも神聖帝国を統一すべきだと考えている。いや、朕は期せずして一度それを実行したのだから、今度は、兄弟の順逆に倣い、貴帝がその任を永久に受けていただきたいのだ」
「嫌なこったね、ラス」ピサは老いても上流階級らしい言葉遣いをさっぱり会得できていない。「国土は広い、これからも広くしてやる。そいつを一つにしちまったら、目が届かなくなることは目に見えているだろう」
「いや、そのときは、朕がその最たる支え手となることができよう。そうすれば、我等はまた、ともに暮せるではないか…」
　兄弟のあまり似ていない顔を美しい夜空の華が照らし出す。兄は少し口を動かして何かを言いかけたがやめてしまって、表情を変えて声を潜め、別のことを切り出す。「…エスパイアを陥とすぜ。協力するか？」ラスは眉根を上げたが、すぐに冷静な表情に戻って頷く。
「ああ。帝国は便宜上分かれているだけで、本来は一つ。貴帝のやろうということには口出しせぬよ」
「ところが、大いに口を出してもらわねばならん。俺は考えることがあまり得意じゃないからね」
「それなら、はっきりと意見を言おう。貴帝の考えは世の潮流から言っても、全く正当である。あの戦乱の混迷を突いて、エスパイアが我が国に侵攻を企てていたことは既に部下が明らかにしている。彼等の軍事大国としての誇りからすればそれもわからんでもないし、最後の花火に等しいものだったのではないか。華々しく散らせてやるのが良かろう。そして貴帝は、ケチアナイを利用するのだな。まぁ、あの連中、思ったより悪くなかった」
「よぉし、可決だな」ピサの服装には毛並みと同じくらいに黒ずくめの装飾が施されていたので、早速と彼が動いた時、その姿が暗闇の中に溶け込んでいくように弟には思われた。思わず顔をしかめて寂しさにとらわれていく彼を、兄が振り返る。
「な？　ラス。俺達は離れていても一緒にいても、同じことだろうが。じゃあ、よろしく頼むぜ」
　祭りの中、一時的に名誉を失った英霊や戦士達の役職が復帰され、相応の勲章が授与された。ビスタ

ン・ケイマリッチの巨躯に相応しい巨大墳墓の建造計画が腕利きの建築家達によって性急に実現され始めており、最高の勇者としての称号が送られた彼に一般民衆がいつでも礼拝できるような講堂も設けられる。優れた人間の引力で矯正され、さもしい性質の中から優れた素質を引き出していった彼の山賊時代の友人達や、尊敬する者のために弓を捨てて敵を掻き分け、武勇以上の友愛を示したブースナン・フィアンを始め、決死隊として散った指揮官等、多くの英霊の名を刻んだ立派な慰霊碑がその近くに建てられた。

それらは見晴らしの良い丘に立てられ、訪れる人の絶えることは無かったが、神聖帝国とともに、いつしかその存在は伝説の中に消えてしまう。一般的には盗賊や戦乱の影響で破壊されてしまったと言われるが、そうではなくて、梵子術の強力無比な結界で護られ、どこかに残存しているのではないかという新説も興味深く、後世の踏破家達の心を熱くしている――しかし例えそれを見つけても、恭しく跪いて目に収めるだけで満足しなければ、所詮は賊と同じである。

絶望の中でも皇帝を信じて辛酸に耐え続けた忠義の士、北懸の軍人達も復職し、功績のあった者は飛び級で出世を果たした者も多くあった。そして、マイザブル・ビアツは晴れて総監の座に戻ることになる。彼はそのことを妻に報告しに行く。その墓に、ではない。今やそれは無意味なものとして取り払われてしまっている。その愛らしく輝く笑顔が、家で待っているからである。

祭りが終わった直後、パンダンタの部族が住むケチアナイ共和連合の一州が独自に動き、エスパイア王国に宣戦布告する。衰えたりとはいえ、さすがに数においても質においてもエスパイア軍の方が上であるが、無論、パンダンタは他国の支援を期待してのことである。兇空がこれに積極的な支援をしたのは、ケチアナイにとって、自分の領土に踏み込んできた連中と仲直りしたものの、彼等がいつまでも住みにくい一角で満足しているとは思われず、その不平が自分たちの不利益に繋がることを恐れていたので、同居者が引っ越してくれるならおあつらえ向きのことであったからである。

領土の利権についてはほとんど関係のない神聖帝国がこの戦役にしゃしゃり出てきたのは、ピサとスイミレ・クッヒュの約束のこともあるが、そればかりではない。攻める理由のなくなってしまったエスパイアを楽に手中に収めるため、ほとんど従属国に近い立場にある友好国にこれを取らせ、招来の不安のある勢力を壊滅させてしまおうという暗黙の意義があったのである。南懸皇帝は『今さらきれいごとなど白々しいと思うがね』と言ったのだが、第一位皇帝となったピサには陸路からの直接的な侵攻は何となくためらわれ、海路からの後方支援に徹することに決められる。――自分の力で取らなければ今後の彼等のためにもならぬし、かといって放っておけば、俺が予め狙っていた当地の権益の恩恵に預かることもできなくなる――などと黒猫は力説したものだが、弟にはその理由が見透かされている。

「海戦がやってみたいんだろう、要は…」雉猫は一人溜息をついて、莫大な費用を投じて次々と急造させている軍艦を眺める。「ふっ、せいぜい楽しんでこいよ、兄貴」

だが、この無駄仕事にも思える黒猫の施策は――彼がそこまで考えていたとしたら、雉猫の場合とは違って、やはり本能的なものであろうが――意外にも意義深い。それまで、地内への穴を『港』と呼ぶような当地では立体的に奥深い内部への関心が強すぎ、鉱山を所有していたエスパイア以外には、海路

を通じての交易や戦闘を行える技術が乏しかった。ラスはここでも卓越した政策手腕を見せ、国家予算から惜しみなく必要な投資を引き出し、国民の強制義務だけでなく、商魂たくましい連中を利用して新たな産業を構築していく。そのおかげで神聖帝国のみならず、東大陸の北方地域全体に未来の世界交易への準備が整っていくのである。

かくしてエスパイア戦役が勃発、それはおよそ一年余り続く。あまり激しい戦争は行われず、少々間延びしたものとなった。傍目からすれば明らかに神聖帝国の代理戦争のようなもので、すぐ近くで見守る片方の親のことを気にしながら恐る恐る喧嘩する子供のように、争う双方共に、横目で大国の動きに気を取られがちになったためである。

兄のために弟が造った勇壮な軍艦は、どれも小型で製造しやすい安価なものであるにも関わらず、虎の子のエスパイアのそれを凌駕する性能を持っていた。神聖皇帝の小艦隊が敵の大艦隊を機動力の差を見せつけて打ち破ったという報告は、自分の作ったものの優越性を確かめられた南懸皇帝を大いに喜ばせる。為政のために首都に移ってきた北懸皇帝の家族も、勝利報告の連続で一憂の暇も無い。

その頃では、あまり家に帰らない黒猫に代わって、ラスがピサ Jr.の面倒を見ることが多くなっている。家臣の心配をよそに雉猫は一向に子を得ようとしなかったが、その寂しさを埋めようとするかのように、種族間契約で指者の子となった兄の息子を、彼は溺愛した。この子にはセアネルという名が与えられていて、ピサが座を譲った暁には『ピサ二世』と名乗って皇帝の座につく権利を所有している。

イム・リバオヤも先妻に敬意を払って、夫婦間の合意の下、新たな子を設けることはせずに、セアネルを我が子として愛した。この子は後に彼を知る誰もが追想するように、非常に不思議な子だった。戦闘に使う能力においてはこれといって秀でた所も無く、父の武勇に興味を示して自分もいずれ戦場に出てみたいという発言をすることなど考えられないような軟弱な子で、将来を心配する家臣の声もあったが、しかし一度彼に接すると、理由もわからずにその魅力の虜となってしまう。その点は父親の血を受け継いでいるようにも思われる。彼は緊張する新しい母親に最初から生みの母に捧げるような偽りの無い愛情を屈託なく見せ、いつでもくっついて歩いたので、イムもすぐに彼と血縁以上の契りを結んだように心を溶け合わせた。

セアネルは何かちょっとでも面白いと思うことがあると、すぐに『お母様』を連呼する。イムにはなかなか彼の想いを知ることができないのだが、例えばそれが、道端から芽吹いた小さな極めて珍しい種類の草花に向けられた感動であったことを知り、共にその『いいこと』を喜ぶ。それは、彼が『お父様』と呼ぶ叔父に対しても同じようになされる。ラスにはこれが堪らなく楽しいことであって、セアネルの少し眠たそうな、甘美な響きのある『おとう…』という部分の発音を聞くと、自分が失ってきた多くのものが全て取り返されたような気がして、真に幸福そうな微笑を浮かべ、子供に付き添うのであった。武将達も皇子が新しい平和の時代を象徴する帝となることを信じて疑わず、彼がこの物語を展開してきた兄弟達の結末を包み込むためだけに生まれてきたかのように、非常に短い間しか彼らの中に置かれないということは、予測もし得ないのである。

まだ幼いにも関わらずセアネル皇子は語学や文学に関して非凡な面を見せ、多くの書物を読破して知

識をつけていき、母親や叔父を大変驚かせる。特に祖父の執筆したものをピサの秘密の書斎から勝手に取り出してきては何度も読み返し、時に気に入った箴言を書き写したりして勉強した。イムは家臣の言うことに従わず、彼に全般的な教養を身に付けさせるための英才教育を行わなかった。彼女は母親の勘で息子のしたいように任せるべきだと判断し、彼独自の、地道で、かつ先取りして飛び級で覚えていくような勉強方法を見守ってあげるようにする。

なお、書斎への鍵は大人の誰も発見できなかったのに、彼はどこからかそれを見つけ出してきたらしい。ピサは宮殿内にも様々な悪戯を仕掛けている。その一つとして、『もし俺が城に隠している鍵を見つけたら、あそこにあるものを全部自由にしてもいい』というので、ラスは家臣とともにくまなく探したのにどうしても見つけられず、悔しく思って、それをくだらないことだと決め付けて捜索を打ち切りにしてしまっていたのだが――セアネルに言わせれば随分簡単なところにあったというので、雉猫は種明かしをしてもらおうと彼についていこうとしたのだが、にこにこしたまま、子供が動こうとしない。「セアネルや、お父様にも秘密なのかしら？」南懸皇帝は玉座を立って、息子に等しい子に屈みこみ、毛の無い頭を撫でまわす。

「…ほら、ようやく見えたよ。黒い父上の愛するお父様が、きっと持っていらっしゃると思いましたので」

はっとして雉猫は後ろを振り返り、自分の玉座を調べる。座位部に小さな小さな開閉部があった。ラスは感嘆し、黒猫ご自慢の書斎見学のお相伴に与ることにする。

堀を幾重にも重ね、美しさと防衛力については事欠かない弟のデザインした宮殿に、兄は『井守の宮殿』という変な呼び名を付けた。弟には『不可侵の神聖帝国には不必要な慎重さではないか』という黒猫流の皮肉であるかと思われていたが、様々な物事を考え合わせて思い返してみると、弟のやっていることに協賛し、何らかの形で関わろうとしていた兄の想いが浮かび上がってくるようである。ピサはラスの自由にさせる一方で、その建築内に全体としてはほとんど無意味な秘密の構造を作らせることで、小動物をその中にうろちょろと這わせるような悪戯をやったに違いなかった。ラスは視点が 180 度転換されたように感じ、セアネルと一緒になって、もはや懐かしい森の匂いすら香らせ始めているこの宮殿の至る所に井守どもを見つけた。例えば厠、寝室、廊下等に置かれている小さな様々の勇士像の置物は強い梵子力をかけると台座から外すことができた。それらの像はいずれも底と思われた面に逆向きの別の像がつけられている。隠れていた方の像は彼等が子供時代に目にした森の多様な動物、自分達自身の子供時代の像など、兄弟にしか分からない様々の対象を象っている。ラスはそれらを心楽しく発見しながら、開かずの間だった部屋を訪れる。

そこは本当に小さな、六畳一間ほどの部屋であった。壁は漆喰か何かで、宮殿の壮麗堅牢な磨理石の上に無造作な仕方で意図的に塗られている。その高い部分につけられた横木には小さな鉤釘がいくつも打たれていて、ぼろぼろの衣服がかけてあった。それはウムポ・ルサが子供たちのために編んだ下手糞な布切れらしかった。子供たちはそんなものはおあつらえ向きの遊び道具と思って全て八つ裂きにしてしまったから、実際には着たことはない。

また、ラスは部屋の隅に青い縄紐が、干からびたとぐろ蛇のように丸められているのを見た。こちらの方が彼には馴染みである。少年の頃にこれを必死に追いかけたものだ。弟は何にでも興味を示す長男と違って子供の頃から落ち着いたところがあったので、彼の運動のために父はいろいろと苦労したらしい。ウムポがこれを振り回し、愛らしい雉猫は牙を剥き出してそれを捕まえ、叩き伏せようと跳ね回る。大人に操られた紐はそれを巧みに避けて鼻先や足元などの微妙な位置で跳ね回り、挑発する。

夢中になっているうちに子猫は紐でぐるぐる巻きにされていく。すると感触が体の四方八方に生じる。ラスはそのどれにも同時に攻撃をかけたいと欲望し、弾みで、初めての梵子念力を発動して紐を切り裂いた。父はこれを大変喜んだが、切られる度に結び合わされて使われたので、すぐに結び目だらけになってしまった。…結び目が、そのまま変わらずに残されている。その他にも、部屋の隅には兄とのジャンプ競争の目標点となった、爪や牙の跡でぼろぼろにされた枝切れとか、草を術で引き合わせて作った滑り台、破壊の術で穴を空けられたかくれんぼの岩などが並べられていた。――自分は何と壮絶に、彼等と一緒にぶつかり合い、打ち溶け合ってきたのだろう――

「お父様。これ、お父様へ、って書いてあるの」ラスは夢想から我に返り、セアネルの差し出したノートをパラパラとめくる。ウムポ・ルサが研究開発した、知られざる秘術がいくつも載っている。ラスは改めて父親の梵子術に関する圧倒的な知識の深さ、そして、そこから生まれる世界の高次な理に関する解明に感嘆させられた。「あの人には、ついに叶わなかったな…」しかし、もはや彼にとって術を極めることは二の次ぎになっていたから、それを肩身の品として考え、術法書としての価値を秘密の中に封印したままにした。だが、その書の冒頭に書かれた論考は一つの読物として興味深く思われたようだ。その内容は以下のようなものである。

《梵子空論

物事の本質をわかりやすく捉えるために、とある非常に簡素化された法則で構成されている下位次元において、非計算処理を使わなくても済むような簡便な理論を基礎とする学問を自慢する社会を想定し、思考実験を行ってみる。なお、エネルギー効率や達成までの道筋の悪さ、および達成時における予期せぬ副作用の極めて高い発生率などのことは、今回の場合は考慮に入れないものとする。

そこでは『薄鉄の棺桶』と仮に名づけたいような、実にひ弱な箱型の、脚の代わりに何か鞠のようなものが絶えず転がりつづける危なっかしい駆動機器が活躍しているとしよう。それは社会史上に登場以来、人々の生活を助けるという歌い文句で新種の凶悪な伝染型病原菌のような勢いで世界に蔓延し、人々の顔を自分の冷たい体に貼り付けることにも、既に十分な成果を上げている。しかし無論であるが、それはこの単純な機器の努力などではない。人々が自己の人格を自ら喜び勇んで『薄鉄の棺桶』の中に閉じ込めるから、そういうことになるのだ。なぜそうしてしまうのかも考えずにそうするのだ。必要があるから、みんながそうしているから、そこにあるから――もしくは自分が入らなければすっからかんの空箱でしかない先行の棺桶のように、思考の中身が損なわれているから。

それがある一部の地域から、まだ貧困と清浄の残留する遺跡の地へ他の物が流入し、美しくもか弱い物をきれいさっぱりヘドロで洗い流した時のようにやってきて、君達を支配したと想像してみるがいい。どうしてあれらの淀んだ、騒音と

悪寒と睨み合いと殺し合いのせせらぎを前に、嫌悪感を持たずにいられようか。必要最低限以外、避けて通ろうとする人がほとんどいないのはなぜなのだろうか。

それは、物に顔が張り付くという異常な現象から簡単に説明することができる。それはちょっとまともに、客観的に、冷静に見下ろす機会を与えられれば誰でも忌むべきことだと考えたくなるような事柄ではあるが、実際の場合においては、むしろ正常だとか優れているように見られてしまう類のことである。疑問を持つことの方がおかしいのだ、と。顔、もしくは仮面は、今ようやく物に張り付いたのではない。最初から流れそのものに張り付いていて、いつだって自分から離れて他の何らかの取るに足らない所有物に張り付くことができるのだ。風に舞うように、何の重々しさもなく。それはこの事例の場合に留まらず、いついかなるときにおいても同様で、流行の慣習化が満期を迎え、たまたま今の時代に顕著になったというだけのこと。それが何かの汚濁のうねりであることは間違いないが、繊細な物を傷つけるために創られたにしてはあまりにも大きい。それはこの種族が、およそ現代の形に等しくなった大変古い時代にはすでに十分すぎるほどの度量で形成されていた、創造力という能力を退化させ続けてきた子孫の塊である。

人間一人一人が偉大で尊い存在だと定義する賢者よ、なぜあなたはそういう言葉を残して楽観視し、全てを解決したつもりになって匙を投げやってしまったのか。偉大ならなお危ういとはなぜ警告してくれなかったのか。よもや破滅の予感を諦念で隠した？――それとも誰かはこういったのだろうか。汝、その流れを愉しむ船頭であれ。流れから脱しようともがく小石を見つけよ、あれはこそは人である、溺れている彼を助けよ。

しかし…　いや、これ以上流れに沿って本題からずれ行くのはやめにする。それに、少なくとも昔から流れはあった。それが突然大きくなったことに気が付いたからといって、今、ある人が大騒ぎして何になるだろうか。例えば厚顔無恥の者がこのように叫ぶ、この濁流を、その犠牲を持ってして塞き止めようという勇士はいないものか――いやいや、どうかそんなことはしてくれるな。流れているからまだ御しようもあるというもの、もはや流し続けることくらいがせいぜい我々にできることなのだ。しかし船頭よ、君は死神のように溺れる人の名を逐一称えよ。そしてもし、ふにゃふにゃと泳ぎきっている不気味な河童のような奴を見かけたら、身を震わせて眼を背け、新しい犠牲者のところへ、せめて彼を慰めるために急ぎ漕ぎゆけ。

――流れがゆるやかな場所があったら、ぜひ水底を見てみるが良い。眼下にはいくつもの直線が引かれていることだろう。直線は踏み越えることの簡単な、ただ書かれているだけの、周囲とそのバリケードの高さを見分けるのは甚だ困難な、無に近いものであるのに、水はそれに従って大よそ分別を装って流れていく。

目を凝らしてよく見たまえ、君は梵子について、これほどの低次元の世界でも、しかも大変わかりやすい形で、その片鱗を垣間見ることができる。立体視の化かし絵のように君の目に飛び込んでくるそれは、薄鉄の棺桶に貼られた顔と線を作った人の思考が念として作用し、決め事による罰則を仲立ちとして形成している、梵子の壁そのものである。この壁の効果が生かされているうちは、あの紙より薄そうな鉄板同士がひしゃげたり、無邪気な古人の散歩が死によって妨げられたりするということもない。稀にそうした実に馬鹿げた悲劇も起こるのであろうが、それはおよそ、流動する顔どもが相談した多数決による決議事項でうやむやにされ、問題とされるにも至らない。このように、こうした見えざる壁は、見えるいかなる分厚い堅牢な壁よりもその機能性において優れ、過ちが起きた際のアフターケアも万全だ。

高次と低次の差は、その現象を引き起こすためにどういったバイパスを経由してくるのかを見ることでも判断できる。低次元においては多くの人間が多くの物質を小難しくかき集めて弄くりまわし、ようやく作りあげたものを、我々梵子術

者は個人的な働きかけによって一瞬にして練り上げてしまったりする。一般的な意味での梵子術による防壁――上述の事例が梵子的な意味を持つことは、その世界以上にここでは有り得ない――は、現実的な物質としての壁が生じたり、エネルギー変換のスパークが目を引く光りを発したりするので、かえって本質的な理解がしにくくなってしまう。本来梵子とは事例のように単純なものであるということを、長年研究し続け、頭がこんがらがった末に全くそれまでの努力を皮肉ってしまうような間違った解答に到達する哀れな思索者のように、私は結論する。例えそうであっても、こういうことは偉大な学院で教鞭を振るう頭でっかちの教授様方々は絶対教えてくれないだろうから、奇跡とか至高の技とか、最初から学問の方向性を誤った理想をもって梵子術を極めんと欲する術学士諸子は特に、心にとめておいても決して損はないと思われる。》

ラスは左手の壁際に背中合わせで置かれている背の高い二つの書棚と、それに隣接させている小机の上の書置きや書類を調べた。入口から見えなかった側の本棚は非常に奇妙な様子である。そこには本は置かれず、紙屑のようなものが一定感覚で整然と並べられているだけである。ラスはそれが何であるかをすぐに勘付き、兄がやろうとしている仕事の邪魔をすべきではないと思ったものの、やはり気になって、いくつかを開いて読んでみた。

棚にはラベルが張ってあって、掲載順番を意味しているらしかった。ラスは段々夢中になってきて、その全てを読み、いくつかは元の場所でないところに入れ替えてしまう。しかし彼は、ピサがそれに気付いたら、きっと弟の入れ知恵を喜んでくれるだろうと考えている。――こんなものだろう、著者の製作順番だけでなく、その内容を鑑みて箴言や作品を効果的に並べるとすれば。特に印象的で分りやすいものは前の方に出した方が良い。僕等なら理解できても他人には誤解されやすい節のある文は、オブラートにくるむように、受けの良いものの間に挟んだ方が何かと都合が良いんだ――

机の上の草庵書にはびっしりと文字が書き込まれ、得体の知れない構図が所狭しと大胆に描かれている。それらは互いに関係のない、あふれ出るアイディアの混合であったが、全体として遠目から見ると、意図的に書かれた、優れた一体の抽象画としか思われない。

また、ウムポが命より大事そうに懐にしまっていた小さな石ころが、床に大きく広げられた紙の中央に無造作に置かれている。石にはいわゆるセイフティロックがかけられていなかったようで、インクが漏れ出すように内部に凝縮された彼の草案が流出し、紙一面に所狭しと炙り出されるように描きこまれている。もちろん彼が施錠を忘れたはずがなく、ピサのような術の心得のないものでも自分の生きた証を僅かな遺産として引き出せるようにしたのであろう。

これ等を見るとウムポ・ルサという作家は、多くのことを先取りしすぎる高次元の知性ゆえに多くの絶望すら見てしまったが、それでもあきらめず、ひたすらに真実と幸福の言葉を捜していく、悪戦苦闘の日々を過ごしたようである。結局彼は求めるものを見つけられたのだろうか。もしかしたらそれは作品にされておらず、ただ唯一、兄だけが知っているのかもしれないとラスは感じた。

机の引出の中にもメモ用紙が入っていて、一目でそれとわかるピサの達筆で、――黒猫は優れた感性を持ちながら、文字をきれいに書くことだけは本当に苦手だった――いくつかの極めて短い、一定の音

節で構築された詩の一切れのようなものが並べて書かれてある。それはよく見るとウムポの草庵書に書き込まれている、これまた大変に読みにくいアイディアの覚書を拾い出し、書き写したものであるらしい。

「驚いたな…　何なのだろう、これは。兄さん、どんな梵子術を使えばこんなことができるのだ。打ち捨てられた言葉を拾い集めているだけなのに、まるでそれが一つの凝縮された想いを込めた言霊のように独自の芸術性を主張している。極度に純粋化された言の葉の梵子、これぞまさにウムポ・ルサの求めた領域ではないのか。

彼はうまくいかないと四苦八苦し、悪夢を書き散らしていった。だが、その中で自分でも気付かぬうちに、後に残る者たちに捧げる作品を、精神内部の高次的闘争の中から生み出していたのかもしれない。兄は逸早くそれに気付いたというのか…」

「僕も真っ黒の父上が書いているそのご本が、大好きなんだよ。戦場からお帰りになるたびに、こっそり少しずつ増えているんだ」得意げに、愛らしい子供がいくつかの詩句を諳んじてみせる。ラスは以後それを折に触れて繰り返させ、ウムポ的な分りにくい表現の裏にある彼の思いやりの世界に身を委ねるようになる。

黒猫の秘密の部屋を幾度も訪ねるうちに、ラスにはこれが、兄の十数年越しのプレゼントではないかとも連想された。それは不意に沸いた何の根拠もない思い付きではあったが、彼には理由も無く非常に確からしく思われて仕方がない。兄は日焼けした色だから夏生まれ、弟は灰色の空を思わせるから冬生まれだと、父は彼らの生まれ順同様で気侭に決めてしまい、孤児達の出生の拠り所を創った。アギロ・ザイマで戦争に明け暮れていた若かりし頃、ラスはある夏にそのことを思い出し、何かプレゼントでも要らないか、と左弦総帥に手紙を送った。

『ツケにしといてくれ』というそっけない返事を受け取った弟は、折角の思い付きを挫かれてしまって、忙しさの中に忘却させた他の物事にそれを混ぜこんだ。だが、兄の方は自分も忘れていたことを弟が持ちかけてきたのが嬉しかったのだろう、その年の初雪を見たときに同じ質問を弟にしてきたので、別段ほしいものも無かったラスは同じ返事を遣った。それから、いつしかそのことも忘れ去られるまで、毎年同様の奇妙な問答が続いた。

今思えば兄はそれを気持ちの中で律儀に貯めていたのかもしれなかった。しかし、とラスは誇らしげに思い返す。それが、兄弟が共に生き続けていくという何よりの宝を意味するのであれば、この部屋は我々の合作なのだ。それを共有することが、未来から互いの歳月の一つ一つを潤わすことになっていくはずである。

その日から数週間過ぎ、皇帝の階位を交代する儀式を行う時節が来たこともあり、第一位皇帝が堂々の戦果を持って宮殿に帰ってきた。彼は総監にしばらくの指揮を委ね、首都に滞在するつもりである。それはたまには家族と水入らずの時を過ごそうといった理由ではなく、帰るとすぐにあの部屋に閉じこもってしまう。彼は森から持ち帰ったものの編纂作業を人に任せずに自分で行うことにこだわった。しかし彼がどうしても悩んでいた作品の並び順があっさりと片付いてしまっていたので、北懸皇帝は満足

げに頷くと、思ったほどの時間をかけることもなく、ウムポの遺稿である紙屑の内容を組み合わせた論文・箴言・物語集『化猫の四十九（シジュウク）の溜息』を完成させた。

それは一般の書物として刊行されたわけではなく、ピサが落下した絶壁と同じ材質を産する場所から巨大な岩盤を削り取ってきて掘り込んだもので、そのための美術館のような一つの建物を作り、一般公開する形式が取られた。作品が人々の手に渡り、もみくちゃにされて憶測と解釈の一人歩き、悪用や踏みにじりが起こらぬよう、そこから教えを受けたい謙虚な人が自分の足で思い思いに作品と対話できるように、という兄弟の配慮である。

その建物には『廃句集』と呼ばれる一廓が設けられる。これは、一度廃棄された思いつきを短い詩句のように殴り書いたメモを、ピサが作品として抽出したものである。それはおそらくウムポ・ルサが若い頃に熱中していた古獅語の研究が嵩じて、遠い祖先が異次元の世界から得てきた芸術表現の影響を受けたものであろうとラスは推測している。その詩句のほとんどが叙情的で、明確な文法を欠くわかりにくいものもあったが、子供たちには、化猫と呼ばれた父が子を得、失い、またその傍で死するまでの間、常に息子達のことばかり考えていたことが痛いほどに感じられる。例えばその書き方や近くのメモから推測するに、恐らく息子達が家を飛び出た後に書かれたであろう一節、『道端の散る花びらの蜜集む戯れし子に似たる熊蜂』は、大変な失敗作として非常に入念に塗りつぶされていたのを、黒猫があれこれと手を尽くして解読したものである。一人寂しく過ごす父親は愛しい子猫達の様子を思い出し、地に落ちた小さな花弁に潜り込んで嬉しそうに震える羽虫に重ねていたのだろう。その気持ちが、例えウムポが赤面してそれを隠そうとも、息子達にはどうしても引き出さねばならない嬉しい贈り物と感じられたのである。

後に書かれたと思しき詩句はそれよりは洗練されていて、時節もはっきりと読み取れたので黒猫の明確な注釈がついている。

『我が鎧子の晴着など編むように新調すらば雪晴れの照る
（久方ぶりにゲルペンフユの森より出たる時に詠み侍りける）』

白く輝く装飾を施された自前の虚品による最高級の装備を再会した息子達は不気味に眺めたものだが、父は息子達と共に戦える栄光の日々を予感し、年甲斐も無く浮かれた気分を恥かしく、嬉しく思ったのであろう。

その他に例外の寄贈作品として、セアネルが真似事をして父親に捧げた廃句も掲載されていた。これらの作品全てを眺めていくのが本文の主旨ではないし、巻末にも付録するので、これを紹介することで、この特殊極まる美術館を観覧する区切りとしたい（残念ながら次元超越翻訳の際に本稿以外の部分が脱落したため、実際にはついていません。何卒ご了承を）。

『いと高き帝の徳と思えれど魂の血潮は昇る白雲』

これは地内神殿の主催でピサのサイルゴッツ討伐達成を遅ればせながらも祝福した儀礼が行われた時に、皇子の挨拶に代えて詠まれた。例年に無く暑い日であった。これを聞いた時、人々は一瞬どよめいた。奇妙な詩句形式が普及していなかったからではない。すでに仙猫の芸術館が人々の目に触れ、宮廷関係の者ならそれを全部暗記しなければ出世がままならぬと噂されていた時であったのだ。他でもな

く、この詩の中に北懸皇帝に関して秘密の領域とされている『聖魂の系譜』に関する露骨な言葉が盛り込まれ、子供の無邪気がそれを、場合によっては――例え嘘でも――それ以上の位置付けに置かねばならない、比較など恐れ多い皇帝の威徳以上のものとして賛美しているのではないかと思われたのである。

だがそれは大人の浅はかな詮索というものである。咀嚼するまでもないことだが歌人はその二つのものを単に同じく巨大なものとして並べているだけで、どちらがより高いかといった瑣末な比較検討などしていない。自然物の高さというのはそもそも計りがたく、極めて高いとも、天球に比喩される皇帝の尊厳よりも低いともいえる。セアネルは純粋に、その恒久的に栄光ある様を表現したに過ぎない。もちろん、弟の方は愛する息子の想いが直截に伝わっていたので優しく微笑んで盛んに拍手し、周囲の要らぬ気使いを煩く思っただけである。

一方ピサはというと、父親の試みに参画する息子のいじらしい行為について答辞の際には全く触れず、式典に参加したものは少々冷淡に感じたくらいである。だが雉猫は、黒猫が壇上から降りて参列者の傍を通り過ぎる時にセアネルに一瞥をやって、親子の視線が電気を帯びるように光ったのを見逃さなかった。そもそもこの父親は極めて放任主義で、息子に何か声をかけたかというときは大抵叱る言葉ばかり、弟には一時『虐待者の子は悲劇を繰り返す』という言葉を持ち出さねばならないと思われたこともある。しかし一方でこの父子は本当に風変わりであって、言葉を交わさずとも、メモや調度品の僅かな位置替え、そして兄弟が良く用いた目配せなどだけでほとんど全てを理解しあえるらしいことを察し、やはり血縁には勝てぬかと、ラスは少し物寂しく感じるのであった。

皇子の方もあまり『黒い父上』について何かを喋ったりすることはなかったのだが、ある朝――早く起きて都市を一望できる窓辺に座り、黒猫のことばかり考えていた。後ろから驚かせてやろうと近づいていた雉猫は、セアネルが涙を流しているのを見て自分の方がすっかり魂消てしまって駆け寄る。どんな悲劇か感動がお前の美しい心根からこのように水分を搾り出そうと言うのか。苦しみならば取り除き、慈しみならば分かち合おう、と問うラスにセアネルは言った。

「お父上が、逝ってしまわれます…」

ラスは目を見開いて苦渋の表情になったが、すぐに動き、遠話の水晶球を介して総監と連絡をとる。――第二位皇帝として再び意気揚々と出て行ったピサの指揮で敵が蜘蛛の子を散らすように逃げてしまったこと、戦は相変わらずの大勝利の連続、あまり手を出しすぎておかしなことにならぬように注意を払うのが一苦労です、という解答が得られる。陽気な報告をそっちのけでラスの表情が見る間に強張っていく。彼は必死に特定の生命反応検索を一帯に試みている。何度も、何度も…

弾かれたように彼は走り、失礼を省みずに奥方の部屋に転がり込む。血相を変えて涙ぐむ雉猫の様子で、イムは全てを察したようだった。「…セアネルも連れて行ってくださいますか。陣中に術で飛ぶのはあまり作法に叶ったことではありませんが、急務でしょうから…」

三人はラスの転移霧の術で、一瞬後にはさっきまで話していたマイザブル・ビアツの隣に立っている。

「…！？　殿下、皇后様、皇子まで…　一体…　陣中見舞いでございますか？

いえ、北懸皇帝陛下なら先ほどまで濁酒を嗜んでおられ、非常に気分良く自室でお休みでございます

よ」だが、ただならぬ様子で案内されていく三人に、砂魚者も緊張し始める。

ピサは、弟の軍艦の中、左腕には父の武具を嵌め、威風堂々たる様子で寝椅子に座し、胸元で手を組んでいる。濁酒は瓶に半分くらい、おちょこにも少し残っているから、うつらうつらと呑りながら寝入ったのであろう。穏やかな表情を浮かべて目を閉じている黒猫にゆっくりと妻が歩みより、彼の逞しい腕に夫の愛した皇からな長い多指を絡ませる。

「あなた…」美しい声が涙に掠れる。彼女は彼と剣を打ち合わせることで出会い、その存在自体に恋を超えた次元で身を捧げることに喜びを見出した——無神経で向こう見ずなのに、自分の光で相手を翳らすのではなく、柔らかく照らしだしてくれる人——「ピサ。本当に、お疲れ様でございました…」彼女は崩れ落ちるように夫の膝に額を当て、身を震わす。息子が泣きながらも母をいたわろうとその背を抱きとめるようにする。

「…そんな…　先ほどまで、あんなに」よろよろと剣豪がその場に跪く。「いかなる困難も強敵も打ち砕いてきた貴方様が…　おおおおおおおおおおっ……！」

——僕を怨まずに救ってくれた時から、今後は自分を捨石にしてでも兄ちゃんを生かそうと考えていたのに——ラスだけが離れた位置で唇を噛み、温度を失った兄の顔を黙って凝視している。——しかし僕よりもイムには、もはや慰めすら…　ただその悲しみの大きさが愛する者との繋がりの深さを示すものだと考えるべきなのだろう——雉猫に奇妙な余裕があるのは、実に密やかな証拠の無い確信——『な？　…俺達は離れていても一緒にいても、同じことだろうが』

身内の嘆きは隠されずに、自国民も他国民も、間もなく全ての人々の知る所となった。今や帝国が暗雲に包まれたかのようであるのは、全ての国民が儀礼的に喪に服したためではなく、偉大な王者の死を絶望するほどに悼んだからである。弔問に訪れたヤピ・チッレーレは、あの『角』の二度に渡る強すぎる力の顕現の無理が祟り、細胞維持の遺伝子を著しく傷つけていたことが死因の一つではないかと推論する。ラスもそれに同感した、我が兄ならば例えそれを知っていたところで躊躇などしなかったでしょうと付け加えて。

黒猫の神々しいばかりの気高い精神と行い、それに矛盾するまでの親しみやすさは誰にも好まれ、かつては敵同士であった犬族をも友人同然にしてしまった。彼は身分の低い者も高い者も同様に扱い、本質的な面では偽善を知らなかった。心正しき者なら誰しも彼を愛さずにはいられず、彼が自分たちから失われるという悲劇など、永久に有り得ないと錯覚すらさせた。——北懸神聖皇帝ピサ崩御、享年三十五歳であった。

彼は遺書を認めていたが、その内容は新しい北懸皇帝の誕生で何とか悲しみを乗り越えようと言う人々のせめ

てもの願いに反している。――我が死をもってして南北二分政策の終わりと為し、弟の南懸皇帝を唯一の神聖皇帝とすること。セアネルは旧来通りラスを父と敬い、その家族は唯一皇帝の親族として共に国のために尽くすこと――

人々の井戸端会議的な詮索が始まる。仲直りした振りをしながら、弟はうまいこと兄を出し抜いて野心を達成したのではないか――セアネルを北懸皇帝にすべきだという論調も強い。だが、弟、妻、息子は、遺書を尊重することを第一義とする。雉猫も自分に向けられた多くの尖った視線を感じないわけではない。しかし兄弟の数段高い次元に属する意思疎通の前に、彼らの陰口など何の効力も示さない。

「結局は押し付けていったな。…そうさ、僕はどんな遊びだって兄ちゃんよりもうまく、最後までこつこつ丁寧に積み上げていったんだ。まぁ、見ていなよ」

ラスは兄の遺志に従って北懸皇帝独自の墳墓を作らず、彼の最大の友人であった男の墓の中に遺体を安置して数ヶ月にもわたる魂送の儀式を指揮する。その傍らで内政と軍務の鞭を、兄の目を気にしていたときにはしなかったような、少々きついやり方で揮う。反対の声などには耳も貸さず、反抗勢力を弾圧することもなしに、彼らの行動の何倍も先を飛び越すように――まず北と南の分け方を完全に廃止、国土を四十区域ほどの県に分割し、それぞれに官を置いた。さらに同時並列で全軍を総動員し、一斉に多面侵攻を開始。

聖功暦十七年、ケチアナイに構わず陸路からも海路からも雪崩れ込む聖帝軍の猛攻を受けたエスパイア王国は、王族の自害をもってして滅亡。新領土を得たパンダンタはケチアナイとの共和制を持続、パンダンタ共和国として、神聖帝国との末永い友好を約束する。一方、西の戦争の間に密かに国力を増強していたヨルコン合衆国は慢心し、離婚のごたごたで生じた神聖帝国との不和もあり、地内のポイラルド王国と連絡を取ってさらに力をつけようとしていた。雉猫はこれを待っていましたとばかりに取り沙汰し、神聖帝国に対する反逆を企てたと言い掛かりをつけ、駄目押しにハーン・サイバルやエルフム・ヤスの死に間接的に関わったことの風化した恨みまで持ち出してヨルコンに侵攻。エッセヴァリナにもポイラルドがヨルコンと企んで地内の権益を我が物にしようとしていると煽って戦争させ、そこにも莫大な兵力を投じる。

一方、外交面も抜かりない。黒猫の死で友好度が薄れたことで、この隙におかしな挙動をされては困る兇空どもを鎮めるため、彼はセアネルにイムを同行させて派遣した。皇子は持ち前の黒猫を思わせる犬好みの魅力で立派に務めを果たし、多くの貢物を交換しあい、しばらくの間滞在した。大人びた風のひょろっとした少年は、かつてパンダンタ族が住んでいた僻地を視察し、人のおよそ住めるとは思われないような厳しい地に未だもって生きた集落が点在して見出されたことに感じ入った。「父が貴殿方に尊敬の念を抱いたことが、私にも本当に良くわかります」皇子が帰り道に、小さな荒地の汚れた溝川に目をやったときにその気持ちを歌ったのが、廃句の碑文に追加される。

『忘れ夏映す淀みの枯野川(かれのがわ)居ぬと思いし魚(うお)の一群(ひとむれ)』

《訳注：第一節は、幼い時に父を称えてから過去った時間を意味すると思われる。居ぬに、犬が掛けてある》

この仕事以外、セアネルは武力で雉猫を助けられるわけではないので、彼のために戦歌を捧げるべく

聖帝楽団長マフィナ・フランツームに曲を作らせ、自らは詩を書いた。それらの歌が国中をそよ風のように流れ吹き、愛する者を尽く失った雉猫を元気付け、兄弟の夢の実現を早めるように力を与えていく。

ヨルコン合衆国議会は聖功暦二十二年に皇帝の譲歩――主要貴族の地位存続、各州の生活機能を継続――に従って主権を神聖帝国に委譲。翌年にはポイラルドがエッセヴァリナに降伏。すでに神聖帝国の従属国に等しい立場となっているエッセヴァリナ王国が地内の統合を果たしたことで、ビルドモンソ神聖帝国は事実上、北部地域アグラビルドモンソと呼ばれたディアネムル大陸の広大な地域を、地上と地内を含めて総て傘下に収めたといえる。共知人類種国家としての規模を越えるには西大陸の帝国の出現を待たねばならぬほどのものであるし、一代で為した覇業としては全く異例の偉大な統一であった。

なおその間に、ラスの脚を地に縛り付けていた最後のものがごくあっさりと舞台から姿を消していることも報告せねばなるまい。ほんの風邪をこじらせたかと思った数日後、お父様やお母様に見守られながら、間近く迫った全土統一を祝福する言葉を述べてセアネル皇子が逝去し、雉猫の達成を家族に直に報告せねばならぬとばかりに、その母親も一年後に後を追って、急くようにして病でこの世を去った。ラスにはセアネル自体、兄が弟のために残した分身であったような気がした。しかし、その子も今や土に還っている。

ラスはもはや涙も見せず、ただ、勤めを終えて先に眠りについていく家族のような人々を称え、彼等の冥福のための労苦を惜しまない。そのような作業も段取りの良い彼ならそれほど時間も掛からず終わってしまう。さてさて、次は…

ビルドモンソ神聖帝国を異色で彩るまたとないような出来事はまだ終わっていなかった。

次代に引き継ぐ血族のない皇帝が、全聖帝の民を対象に『皇帝選挙』という驚くべき一大イベントを行ったのだ。選挙の管理は皇帝自らが指揮を取り、彼と多くの術士が梵子術を使って完全に厳正なものにした。どんなに僅かの不正も、多くの紆余曲折を乗り越えて人生の達見を得た雉猫の知性と、最高位の梵子術によるバリケードを乗り越えることはできない。こうした結果、志操、地位、能力ともに申し分の無いパワルス・ヒードゥ・ネセカが二代目の皇帝として選出され、ラスは実に素直に、彼に座と杓上を譲った。

だがこのあまりにも性急な変動は多くの歪を生む。猫派の家臣達は聡明で慎重だった皇帝の変化を嘆いて彼を押しとどめようとしたが、無力に取り付かれた以前と対照的に、熱に浮かされたように行動に行動を重ねる彼は、自分と、自分の内面に語りかける親しみ深い声以外を聞こうとはしなかった。それでもあきらめきれない人々が、ラスの考えを変えてもう一度自分たちの身分を保証してもらおうと画策し、暗躍する。その外部では、中央集権国家に突然降って湧いたような民主主義的祭典で落選した者の妬みが、亡霊の嘆きのような木枯らしとともに荒れ吹く。

とんとん拍子で皇帝にのしあがってしまった男も、次第に慢心と疑心暗鬼に陥っていく。軍人としては優秀で、死した英雄と生きた剣聖を尊敬する無欲な男だったのに――真面目に暮らしていれば慎ましくも幸福だった人間の前に、そっと麻薬を落としていくような――彼は民衆のための政治をそっちのけで抵抗勢力と思われる者たちを片端から厳しく弾圧し、ついには一人余生を静かに過ごしている隠居の

草庵にまで軍隊を率いて押しかけ、前皇帝を亡きものにしてしまおうとする。

その程度の浅知恵を予測できない雉猫であっただろうか。無論、既に彼の姿はそこにない。いや、国内のどこを探してももはやラスを見つけることはできないであろう。元総監代理は小さな書置きを拾う。『どうぞご自由に』

繰り返すことになるがこの物語は聖人君主の伝記ではなく、むしろ有象無象の織り成す泥沼の中に落ちているか落ちていないかもわからない珠玉を探し回りながら、錬金術的にここまで辿り着いてしまったようなものである。運命の寵児達の遊びは終わった――思い思いの形に積み上げられた玩具は打ち捨てられ、もはや見向きもされぬ。

民衆よ、嘆くが良い。君達の愚鈍さは救いようも無く体中に蔓延った疫病に似た体質だけれども、いつしか一時の楽しかった夢想が思い出されるように、再びしかるべき道を歩むことができるかもしれない。しかし二度と戻らず、以後再び現れることの無いものもある。その点に関しては、ゆえに尊いのだ、などとせいぜい納得するしかない。だからといって優れた人間に見捨てられたと勘違いし、見苦しくも悲劇の役柄を演じるのは大間違いで、いつの世でも、裏切ってきたのは我々の方なのだ。知るがよい、彼らが英雄であるかどうかなどただの不可要素、彼らこそが最も単純に、人間らしく生きようともがいた人間であったことを。そのことを知る機会こそが彼らの最後の贈り物である。彼らの生き方はいつの時代でもどこの場所でも次のように謳うであろう――人間とは単に、言語能力を所有する一定の姿形水準に填まる生物を指す言葉ではない――

蛇足ではあるが、兄弟のいなくなった後にごたごたしたにも関わらず、神聖帝国がこの後三百年ほどかろうじて続いたこと自体が奇跡的で、ピサラス皇帝が短い間に培ったものの素晴らしさが偲ばれる。それもガンウランテ黄圏皇帝の復活で、なけなしの生活すら国の分け隔てなく尽く滅ぼされてしまう。何の未練も感じられぬほどに荒廃した地を我が物とする凶悪な邪神生物を二度と復活できぬように抹消するため、虚神達が地の神に力を貸して起こした局地的大地震によって、アグラビルドモンソと呼ばれた地そのものが完膚なきまでに破壊された。かつて地内と呼ばれた巨大な鍾乳洞の区域も既に滅びた生活の残骸と共に瓦礫に埋まったから、その後にぽつりと立ち上がったポソ王国の主な国土として新しく開拓された『地内』とは、全く別のものである。

ぼろぼろに汚れた毛並みの老いて疲れ果てた雉猫が、四つん這いで一歩一歩を踏みしめるように、深い深い緑の宮殿を歩いていく。彼は家に辿り付くであろうが、そこまでの道を共にするのは控えよう。猫族にも少ないが伝承が無いでもないのだから――古人曰く、『生は死と相容れず、死は尊敬されど、恨まれもす。ゆえに汝、死する様を世間に見せるべからず』――いつしか二つの方面から靄が立ち上がり、彼を包み込んでいく――

ただいま

ぼくは　　かえってきた

※訳者が移動させた挿入文

（一般的にビルドモンソ期の正史として取り上げられている年代記の記述には、『弟皇帝が兄を追い落として殺害し、全土を統一した』というわかりやすい平坦な事実を示す短い一文があるのみで、詳しいことは判っていない。以降の部分は創作的な色彩が一層に濃くなるのは否めないが、現代に残る様々な歴史書の記述に反する証拠、そして、そもそも歴史観自体を否定してしまうアナケー発祥説などを鑑みれば、我が梵子術で夢想した時代劇による創作が事実に限りなく近しいという可能性を、否定できる厳密な証拠もないと思われる。）